亀井遺跡Ⅱ

Kamei site

寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場
築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅲ

— 本　文　編 —

1984

財団法人　大阪文化財センター

亀井遺跡Ⅱ

Kamei site

寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場

築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅲ

— 本　文　編 —

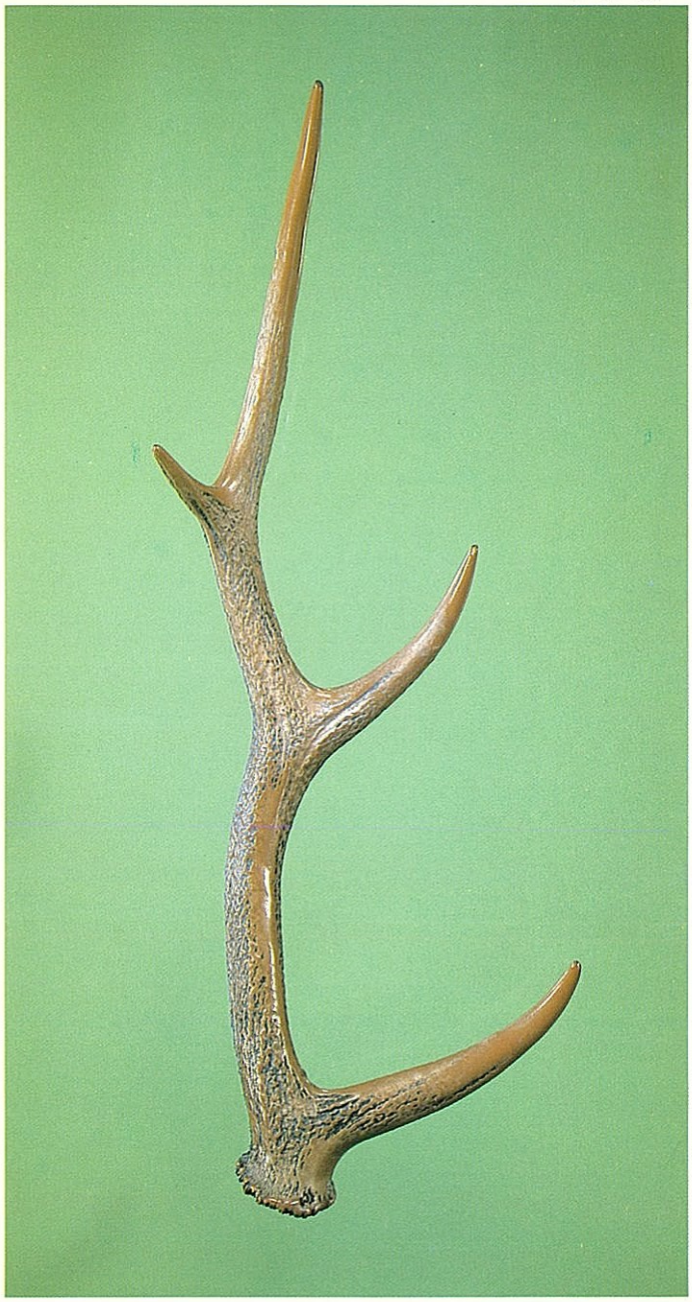
1984

財団法人　大阪文化財センター

巻頭図版１

冠（かんむり）状木製品

ＫＭ－Ｈ７調査区　ＳＤ－19出土



ニホンジカ落角

KM－H４調査区　SD－19出土

ト骨

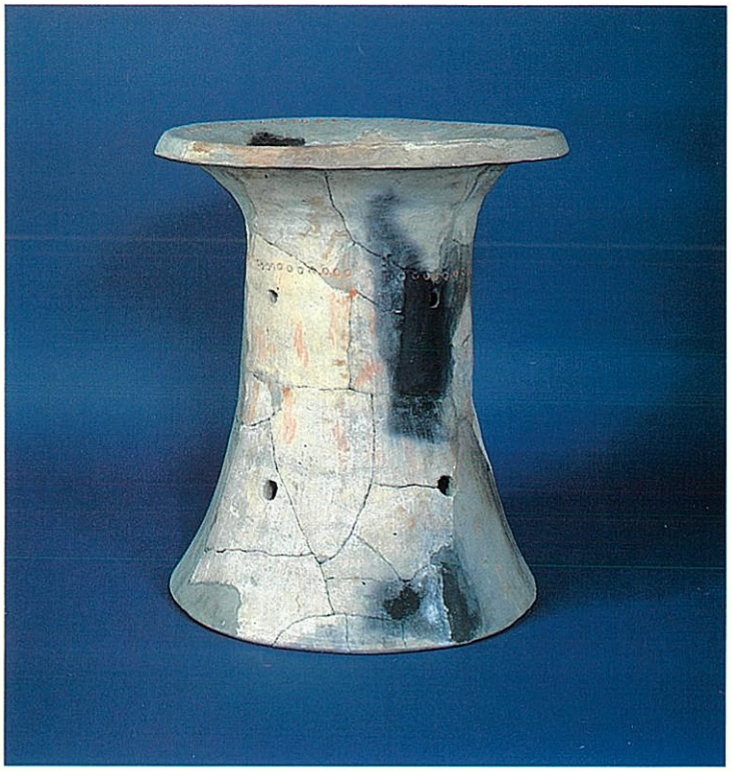
左はＫＭ－Ｈ７調査区 ニホンジカ ＳＤ－19出土
右はＫＭ－Ｈ４調査区 イノシシ ＳＤ－19出土

縦斧

ＫＭ－Ｈ４調査区　ＳＤ－19出土

高杯

ＫＭ－Ｈ４調査区　ＳＤ－14出土



装飾大型器台

ＫＭ－Ｈ４調査区　ＳＤ－14出土

序

八尾市南亀井町を中心に拡がる亀井遺跡は、昭和43年に発見されて以来数次にわたる範囲確認調査をはじめとして、昭和53年から開始された長吉ポンプ場関連の発掘調査や、同54年から開始された近畿自動車道関連の発掘調査によって、その内容が徐々に把握されてきた遺跡であります。

これらの調査によりますと、当該遺跡は弥生時代前期から始まる大集落遺跡であり、河内平野中央部に存在する瓜生堂遺跡や山賀遺跡と同様に、中核となる村として位置付けられる重要な遺跡であります。

上述の各々の調査の内、当センターとしては、長吉ポンプ場関連の調査結果については“亀井・城山”、“亀井遺跡”の二冊の調査報告書を、また近畿自動車道関連の調査については“亀井”として概要報告書を上梓したことは記憶に新しいところであります。

本書は、上記調査の中、長吉ポンプ場関連で昭和55年から調査を実施した平野川改修工事を含む部分にかかる“亀井遺跡”の未報告部分を収録したものであります。当該調査は、周辺地域の住民生活と密接に関係する下水道整備事業に関するものであることから、調査期間についても、おのずと制約があり、上記“亀井遺跡”に、検出した遺構、遺物の主たる部分のみについても満足に掲載することが出来なかったため、未報告に終った膨大な量の資（史）料の主たる部分を再度分冊として報告し、当該遺跡の理解に少しでも貢献しようとするものであります。

ここに、本書が出版されるに当りましては、当該調査を担当した職員はもとより、事務局長以下センター職員の埋蔵文化財に対する積極的な取り組みの姿勢と情熱が結実したものと確信いたしております。

最後に、当センターは、設立以来、埋蔵文化財の保護や文化財全般にわたる普及活動を通じて、その使命を着実に果してきたと自負するものでありますが、さらに今後とも役職員一同一丸となってより一層研鑽、努力し、着実に歩み進める覚悟を持つと共に、関係各位にはより一層のあたたかい御支援、御理解を賜わることを願ってやみません。

昭和59年３月

財団法人　大阪文化財センター

理事長　加藤三之雄

例　　言

1．本書は大阪府土木部下水道課、東部流域下水道事務所が築造した寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場建設に関連した亀井遺跡の発掘調査報告書である。

既に、当該事業に関連した当該遺跡の調査報告は、“亀井・城山”（昭和55年）及び“亀井遺跡”（昭和57年）として上梓したが、あまりにも未報告の貴重な資料が多数存在することから、当センター職員の協力で、独自に刊行するものであり、“亀井遺跡”（昭和57年）を補うものである。

2．本書で報告する亀井遺跡の発掘調査は、財団法人大阪文化財センターが、大阪府土木部東部流域下水道事務所の委託を受けて実施したものである。

3．本書の作製に要した費用は、すべて財団法人大阪文化財センターが負担した。

4．本書の作製は、昭和57年６月１日から昭和59年２月29日までの間に実施した。

5．本書で取り扱った資料に関連する発掘調査は昭和55年６月１日から昭和56年10月31日までの間に当センターが実施した寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査で検出されたものである。

6．上記の調査に関係した者は以下のとおりである。

井上定清、筒井康雄、大塚恭郎、阪上允子、田中喜代子、秋山芳廣、灰本明子、千野和久田口宗義、鎗山洋子、宮本哲男、（以上事務局総務課関係）

堀江門也、中井貞夫、椋尾孝彦、中西靖人、酒井龍一、宮崎泰史、西村尋文、国乗和雄、小島成元、入江正則、高島　徹、尾谷雅彦、寺川史郎、畑　暢子、清原弘美、金光正裕、広瀬雅信、山口誠治、山田拓伸、片山彰一、上西美佐子、（以上事務局業務課関係）

7．上記の調査に参加、協力を得た学生諸君は以下のとおりである。

布目久夫、森　哲哉、石田篤司、丸尾雅則、島田敏男、谷本昌隆、坂口昌治、今井工造、宮北千秋、家村富貴子、高森郁恵、伯井幸代、飯田智子、新中伸子、月森香世子、岩本敦美、竹内佳代、遠藤美栄子、菊山孝子、上田浩子、斎木優子、太田邦子、高畠留美、岡本康代、堺千鶴、竹村美香子、入野恵美、野村康子、森安美枝子、小沢和代、丸目ゆかり、岡本由美、伊藤佳津江、辻登紀子、老月伸也、小北茂子、井上国子、斎藤ふみ、田中美和子、藤田愛弥、足立貴美、横山真弓、新田　隆、増本真治、市原敦司、脇田佳見、吉田恵子、光田邦夫、井上好子、森田　豊、神山雅央、大谷珠美

8．上記の調査に関して、御指導、御教示、御協力をいただいた方々は以下のとおりである。記して感謝する。

金子浩昌、丹羽百合子、池田次郎、山中一郎、沢田正昭、秋山隆保、土肥　孝、小池裕子、田代克巳、佐藤良二、那須孝悌、樽野博幸、石井久夫、岩田栄之、蜂屋靖美、瀬川眞美子、石田佳子、辰見和子、横田和代、竹村こずえ、能阿弥明美

9．本書の執筆は、中西靖人、国乗和雄、宮崎泰史、西村尋文、岸本道昭の５名が分担し、村上年生、杉本二郎、一の瀬和夫、宮野淳一、上西美佐子、高橋雅子、畑　暢子、平井貞子、片山彰一、山口誠治がこれを助けた。

10．亀井遺跡の地理的環境、歴史的環境については、寺川史郎、雄谷雅彦編『亀井・城山』（財）大阪文化財センター　1980　　中西靖人、宮崎泰史、西村尋文編『亀井遺跡』（財）大阪文化財センター　1982の両書を参照されたい。

11．本書の編集は、主に宮崎泰史がこれに当り、中西靖人、西村尋文が補助をした。

凡　　例

1．亀井遺跡の略称名をＫＭとし、今回の調査対象地名をＫＭのうしろに平野川の略称Ｈを添加して、ＫＭ－Ｈ調査区とした。また、調査の手順に従って８つの調査区に分け、各々の調査区をＫＭ－１，２……８調査区と呼称している。

この例にならって先のポンプ場本体部の調査地をＫＭ（『亀井・城山』）、近畿自動車道建設予定地内の調査地をＫＭ－Ｋ（『亀井』）と呼称、表記している。

2．遺構は、原則として２つのアルファベット記号と２桁の数字を組み合せて表記している。

使用したアルファベット記号は、溝・自然河川・自然流路（ＳＤ）、土坑・井戸（ＳＫ）、墓・土器集積遺構（ＳＸ）である。

3．遺構平面、土層断面、遺物出土状況の実測図の縮尺率は、1/20、1/25、1/30、1/40、1/60を基調とした。遺構配置図は1/200、1/300としている。

4．出土遺物実測図の縮尺率は、以下のとおりである。

土器は1/4（但し、第Ⅵ章中のものは1/2）。石器は磨製を1/2、打製を2/3に統一している。木製品は1/2、1/4、1/8とした。土製品・金属製品は1/1、1/2。骨角製品は2/3、1/2、1/3。

5．遺物実測図の遺物番号は、土器のみ各調査区の各遺構ごとに付した。なお、遺物実測図の遺物番号と写真図版の遺物番号は、石器と土製品及び第Ⅵ章中の土器のみ一致させ、それ以外のものは一致させていない。

6．引用文献、参考文献はすべて註としてまとめた。

7．レベル高は、Ｔ.Ｐ.±で表示した。

8．遺構のスケールはｍ、土器・石器・木製品・土製品・金属製品はcm、骨角製品・動物遺存体の計測はmm、重さはｇで表示している。

9．「生駒西麓産」の胎土とは、土器の表面観察により、胎土中に多量の角閃石を含むものを示している。かならずしも生駒西麓でつくられたものであるという意ではない。

10．本書で使用している弥生時代の時期区分は、前期を畿内第Ⅰ様式土器、中期を畿内第Ⅱ・第Ⅲ・第Ⅳ様式土器に、後期を畿内第Ⅴ様式土器に、比定させている。

亀井遺跡 Ⅱ

寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場
築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

本文編

目次

巻頭カラー写真図版

序文

例言　(凡例)

第Ⅰ章　はじめに……中西靖人……1

第Ⅱ章　調査の目的と方法

第1節　調査に至る経過……中西靖人……3

第2節　調査の目的……宮崎泰史……5

第3節　調査の方法……宮崎泰史……5

第Ⅲ章　基本層序……宮崎泰史……9

第Ⅳ章　調査の概要……宮崎泰史……13

第1節　はじめに……13

第2節　KM－H1・2の調査……13

第3節　KM－H3の調査……16

第4節　KM－H4の調査……17

第5節　KM－H5の調査……21

第6節　KM－H7の調査……22

第7節　KM－H8の調査……26

第Ⅴ章　検出された遺構と出土した土器　　KM－H3～8調査区

第1節　KM－H3調査区……宮崎泰史……29

第2節　KM－H4調査区……国乗和雄、宮崎泰史……51

第3節　KM－H5調査区……宮崎泰史…105

第4節　KM－H7調査区……宮崎泰史…151

第5節　KM－H8調査区……宮崎泰史…197

第Ⅵ章　検出された遺物

第１節　亀井遺跡出土の石器……西村尋文……205
第２節　亀井遺跡出土の木製品……宮崎泰史……271
第３節　亀井遺跡出土の土製品……宮崎泰史……309
第４節　亀井遺跡出土の土器……宮崎泰史……321
第５節　亀井遺跡出土の金属器……岸本道昭……332
第６節　亀井遺跡出土の卜骨について（II）……宮崎泰史……333
第７節　亀井遺跡のイヌについて（II）……宮崎泰史……337
第８節　亀井遺跡出土の骨角器……岸本道昭……355
第Ⅶ章　まとめ……宮崎泰史……359

挿 図 目 次

第 1 図　亀井遺跡の位置と調査トレンチ…… 2
第 2 図　KM－H調査トレンチ配置図（1/1000）…… 4
第 3 図　KM－H地区割り図（1/500）……7～8
第 4 図　KM－H土層柱状図（1/80）…… 9
第 5 図　第X層の柱状図（1/20）…… 10
第 6 図　KM－H４調査区西壁土層断面図（1/40）…… 11
第 7 図　KM－H５調査区南壁土層断面図（1/40）…… 12
第 8 図　翼状剝片石核・有舌尖頭器（1/2）…… 13
第 9 図　縄紋晩期の土器（1/4）…… 14
第 10 図　弥生時代最終遺構面（西から）…… 14
第 11 図　１、２号方形周溝墓（西から）…… 14
第 12 図　邪視文土器　SD－03…… 15
第 13 図　亀井１・２号犬出土状況　SD－03…… 15
第 14 図　KM－H３～５調査区弥生時代最終遺構配置図（1/200）……19～20
第 15 図　KM－H７調査区弥生時代最終遺構配置図（1/200）……23～24
第 16 図　KM－H８調査区最終遺構配置図（1/200）…… 27
第 17 図　KM－H１～５・７調査区弥生時代最終遺構配置図（1/300）…… 28
第 18 図　SD－03あぜ配置図（1/200）…… 29
第 19 図　SD－03及びSD－12土層断面図（1/40）…… 30
第 20 図　SD－03（II）層遺物出土状況（1/20）……31～32
第 21 図　SD－03出土土器実測図（1/4）…… 33
第 22 図　SD－03出土土器実測図（1/4）…… 34
第 23 図　SK－04遺物出土状況（1/20）…… 35
第 24 図　SK－04出土土器実測図（1/4）…… 36
第 25 図　SD－12あぜ配置図（1/200）…… 36
第 26 図　SD－12土層断面図（1/40）…… 36
第 27 図　SD－12　１～４ブロック遺物出土状況（1/20）……37～38
第 28 図　SD－12　４～６ブロック遺物出土状況（1/20）及び土層断面図（1/40）……39～40
第 29 図　SD－12出土土器実測図（1/4）…… 43
第 30 図　SD－12出土土器実測図（1/4）…… 44
第 31 図　SD－12出土土器実測図（1/4）…… 46

第 32 図　ＳＤ－12出土土器実測図（1/4）…… 48
第 33 図　ＳＤ－12出土土器実測図（1/4）…… 49
第 34 図　ＳＤ－12出土土器実測図（1/4）…… 50
第 35 図　ＳＫ－05遺構平面図及び土層断面図（1/40）…… 51
第 36 図　ＳＫ－05出土土器実測図（1/4）…… 52
第 37 図　ＳＫ－05出土土器実測図（1/4）…… 53
第 38 図　ＳＫ－06・12平面図及び土層断面図（1/40）…… 54
第 39 図　ＳＫ－06・07・13・14，ＳＤ－18遺構平面図（1/40）…… 55
第 40 図　ＳＫ－14土層断面図（1/40）…… 56
第 41 図　ＳＫ－15出土土器実測図（1/4）…… 56
第 42 図　ＳＫ－15遺構平面図及び土層断面図（1/20）…… 57
第 43 図　ＳＫ－07出土土器実測図（1/4）…… 58
第 44 図　ＳＫ－08出土土器実測図（1/4）…… 58
第 45 図　ＳＫ－08・09・10，ＳＤ－10遺構平面図（1/60）…… 59
第 46 図　ＳＫ－13及びＳＤ－18土層断面図（1/40）…… 59
第 47 図　ＳＤ－03あぜ配置図（1/200）…… 60
第 48 図　ＳＤ－03あぜ８土層断面図（1/40）……61～62
第 49 図　ＳＤ－03　６ブロック（Ｉ）層遺物出土状況（1/30）……61～62
第 50 図　ＳＤ－03　６，７ブロック（II）層遺物出土状況（1/30）……61～62
第 51 図　ＳＤ－03出土土器実測図（1/4）…… 64
第 52 図　ＳＤ－03出土土器実測図（1/4）…… 66
第 53 図　ＳＤ－19土層断面図（1/40）……67
第 54 図　ＳＤ－19（II）層遺物出土状況（1/20）……69～70
第 55 図　ＳＤ－19出土土器実測図（1/4）…… 71
第 56 図　ＳＤ－19出土土器実測図（1/4）…… 72
第 57 図　ＳＤ－19出土土器実測図（1/4）…… 73
第 58 図　ＳＤ－20（III）層遺物出土状況（1/20）……75～76
第 59 図　ＳＤ－20出土土器実測図（1/4）…… 77
第 60 図　ＳＤ－20出土土器実測図（1/4）…… 78
第 61 図　ＳＤ－09出土土器実測図（1/4）…… 80
第 62 図　ＳＤ－09出土土器実測図（1/4）…… 81
第 63 図　ＳＤ－10土層断面図（1/40）……83
第 64 図　ＳＤ－14あぜ配置図（1/200）…… 83
第 65 図　ＳＤ－14あぜ２土層断面図（1/40）…… 84

第 66 図　ＳＤ－14　１ブロック上位遺物出土状況（1/20）…… 85
第 67 図　ＳＤ－14出土土器実測図（1/4）…… 86
第 68 図　ＳＤ－14　１，２ブロック下位遺物出土状況（1/20）……87～88
第 69 図　ＳＤ－14　３，４ブロック上位遺物出土状況（1/20）……89～90
第 70 図　ＳＤ－14　３，４ブロック下位遺物出土状況（1/20）……91～92
第 71 図　ＳＤ－14出土土器実測図（1/4）…… 94
第 72 図　ＳＤ－14出土土器実測図（1/4）…… 96
第 73 図　ＳＤ－14出土土器実測図（1/4）…… 97
第 74 図　焼土坑遺構平面図（1/40）及び土層断面図（1/40）…… 98
第 75 図　江戸時代旧平野川遺構平面図（1/500）…… 98
第 76 図　旧平野川，ＳＥ－01出土遺物実測図（1/4）…… 99
第 77 図　旧平野川，ＳＥ－01出土遺物実測図（1/4）……101
第 78 図　ＳＥ－03遺構平面図及び導水管掘り方土層断面図（1/60）…… 102
第 79 図　ＳＫ－16遺物出土状況及び土層断面図（1/40）…… 105
第 80 図　ＳＫ－16出土土器実測図（1/4）……106
第 81 図　ＳＤ－22出土土器実測図（1/4）……108
第 82 図　ＳＤ－22出土土器実測図（1/4）……109
第 83 図　ＳＤ－22出土土器実測図（1/4）……110
第 84 図　ＳＤ－22大型台付鉢形土器出土状況（1/30）…… 111
第 85 図　ＳＤ－24，25遺構平面図（1/80）…… 112
第 86 図　ＳＤ－24出土土器実測図（1/4）……112
第 87 図　ＳＫ－17遺構平面図及び土層断面図（1/20）…… 114
第 88 図　ＳＫ－17出土土器実測図（1/4）……114
第 89 図　ＳＤ－09出土土器実測図（1/4）……116
第 90 図　ＳＤ－23土層断面図（1/40）…… 117
第 91 図　ＳＤ－23出土土器実測図（1/4）……118
第 92 図　ＳＤ－11出土土器実測図（1/4）……119
第 93 図　⑩ライン沿い土層断面図（1/60）…… 120
第 94 図　ＳＸ－03遺物出土状況（1/25）　第１回目……121～122
第 95 図　ＳＸ－03遺物出土状況（1/25）　第２回目……123～124
第 96 図　ＳＸ－03地区割り図（1/100）…… 125
第 97 図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）……127
第 98 図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）……128
第 99 図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）……129

第100図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）…… 130
第101図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）…… 132
第102図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）…… 134
第103図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）…… 135
第104図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）…… 136
第105図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）…… 139
第106図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）…… 140
第107図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）…… 142
第108図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）…… 143
第109図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）…… 144
第110図　第Ⅶ層出土土器実測図（1/4）…… 145
第111図　落ち込み３南北土層断面図（1/40）…… 146
第112図　落ち込み３遺物出土状況（1/30）…… 147
第113図　落ち込み３出土土器実測図（1/4）…… 148
第114図　落ち込み３出土土器実測図（1/4）…… 149
第115図　第Ⅴ層出土土器実測図（1/4）…… 150
第116図　ＳＫ－19遺構平面図及び土層断面図（1/40）…… 151
第117図　ＳＫ－19出土土器実測図（1/4）…… 152
第118図　ＳＫ－21遺構平面図及び土層断面図（1/30）…… 153
第119図　ＳＫ－21出土土器実測図（1/4）…… 154
第120図　ＳＫ－18遺構平面図及び土層断面図（1/20）…… 155
第121図　ＳＫ－18出土土器実測図（1/4）…… 156
第122図　ＳＫ－20出土土器実測図（1/4）…… 156
第123図　ＳＫ－23，28土層断面図（1/40）…… 157
第124図　ＳＤ－19及びＳＫ－24土層断面図（1/40）…… 158
第125図　ＳＤ－19遺構平面図及びピット群（1/50）……159～160
第126図　ＳＤ－19（Ⅲ）層遺物出土状況（1/25）……161～162
第127図　ＳＤ－19出土土器実測図（1/4）…… 165
第128図　ＳＤ－19出土土器実測図（1/4）…… 166
第129図　ＳＤ－19出土土器実測図（1/4）…… 167
第130図　ＳＤ－19出土土器実測図（1/4）…… 168
第131図　ＳＤ－19出土土器実測図（1/4）…… 170
第132図　ＳＤ－20土層断面図（1/40）…… 171
第133図　ＳＤ－20出土土器実測図（1/4）……173

第134図　ＳＤ－20出土土器実測図（1/4）……174
第135図　ＳＤ－26遺物出土状況（1/40）……175～176
第136図　ＳＤ－26東端土層断面図（1/40）……177
第137図　ＳＤ－26西端土層断面図（1/40）……177
第138図　ＳＤ－26出土土器実測図（1/4）……178
第139図　ＳＤ－26出土土器実測図（1/4）……180
第140図　ＳＤ－27Ｂブロック東側のあぜ土層断面図（1/40）……181
第141図　ＳＤ－27（II）層遺物出土状況（1/40）……183～184
第142図　ＳＤ－27出土土器実測図（1/4）……185
第143図　ＳＤ－27出土土器実測図（1/4）……186
第144図　ＳＤ－27出土土器実測図（1/4）……187
第145図　ＳＤ－29土層断面図（1/40）……189
第146図　ＳＤ－29出土土器実測図（1/4）……189
第147図　ＳＤ－11出土土器実測図（1/4）……191
第148図　ＳＤ－11出土土器実測図（1/4）……192
第149図　第Ⅸ層出土土器実測図（1/4）……193
第150図　古墳時代出土遺物実測図（1/4）……194
第151図　亀井１号墳遺構平面図（1/200）……195
第152図　ＳＫ－25遺構平面図及び土層断面図（1/40）……198
第153図　ＳＫ－25出土土器実測図（1/4）……199
第154図　ＳＫ－25出土土器実測図（1/4）……200
第155図　ＳＫ－26出土土器実測図（1/4）……202
第156図　ＳＫ－26，27遺構平面図及び土層断面図（1/40）……203
第157図　ＳＤ－30出土土器実測図（1/40）……203
第158図　石器組成比較図……205
第159図　石器実測図（2/3）……208
第160図　石器実測図（2/3）……209
第161図　石器実測図（2/3）……210
第162図　石器実測図（2/3）……211
第163図　石器実測図（2/3）……213
第164図　石器実測図（2/3）……214
第165図　石器実測図（2/3）……215
第166図　石器実測図（2/3）……216
第167図　石器実測図（2/3）……217

第168図　石器実測図（2/3）…… 218
第169図　石器実測図（2/3）…… 221
第170図　石器実測図（2/3）…… 222
第171図　石器実測図（2/3）…… 224
第172図　石器実測図（2/3）…… 225
第173図　石器実測図（2/3）…… 227
第174図　石器実測図（2/3）…… 228
第175図　石器実測図（2/3）…… 229
第176図　石器実測図（2/3）…… 230
第177図　石庖丁石質比較図…… 231
第178図　石器実測図（1/2）…… 233
第179図　石器実測図（1/2）…… 234
第180図　太型蛤刃石斧石質比較図…… 235
第181図　石器実測図（1/2）…… 236
第182図　石器実測図（1/2）…… 237
第183図　砥石石質比較図…… 238
第184図　石器実測図（1/4）…… 239
第185図　石器実測図（1/2）…… 240
第186図　石器実測図（1/2）…… 242
第187図　石器実測図（1/2）…… 243
第188図　石器実測図（1/2）…… 244
第189図　敲き石石質比較図…… 245
第190図　用途別石器比較図…… 246
第191図　剥片類型比較図…… 248
第192図　二次加工ある剥片類型比較図…… 249
第193図　折断面ある剥片類型比較図…… 249
第194図　二次加工・折断面ある剥片類型比較図…… 249
第195図　剥片Ⅰ～Ⅲ類剥離角度数分布図…… 250
第196図　二次加工ある剥片剥離角度数分布図…… 250
第197図　剥片Ⅰ～Ⅲ類長／幅…… 251
第198図　二次加工ある剥片長／幅…… 251
第199図　剥片Ⅰ類長／幅比分布図…… 253
第200図　剥片Ⅱ類長／幅比分布図…… 253
第201図　剥片Ⅲ類長／幅比分布図…… 253

第202図　二次加工ある剝片長／幅比分布図…… 253
第203図　剝片Ⅰ～Ⅲ類厚さ分布図…… 253
第204図　二次加工ある剝片厚さ分布図…… 253
第205図　ＳＤ－19出土木製品実測図（1/4）…… 277
第206図　ＳＤ－19出土木製品実測図（1/4）…… 278
第207図　ＳＤ－19出土木製品実測図（1/4）…… 279
第208図　ＳＤ－19出土木製品実測図（1/4）…… 280
第209図　ＳＤ－19出土木製品実測図（1/4）…… 281
第210図　ＳＤ－19出土木製品実測図（1/4）…… 282
第211図　ＳＤ－19出土木製品実測図（1/4）…… 283
第212図　ＳＤ－19出土木製品実測図（1/4）…… 284
第213図　ＳＤ－19出土木製品実測図（1/2）…… 285
第214図　ＳＤ－19出土木製品実測図（1/8）…… 285
第215図　ＳＤ－19出土木製品実測図（1/4）…… 286
第216図　ＳＤ－20出土木製品実測図（1/4）…… 288
第217図　ＳＤ－20出土木製品実測図（1/4）…… 289
第218図　ＳＤ－27出土木製品実測図（1/4）…… 291
第219図　ＳＤ－27出土木製品実測図（1/4）…… 292
第220図　ＳＫ－21・22・25出土木製品実測図（1/4）…… 294
第221図　ＳＤ－03出土木製品実測図（1/4）…… 295
第222図　ＳＤ－03出土木製品実測図（1/4）…… 296
第223図　ＳＤ－12（ＳＤ－14）出土木製品実測図（1/4）…… 299
第224図　ＳＤ－12（ＳＤ－14）出土木製品実測図（1/4）…… 300
第225図　ＳＤ－12（ＳＤ－14）出土木製品実測図　58，59は（1/4）　60は（1/8）…… 301
第226図　ＳＤ－12（ＳＤ－14）出土木製品実測図（1/4）…… 302
第227図　ＳＤ－12（ＳＤ－14）出土木製品実測図（1/4）…… 303
第228図　ＳＤ－12（ＳＤ－14），ＳＤ－11出土木製品実測図（1/4）…… 304
第229図　ＳＤ－11出土木製品実測図（1/4）…… 306
第230図　ＳＫ－17出土木製品実測図（1/4）…… 307
第231図　土製品実測図　紡錘車、円板　（1/2）　但し３のみ石製紡錘車…… 313
第232図　土製品実測図　円板（1/2）…… 314
第233図　土製品実測図　円板（1/2）…… 315
第234図　土製品実測図　円板（1/2）…… 316
第235図　土製品実測図　土玉（1/1）…… 319

第236図　弥生時代記号文拓影（1）（1/2）…… 322
第237図　弥生時代記号文拓影（2）（1/2）…… 323
第238図　弥生時代記号文拓影（3）（1/2）…… 324
第239図　弥生時代記号文拓影（4）（1/2）…… 325
第240図　弥生時代記号文拓影（5）（1/2）…… 326
第241図　弥生時代記号文拓影（6）（1/2）…… 327
第242図　弥生時代記号文拓影（7）（1/2）…… 331
第243図　鉄斧実測図（1/2）…… 332
第244図　銅鏃実測図（1/1）…… 332
第245図　亀井遺跡出土のト骨（1/2）　a肋骨面　b外側面…… 335
第246図　イヌ頭蓋の上・下・側面観、下顎の計測点…… 340
第247図　前肢骨の計測点…… 344
第248図　後肢骨及び陰茎骨の計測点…… 346
第249図　亀井犬（a）1号犬　（b）2号犬　（c）3号犬　（d）9号犬　上面観…… 351
第250図　亀井犬（a）1号犬　（b）2号犬　（c）3号犬　（d）9号犬　底面観…… 352
第251図　亀井犬（a）1号犬　（b）2号犬　（c）3号犬　（d）9号犬　側面観…… 353
第252図　亀井犬（a）7号犬　（b）9号犬　（c）6号犬　（d）2号犬　（e）1号犬
（a）、（c）～（e）は頬側面観（b）は舌側面観…… 354
第253図　骨角器実測図　ソフトハンマー（1/2）…… 355
第254図　ソフトハンマーとしての使用想定図…… 356
第255図　遺物素材取得部位…… 356
第256図　骨角器実測図（2/3）…… 357
第257図　ＳＤ－26出土土器実測図（1/2）…… 359

表　目　次

第 1 表　KM－H 1・2 調査区遺構一覧表……15
第 2 表　KM－H 3 調査区遺構一覧表……17
第 3 表　KM－H 4 調査区遺構一覧表……18
第 4 表　KM－H 5 調査区遺構一覧表……21
第 5 表　KM－H 7 調査区遺構一覧表……25
第 6 表　KM－H 8 調査区遺構一覧表……26
第 7 表　亀井遺跡出土打製石器出土遺構一覧表（H 3～H 8 調査区）……206
第 8 表　亀井遺跡出土磨製石器出土遺構一覧表（H 3～H 8 調査区）……206
第 9 表　主要な磨製・礫石器石質一覧表……232
第 10 表　剥片類型比較一覧表……248
第 11 表　二次加工ある剥片類型比較一覧表……249
第 12 表　折断面ある剥片類型比較一覧表……249
第 13 表　二次加工・折断面ある剥片類型比較一覧表……249
第 14 表　剥片属性一覧表……254
第 15 表　報告石器一覧表……256～258
第 16 表　剥片Ⅰi 類計測一覧表（mm・度）……258
第 17 表　剥片Ⅰii 類計測一覧表（mm・度）……258～259
第 18 表　剥片Ⅰiii 類計測一覧表（mm・度）……259～260
第 19 表　剥片Ⅰiv 類計測一覧表（mm・度）……260～261
第 20 表　剥片Ⅱi 類計測一覧表（mm・度）……262
第 21 表　剥片Ⅱii 類計測一覧表（mm・度）……262
第 22 表　剥片Ⅱiii 類計測一覧表（mm・度）……262
第 23 表　剥片Ⅱiv 類計測一覧表（mm・度）……262～263
第 24 表　剥片Ⅲi 類計測一覧表（mm・度）……263
第 25 表　剥片Ⅲii 類計測一覧表（mm・度）……263
第 26 表　剥片Ⅲiii 類計測一覧表（mm・度）……263～264
第 27 表　剥片Ⅲiv 類計測一覧表（mm・度）……264
第 28 表　その他の剥片計測一覧表（mm・度）……265～269
第 29 表　H 1～H 2 調査区亀井遺跡出土打製石器出土遺構一覧表……269～270
第 30 表　H 1～H 2 調査区亀井遺跡出土磨製・礫石器出土遺構一覧表……270
第 31 表　亀井遺跡（KM－H 3～8 調査区）出土の木製品一覧表……272
第 32 表　土製紡錘車の法量一覧表……310
第 33 表　亀井遺跡（KM－H 1・2）出土の紡錘車一覧表（参考）……310
第 34 表　『亀井・城山』出土の紡錘車一覧表（参考）……310～311

第 35 表　円板の法量一覧表…… 317～318
第 36 表　亀井遺跡（ＫＭ－Ｈ１・２）出土の円板一覧表（参考）…… 318
第 37 表　『亀井・城山』出土の円板一覧表（参考）…… 318～319
第 38 表　記号文の拓影一覧表…… 321
第 39 表　弥生時代記号文土器観察表（１）…… 328
第 40 表　弥生時代記号文土器観察表（２）…… 329
第 41 表　弥生時代記号文土器観察表（３）…… 330
第 42 表　家犬頭骨及び四肢骨長幅標準表（単位mm）…… 337
第 43 表　頭蓋の計測値一覧表…… 342
第 44 表　下顎骨の計測値一覧表…… 343
第 45 表　四肢骨の計測値一覧表（１）…… 348
第 46 表　四肢骨の計測値一覧表（２）…… 349

第Ⅰ章　は　じ　め　に

亀井遺跡は、大阪府八尾市南亀井町一帯に拡がる一辺約500mと推定される複合集落遺跡である（第1図）。

当該遺跡の調査は、昭和43年に平野川改修工事に伴なって発見されて以来、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会、八尾市教育委員会、財団法人大阪文化財センター等、調査主体者こそ異なるものの、繰返し発掘調査が実施され、弥生時代前期から人々の生活の舞台となった極めて重要な遺跡であることが明らかとなってきた。

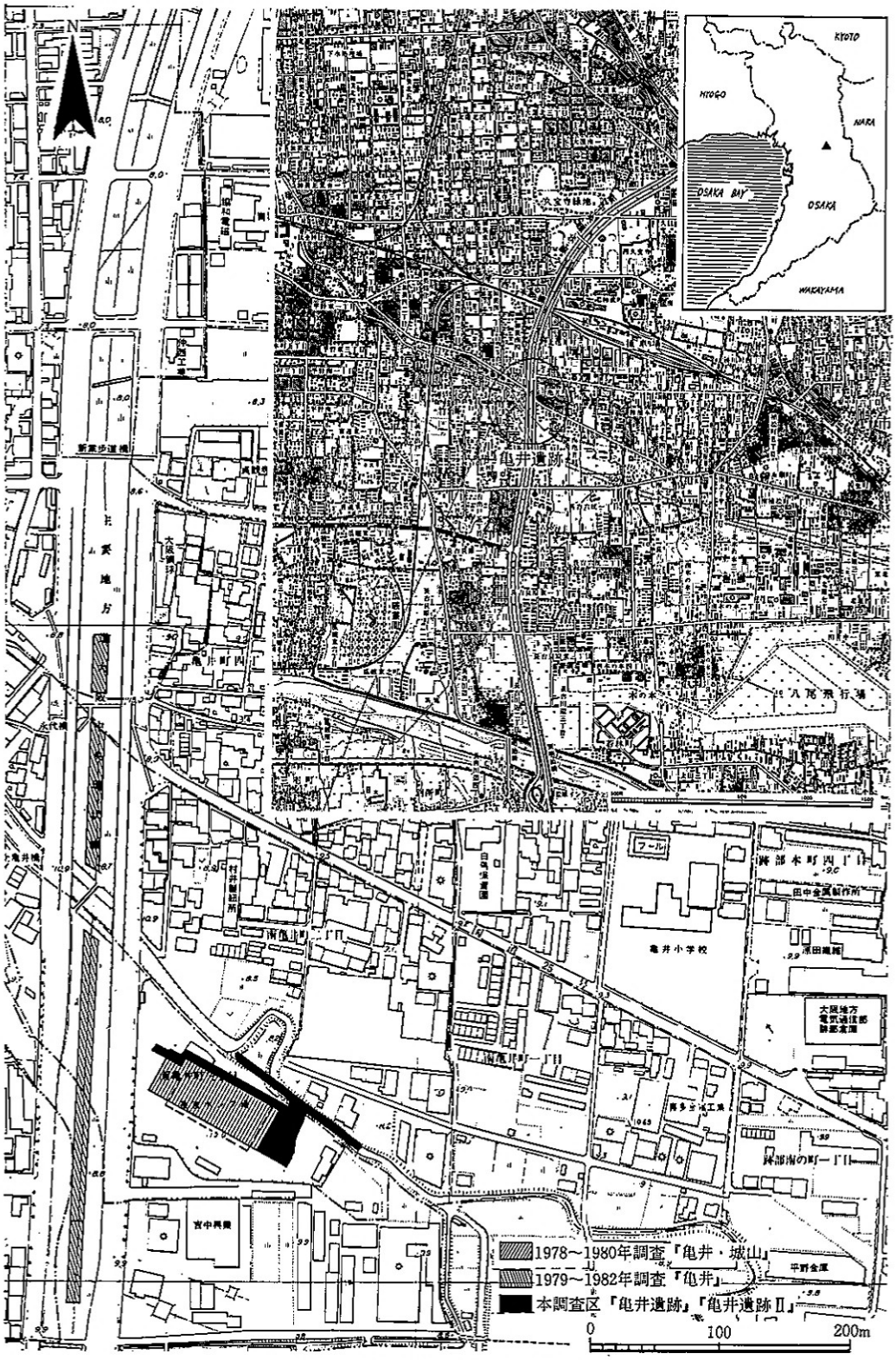
中でも、昭和52年から実施された大阪府東部流域下水道事務所の施工にかかる寝屋川南部流域下水道事業に関連する長吉ポンプ場築造工事及び飛行場南北幹線下水管渠築造工事は、当該遺跡中心部分に位置する大規模な開発として注目され、遺跡の保護と生活環境の整備という二律背反する課題に関して、大阪府教育委員会と大阪府土木部の間で建設計画の変更をも含めた協議が繰返し行なわれたが、結局工事予定地内全域の発掘調査を実施することと、その結果に基づいて最終的に協議をすることで合意がなされた。

上記合意に基ずく発掘調査は、財団法人大阪文化財センターにより実施され、弥生時代前期～後期の集落、古墳時代中期～後期の古墳、堤防、水田跡及び大規模な自然河川等々、貴重な遺構群と、多量の遺物が出土し、その結果は『亀井・城山』として報告したところである。

さらに、上記の長吉ポンプ場築造に関連する平野川改修工事を含む一連の事業についても、一貫した調査主体の下に実施されるべきものとして、当センターが実施することとなり、昭和55年から2年間にわたって発掘調査が行なわれ、弥生時代を中心とした遺構や多量の遺物を検出した。この調査の結果は、1982年『亀井遺跡』として報告したところであるが、遺物については、その量があまりにも膨大であったこと、契約期間がこれ以上延長不可能であったこと等から、弥生時代を中心とした主たる遺物について報告することが出来なかった。しかし、未報告の遺物群は、亀井遺跡を理解する上に極めて重要な位置を占めると考えられる物が多数含まれており、契約上の終了をもって調査の完了とするには、あまりにも影響が大きいと考えられたことから、担当した職員を中心として、下記の職員の協力の下に最大限の努力をはらって必要最少限の報告を追加することとした。

本報告書の刊行に当っては、当該調査を担当した中西靖人主幹兼業務第1係長、宮崎泰史、西村尋文両技師の本務を完遂しながらの積極的な努力は特筆されるべきであるが、他に国乗和雄、村上年生、平井貞子、片山彰一、杉本二朗、一の瀬和夫、山口誠治、岸本道昭、宮野淳一、上西美佐子、高橋雅子、畑　暢子各技師の時間を超越した支援があって完成したものである。また、発刊に当っては、井上定清、小林廣善両事務局長をはじめとする事務局職員並びに石神　怡業務課長、福岡澄男主幹兼普及係長の援助があった。

本報告書は、このようにして昭和59年3月発刊されることとなったものである。



第1図　亀井遺跡の位置と調査トレンチ

第II章　調査の目的と方法

第１節　調査に至る経過

大阪平野（河内平野）は、旧大和川と呼ばれる本流としての長瀬川・玉串川と、平野川を含む数条の中小河川によって形成された沖積平野であり、亀井遺跡は、この沖積平野の南端部に位置している。

一方、近年大都市を中心にした近隣市町の急激な都市化現象は、農地の宅地化を促進し、人口の急増をもたらし、結果、地域住民生活と密接に関連をもつ環境の整備は、必要欠くべからざるものとなってきている。

大阪府土木部下水道課が計画・実施している寝屋川南部流域下水道事業は、これら環境整備事業の一環として、東大阪市・八尾市・柏原市並びに大阪市や藤井寺市の一部を含む地域の広域幹線下水道網整備事業である。

亀井遺跡の所在する八尾市南亀井町３丁目の地は、上記幹線下水道の中継基地として長吉ポンプ場の建設用地となったことから、亀井遺跡も、古代の人々の生活の舞台から、現代の下水道網の中心的基地となることとなった。

ちなみに、亀井遺跡は、昭和43年、主要地方道大阪中央環状線の建設工事に伴って実施された平野川改修工事に際して、多量の弥生式土器が発見されたことによって遺跡の存在が知られたものである。この発見により、当該改修工事と併行して発掘調査が実施され、遺物包含層の確認と、その拡がりが把握されたが、工事区間のみに限られていたこともあって、全体の範囲については不明な点が多く、また、層位的に逆転現象が認められたことから、遺構の存在についても否定的な認識のもとにおかれていた。その後、本遺跡の原位置の確認や、遺物包含層の分布範囲の確認を目的とした範囲確認調査が４次にわたって大阪府教育委員会の手で実施された。これら４次にわたる調査でも、遺構が認められたのは１回のみであり、昭和48年の時点では包含層の分布する範囲が東西500mであることを確認したにとどまり、唯一確認された遺構の性格については将来の調査にその解明を持ち越していた。さらに、昭和48年には、財団法人大阪文化財センターの手によって、近畿自動車道に関連する当該遺跡の範囲確認調査も実施され、中央環状線中央分離帯部分に於いて、南北に500mの拡がりを持っていることが確認された。

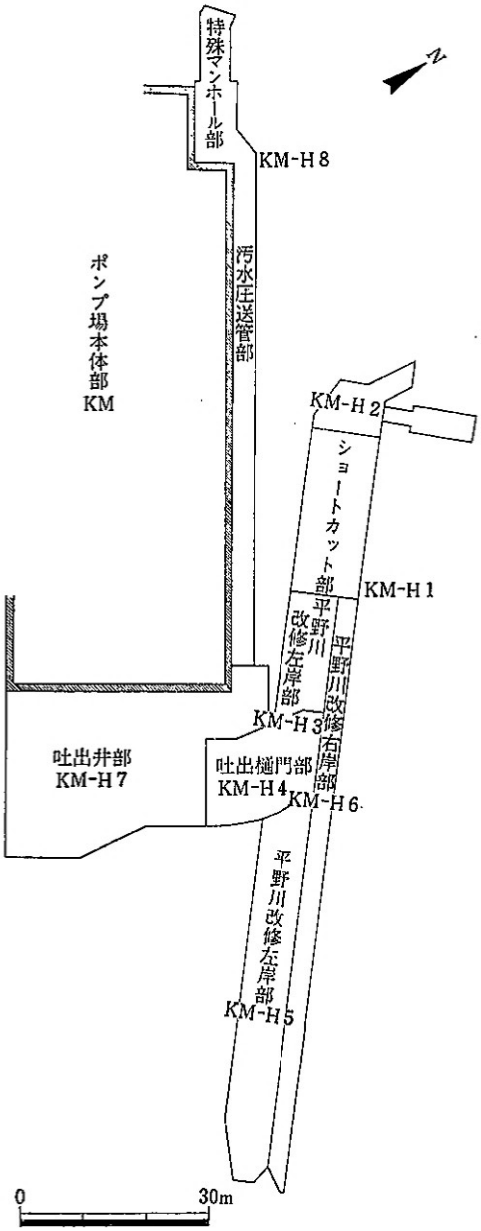
こうして、遺跡の範囲が概ね把握せられた時点で、先述の長吉ポンプ場の建設について、大阪府土木部から、大阪府教育委員会に対して、当該遺跡の取り扱いについて協議がもたれた。

協議を受けた大阪府教育委員会は、当該遺跡地内であることを確認すると共に、計画の変更を強く求めたが、用地取得が完了していること、中央南幹線下水管渠がすでに長吉ポンプ場を除いてほぼ完成していること等、計画の変更は困難であることから、長吉ポンプ場用地内に於ける正

確な試掘調査を実施し、遺物包含層の有無、遺構の有無やその範囲を確認し、その結果に基づいて再度協議したい旨回答した。

この回答に基づく試掘調査は、財団法人大阪文化財センターによって昭和52年に実施され、それまで不明とされていた弥生時代中期及び前期の遺構を検出するとともに、遺物包含層もプライマリーなものであり、当該地が亀井遺跡の中心部分である可能性が強いと結論されるに至った。この結果をもって、再度当該遺跡の取り扱いについて協議をもった大阪府土木部と大阪府教育委員会は、数回にわたり遺跡の保護・保存対策等を慎重に検討したが、結局、工事予定地内すべてに発掘調査を実施することと、その結果を基に最終的な協議と検討を加えることで合意した。こうして実施された長吉ポンプ場の発掘調査は、昭和53年から同55年まで、財団法人大阪文化財センターが東部流域下水道事務所の委託を受けて実施し、弥生時代全般にわたる集落関係の厖大な遺構・大量の遺物・古墳・平野川の旧流路、等々、亀井遺跡の中心部であり、大集落遺跡であることを明らかにした。

今回の調査は、先述の過去の調査結果を踏まえて、長吉ポンプ場に関連する施設（吐出井・吐口樋門・平野川改修・汚水圧送管）部分について、長吉ポンプ場と一連のものとしての協議に基づいて、同じく財団法人大阪文化財センターが、東部流域下水道事務所の委託を受けて、昭和55年６月から昭和57年３月まで実施したものである。その中で汚水圧送管部分については、古墳時代から弥生時代前期までの遺物包含層及び遺構が破壊されることがレベル的にないことから、上層の調査のみでとどめることとし、他の部分については、すべての時期の調査を実施することとした。



第２図　ＫＭ－Ｈ調査トレンチ配置図　(1/1000)

第2節　調　査　の　目　的

昭和53年～55年にかけて行われた亀井遺跡（ポンプ場本体部－以下、KMと略称する）発掘調査の成果は従来、洪水等によって遺物が押し流され、これが再堆積して形成された2次堆積層であると考えられていた弥生時代遺物包含層が、長期間同じ場所で生活している間に、生活・生産用具、食料残滓等の積極的な廃棄等の人為的要素と自然の営力によって堆積した自然的要素の2つの要素が融合した結果、形成されたものであることを証明した。加えるに、炭層・焼土層の間在によって複数の遺構を認め、各層より掘り込まれた遺構を確認でき、弥生時代遺物包含層とは、遺構面の集合したものであることを立証したことは大きな成果であったといえる。同時に豊富な遺構・遺物の出土量は、東除川・平野川流域はもちろんのこと河内平野においても亀井遺跡の重要性を遺漏なく世に示すに足りうるものであった。しかし反面、調査された面積は想定される亀井遺跡のほんのわずかであり、集落全体を考えていく際に、解決されていない3つの問題点を内蔵していた。

今回、調査にあたって我々に提出された大きな課題は、KMの調査で解明できなかった3つの問題を解くことにあった。

1）弥生時代から江戸時代にかけて、各々の生活を復元するにあたっての資料の蓄積が必要。特に、弥生時代に関しては弥生時代中・後期における集落の拡がり、弥生時代前・後期集落の位置（「KM」で検出された柱穴状ピットは、中期のものであり、確実に後期といえるピットはなく、前期に至っては溝一条が知られるのみである。）

2）亀井遺跡の立地環境がいつ頃成立したのか。また、集落の立地を大きく左右したであろう東除川、平野川の流跡については弥生時代後期、江戸時代以降以外は不明である。

3）調査によって縄紋海進最高期においては、河内湾南岸に位置していたことが明らかとなったが、当時の人々の生活域がどのようなものであったのか。また、旧石器時代の人々の生活域が、亀井遺跡まで及んでいたのか否かついては全くわかっていない。また、古墳時代前期の遺構・遺物が検出されていないのに突然、古墳時代中期の古墳が現れてくるのはどうしてなのか。解決されていない問題が山積みとなっている。

以上の問題点は、亀井遺跡における3回目の大規模調査であるという点からも、我々に与えられた課題であったといえる。また、亀井遺跡を理解するにあたっての調査の目的であった。

第3節　調　査　の　方　法

調査の開始にあたっては、以上に記したような目的意識（課題）を前提作業として認識し、KMの調査成果を最大限に利用した上で調査方法の検討を行い、調査に望んだ。

調査の準備として、当遺跡が低湿地に存在し、最終遺構面が現地表面下－5.0mに達することが明らかであるため、まず第1に、トレンチを囲むようにして鋼矢板を打設し、壁面の破壊をあ

らかじめ防いだ。

次に、KMとの位置関係を明確化するためと遺物の取りあげ、遺構実測の基準線としてKMの地区割りをそのまま利用して、第3図に示すように、KM－H全体に5×5mの区画を設定割付をした。基準線はポンプ場コンクリート連続壁に合わせ、基準線の方位はN－26°－Eを示す。各区画の地区名は、南北線を数字、東西線をアルファベットで示し、区画の東南の交点の番号を東南優位の原則に従って用いた。地区名はアルファベットを先にしるしている。たとえば、▨の地区名はO・5地区と呼称する。また、連壁より以東は0、①、②……として0を境に順次数字に〇印を付した。

調査の実際にあたっては、遺跡全体を一律に覆う層厚約2.0mの盛土（第Ⅰ層）及び第Ⅱ層を機械力の導入によって排土し、第Ⅲ層以下は人力による掘削を行った。

遺構の調査は次のような基準を設けて実施した。

1）遺跡の土層堆積状況及び遺構の切り合い関係を調べるため、トレンチの端に観察用セクションを斜め、若しくは階段状にして現地表面から残すように心掛けた。幸いKM－H1～5調査地区は南側に鋼矢板を打設していないので第Ⅰ層から残すことが出来た。反面、これがために発掘調査が下の方にさがるにしたがい幅をせばめざるをえず、当初設けた幅10mのトレンチが弥生時代最終遺構面では約4.0mとなり遺構の把握（拡がり）を妨げる結果にもつながった。

2）調査は、KMの基本土層に順じ、層位ごとに一面々剝いで遺構検出にあたった。

3）溝、土坑、方形周溝墓等の遺構については、土層堆積観察用セクションを1～4ヶ所設けて土層の堆積状況の把握に鋭意努力した。

4）遺物の取りあげは、1つの層に含まれている遺物が一括性を有するか否かについてを検討する前提作業として、でき得るかぎり層ごとに取りあげることを心掛けた。また、出土状況を重視する立場から実測・写真を取っている。

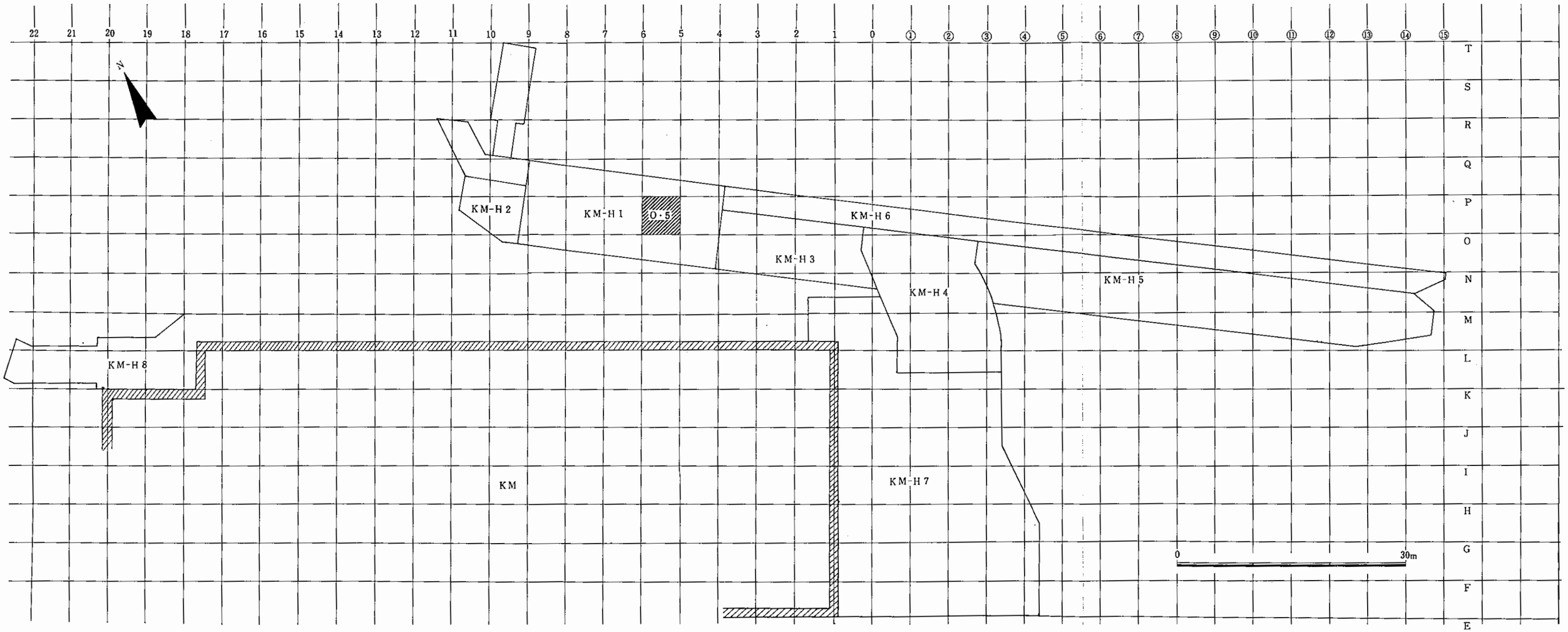
5）水準の表記はT.P.±を採用した。

6）平面図の実測は、地区割りの交点杭から各遺構の位置関係・方位の決定を行った。土層断面・平面図の実測図の縮尺は1/20を基調とし、適宜1/2、1/10、1/100を併用した。

7）写真撮影は適時にトレンチのまわり、トレンチ内に1～10段のビディ（写真撮影用足場）を設置して行った。遺物、土坑・溝等の遺構を単独であるいは近接して撮る場合は、三脚、手もちで撮影を行った。

8）土層観察用のあぜは、必要に応じて再検討できるように、可能な限り最後まで残すように心がけた。

9）自然環境を復元するための一つの方法として、できる限り土壌サンプルを採集し、種子・小さな動物骨（ネズミ・トリ・ヘビ・サカナ・カエル等）の検出に努めた。



第３図　ＫＭ－Ｈ地区割り図（1/500）

第Ⅲ章 基　本　層　序

ＫＭ－Ｈ調査地区において、普遍的に存在する層を基本土層として、『亀井・城山』の基本層序の呼称に対応させて示すと以下のようになる。

第Ⅰ層　調査予定地内の全面にわたって堆積する産業廃棄物（空カン・ビン・タイヤ等）を含む盛り土で、上面のレベルはＴ．Ｐ．＋10.0m、層厚約2.0mである。

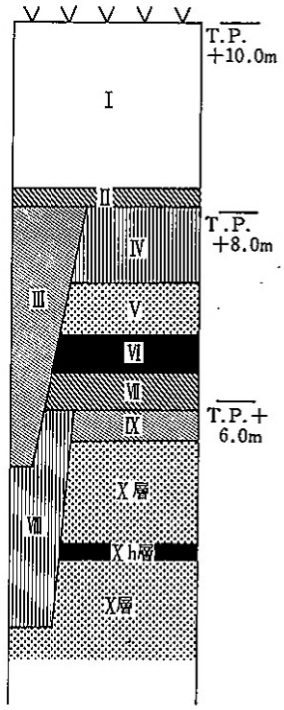
第Ⅱ層　（暗灰色砂質シルト層）　近年までの耕土・床土に相当する。上面のレベルはＴ．Ｐ．＋7.8mである。

第Ⅲ層　（砂・シルト－互層、粘土層）　江戸時代の平野川内に堆積する土層。Ｔ．Ｐ．＋8.0m～5.4m。上位からａ層（暗茶褐色粘土・暗褐色粘質土－埋没後の凹みに堆積した土層）Ｔ．Ｐ．＋8.0～6.9m、ｂ層（青灰色極細砂と青灰色シルトの互層）Ｔ．Ｐ．＋6.9～6.2m、ｃ層（灰白色粗砂－瓦・すり鉢・弥生土器を多く含んでいる）Ｔ．Ｐ．＋6.2～5.3m。ＫＭ－Ｈ４調査区のａ層下位（暗褐色粘質土）上面にて、取水用の井戸を検出している（図版37ａ）。

第Ⅳ層　（黄褐色シルト層）　全域を覆ってほぼ水平に堆積する。上面はＴ．Ｐ．＋8.0mで、層厚約0.8m。上位よりａ層（黄褐色極細粒砂混りシルト層）、ｂ層（黄褐色シルト層－多数の細い植物の根の跡に酸化鉄が沈着し、微細なマンガンノジュールが散在する）、ｃ層（灰黄褐色極細粒砂混りシルト層）。第Ⅳａ層上面にて江戸時代平野川の輪郭を確認している。Ｈ１調査区の第Ⅳｂ層上面では中世の小溝や落ち込み状遺構を検出した。

第Ⅴ層　（暗灰色粘土層）　本層上位は黄褐色極細砂、中位には植物遺体が数層間在する。下位では塊状の炭酸第一鉄が点在する層準に移行する。この層から古墳時代後期の須恵器が出土している。

第Ⅵ層　ＫＭ－Ｈ調査区では、『亀井・城山』第Ⅵ層に対応する偽礫層は存在しない。ＫＭ－Ｈ１，３調査区では、層厚約0.1～0.4mの褐灰色細砂＋暗灰色シルトのラミナが挟在し、第Ⅵ層に対応するものと思われる。沼状の滞水堆積と考えられる。検出面のレベルはＴ．Ｐ．＋6.7mである。ＫＭ－Ｈ４調



第４図　ＫＭ－Ｈ土層柱状図
(1/80)

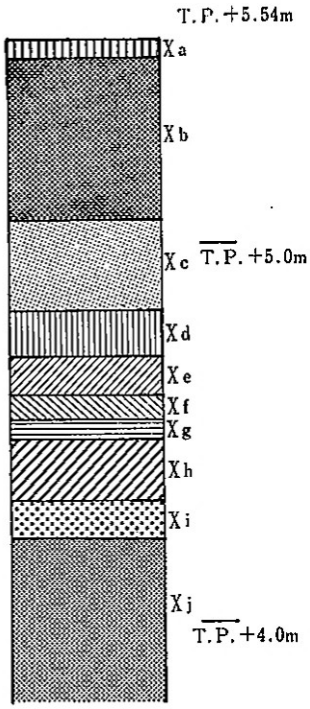
査区以東、KM－H７調査区では存在しない。

第Ⅶ層　（暗灰色シルト、青灰色シルト層）　自然河川ＮＲ－3001（ＳＤ－11）の氾濫土層である。とくに弥生時代後期の凹みで厚く堆積する。層厚0.3～0.5m。上面にて古墳時代初頭の落ち込み３、古墳時代前期の自然流路を検出している。検出面のレベルはＴ.Ｐ.＋6.4～6.3mである。

第Ⅷ層　（粗粒砂層）　弥生時代後期の自然河川ＳＤ－11内に堆積する層で、上面はＴ.Ｐ.＋6.0mで、層厚約3.5mをはかる。

第Ⅸ層　（弥生時代遺物包含層）　上面はほぼ水平でＴ.Ｐ.＋6.2～5.6m、層厚は0.5～0.8m。方形周溝墓は第Ⅸ層をベースとして築かれている。黒灰色粘土と黒褐色粘土で形成されている。

第Ｘ層　（青灰色シルト層）　亀井遺跡弥生時代最終遺構面のベースとなる層（地山層）である。上面はＴ.Ｐ.＋5.7～5.04m。さらに、第Ｘ層をＴ.Ｐ.＋5.45m～Ｔ.Ｐ.＋4.0mまで、層準の中で細分すると以下のようになる（第９図）。



第Ｘａ層（青灰色粘質土）

第Ｘｂ層（青灰色シルト）　粘土や砂・シルト互層を薄く間在させ、漸進的に粗粒砂に変化する。

第Ｘｃ層（青灰色粘土）

第Ｘｄ層（茶灰色粘土）　ラミナを認める。

第Ｘｅ層（暗青色粘土）　有機物を多量に含み、カーボンを間在している。

第Ｘｆ層（暗灰色粘土）　わずかに有機物を含み、カーボンを多量に含む。

第Ｘｇ層（暗灰色シルト）　第Ｘｆ層から第Ｘｈ層にいたる漸進層である。

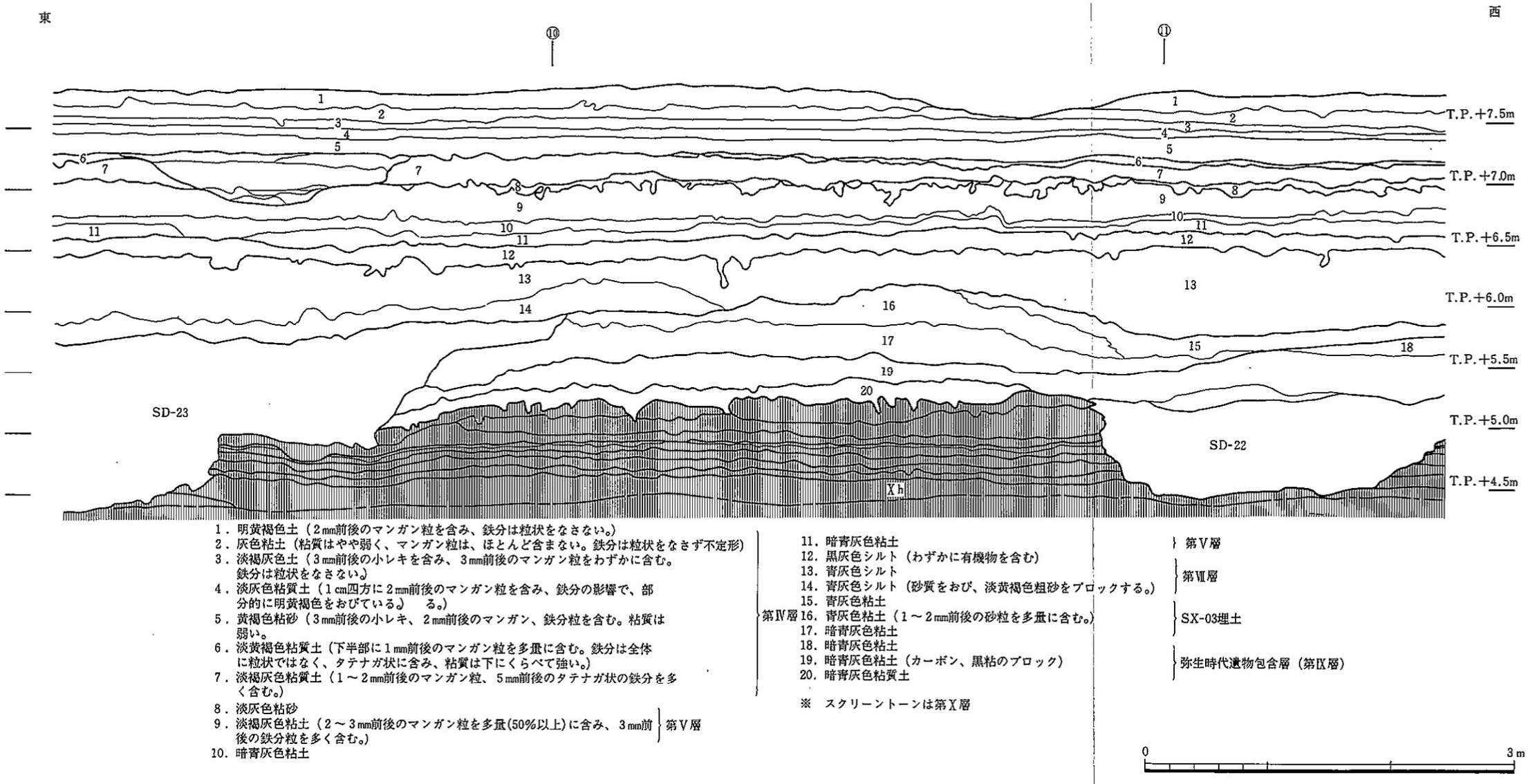
第Ｘｈ層（暗褐灰色粘土）　こまかな有機物を多量に含んでいる。

第Ｘｉ層（暗灰色シルト）　比較的よくしまっている。

第Ｘｊ層（青灰色シルト）　この層に達すると湧水が激しくなり、漸進的に粗粒砂に変わる。

第５図　第Ｘ層の柱状図（1/20）

第Ｘｈ層からは有機物・植物種子とともに縄紋晩期の土器底部を得ており、この層が縄紋時代晩期に形成された堆積であると思われた。したがって、第Ｘｇ～第Ｘａ層は縄紋晩期から弥生時代前期の間に形成されたものであることが了解された。



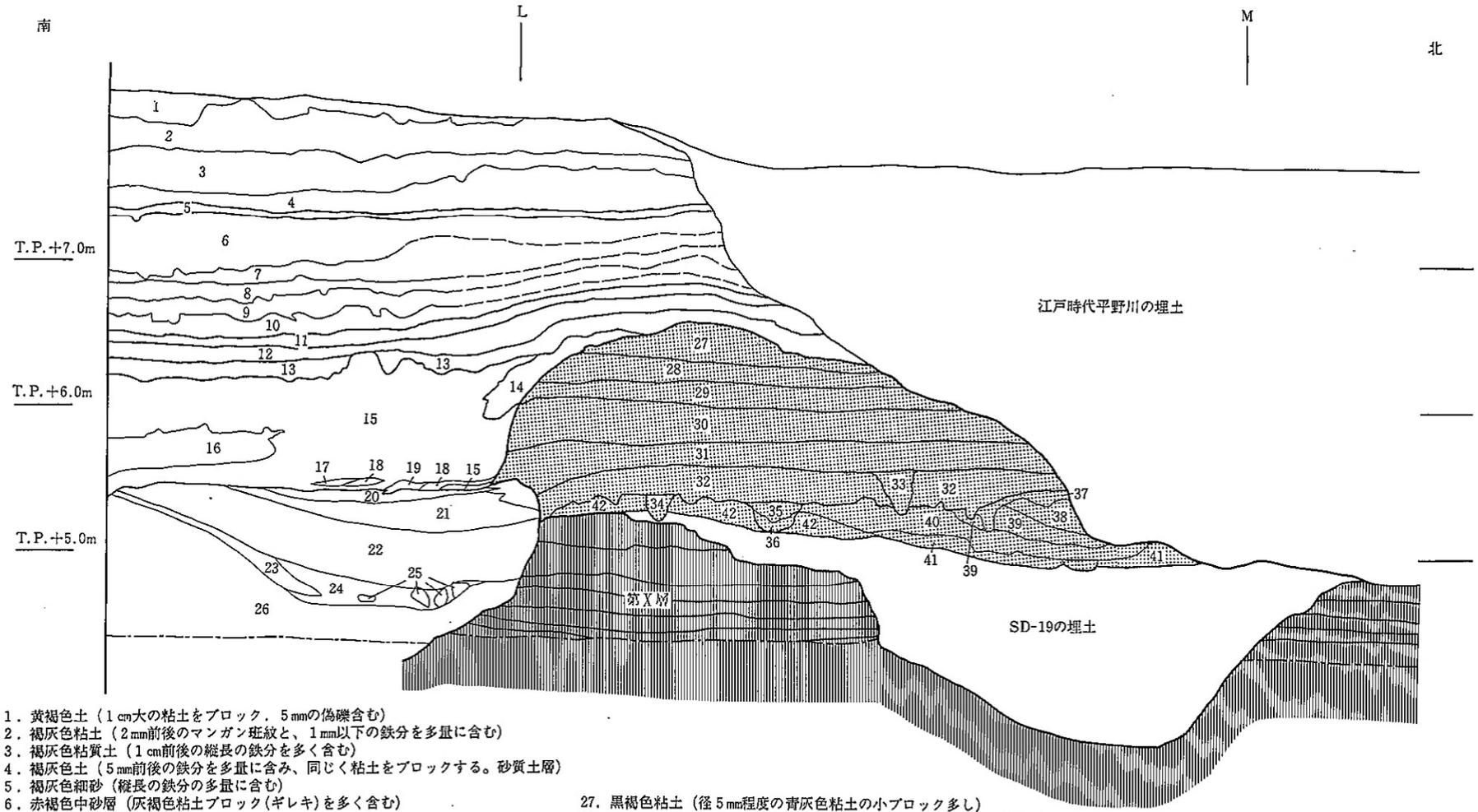
1．明黄褐色土（2mm前後のマンガン粒を含み、鉄分は粒状をなさない。）
2．灰色粘土（粘質はやや弱く、マンガン粒は、ほとんど含まない。鉄分は粒状をなさず不定形）
3．淡褐灰色土（3mm前後の小レキを含み、3mm前後のマンガン粒をわずかに含む。鉄分は粒状をなさない。）
4．淡灰色粘質土（1cm四方に2mm前後のマンガン粒を含み、鉄分の影響で、部分的に明黄褐色をおびている。　る。）
5．黄褐色粘砂（3mm前後の小レキ、2mm前後のマンガン、鉄分粒を含む。粘質は弱い。
6．淡黄褐色粘質土（下半部に1mm前後のマンガン粒を多量に含む。鉄分は全体に粒状ではなく、タテナガ状に含み、粘質は下にくらべて強い。）
7．淡褐灰色粘質土（1～2mm前後のマンガン粒、5mm前後のタテナガ状の鉄分を多く含む。）
8．淡灰色粘砂
9．淡褐灰色粘土（2～3mm前後のマンガン粒を多量(50%以上)に含み、3mm前後の鉄分粒を多く含む。）
10．暗青灰色粘土
} 第Ⅴ層

11．暗青灰色粘土
12．黒灰色シルト（わずかに有機物を含む）
13．青灰色シルト
14．青灰色シルト（砂質をおび、淡黄褐色粗砂をブロックする。）
15．青灰色粘土
16．青灰色粘土（1～2mm前後の砂粒を多量に含む。）
17．暗青灰色粘土
18．暗青灰色粘土
19．暗青灰色粘土（カーボン、黒粘のブロック）
20．暗青灰色粘質土
} 第Ⅳ層

※　スクリーントーンは第Ⅹ層

} 第Ⅴ層
} 第Ⅶ層
} SX-03埋土
} 弥生時代遺物包含層（第Ⅸ層）

第6図　KM－H4調査区西壁土層断面図（1/40）



1．黄褐色土（1㎝大の粘土をブロック，5㎜の偽礫含む）
2．褐灰色粘土（2㎜前後のマンガン斑紋と、1㎜以下の鉄分を多量に含む）
3．褐灰色粘質土（1㎝前後の縦長の鉄分を多く含む）
4．褐灰色土（5㎜前後の鉄分を多量に含み、同じく粘土をブロックする。砂質土層）
5．褐灰色細砂（縦長の鉄分の多量に含む）
6．赤褐色中砂層（灰褐色粘土ブロック(ギレキ)を多く含む）
7．青灰褐色粘土層
8．黒褐色粘土層（径1㎜以下の砂粒を含む）
9．灰褐色粘土層（径1㎜以下の砂粒を含む）
10．青灰色(暗)粘土層（全くの粘土層）
11．青灰色(暗)粘土層（炭化物を多く含む）
11．青灰色(暗)粘土層
13．黒褐色粘土層
13．黒褐色粘砂主体層
14．灰褐色粘土
15．青灰色シルト
16．淡黄褐色中砂層
17．細礫層
18．淡黄褐色細砂
19．黒褐色粒土（砂多く、径2㎝程度のブロック）
20．淡褐色細礫層
21．淡白褐色中砂（径1㎜程度）
22．淡白褐色粒砂層
23．灰色細砂
24．灰色・淡白褐色中砂層の互層
25．黒褐色粘土ブロック（偽礫）
26．径3㎝以下の礫砂層
27．黒褐色粘土（径5㎜程度の青灰色粘土の小ブロック多し）
28．黒褐色粘土（27より大きな青灰色粘土のブロック（径1㎝程度）多し、かなり砂粒群のブロックを含む）
29．黒褐色粘土（28との区別むずかしい、わずかに青味をおびる）
30．黒褐色粘土（青味強し、径3㎝程度の比較的大きな青灰色・粘土ブロックを含む）
31．黒褐色粘土（赤味強い焼土を含む・青灰色粘土ブロックは極めて少ない）
32．灰黒色粘土を主体にするも青灰色粘土ブロック（径1㎝以下多し）を含む、カーボンもかなり多い
33．黒褐色粘土（炭化物を多く含む）
34．黒褐色粘土
35．灰色ブロック土（土器細片焼土を含む）
36．灰紫色粘土（カーボン・焼土主体）
37．灰黒色粘土（上層に青灰色ブロック）
38．青灰色粘土と黒褐色粘土のブロック層（黒褐色粘土主体）
39．青灰色粘土と黒褐色粘土のブロック層（青灰色粘土主体）
40．青灰色粘土と黒褐色粘土のブロック層（黒褐色粘土主体）
41．黒灰色土（2㎜以下の青灰色粘土を含み・8㎜以下のカーボン、4㎜以下の焼土を多く含んでいる）
42．青灰色シルトのブロック土層

※　27～42は弥生時代遺物包含層（第Ⅸ層）

0　2m

第7図　KM－H5調査区南壁土層断面図（1/40）

第Ⅳ章　調査の概要

第１節　はじめに

亀井遺跡は、旧大和川の支流である東除川、平野川の２つの旧河道の河道変遷によって形成された微高地（自然堤防）上に位置する弥生時代を中心として現代に至るまで居住空間として営まれてきた集落址である。(註1)

調査によって、弥生時代中期から江戸時代の平野川までの遺構を検出している。遺物では、旧石器時代の石器から江戸時代の瓦・陶器等の出土をみている。

調査の開始にあたって、あらかじめ調査対象地を８つの調査区に分け、その進行にあわせてＨ１・２，Ｈ３～５，Ｈ６，Ｈ７，Ｈ８と５回にわけて調査を行った（第３図）。

以下、各調査区ごとに節に分けて、調査の概要を略記する。Ｈ１・２調査区については、すでに『亀井遺跡』として報告書の刊行(註2)をみているが、あらためてここに略述する。なお、Ｈ６調査区の調査は、現平野川の堆積土を除去したのみなので省略している。

第２節　ＫＭ－Ｈ１・２の調査

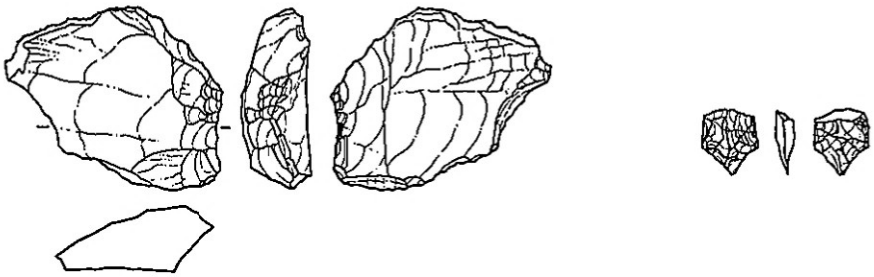
調査の概要

本調査地区は、亀井弥生集落の想定される南縁に相当している。調査によって検出した遺構は弥生時代の落ち込み２・焼土坑１・土坑３・溝８・ピット多数・方形周溝墓２（ＳＸ－01・02），古墳時代の自然流路１，奈良時代の小穴（足跡）多数，中世の小溝１・落ち込み２，江戸時代の自然河川１，近代素掘り溝である。

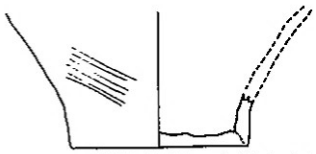
遺構・遺物の概要

縄紋時代以前

遺構は検出されていないが、弥生時代の２次的堆積層である方形周溝墓の盛土中から、旧石器時代の翼状剝片石核１点、有舌尖頭器片１点が出土している（第８図）。また、弥生時代中期末の溝ＳＤ－０３からは、縦長剝片を１点得ている。縄紋時代に関しては、基本層序第Ｘｈ層の暗



第８図　翼状剝片石核・有舌尖頭器（1/2）



第９図　縄紋晩期の土器(1/4)

褐灰色粘土中から、縄紋晩期の土器底部（第９図，図版175ａ）１点が出土している。底径約9.2ｃｍをはかり、鉢の底部と考えられる。著しくローリングを受けているが、わずかに条痕様の凹凸が認められる。晩期後半のものであろう。このことから、暗褐灰色粘土の形成は縄紋時代晩期であることが明らかとなった。

弥生時代中期

弥生時代中期の遺構は、Ｈ１調査区の全域で検出されている。土坑は３基検出されており、ＳＫ－01から第Ⅱ様式の土器片とともに石槍片１点が、ＳＫ－02からは結晶片岩製の紡錘車が、ＳＫ－03下層からは第Ⅲ様式古段階の土器、獣骨が出土している。Ｏ・７地区では、第Ⅱ様式の土器、イノシシ頭蓋骨、石小刃を出土した落ち込み１や、第Ⅱ様式の土器と石庖丁未製品が出土した落ち込み２を検出している。溝は、ＳＤ－03・05・07・08の４条を検出している。トレンチの西側において検出されたＳＤ－05からは、第Ⅲ－Ⅳ様式の土器が一括して出土している。ＳＤ－03からは、第Ⅳ様式の土器とともに邪視文土器、石庖丁形木製品、武器形木製品、イヌ２頭分の全身骨格、ト骨等が出土している（第12・13図）。

トレンチ西側では、亀井遺跡ではじめて方形周溝墓２基が検出された（第11図）。ＳＸ－01には東にかたよって２つの埋葬施設があり、いずれも木棺墓で、中に残っていた人骨にはどちらにも石鏃が伴っていた。ＳＸ－02はその大半が調査区外にあるが、ほぼ中央にて木棺墓２，土壙墓

第10図　弥生時代最終遺構面　（西から）

第11図　１，２号方形周溝墓　（西から）

２の埋葬施設を検出している。木棺墓には人骨が残っており、やはり石鏃を伴っていた。ＳＸ－01・02は第Ⅸ層をベースに、盛り土をして（一部、ＳＤ－03溝を埋めて）築造している。盛り土中から第Ⅳ様式の土器、石器、鳥形土製品、獣骨等が出土している。

住居の遺構は、８ライン以西において、夥しい柱穴状ピット・杭状ピットが検出されているが、復元は出来なかった。以上、中期の遺構を重複関係から、時期の前後関係を古い順に並べてみると、落ち込み１・２－ＳＫ－03－ピット群－ＳＤ－05－ＳＤ－03－方形周溝墓（ＳＸ－01・02）となる。弥生・古墳時代の遺構・遺物の概要については、第１表にまとめているので参照されたい。

第12図　邪視文土器　ＳＤ－03

第13図　亀井１・２号犬出土状況ＳＤ－03

弥生時代後期

後期の遺構には、溝ＳＤ－02・04・06がある。ＳＤ－02から第Ｖ様式前半～中頃にかけての土器、フライパン状着柄鋤が、ＳＤ－04から第Ｖ様式前半の土器、石器、獣骨等が、ＳＤ－06からは第Ｖ様式初頭の土器が一括出土している。

第１表　ＫＭ－Ｈ１・２調査区　遺構一覧表

	遺構名	時　代	規　　模（m）	主　な　遺　物	備　　考
溝	SD-01	古墳時代	巾10　深1.3	布留式の甕・鉢	
	SD-02	弥生後期	巾約4.7 長さ10.0以上	多量の土器・フライパン状木製品・自然木・石器	
	SD-03	弥生中期	巾約2.8　深1.5	木製農具・邪視文土器・動物遺存体(イヌ)・骨角製品	
	SD-04	弥生後期	巾3.0以上　深0.6以上	土器・動物遺存体(イヌ)・石器・骨角製品	
	SD-05	弥生中期	巾0.6　深0.4	土器・動物遺存体・石器	KMのSD3010に同じ。
	SD-06	弥生後期	巾7.0以上　深1.4	土器・木製品・石器・動物遺存体(イヌ)	
土　坑	SK-01	弥生中期	径0.9　深0.7	土器・石槍	
	SK-02	弥生中期	径2.5　深0.3	土器・石製紡錘車	
	SK-03	弥生中期	径1.8　深0.5	土器・イノシシ・スッポン	
墳　墓	SX-01	弥生中期	径6.0×3.6	木棺墓２	
	SX-02	弥生中期	径7.0×4.0以上	木棺墓２　土壙墓２	
ピット群		弥生中期		柱穴状ピット100個余	
		弥生中期		杭状ピット数100個にて構成	

古墳時代

８ラインから４ライン附近にかけて、第Ⅶ層をベースに南ー北に流れる自然流路ＳＤ－01が検出されている。下層から古墳時代前期（布留式）の壺・鉢・甕形土器が一括出土している。古墳時代中期～後期の遺構は未検出である。

奈良時代

奈良時代の遺構は、第Ｖ層上面において、ウシ・ウマ等の足跡が検出されている。

中世

ＫＭ－Ｈ１調査区第Ⅳｂ層上面において、室町時代と推定される溝、落ち込みを検出している。

江戸時代以降

８ライン以西において、東→西走する自然河川の北肩を検出している。

第３節　ＫＭ－Ｈ３の調査

調査の概要

本調査地は、ＫＭ－Ｈ１調査区に東接する。調査によって検出した遺構は、弥生時代の溝２条・土坑１基・ピット13個、奈良時代の小穴（足跡多数）、江戸時代の自然河川である。弥生時代の遺構・遺物の摘要については第２表にまとめているので参照されたい。

遺構・遺物の概要

弥生時代中期

該期の遺構は、江戸時代及び現在の平野川の浸蝕によって調査面積の1/2以上、削平を受けている。ＳＤ－03はＨ１調査区の調査で検出されたＳＤ－03より続く蛇行溝である。その覆土からは、畿内第Ⅳ様式の土器とともに、木製の鍬と鋤の把手、ヤス状骨器、多くの加工材木、自然木片、さらに、イヌ一括（図版５）をはじめとする豊富な動物骨など多種多様の遺物の出土をみている。また、２ライン以西にて検出されたピットは該期に相当するものと思われる。

弥生時代後期

弥生時代後期の遺構には、土坑ＳＫ－04、溝ＳＤ－12がある。いずれも時期は後期初頭である。ＳＤ－12は東西に蛇行して走る幅約3.5m、深さ1.2mの溝である。覆土内から畿内第Ｖ様式初頭の土器が一括出土している。木製品では布巻具が検出されている。把手に渦巻紋、身部両端近くに鋸歯紋、綾杉紋を刻み、装飾性に富んだものである。動植物遺存体の出土も多量かつ豊富である。中でも鹿角加工品の集中出土する点は注目される。

古墳時代～奈良時代

古墳時代の遺構は検出されていない。奈良時代の遺構は、江戸時代の自然河川の削平をまぬがれた２ライン以西の第Ｖ層上面において、ウシ・ウマ等の足跡が検出されている。

平安時代～江戸時代及び江戸時代以降

江戸時代の遺構には自然河川がある。２ライン以東において各時期の遺構を破壊して南→北に

走行する。この自然河川は、現在の平野川の前身河川と推定される。

第２表　ＫＭ－Ｈ３調査区遺構一覧表

	遺構名	時　代	規　　模（m）	主　な　遺　物	備　　考
溝	SD-03	弥生中期	巾2.6　深さ1.3	土器・木製農具・石器・イヌ	KM-H4 SD-03と同一溝
	SD-12	弥生後期	巾3.5　深さ1.2	多量の完形土器・農耕具・木製布巻具 動物遺存体（イヌ）・骨角製品	KM-H4 SD-14と同一溝
土　坑	SK-04	弥生後期	径1.0×1.3　深さ0.52	完形土器	
	ピット群	弥生中期			

第４節　ＫＭ－Ｈ４の調査

調査の概要

調査によって検出した遺構は、弥生時代の溝８条・土坑６基・井戸４基・ピット141個、奈良時代の小穴（足跡多数）、江戸時代の井戸３基・自然河川１条である。弥生時代の遺構・遺物の摘要は第３表にまとめているので参照されたい。

遺構・遺物の概要

弥生時代中期

弥生時代中期の遺構には、井戸・土坑・溝がある。ＳＫ－05、ＳＤ－03・19は、江戸時代の自然河川底上面で、ＳＤ－20はＳＤ－09の底面にて検出された。井戸は４基検出されており、ＳＫ－05の下層からは畿内第Ⅳ様式の壺形土器大小２個が一括出土している。ＳＫ－15下層からも小型水差形土器１点が単独で出土した。

土坑はＮライン以北において、４基検出された。ＳＫ－10からは中期の土器片少量とイヌの下顎骨片１が出土している。溝は中期初頭～中頃のＳＤ－19、中期中頃のＳＤ－18・20、中期末のＳＤ－03の４条が検出された。ＳＤ－19上層から畿内第Ⅲ様式主体、下層からは多量の第Ⅱ様式の土器、石器とともに木製容器（四脚・六脚）、太型蛤刃石斧の装着されたままの縦斧の柄、鹿角製ハンマー、ト骨が出土した。他にイノシシ・ニホンジカ・イヌ・魚類等の豊富な動物遺存体を検出している。また、興味深いものに土器の中にイノシシ左右下顎骨（M_3未萌出）、ニホンジカの大腿骨１が入っていた点をあげることが出来る。最下層からはニホンジカ左落角（完存品）と把手付台付鉢１点を得た。ＳＤ－20はＫＭのＳＤ－3004と同一の遺構で、溝内から第Ⅲ様式古段階の土器とともに豊作豊猟を願う祭祀遺物として、イノシシの下顎枝に約2cm大の粗孔を穿ったものが１例出土している。ＳＤ－03はＫＭ－Ｈ３調査区から続く溝で、溝内から第Ⅳ様式の土器、石器とともに木製農耕具、容器、ヤス状骨器が出土した。また、注目すべき遺物として瀬戸内系の甕形土器（図版82－33）１点が出土している。

弥生時代後期

弥生時代後期の遺構は、溝４条・自然河川１条である。東→西に走行するＳＤ－09からは中期から後期の多量の土器が出土してる。出土土器の中には，瀬戸内地方で後期初頭に編年されてい

る上東・鬼川市Ⅰ式に、形態的によく似た高杯口縁部片１点が含まれていた。ＳＤ－14はＫＭ－Ｈ３調査区で検出されたＳＤ－12と同一の溝である。Ｍ・②地区で収束している。遺物は多量の第Ⅴ様式初頭の土器、木製品、動物骨等が出土している。土器では瀬戸内系の高杯完形品１点と大型器台１点の出土が注目される。特に前者の場合、瀬戸内地方と近畿地方の併行関係を知る鍵になるであろう。木製品には、臼と高杯などがある。臼はＳＤ－14が収束するところから出土した。ＳＤ－11はＫＭのＮＲ3001から続く同一の自然河川である。ＳＤ－09同様、多量の土器が出土している。

奈良時代

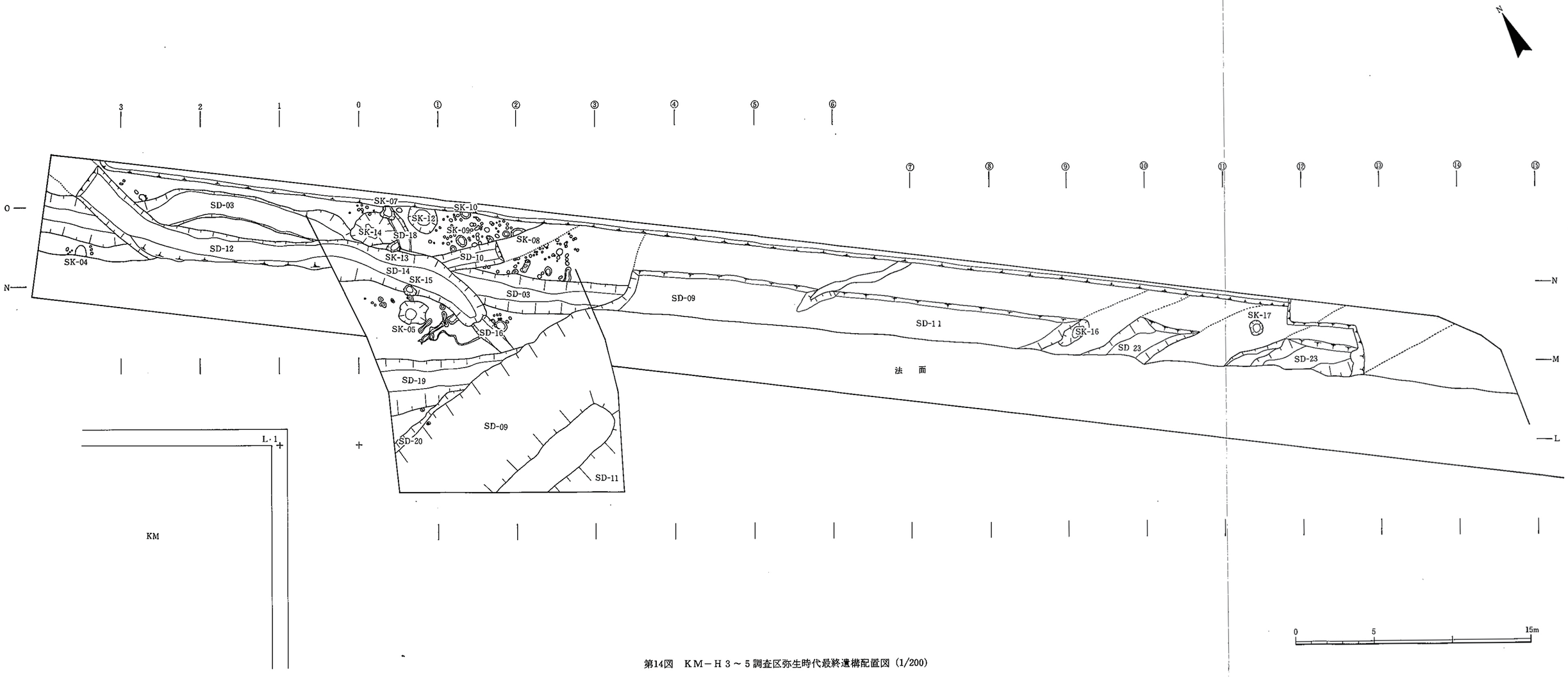
奈良時代の遺構は、江戸時代の自然河川の削平をまぬがれたＭライン以南の第Ⅴ層上面において、ウシ・ウマ等の足跡が検出さているのみである。

江戸時代及び江戸時代以降

当該期の遺構には、井戸と自然河川がある。井戸は３基。調査区南側で１基、北側で２基検出されている。いずれも導水管を付設しおり、川などから水を引き込むための集水用井戸と思われる。自然河川はＭライン以北において東→西に走行するが、①ライン以西から流路は北進し、Ｈ３調査区に続く。

第３表　ＫＭ－Ｈ４調査区遺構一覧表

	遺構名	時　代	規　　模（m）	主　な　遺　物	備　　考
溝	SD-03	弥生中期	巾2.5　深さ1.5	木製農具・容器・イヌ・土器	
	SD-09	弥生後期	巾6.0以上　深さ1.5以上	多量の土器・石庖丁・石槍	KMのSD-3041と同一溝
	SD-11	弥生後期	巾8.0以上　深さ1.5以上	多量の土器(記号文あり)・石器	KMのNR-3001と同一
	SD-10	弥生後期	巾1.3　深さ0.65	土器・動物遺存体	
	SD-14	弥生後期	巾2.5　深さ1.5	多量の土器(記号文)、臼等の木製品 石器・動物遺存体	KM-H3 SD-12と同一溝
	SD-16	弥生中期	巾1.6　深さ0.55	土器・イヌ・イノシシ等の獣骨	
	SD-18	弥生中期	巾0.82　深さ0.49	土器	
	SD-19	弥生中期	巾3.6　深さ1.5	多量の土器・豊富な木製品・ト骨	KM-H7 SD-19と同一溝
	SD-20	弥生中期	―　―	イノシシ下顎(穿孔)・土器	KM-H7 SD-20と同一溝
井　戸	SK-05	弥生中期	径2.1×1.6　深さ1.2	完形土器・石器	
土　坑	SK-06	弥生中期	径0.64　深さ0.3	土器	
	SK-07	弥生中期	径0.89×0.87 深さ0.2	土器	
	SK-08	弥生中期	径1.14　深さ0.20	土器	
	SK-09	弥生中期	径0.85×0.68　深さ0.36	土器	
	SK-10	弥生中期	径0.6×0.5　深さ0.2	土器・イヌ	
井　戸	SK-12	弥生中期	径1.85　深さ1.1	土器	
土　坑	SK-13	弥生中期	径1.1×0.65　深さ0.24	土器	
井　戸	SK-14	弥生中期	径2.25×2.2　深さ1.32	土器・石器・木製品	
井　戸	SK-15	弥生中期	径1.4×1.1　深さ0.9	水差形土器	
	ピット群	弥生中期		多量の柱穴状ピット	



第14図　ＫＭ－Ｈ３～５調査区弥生時代最終遺構配置図（1/200）

第５節　ＫＭ－Ｈ５の調査

調査の概要

調査地は、ＫＭ－Ｈ４調査区に東接し、想定される亀井弥生中期集落の東端に位置している。

調査によって検出した遺構は、弥生時代の井戸２基・土器集積遺構１基（ＳＸ－03）・溝５条・自然河川１、古墳時代の落ち込み１、奈良時代の小穴（足跡）・自然河川１条、江戸時代の自然河川１条である。弥生時代の遺構・遺物の摘要については第４表にまとめているので参照されたい。

遺構・遺物の概要

弥生時代中期

弥生時代中期の遺構には井戸１基・溝３条がある。井戸ＳＫ－16下層からは第Ⅲ－Ⅳ様式の壺・水差形土器各１点が一括出土している。溝ＳＤ－22・24・25はともに東－西に走行し、ＳＤ－22からは第Ⅲ－Ⅳ様式の土器、ＳＤ－24からは第Ⅲ様式の土器が出土している。ＳＤ－22以東は、遺構の分布密度は低く、遺物包含層は稀薄になる。このような状況から、溝ＳＤ－22は中期亀井集落の東端に位置し、集落域を画する溝であったものと想定される。

弥生時代後期

弥生時代後期の遺構には、井戸１基、土器集積遺構１基（ＳＸ－03）、溝２条・自然河川１条がある。井戸ＳＫ－17は、トレンチ東隅において検出された。覆土から第Ⅴ様式末の土器、籠、ヒョウタン、二又鋤、ウニが出土している。ＳＤ－23は、調査区東端にて検出された。ＳＤ－23以東には弥生時代遺物包含層の堆積は全く観察されない。⑨～⑫ラインにかけての地点では、第Ⅴ様式初頭の土器を数百点、一括出土した土器集積遺構ＳＸ－03が検出されている。これらの中には明らかに、何らかの意識をもって配列したような状況を示す土器の一群があった。

第４表　ＫＭ－Ｈ５調査区遺構一覧表

	遺構名	時　代	規　　模（m）	主　な　遺　物	備　　考
溝	SD-09	弥生後期	巾10.0　深さ1.5以上	多量の土器・石庖丁・石槍	KM-H4 SD-09と同一溝
	SD-11	弥生後期	巾8.0　深さ1.5以上	多量の土器（記号文あり）	KM-H4 SD-11と同一
	SD-22	弥生中期	巾 2.6　深さ 0.8	多量の土器、石器	
	SD-23	弥生後期	巾 4.1　深さ1.2	土器・自然木・獣骨	
	SD-24	弥生中期	巾 4.9　深さ1.0	土器	
	SD-25	弥生中期	巾 5.0　深さ1.0	土器	
井　戸	SK-16	弥生中期	径2.2×1.0　深さ1.5	完形土器・木器・獣骨	下層から壺、水差形土器
井　戸	SK-17	弥生後期	径 0.9　深さ1.0	完形土器・ヒョウタニ・ウニ・カゴ	ヒョウタンは穿孔されている。
	落ち込み3	古墳初頭	径7.2×5.4以上 深さ0.4	土器一括・ウマの歯	
	SX-03	弥生後期	径約5.0以上　0.3	後期初頭の一括（記号文含む）	
	ピット群	弥生中期		多量の柱穴状ピット	

古墳時代

M・⑨地区から、古墳時代初頭（庄内式）の一括土器を出土した、落ち込み3を検出している。また、基本層序第V層からは、後期の須恵器蓋杯1点が出土している。

奈良時代

調査区のほぼ全域に亘って、ウシ、ウマの足跡が検出されている。西端では、奈良時代のものと思われる自然河川の南肩を検出した。自然河川の大部分は江戸時代平野川、現在の平野川によって破壊されていた。

江戸時代及び江戸時代以降

トレンチ西端にて、東から北に向って流れる自然河川が検出された。

第6節　KM－H7の調査

調査の概要

調査地はポンプ場本体部（KM）に東接する。トレンチ内の西側は、ポンプ場本体部の連続壁築造の時に使用したアース・アンカーによって大きく陥没していた。それがため、当初検出のまたれていた亀井1号墳の輪郭も充分把握することが出来ず、かろうじて方形プランであると想定されたにとどまったのは惜しまれた。

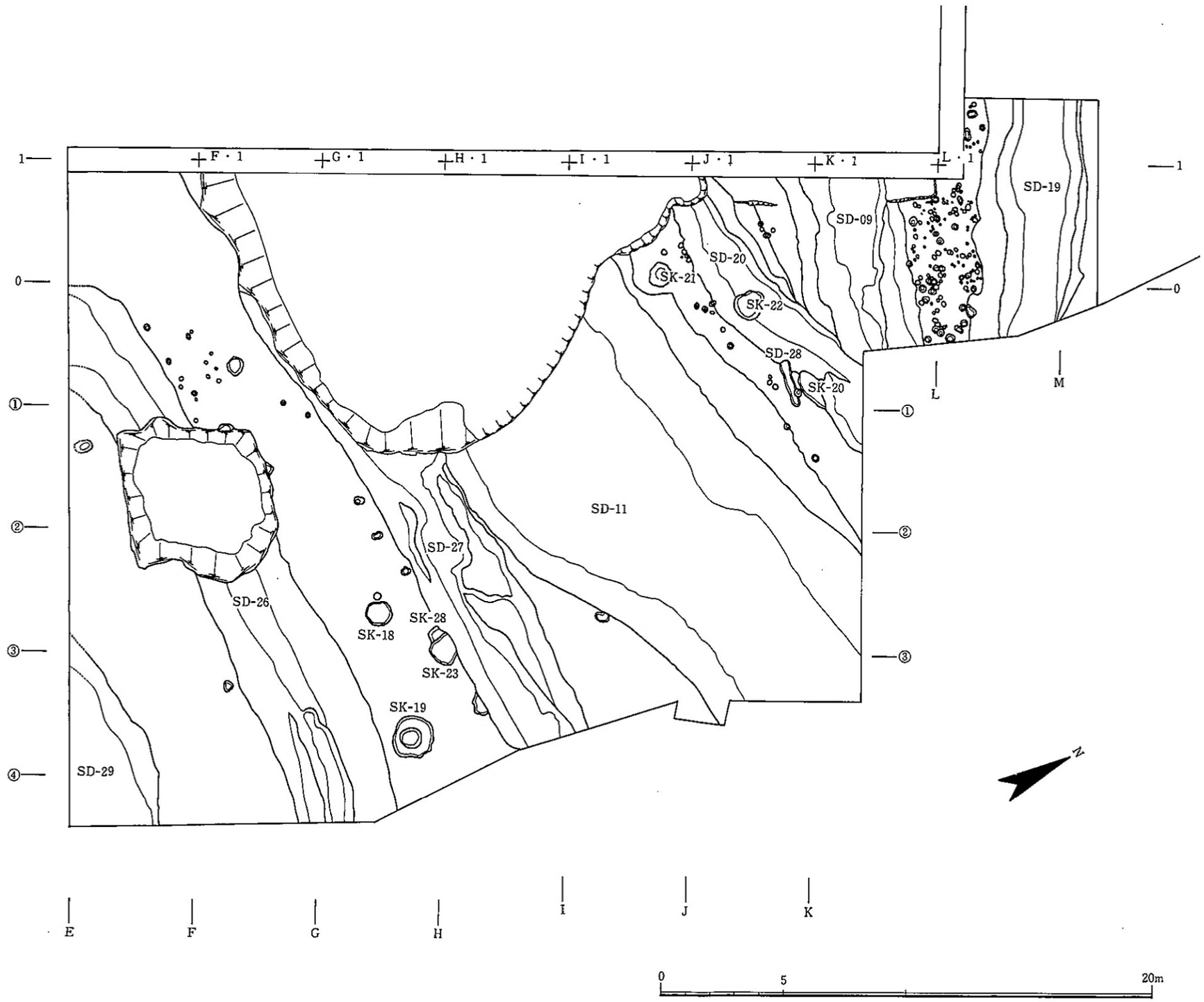
調査によって検出した遺構は、弥生時代の土坑4基・井戸4基・溝7条・自然河川1条・多数のピット，古墳時代の自然河川1条，奈良時代の小穴（足跡）多数，江戸時代の自然河川1条である。弥生時代の遺構・遺物の摘要については第5表にまとめているので参照されたい。

遺構・遺物の概要

弥生時代中期

弥生時代中期の遺構は、調査区全域に亘って検出されているが、調査区中央を流れる自然河川ＳＤ－11を界して、北と南側では遺構の分布状況に粗密が認められた。調査区の南側では、幅約4.0m、深さ1.0～2.0mの大溝、ＳＤ－26・27・29の3条が検出されている。これら3条の大溝は、すべて同一方向に、ほぼ等間隔に併行して、掘削されている。さらに、出土土器から同一時期に併存していたものと判断される。南へいくにしたがい遺物包含層が稀薄になる点、遺構の分布の低い点等から、調査区南側は亀井弥生中期集落の南端に位置するものと推定される。と同時に3条の大溝は、集落を画する機能を有していた溝と想定される。土坑は3基検出した。ＳＫ－18・23・24である。ＳＫ－18下層からは、生駒西麓産の胎土をもつ完形壺形土器1点が単独で出土している。井戸ＳＫ－19（Ⅲ）層からは、大小の水差形土器各1点が出土している。ＳＫ－18・19は掘削位置及び出土土器のプロポーションから、溝ＳＤ－26・27と有機的関係を有するものと考えるられる。このような例はＫＭ－Ｈ5調査区でもみられる。たとえばＳＤ－22と井戸ＳＫ－16の関係である。

調査区北側では、井戸・ピット・溝等が複雑に重複している。ピットは、Ｋライン以北にて、



第15図　ＫＭ－Ｈ７調査区弥生時代最終遺構配置図（1/200）

特に多数検出されているが住居等の復元は出来なかった。井戸は３基検出された。井戸ＳＫ－21下層から単独で小型無頸壺形土器１点が出土している。溝は三条検出された。東西溝ＳＤ－19から多量の第Ⅱ～Ⅲ様式の土器、石器とともに豊富な木製品等が出土した。木製品には、黒漆塗長弓・流水紋や鋸歯紋を陽刻した秀麗な冠状木製品・鍬・鋤・斧柄・杓子等がある。動物遺存体は、イノシシ・ニホンジカ・イヌ・ネズミ・鳥類・魚類等豊富に得ている。また、占いに用いられたものと思われる、ニホンジカ肩甲骨を利用した、ト骨を得ている。ＳＤ－20は、KMのＳＤ－3004と同一の溝である。第Ⅲ様式古段階の土器、石器、木製品、動植物遺存体等が出土している。

弥生時代後期

弥生時代後期の遺構には、溝１条・自然河川１条がある。中期の遺構に較べて稀薄である。各遺構ともに多量の中期から後期の土器が出土している。中でも自然河川ＳＤ－11の底から多量の石器とともに鉄斧（第243図）１点が出土した。

古墳時代

古墳時代前期の遺構は、第Ⅶ層をベースに、弥生時代後期の自然河川埋没後の凹みに堆積していた、自然流路１条が検出されている。中期面（第Ⅴ層下位）は、亀井１号墳と同一の面に相当し、ヤナギなどの木が繁茂した状況を示している。Ｈ・０地区から円筒埴輪１点が横位に出土している。また第Ⅴ層中からは後期の須恵器蓋身１点が出土している。

奈良時代

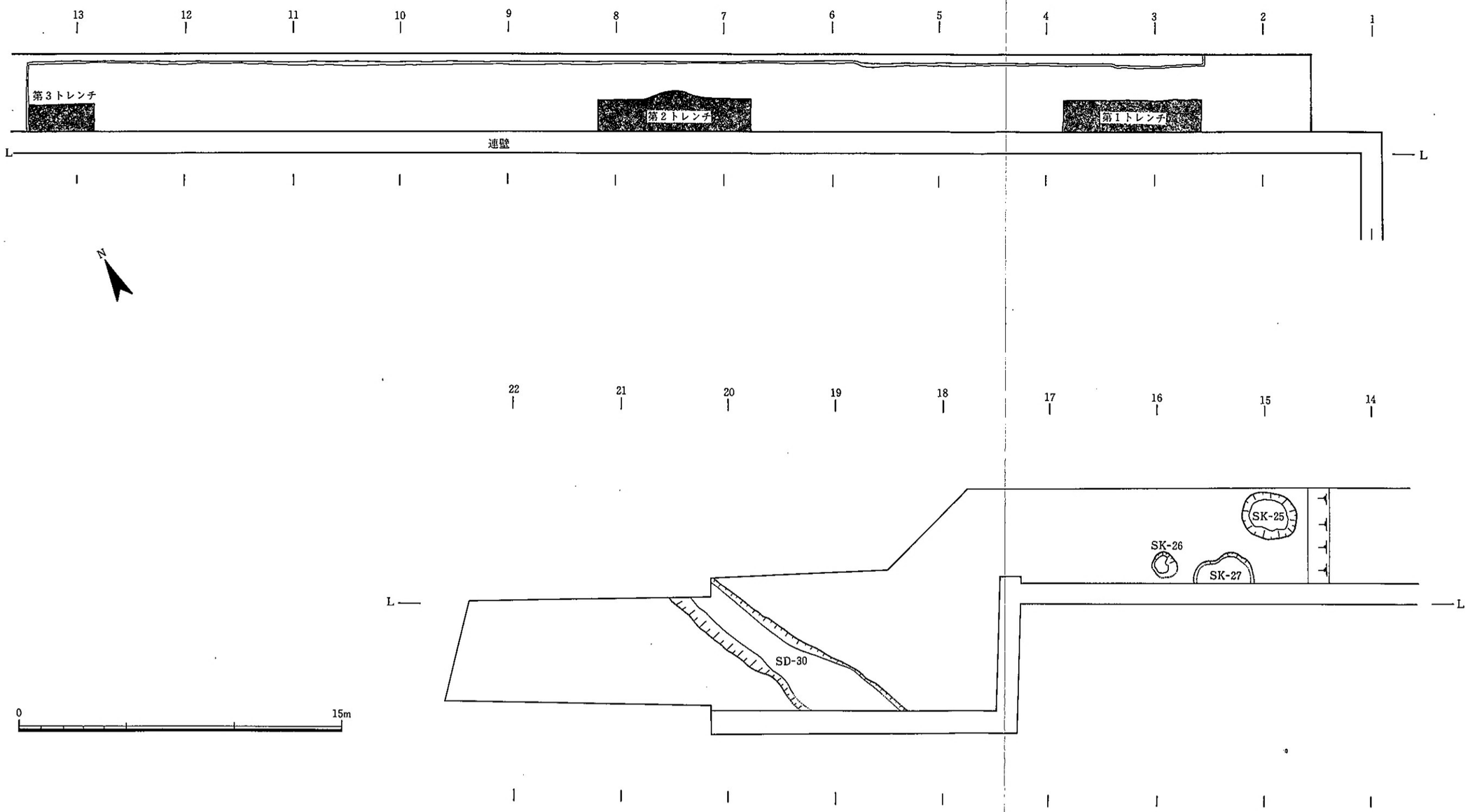
第Ⅴ層上面においてウシ・ウマ等の足跡が検出されているのみである。

江戸時代以降

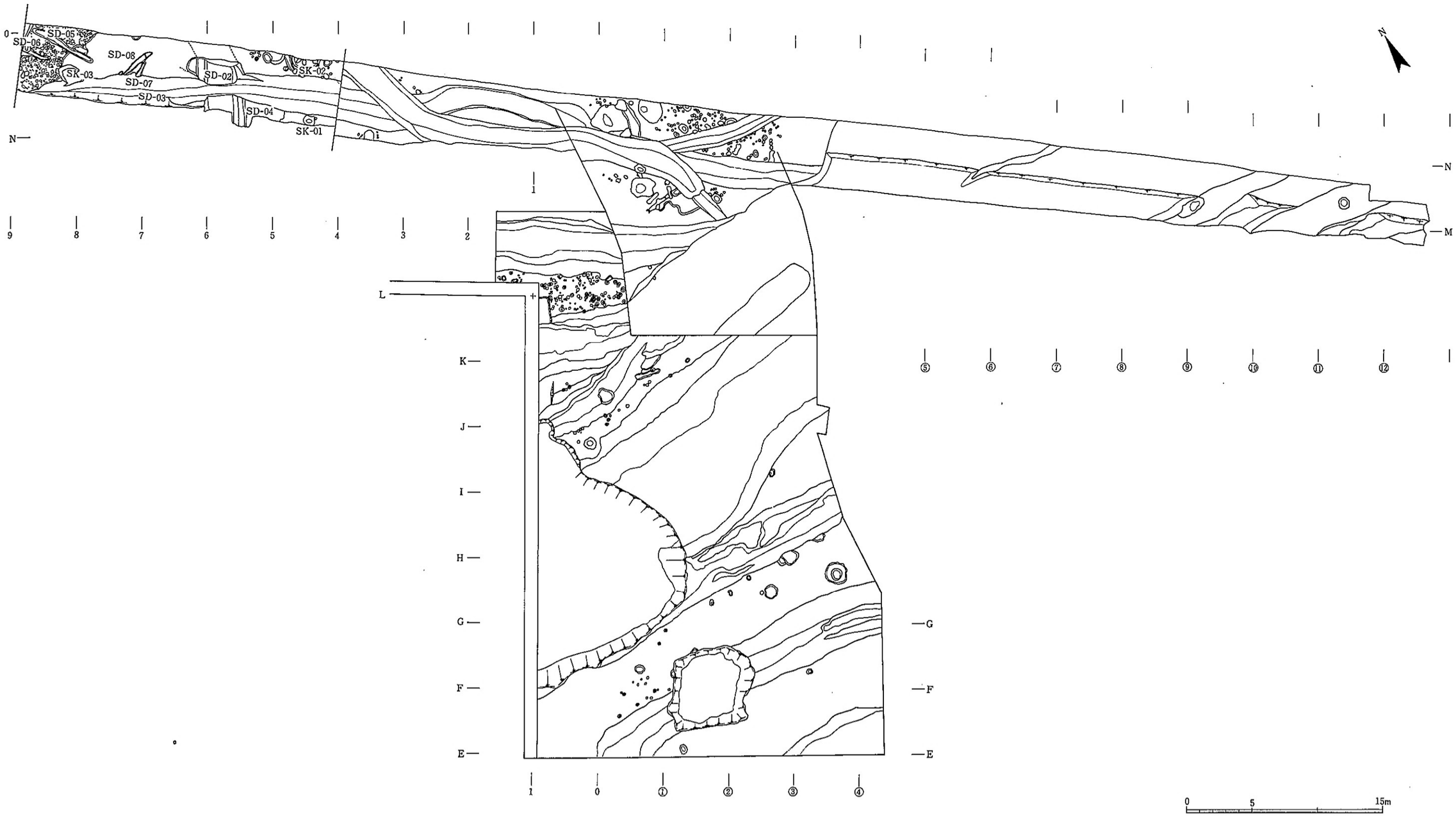
当該期の遺構には、Ｌライン以北において、自然河川１条が検出されている。

第５表　ＫＭ－Ｈ７調査区遺構一覧表

	遺構名	時代	規模（m）	主な遺物	備考
溝	SD-09	弥生後期	巾 4.5	多量の土器・石器	KMのSD-3041と同じ
	SD-11	弥生後期	巾11.4　深さ3.5	多量の土器・石器、鉄斧	KMのNR-3001と同じ
	SD-19	弥生中期	巾 4.3　深さ1.5	多量の土器、木製容器、黒漆塗長弓、骨角器、イヌ・イノシシ	KM-H4 SD-19と同一溝
	SD-20	弥生中期	巾 2.3　深さ1.2以上	土器、石器、木製容器、獣骨 炭化米	KMのSD-3004と同じ
	SD-26	弥生中期	巾 4.2　深さ1.6	土器・石器・獣骨・ヒョウタン	上部は弥生後期の砂堆積
	SD-27	弥生中期	巾 3.5　深さ2.0	土器・木製弓・木製竪杵・石器・動物遺存体	KMのSD-3001と同じ
	SD-28	弥生中期	巾 2.6　深さ0.2	土器細片	
	SD-29	弥生中期	巾 2.2以上　深さ1.0	土器細片	
土　坑	SK-18	弥生中期	巾 1.1　深さ0.8	壺１点	
井　戸	SK-19	弥生中期	巾1.8×1.55　深さ1.62	水差形土器２点	
土　坑	SK-20	弥生中期	巾 1.0以上　深さ1.0	土器細片	
井　戸	SK-21	弥生中期	巾 1.0　深さ1.4	無頸壺・木製品	
井　戸	SK-22	弥生中期	巾 1.1　深さ0.7	土器細片	
土　坑	SK-23	弥生中期	巾 1.2　深さ0.3		
井　戸	SK-24	弥生中期			
土　坑	SK-28	弥生中期	巾 0.43　深さ0.36		

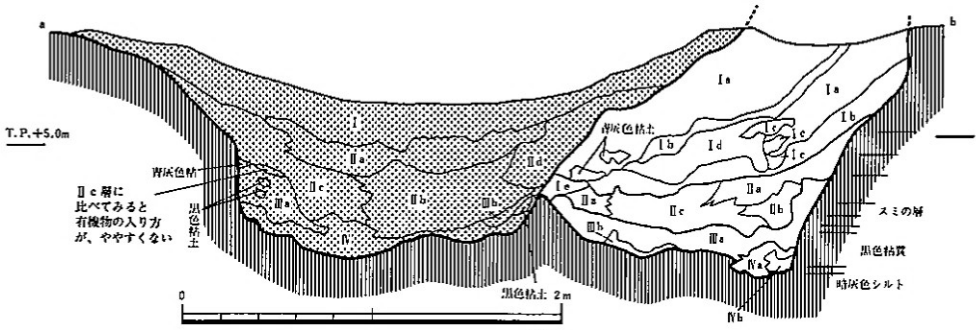


第16図　ＫＭ－Ｈ８調査区最終遺構配置図（1/200）



第17図　ＫＭ－Ｈ１～５・７調査区　弥生時代最終遺構配置図（1/300）

の出土をみている。[註1]（Ⅳ）層は溝開削時の残土と思われる。土器の小破片をわずかに含んでいる。遺物の大半は（II）～（III）層より出土した。



SD-12
Ⅰ．暗褐灰色砂質土（3mm前後の焼土・カーボンを含み、わずかながら有機物を含んでいる。）
Ⅱa．暗褐灰色粘土（わずかに砂質をおびる。Ⅰ層とは不整合面で凹凸が激しい。1mm前後の黒粘土、青灰色粘土、カーボンを含み、有機物を含んでいる。）
Ⅱb．暗褐灰色粘土（Ⅱa層に比べて、有機物の入り方は少ない。より粘質が強い。）
Ⅱc．暗褐灰色粘質土（5～10cm前後の青灰色粘土、5mm前後の焼土、カーボン及び細かな有機物を多量に含んでいる。）
Ⅱd．暗褐灰色粘質土（Ⅱc層に比べて有機物の入り方がやや少ない。）
Ⅲa．黒灰色粘質土
Ⅲb．黒灰色粘質土（Ⅲa層に比べて青灰色粘土の入り方が少なく、粒も小さい。）
Ⅳ．暗青灰色粘土（青灰色粘土をブロックし、有機物を含んでいる。土器もわずかながら含む）

SD-03
Ⅰa．黒灰色粘質土（2cm前後の青灰色粘土を60%、5mm前後のカーボンをいく分含む。1mm前後のカーボン・焼土を多く含む。）
Ⅰb．黒灰色粘質土（1.5～2cm前後の青灰色粘土を40%ブロック、1mm～2mm前後の焼土、カーボンを多く含む。）
Ⅰc．黒褐色粘質土（1mm前後の青灰色粘土、焼土、カーボンを含む。）
Ⅰd．ブロック土（青灰色粘土＋黒灰色粘質土、5cm大の黒褐色粘土をブロック。）
Ⅰe．黒灰色粘質土（2cm前後の青灰色粘土を30%ブロック。）
Ⅱa．暗灰褐色粘土（1～3mm前後の青灰色粘土、そして有機物を多く含み、焼土、カーボンもわずかに含んでいる。）
Ⅱb．暗灰色粘土（青灰色粘土をブロックし、5mm前後の黒粘土、1mm前後のカーボン、焼土をわずかに含む。）
Ⅱc．暗灰褐色粘（Ⅰf層に比べて粘質が強く、青灰色粘土の入り方が少ない。）
Ⅲa．黒灰色粘質土（5mm前後の青灰色粘、黒色粘土をブロックし、有機物、そしてカーボン、焼土をわずかに含む。）
Ⅲb．黒灰色粘質土（ブロック土）
Ⅳa．黒灰色粘質土（茶灰色粘土、青灰色粘土、黒褐色粘土のブロックを含む。）
Ⅳb．暗灰色粘土（青灰色粘土のブロックを含み、5mm前後の黒粘土、1mm前後のカーボン焼土をわずかに含む。）

第19図　ＳＤ－03及びＳＤ－12土層断面図（1/40）

〔遺物出土状況〕　各ブロックから弥生時代中期末の土器・石器・木製品・動植物遺存体等を得ている。土器の出土量は面積のわりに少ないといえる。これは、上部が江戸時代平野川による削平をうけ、３～６ブロックでは検出面で調査をとどめているためであろう。４ブロックからは小型短頸壺、５ブロックから完形に復すことのできた甕形土器１点の出土をみた。いずれも（II）層出土。石器では２ブロックから単独で砥石が出土している。

動物遺存体は、イノシシ・ニホンジカ・イヌ・カエル・スッポン・ヘビ・ネズミ・鳥類・魚類等の豊富な遺存体を得ている。遺存体の大半は、土層断面観察用にもうけたあぜの土壌をすべてサンプリングして、これを水洗浄した際に採集したものである。１ブロックの（II）層調査中に、イヌの頭蓋骨・下顎骨・尺骨・中手骨・基節骨・腰椎・肋骨を検出した（図版５ａ）。あぜ３の（II）、（III）層除去中にも右腓骨・距骨・胸椎・腰椎・尾椎・肋骨・歯牙・末節骨等の犬骨を得ている。おそらく、これらの部骨はその大きさから考えて同一個体に属するイヌ一頭分の骨であろう。頭蓋骨は最大頭蓋長171.4mmを計測する中小型犬の範疇に入る。[註2]これは亀井１号犬と２号犬のほぼ中間の大きさになる。なお、頭蓋骨の形質学的特徴－外矢状稜が著しく突出する－から判断して、雄（♂）の個体であろうと推察される。他に、５ブロックではイノシシ大腿骨遠位端・肩甲骨が接して出土している（図版６ｂ）。

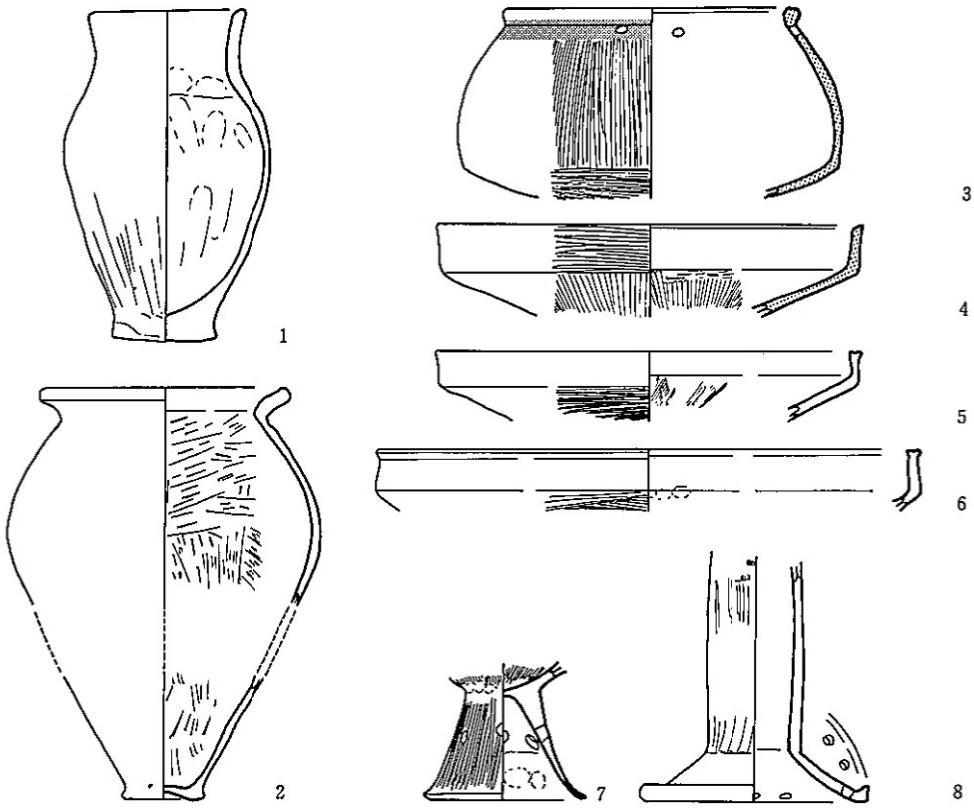
〔土器〕（第21・22図、図版76）

小型短頸壺・無頸壺・甕・高杯形土器等がある。時期は第Ⅳ様式である。（Ⅰ）層から（5・6）、（Ⅱ）層から（1・4・8・9）、（Ⅲ）層から（3）、（Ⅰ）層と（Ⅱ）層から（2）、（Ⅰ）層と（Ⅲ）層から（7）の出土をみている。

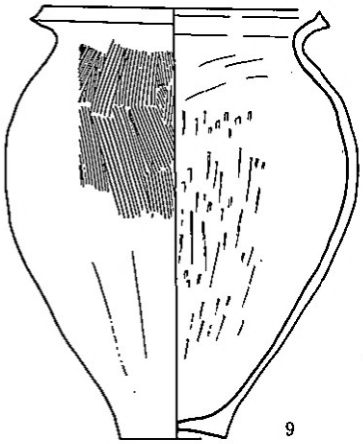
小型短頸壺形土器（1）　口径7.7cm、器高17.6cm、底径5.3cmをはかり、胴長の体部に外反して直口する口縁部を有する。口頸部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、内面は指ナデ調整である。色調は黒灰色を呈し、内外面に煤が附着している。4ブロック出土。

甕形土器（2・9）　（2）は口径12.5cm、復元器高21.7cm、体径16.6cm、底径4.2cmをはかる。くの字状に屈曲する口縁部をもち、底部はあげ底で突出している。屈曲部に強いナデを施す。体部外面はナデ、内面はヘラケズリ調整である。色調は暗褐灰色。（9）は口径14.6cm、器高22.7cm、体径18.6cm、底径5.6cmをはかる。口縁部は緩かに外反し、端部は上下にわずかに拡張する。体部外面上位はハケ、下位はハケ状ナデ、内面はヘラケズリ調整である。色調は褐灰色で、外面全体に煤が附着している。5ブロック出土。

無頸壺形土器（3）　口径15.3cm、体径20.4cmをはかり、口縁部直下に2孔1対の紐孔を穿っている。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は暗褐色を呈し、口縁直下には赤色顔料を塗布していた。生駒西麓産の胎土をもつ。



第21図　ＳＤ－03出土土器実測図（1/4）



第22図　ＳＤ－03出土土器実測図 (1/4)

高杯形土器（４～８）　（４～６）は杯部片で、体部から口縁部にかけての移行部は緩やかに屈曲し、端部は面をもつ。（４）は口径22.4cm、口縁部高2.6cmをはかり、端部はわずかに外につまみだされ、内傾する。口縁部外面および体部内外面はヘラミガキ調整である。色調は淡茶褐色。（５）は口径22.4cm、口縁部高1.9cmをはかり、端部はわずかに内外へ突出させ平坦面をなす。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラミガキ調整である。色調は灰褐色を呈する。（６）は口径28.7cm、口縁部高2.2cmをはかる。体部内外面はヘラミガキ調整で、色調は灰白色を呈する。（７・８）は脚部片で、（７）は裾部径8.2cmをはかる。中央に透孔６個を穿つ。体部内外面および脚部外面はヘラミガキ、内面は指ナデ調整である。色調は灰褐色。（８）は裾径11.9cmをはかり、裾部に２孔１対の透孔を２組穿っている。柱状部外面はハケ状ナデ、内面はナデ調整である。色調は明褐灰色。

第２項　弥生時代後期

土坑

ＳＫ－04（第23図、図版３ｂ）

Ｎ・３地区の南セクション際において、弥生時代遺物包含層（第Ⅸ層）を除去中に検出した。弥生時代後期の土坑である。土坑内に堆積する埋土は第Ⅸ層の色調と大変似ていたため、本来の掘り込み面及び平面プランは明確におさえることはできなかった。かろうじて、南セクションの断面観察及び遺物出土状況（拡がり）、そして下半部にての土坑の輪郭（径0.85×0.77m）確認等から判断して、楕円形プランを有していた土坑であると思われた。規模は推定径約1.0×1.3m、深さは約0.52mをはかる。

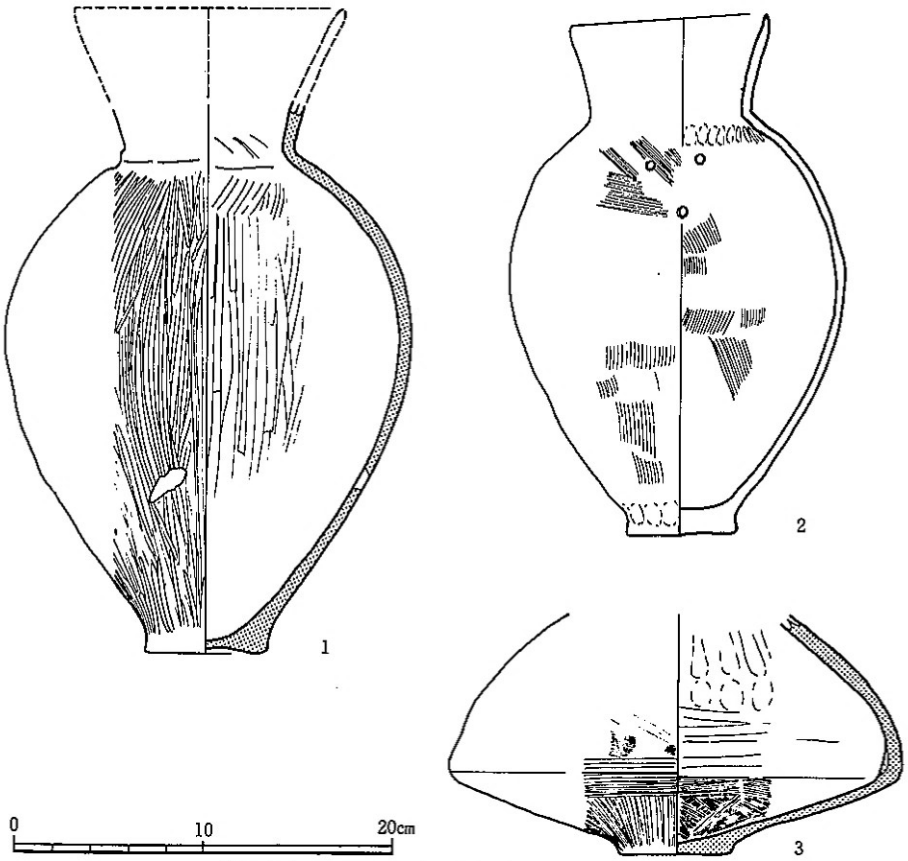
第23図　ＳＫ－04遺物出土状況（1/20）

埋土は、１～２cm大の青灰色シルト・粘土・カーボン粒を多量に包含する黒褐色粘土の単一層である。おそらく機能消失後、短日にして人為的に埋められたのであろう。坑底から浮いた状態で壺形土器３点を得た（図版３ｂ）。

時期は、出土土器のプロポーションからして、弥生時代後期初頭に比定されよう。

〔土器〕（第24図、図版76）

第Ⅴ様式初頭の壺・甕形土器を得ている。甕は、



第24図　ＳＫ－04出土土器実測図（1/4）

小破片のため図示できない。壺形土器（１～３）は、坑底からやや浮いた状態で出土し、廃棄の同時性を有する一括資料と思われる。

短頸壺形土器（１・２）は、長胴の体部に外傾して上方に伸びる口頸部を有したもので、（１）は底部を上にして出土した。現高28.9cm、体径21.4cm、底径6.2cmをはかる。口頸部の大半を失い、体部下半に径2.5×0.9cmの粗孔を外面より穿っていた。体部外面はタテヘラミガキ、内面上半はヘラケズリ、下半はナデ調整を施す。色調は褐灰色で、生駒西麓産の胎土をもつ。（２）は横位にて出土した。口径10.4cm、器高27.2cm、体径17.8cm、底径5.7cmをはかる。体部上半に、円形竹管紋を三個スタンプし、逆三角形状に配列している。体部外面上半はヨコハケ、下半はナデ後、部分的にタテの粗いハケ、内面はナデとタテハケ調整を施す。色調は灰白色。（３）は上半部を欠く下ぶくれの壺形土器（細頸壺形もしくは扁平な体部をもつ広口壺形土器か）。体径23.9cm、底径5.8cmをはかる。外面体部上位はヨコハケ後ヘラミガキ、中位はヨコヘラミガキ、下位はタテヘラミガキ、内面上半は絞り目とナデ、下半はハケ調整である。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(註3)

これらの土器は、型式学的に溝ＳＤ－12出土の土器と併行し、何らかの有機的関係を有していたものと考えている。出土土器のプロポーションからＳＤ－06、ＳＸ－03、ＫＭのＳＤ－3008、

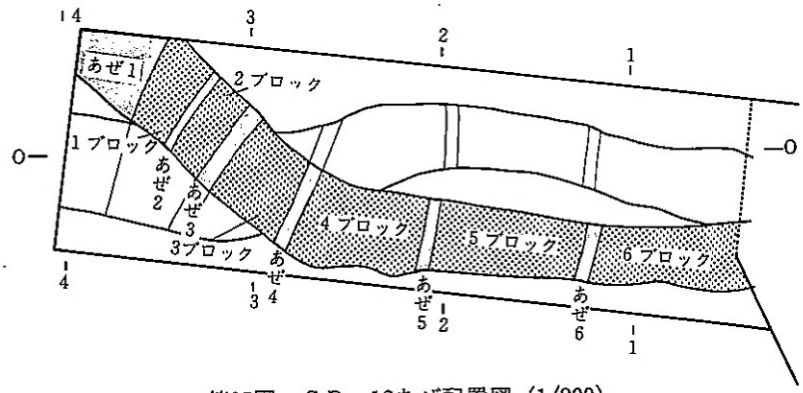
ＳＥ－3005・3006・3011と併行に関係にあるといえよう。

溝

ＳＤ－12（第25～28図、図版７～11）

第Ⅶ層を除去した時点で、ＳＤ－12の輪郭を確認した。形状は、トレンチ内を東－西に蛇行する上部幅約3.5m、下部幅約1.45m、深さ1.2mをはかる大溝（註４）である。

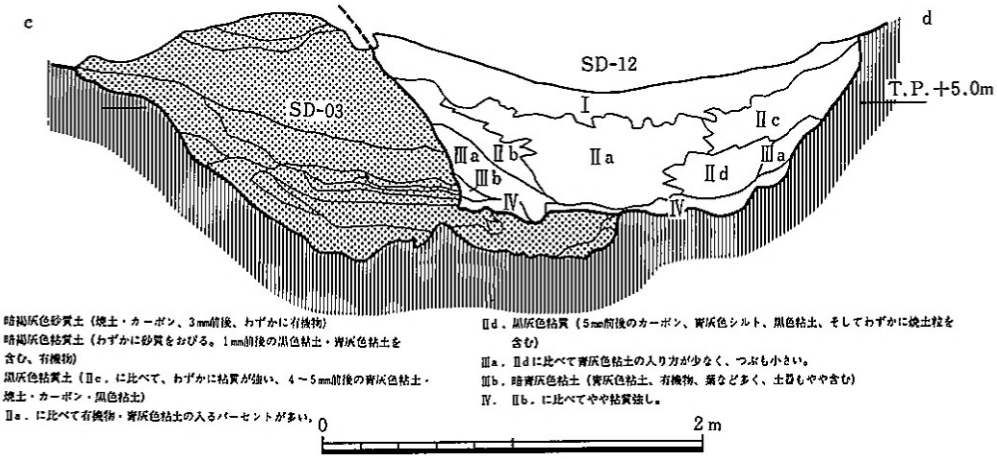
調査は遺物取り上げの便宜・遺物出土状況（拡がり）を把握するために、６つのブロックにわけて行っている（第25図）。各々を１ブロック，……６ブロックと呼称する。実際の調査は、各々のブロックごとに行っている。



第25図　ＳＤ－12あぜ配置図（1/200）

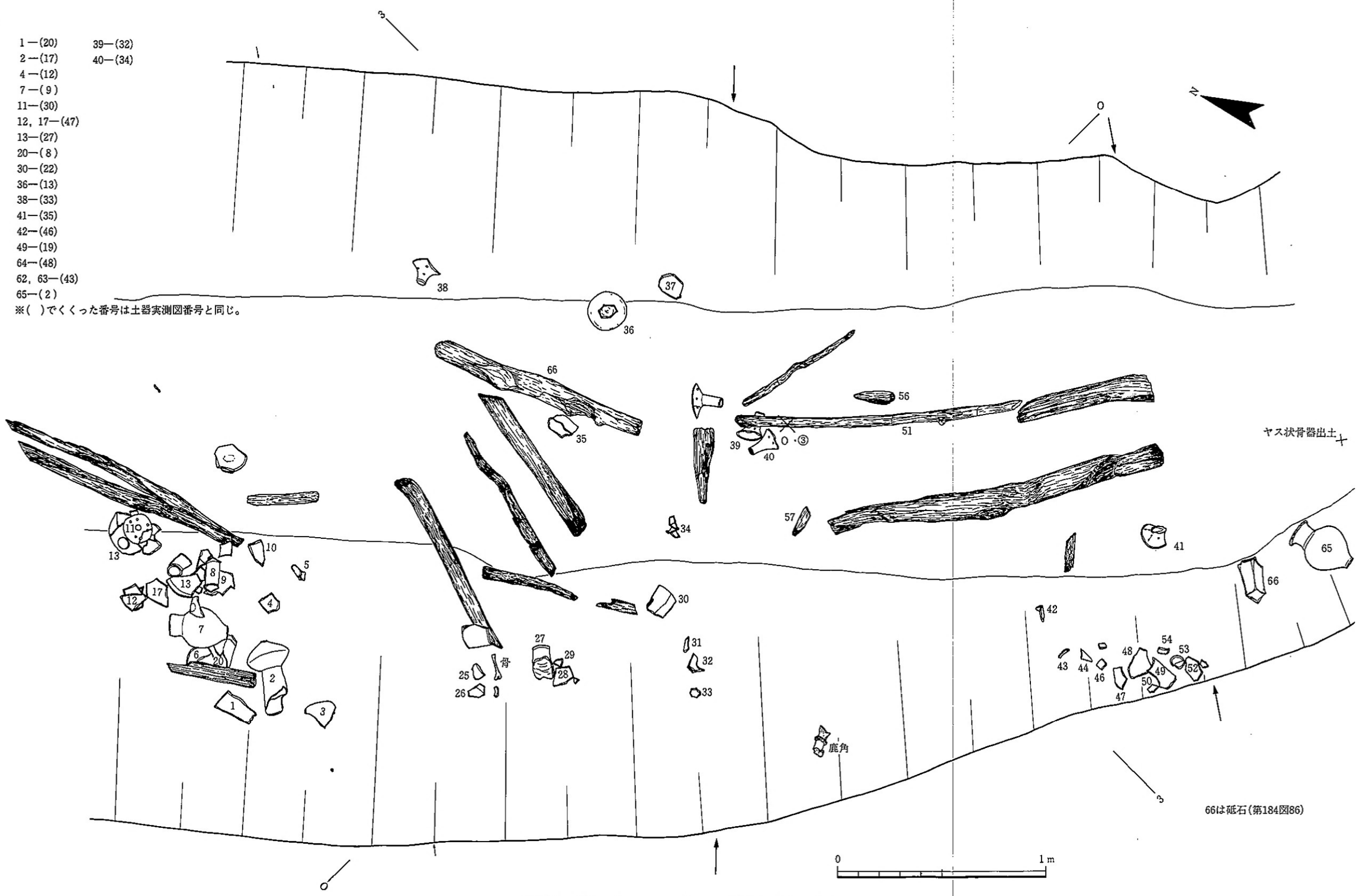
３ブロックの一部・４～６ブロックの上部は、江戸時代平野川の河床にあたり大きく削平を受けている。また、３ブロックでは弥生時代中期末の溝ＳＤ－03と交差していた。両溝の切り合い関係は明確に把えている（第26図）。なお、４～６ブロックでの南肩は、トレンチ外にある。

溝内の堆積土は大別して４つに分けられる。（Ⅰ）暗灰褐色砂質土、（Ⅱ）暗褐色粘質土、（Ⅲ）黒灰色粘質土（ブロック土）、（Ⅳ）暗青灰色粘土である。溝底は、暗灰色シルト上面（Ｔ．Ｐ．＋4.4m）まで及んでいる。遺物は（Ⅰ）～（Ⅲ）層に集中して出土した。

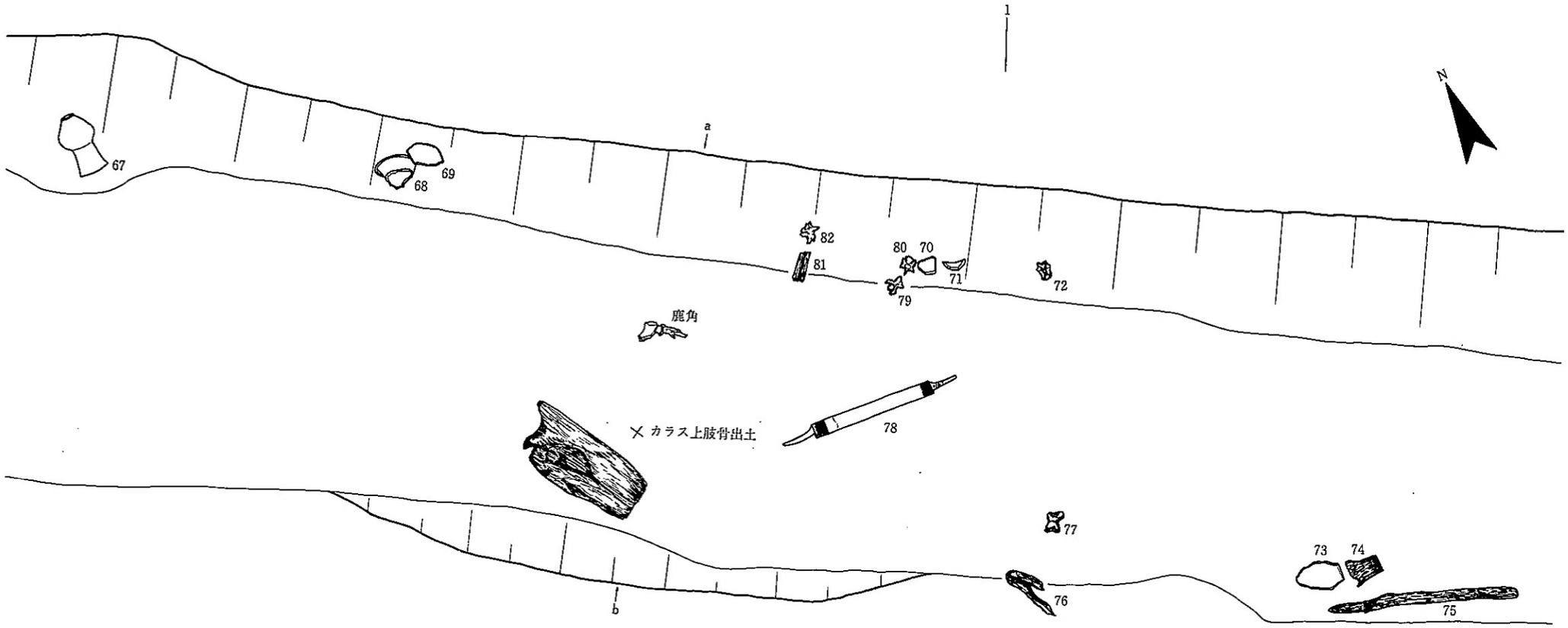


第26図　ＳＤ－12土層断面図（1/40）

1—(20)　39—(32)
2—(17)　40—(34)
4—(12)
7—(9)
11—(30)
12, 17—(47)
13—(27)
20—(8)
30—(22)
36—(13)
38—(33)
41—(35)
42—(46)
49—(19)
64—(48)
62, 63—(43)
65—(2)
※(　)でくくった番号は土器実測図番号と同じ。

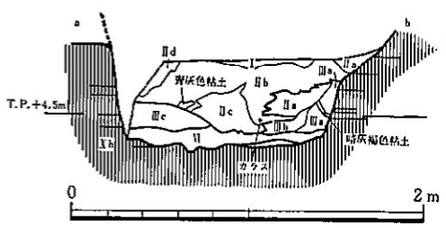


第27図　ＳＤ－12　１～４ブロック遺物出土状況（1/20）



67—(23)
68—(3)
72・77・79・80・82—ニホンジカ頸椎骨
74—木製鍬(第224図57)
76—イノシシ下顎骨
78—木製布巻具(第225図58)

※( )でくくった番号は土器挿図番号と同じ。



Ⅰ. 暗灰褐色土(やや砂質をおびる。1～2mm前後のカーボン、有機物を含む)
Ⅱa. 黒灰色粘土(粘質は弱い、5mm以下の青灰色粘土、カーボン、焼土粒を含む)(流れ込み、もしくはうめつちか)
Ⅱb. 暗灰褐色粘土(Ⅱbに比べて青灰色粘土、黒色粘土、カーボンの粒が細かく、入り方も非常に少なく、粘質は強い。有機物を多く含む)
Ⅱd. 暗灰褐色粘土(ブロック土)5cm～10cm前後の青灰色粘土、黒色粘土、3mm前後のカーボンの粒、有機物を含む)
Ⅲa. 暗灰褐色粘土(Ⅱdにくらべて5～10cm前後の青灰色粘土の入りかたがやや多い)
Ⅲb. 暗灰褐色粘質土(ブロック土)1cm前後の青灰色粘土、黒色粘土を多くブロック、有機物2mm前後のカーボン
Ⅲc. 暗灰褐色粘土(ブロック土)5mm前後の青灰色粘土、2～3mm前後のカーボン、焼土、有機物を多量に含む)
Ⅳ. ブロック土 暗青灰色粘土、黒色粘土、青灰色粘土のブロック有機物をわずかではあるが含む。

N・1

0 1m

第28図　ＳＤ－12　４～６ブロック遺物出土状況（1/20）及び土層断面図（1/40）

〔遺物出土状況〕　各々のブロックから土器・石器・木製品・動植物遺存体等を多量に得ている。特に1ブロックより、完形土器を含む土器の集中出土をみた（図版9）。これらは出土状況から、一括して廃棄されたものと思われた。廃棄の同時代性を有する好資料といえよう。また、断面観察用に残していたあぜ3中には高杯脚部のみが集中しており、特異な出土状況を示していた。4ブロックでは、完形の広口壺形土器1点が南側から流れ込んだ状態で出土している（図版10a）。口縁部外面・肩部に円形竹管文の記号をスタンプしており、全体に秀麗な土器といえる（図版77－5）。記号文を施す土器の出土も多い。5ブロックからは、長頸部に「⋔」の記号をもつものも出土している（図版78－10）。

木製品には、布巻具・鍬そして臼の破片と思われるものを各々1点得ている（第28図）。6ブロックより出土した布巻具（図版159）は把手に渦巻紋，身部両端近くに鋸歯紋、綾杉紋を刻む優品といえる。装飾性に富んだもので、類例を知らない。(註5)

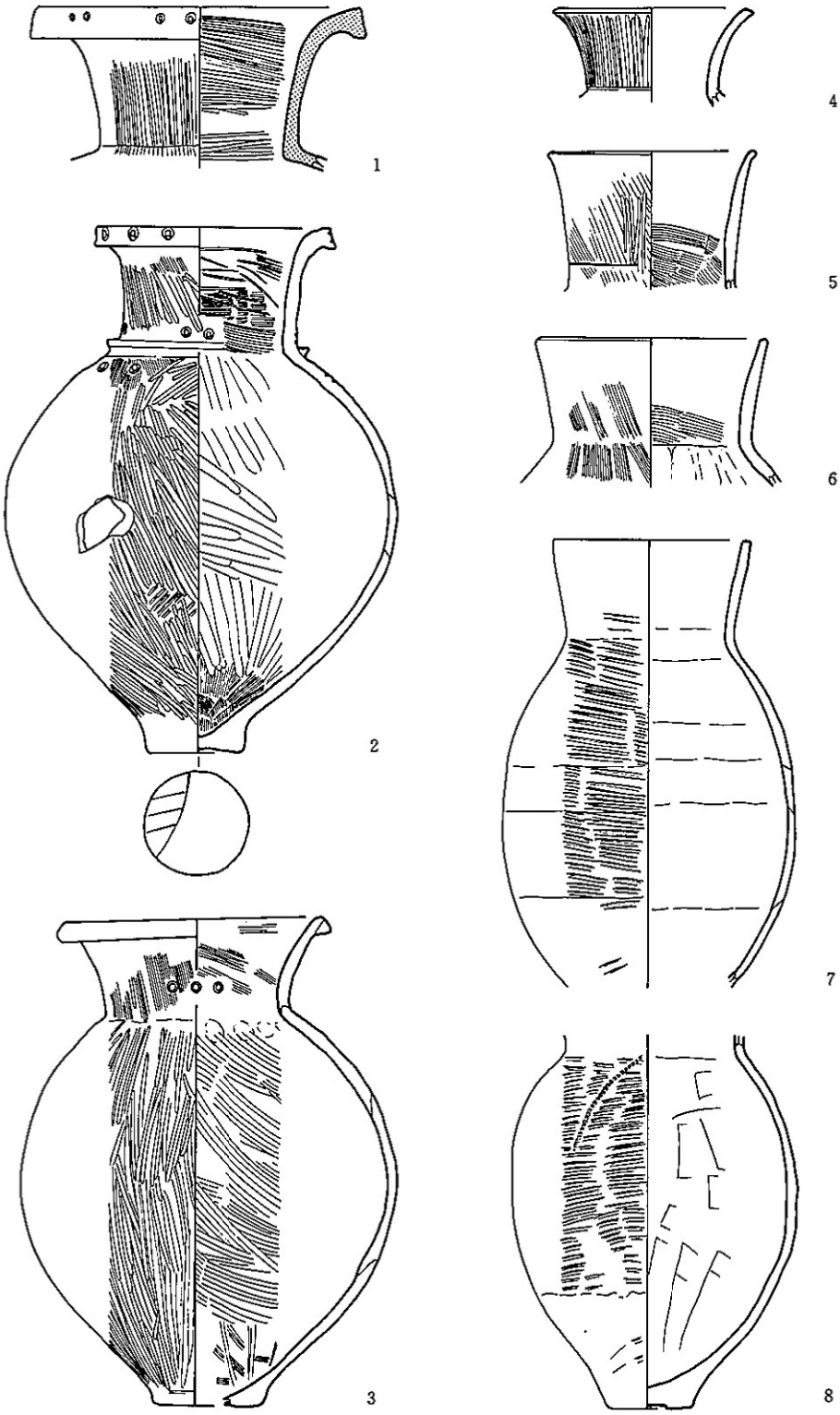
動植物遺存体には、イノシシ・ニホンジカ・クジラ・ネズミ・カエル・スッポン・ヘビ・鳥類・魚類・モモ・コメ・ドングリ類等、豊富な遺体を得ている。中でも、5ブロックより出土したクジラ（の椎体）は弥生時代にあっては大変めずらしい哺乳動物といえ、その搬入経緯に興味をもつ。また、各ブロックからニホンジカの角の出土をみている。特に、5～6ブロックにおいて鹿角6点が集中して出土した。落角1点をのぞくと他はいずれも頭蓋骨片付きの鹿角である。これら角の表面には、鋭利な工具（金属器など）による切断痕・加工痕が顕著に観察された。製作途中の未製品もしくはその残骸であろう。この近辺で鹿角製品を製作していたものと考えられる。すでに角は完全に骨化しており、秋に捕獲されたシカの角、と云うことができる。また、叉状の枝角の形状から年令は5歳以上の個体のものといえる。なお、角の残存状態はいずれも共通して、第1枝の根元および第3枝と第4枝の間の角幹区中央で切断していた。このことから製品をつくる時に一定の約束ごと（使用目的にあった部位の選定）が存在したであろうことが窺える。鳥類では、あぜ6の（Ⅱb）層除去中にカラスの上肢骨を検出した。右側上腕骨・尺骨・橈骨で、接して出土した（図版10b）。おそらく、胴骨から切り離した上肢骨をそのまま溝に投げ捨てたのであろう。なお、6ブロックからも同一個体のものと思われる左側上腕骨・右側脛骨各1点を得ている（図版169a）。また、イノシシ・ニホンジカでは6ブロックから鹿角加工品の他にニホンジカ頸椎骨5点および大形のイノシシ下顎骨が出土した（図版11a）。頸椎骨は出土状況・骨の大きさから考えて同一個体のものと思われる。イノシシ下顎骨は、M_3の咬耗度が著しく進行していることから考えて老獣の個体のものであろう。骨体頬側面のM_2の下側に楕円形の粗孔が穿れていた。これは犬歯を抜去するための破壊で、装身具として利用したのであろう。よほどの幼獣でない限り雄（♂）の下顎骨に共通する。既往の亀井遺跡の調査でイノシシ犬歯を利用した製品は今のところKMのSE－3007から出土している牙製垂飾1点に限られる。(註6) 鹿角加工品のほかに製品としては4ブロックからニホンジカ中足骨を利用し製作したヤス状骨器（第256図4）が出土している（図版11b）。

〔土器〕（第29～34図、図版77～79）

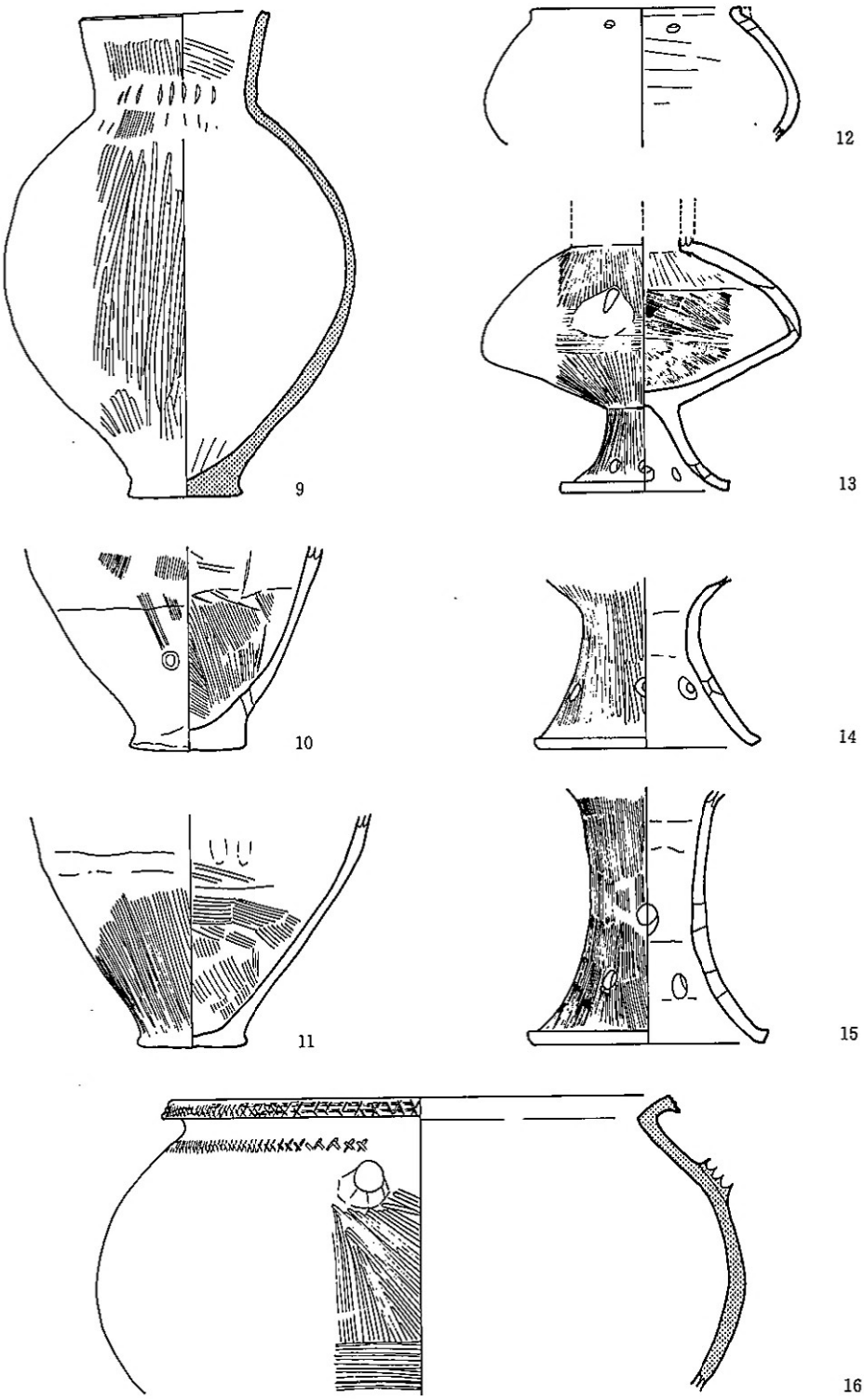
検出された土器には、第Ⅴ様式初頭の壺・短頸壺・壺底部・無頸壺・大型無頸壺・台付壺・器台・長頸壺・高杯・小型鉢・甕・飯蛸壺形土器等と豊富な器種資料がある。各層に包含されていたこれらの土器は、接合資料の検討および型式学的な変化がほとんどないこと等から、共存資料として把握されうるものと理解されるので一括して記述する。1ブロックから（7～12・17・20・26～28・30・31）、2ブロックから（5・13・18・21・22・26・27・37・38・43・45）、3ブロックから（16・19・35・43・48）、4ブロックから（1・2・14・15・24・39・40・42）、5ブロックから（3・4・23・25・44）、あぜ3から（6・29・32・34）、あぜ4から（19）の出土をみている。特に、1ブロックから出土した土器は、一定範囲内に相接して出土した状況から判断して、廃棄の同時性を示す一括土器群として把握されよう。

壺形土器（1～4）　無花果形の体部に外反して立ち上がる口頸部を有する。（1～3）の口縁部は、粘土紐の貼り付けによって肥厚垂下させ、幅広い装飾面をなし、円形竹管紋（1・2）を施す。（1）は口径18.2cm、口頸部高7.9cmをはかる。口縁端面に2個1組の円形竹管紋を廻らし、その上に赤色顔料を塗布している。口縁内外面はヨコナデ、頸部内外面はヘラミガキ調整である。色調は茶褐色。（2）は口径13.4cm、器高30.2cm、体径22.4cm、底径5.5cmをはかり、くびれ部には断面三角形の貼り付け突帯をもつ。口縁端面に円形竹管紋19個、頸部下端および肩部に2個1組で5組の円形竹管紋を交互に配列する。体部中央には人為的か否か不明であるが、径2.5×3.0cmの粗孔が外→内にみられる。頸部外面はハケ後にヘラミガキ、内面はハケ、体部外面上位はハケ後ヘラミガキ、下位はタタキ後にアトランダムなヘラミガキ、体部内面上位は指ナデ、下位は簾状ハケ調整である。色調は黄灰色を呈する。（3）は口径14.7cm、器高27.9cm、体径21.4cm、底径6.4cmをはかる。頸部に円形竹管紋3個を横位にスタンプした記号をもつ。頸部内外面はハケ、体部内面はハケ、外面は丁寧なヘラミガキ調整を施す。突出した底部の外縁は著しく磨耗している。色調は暗緑褐色を呈し、堅緻な土器である。（4）は口径10.7cmをはかり、口頸部は上方に大きく外反する。色調は暗黄灰色を呈し、堅緻な胎土をもつ。内面はナデ、外面はヘラミガキ調整である。

短頸壺形土器（5～9）　長胴の体部に、外上方に伸びる口頸部を有し、口頸部高は器高に対してその1/4より小さいものを一般にさす。（5）は口径11.4cm、口頸部高8.1cmをはかる。口頸部はわずかに外反して立ち上がり、端部は面を成す。頸部外面に沈線1条を施す。色調は黄褐色を呈する。外面はヨコハケ後ヘラミガキ、内面はハケ調整。（6）は口径12.8cm、口頸部高5.9cmをはかる。口頸部は外傾し、端部は面を成す。頸部内外面は共にハケ調整である。色調は赤褐色。（7）は口径11.3cm、口頸部高5.6cm、現存器高25.9cm、体径16.8cmをはかる。やや下膨れの体部に外反して直立する口頸部をもつ。口頸部内面はナデ、外面はタタキ後にナデ、体部外面はタタキ、内面は粘土紐の継ぎ目が残るほどの指ナデ調整である。色調は淡灰褐色を呈する。（8）は現存器高21.5cm、体径16.4cm、底径4.7cmをはかる。口頸部を失うが（7）と同様のも



第29図　ＳＤ－12出土土器実測図（1/4）



第30図　ＳＤ－12出土土器実測図（1/4）

と思われる。体部外面はタタキ後に下半部をナデ消している。内面はハケ状ナデ調整である。なお、肩部には小動物の尻尾と思われる圧痕が観察された。その細部形態から判断してネズミのものと思われる。残存形態から圧痕は、土器が生乾きの段階（タタキ後）でついたものであろう。（9）は口径10.1cm、口頸部高5.6cm、器高27.5cm、体径19.8cm、底径6.4cmをはかる。頸部および肩部にはヘラによる記号文がみられる。口頸部内外面および肩部外面はハケ、体部外面はヘラミガキ、内面上位はナデ、下位は簾状ハケ調整である。色調は淡灰褐色（図版77－6）。

壺形土器底部（10・11）　（10）は底径6.5cmをはかり、体部下位に未貫通の孔を穿つ。色調は淡赤橙色を呈す。体部外面下位に円形竹管紋を1個スタンプする。外面はナデ後にハケ、内面はハケ調整である。（11）は底径6.0cmをはかり、色調はにぶい黄橙色を呈する。体部内外面中位はハケ状ナデ、下位はハケ調整である。

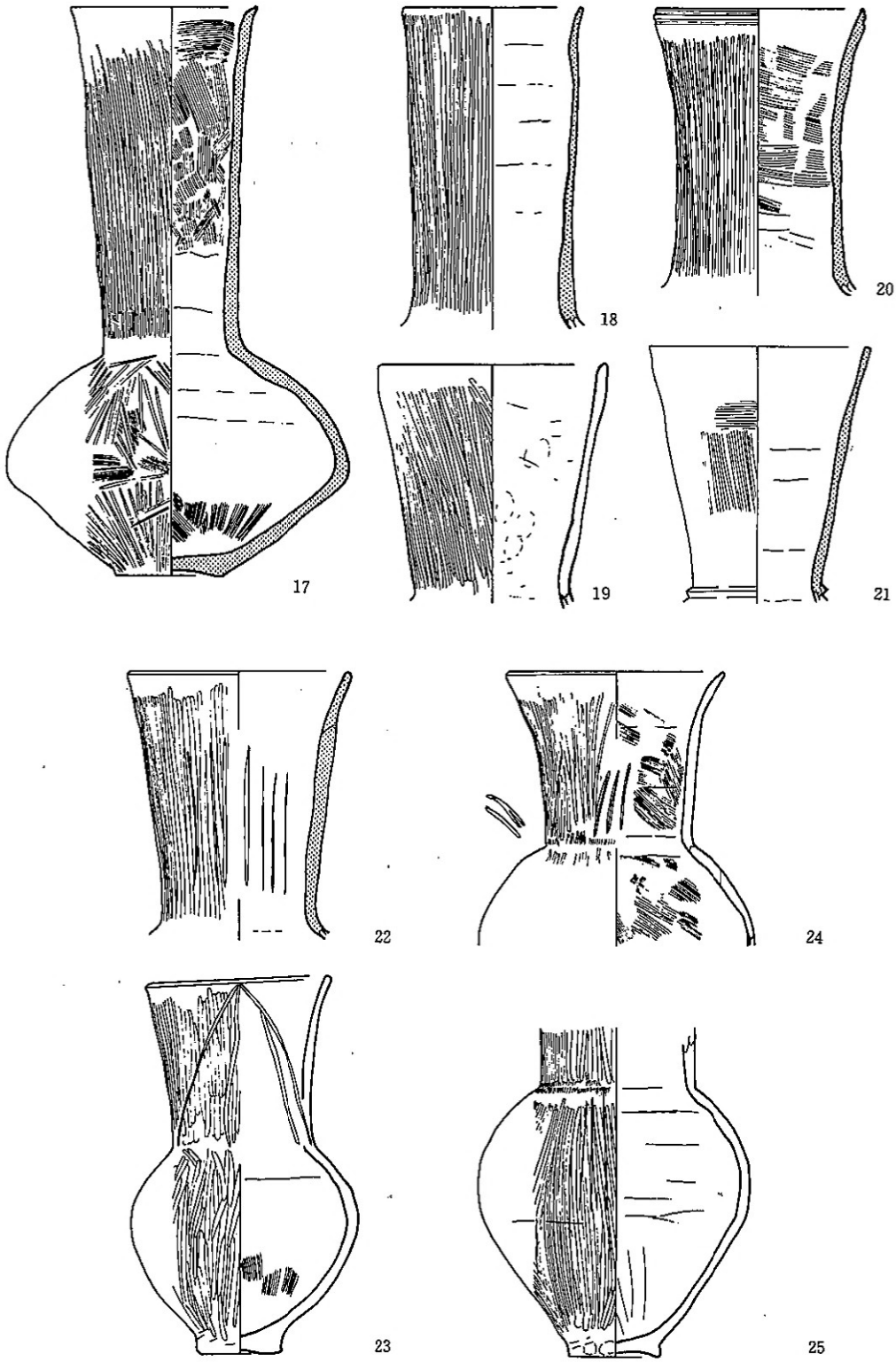
無頸壺形土器（12）　口径12.3cm、体径17.9cmをはかる。色調は淡赤褐色を呈し、体部内面下半に赤色顔料を塗布する。口縁直下に2孔1対の紐孔を2組穿つ。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ状ナデ調整である。

大型無頸壺形土器（16）　口径28.0cm、体径36.5cmをはかり、把手がつく。胴の張る体部に、くの字状に短く外反する口縁部をもつ。口縁端部は下方に肥厚して、擬凹線紋2条と刻目を廻らし、肩部に刻目を施す。色調は暗褐色。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。

台付壺形土器（13）　口頸部を失うものの現高14.6cm、体径18.1cm、裾径9.5cmをはかる。色調は淡茶褐色。算盤玉状の体部に屈曲して、短く外反する脚台が付く。裾部には透孔を7個穿つ。体部外面はヘラミガキ、内面上半はしぼり目を残し、下半はハケ調整。脚台部外面はハケ後にヘラミガキ、内面はナデ調整である。

器台形土器（14・15・36）　（14）は現高9.6cm、裾径12.2cmをはかり、色調は灰白色を呈する。裾部に透孔を5個穿つ。器外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。（15）は現高14.2cm、裾部13.2cmをはかる。色調は淡茶褐色を呈し、内外面に、黒色物質を塗布する。透孔は3個1対を3組あける。外面はハケ、内面はナデ調整である。（36）は現高10.3cm、裾径14.4cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈する。裾部に3個1対の透孔を穿つ。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。

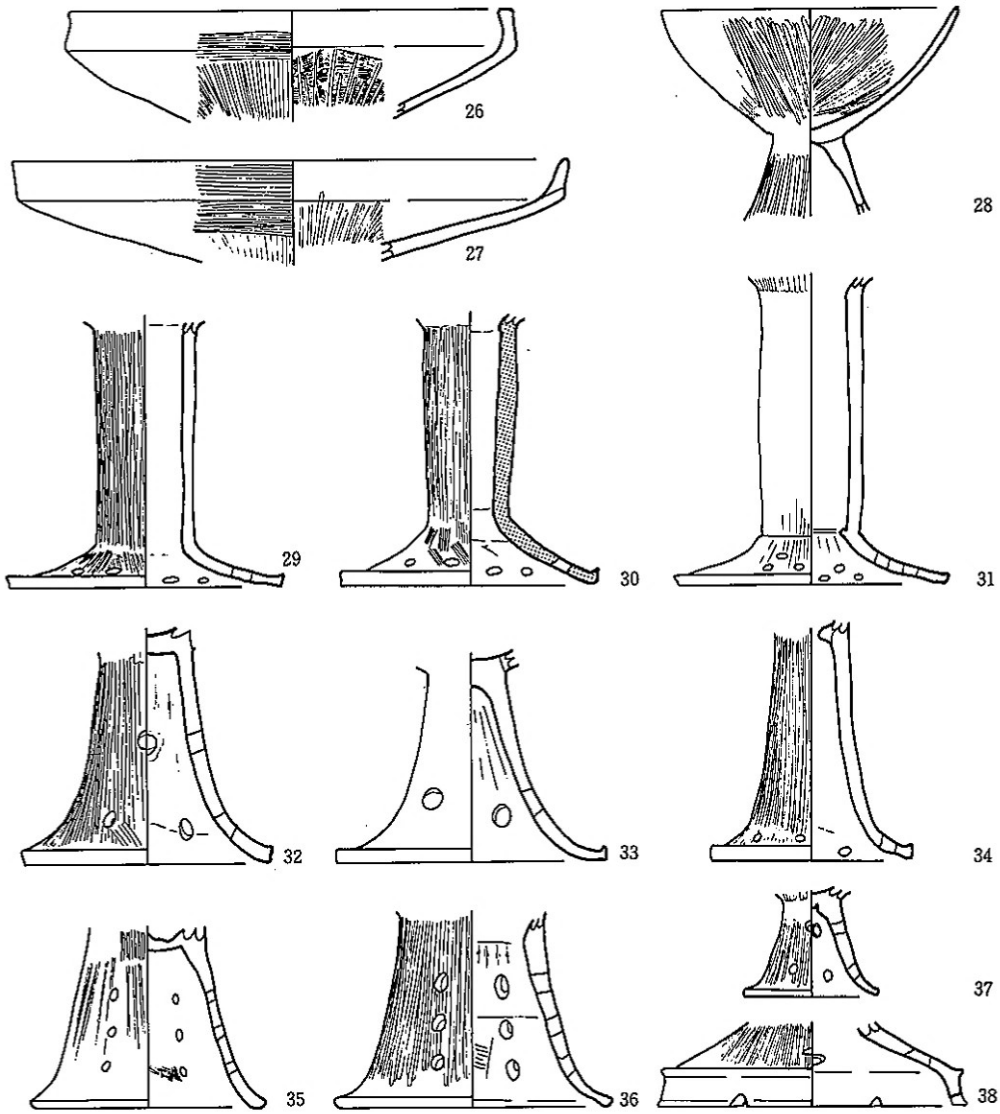
長頸壺形土器（17～25）　球形、無花果形、扁球形などの体部に円筒状の長い頸部と外反および直口する口縁部をもつ。（17・18）は口頸部高20cm前後をはかり、一般的な長頸壺のものと比較して著しく長い。（17）は口径11.1cm、口頸部高20.7cm、器高34cm、体径20.2cmをはかる。頸部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整を施すが粘土紐の継ぎ目は顕著である。体部外面はハケ後に粗雑なヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は暗褐色。（18）は口径10.3cm、口頸部高18.5cmをはかり、端部は丸くおさめる。外面は精緻なヘラミガキ、内面はハケ状ナデ調整である。色調は暗褐色。（19）は口径13.3cm、口頸部高14.1cmをはかり、口頸部は外傾して立ち上がる。頸部内面はナデ、外面はヘラミガキ調整である。色調は灰白色。（20）は口径12.1cm、



第31図　ＳＤ－12出土土器実測図（1/4）

口頸部高15.9cmをはかる。端部はわずかに内弯し、その外面に擬凹線紋２条を施す。頸部外面は精緻なヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は暗褐色。（21）は口径13.1cm、口頸部高14.9cmをはかり、口頸部は外傾して立ち上がる。くびれ部には断面三角形の突帯を貼り付けている。頸部外面はナデ後にハケ、内面はナデ調整である。色調は暗褐色。（22）は口径13.1cm、口頸部高14.8cmをはかる。口頸部は外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。頸部にヘラ状工具による記号文「｜｜｜｜｜｜｜」を施す。頸部外面は粗いヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は暗緑灰色を呈する。（23・24）は口径が口頸部高を凌駕する。（23）は口径10.4cm、口頸部高9.8cm、器高22.5cm、体径13.4cm、底径4.8cmをはかる。外反して立ち上がる口頸部外面に「⋔」のヘラ記号、それに対して内面の上位に「｜」のヘラ記号を施す。頸部外面はヘラミガキ、内面はナデ、体部外面はヘラミガキ、内面上位は、ナデ、下位はハケ調整である。（24）は口径12.9cm、口頸部高10.4cmをはかる。外反して立ち上がる口頸部外面に「｜｜｜」のヘラ記号、その反対の面に「\\」のヘラ記号を施す。頸部・体部内面はハケ、外面はヘラミガキ調整である。色調は淡赤褐色。（25）は現存器高19.6cm、体径16.1cmをはかる。肩部にヘラ状工具による記号文「｜｜｜」を浅いタッチで施している。頸部外面はハケ後にヘラミガキ、内面はハケ状ナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は淡赤褐色。

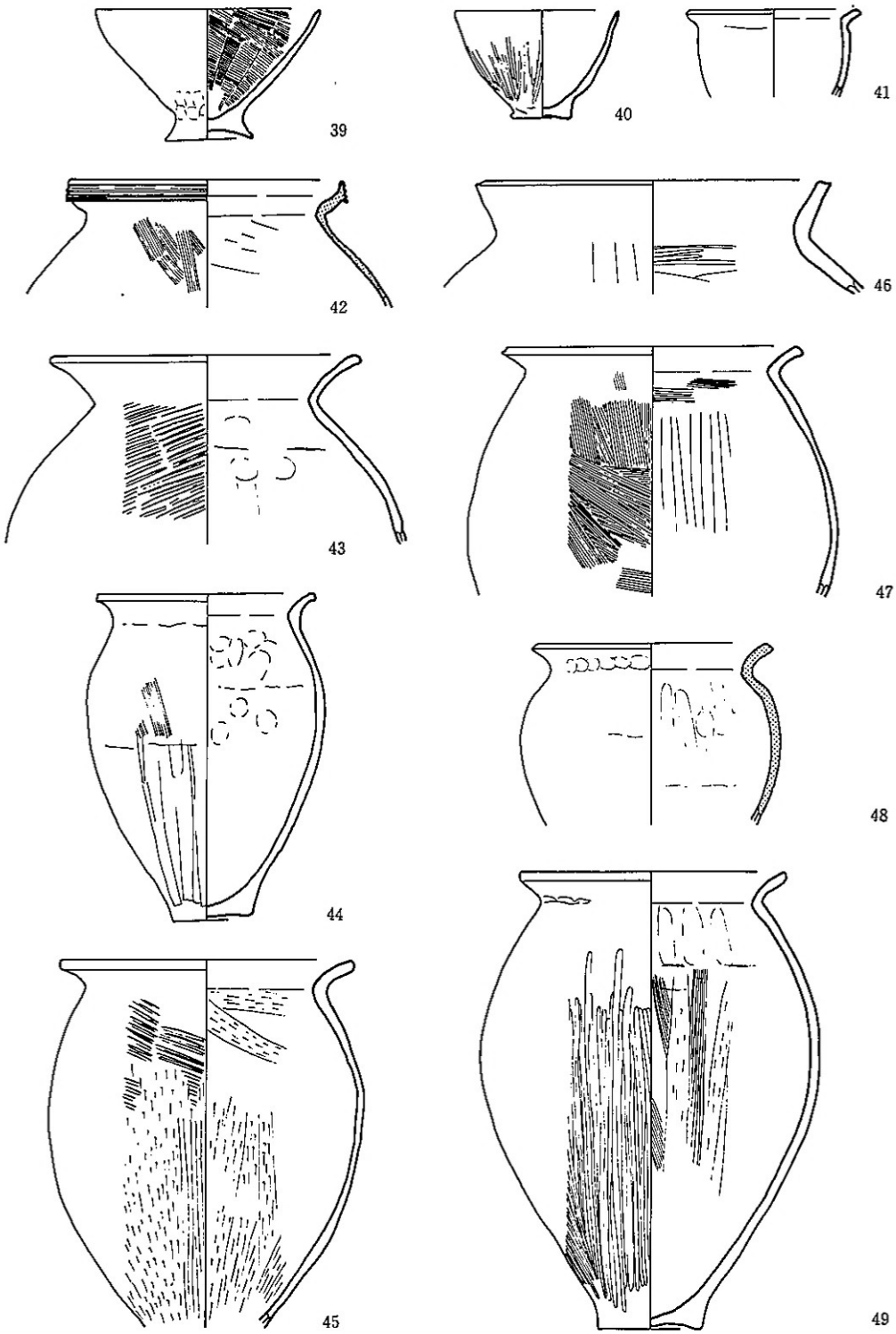
高杯形土器（26～38）　杯部の形態から、外に開く体部より屈曲して短く立ち上がる口縁部を有するもの（26・27）、内弯しつつ上方に開く体部に直口する口縁部をもつ（28）の２形式がある。脚部ではエンタシスの柱状部を有するもの（29～31・38）、緩かに外反するもの（32～34・37）、台状中空脚部のもの（35）の３形式がある。（26）は復元口径23.3cmをはかり、色調は淡赤褐色を呈する。口縁部は体部からわずかに内傾して立ち上がり、端部は平垣面をもつ。口縁部外面はナデ後、下位にハケ、内面はナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はハケ後に粗いヘラミガキ調整である。（27）は復元口径29.1cmをはかり、口縁部は体部から外傾して立ち上がる。端部は丸くおさめ、色調は淡赤褐色を呈する。口縁部外面および体部内外面はヘラミガキ、口縁部内面はナデ調整である。（28）は口径15.6cmをはかり。椀状の杯部をもつ。体部内外面はヘラミガキ、脚部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は灰緑色。（29）は裾径14.4cmをはかり、裾部に２個１対の透孔を穿つ。色調は淡茶褐色を呈す。柱状部、裾部外面はハケ後にヘラミガキ、裾部内面はハケ調整である。（30）は裾径13.4cmをはかり、裾部に２個１対の透孔を穿つ。柱状部外面はヘラミガキ、内面はナデ、裾部内外面はハケ調整である。色調は暗褐色。（31）は裾径14.1cmをはかり、裾部に３個1対の透孔を３組穿つ。色調は淡黄褐色を呈する。器内外面はナデ調整である。（38）はエンタシスの柱状部から低く外反する裾部に、粘土紐を附加して幅広い端面を形成している。裾径16.3cmをはかり、裾部端面に半円形の透孔４個穿つ。（32・34）は出土状況でも触れたように相接して出土した高杯脚部である。（32）は裾径13.9cmをはかり、３個１対の透孔穿つ。色調は淡黄褐色を呈する。脚外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。（33）は裾径14.1cmをはかり、透孔を６個穿つ。色調は灰白色を呈する。脚部外面の調整



第32図　ＳＤ－12出土土器実測図（1/4）

は不明、内面はしぼり目。（34）は裾径10.7cmをはかり、裾部に透孔５個を穿つ。脚部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。（37）は裾径7.1cmをはかり、３個１対の透孔を２組穿つ。（28）と同様な杯部を有するものと思われる。脚部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。（35）は裾径12.1cmをはかり、縦位に３個１対の透孔を６組穿つ。脚部外面はハケ、内面上位はナデ、下位はハケ調整である。

小型鉢形土器（39～41）　（39・40）は内弯ぎみに立ち上がる体部に直口する口縁部を有する。（39）は口径13.1cm、器高7.6cm、底径5.3cmをはかる。底部は著しく外に突出し、高台状をなしている。体部外面は指頭圧痕とナデ、内面はハケ調整である。色調は褐灰色。（40）は口径9.6cm、器高6.3cm、底径3.6cmをはかる。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調

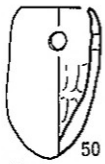


第33図　ＳＤ－12出土土器実測図（1/4）

は黄灰色。（41）は口径9.9cmをはかり、内弯ぎみに立ち上がる体部からくの字状に外反する口縁部を有する。内外面共にナデ調整である。色調は灰白色。

甕形土器（42～49）　（42・43・45～47・49）の口縁部は肩部から屈曲して外反する。（42）は口径16.1cmをはかり、端部は上方に肥厚する。口縁端部に擬凹線紋３条を施す。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ調整である。色調は暗褐色。（43）は口径17.9cmをはかる。色調は淡灰褐色を呈し、胎土中にくさり礫を多量に含む。体部外面はタタキ、内面は指頭圧痕とハケ状ナデ調整である。（45）は口径17.1cm、体径18.8cmをはかる。体部外面上半はタタキ、下半はヘラケズリ、内面はヘラケズリ調整である。色調は淡茶褐色。（46）は口径19.9cmをはかり、色調は淡赤褐色を呈する。体部内外面はナデ、頸部内面はヘラミガキ調整である。（47）は口径17.3cm、体径22.1cmをはかる。体部外面はハケ、内面上位はハケ、下位はナデ調整である。色調は淡茶褐色。（49）は口径15.7cm、器高26.9cm、体径20.2cm、底径6.3cmをはかる。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ後にヘラケズリ調整を施す。色調は淡茶褐色。（44・48）は体部から緩かに外反する口縁部をもつ。（44）は口径12.8cm、器高19.2cm、体径14.1cm、底径4.8cmをはかる。体部外面上位はナデ、中位はハケ、下位は面取り状のヘラケズリ、内面は指頭圧痕とハケ状ナデ調整である。色調は明褐灰色。（48）は口径13.5cm、体径15.4cmをはかり、色調はにぶい橙色を呈す。体部外面はハケ状ナデ調整、内面は煤附着のため不明。

飯蛸壺形土器（50）　口径3.6cm、器高8.1cmをはかり、端部は内弯する。口縁下に紐孔１個を穿つ。体部外面の調整は指ナデ、内面は指頭圧痕。色調は白灰色。（図版176－１）



第34図
ＳＤ－12
出土土器
実測図
(1/4)

第３項　奈良時代

奈良時代の遺構は、江戸時代の自然河川の削平をまぬがれた２ライン以西、第Ｖ層上面にて、ウシ・ウマ等の足跡が検出されている（図版12ａ）。

第４項　江戸時代及び江戸時代以降

自然河川（第75図、図版12ｂ）

第Ⅳａ層上面（Ｔ．Ｐ．＋8.0m）で検出された。トレンチ内を南→北に走行し、深さは約2.7mをはかる。埋土中から、多量の弥生土器を主体に石器、江戸時代の瓦・土管・陶磁器・擂鉢・染付等の遺物が出土している。

〔註〕

註１　中西靖人、宮崎泰史、西村尋文編　『亀井遺跡』（財）大阪文化財センター　1982．３

註２　本書第Ⅵ章第７節を参照。なお、尺骨長から推定される体高は約41cmである。

註３　体部のプロポーションは、ＫＭ－Ｈ５調査区ＳＸ－03出土の壺形土器（第97図５、図版96－107）のものに良く似ている。

註４　ＳＤ－12は、名称は異なるもののＫＭ－Ｈ４調査区で検出された溝ＳＤ－14と同一の遺構である。

註５　奈良県磯城郡田原本町所在の唐古・鍵遺跡から類似品が出土していることを当該遺跡の調査を担当された藤田三郎氏から御教示を得た。
藤田三郎編『第57年度　唐古・鍵遺跡第13・14・15次発掘調査概報』田原本町教育委員会　1983

註６　高島　徹、尾谷雅彦、寺川史郎、金光正裕、畑　暢子、清原弘美、広瀬雅信　「第Ｖ章　遺構及び遺物」『亀井・城山』　1980．12　（192頁の第204図２）

第２節　ＫＭ－Ｈ４調査区

第１項　弥生時代中期

井戸

ＳＫ－05（第35図、図版14）

Ｍ・①地区において検出した中期後半の井戸である。上面は旧平野川の河床にあたり、大きく削平を受けるものの、径2.1×1.6mの不整円形を呈し、検出面からの深さ約1.2mをはかる。断面形態は、上部のなだらかな傾斜から段をもって急に深く下がり、坑底において袋状に大きく拡がっている。

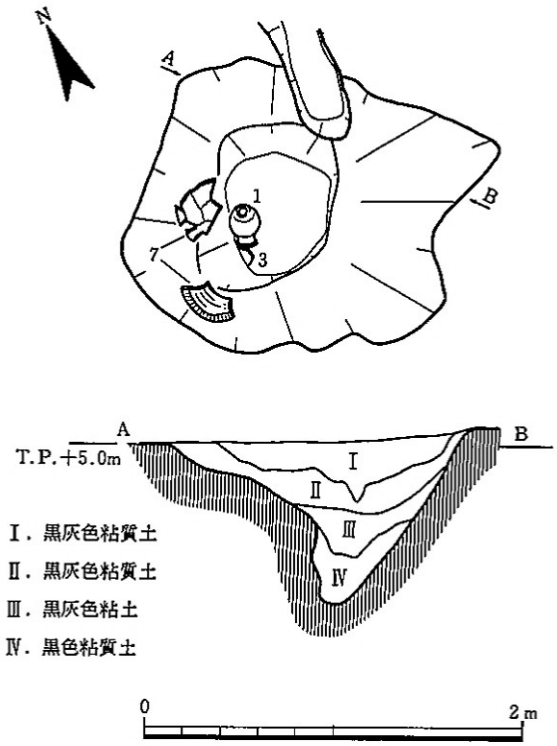
坑内の土層堆積状況から、埋土は4層に分けられる。（Ⅰ）黒灰色粘質土（焼土・カーボン・焼けた有機物、そして１cm前後の青灰色粘土のブロックを多量に含む）、（Ⅱ）黒灰色粘質土（0.5cm前後のカーボン・焼土粒を含む）、（Ⅲ）黒灰色粘土（有機物を多量に含み、0.2cm前後の青灰色粘土・カーボン粒を含む）、（Ⅳ）黒色粘質土（0.5cm前後のカーボン粒を含む）である。（Ⅰ～Ⅱ）層の堆積は、土の内容物から判断して井戸の機能消失後に形成されたものと思われる。（Ⅰ）層から装飾豊かな大型壺形土器１点が押しつぶされた状態で出土している（図版14ａ）。（Ⅲ～Ⅳ）層は土坑の開削から機能時にかけて堆積した土層と思われる。（Ⅳ）層は最下層に相当し、坑底から浮いた状態で、壺形土器大小２点が出土している（図版14ｂ）。いずれも器面の残りは良好というものの、２次的に火を受けていた。井戸掘削行為直後、あるいは、一定の時を経た段階で、坑中に廃棄されたのであろう。出土状況から明らかに廃棄の同時性を有す一括資料といえる。

以上、ＳＫ－05は、坑底が湧水層に達している点、小型水差形土器の出土から、井戸の可能性が一層強いものと考えられよう。坑底のレベルはＴ.Ｐ.＋3.7mである。

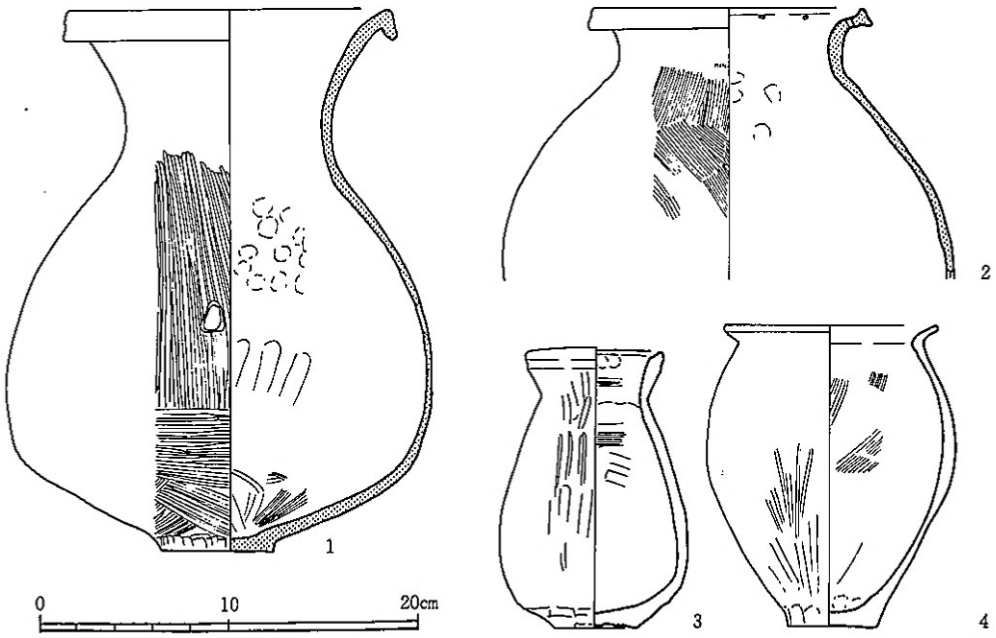
〔土器〕（第36・37図、図版80・81）

壺・大型壺・水差・甕・飯蛸壺形土器等の器種資料がある。時期は第Ⅳ様式である。（Ⅰ）層から（７）、（Ⅲ）層から（２・４～６）、（Ⅳ）層から（１・３）の出土をみている。

壺形土器（１～３・７）　（１）は口径17.1cm、器高29.5cm、体径22.5cm、底径



第35図　ＳＫ－05遺構平面図及び土層断面図（1/40）



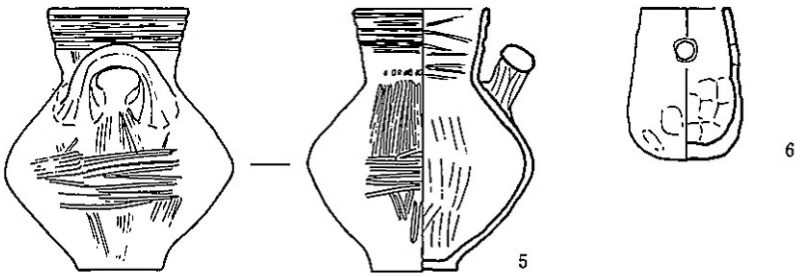
第36図　ＳＫ－05出土土器実測図（1/4）

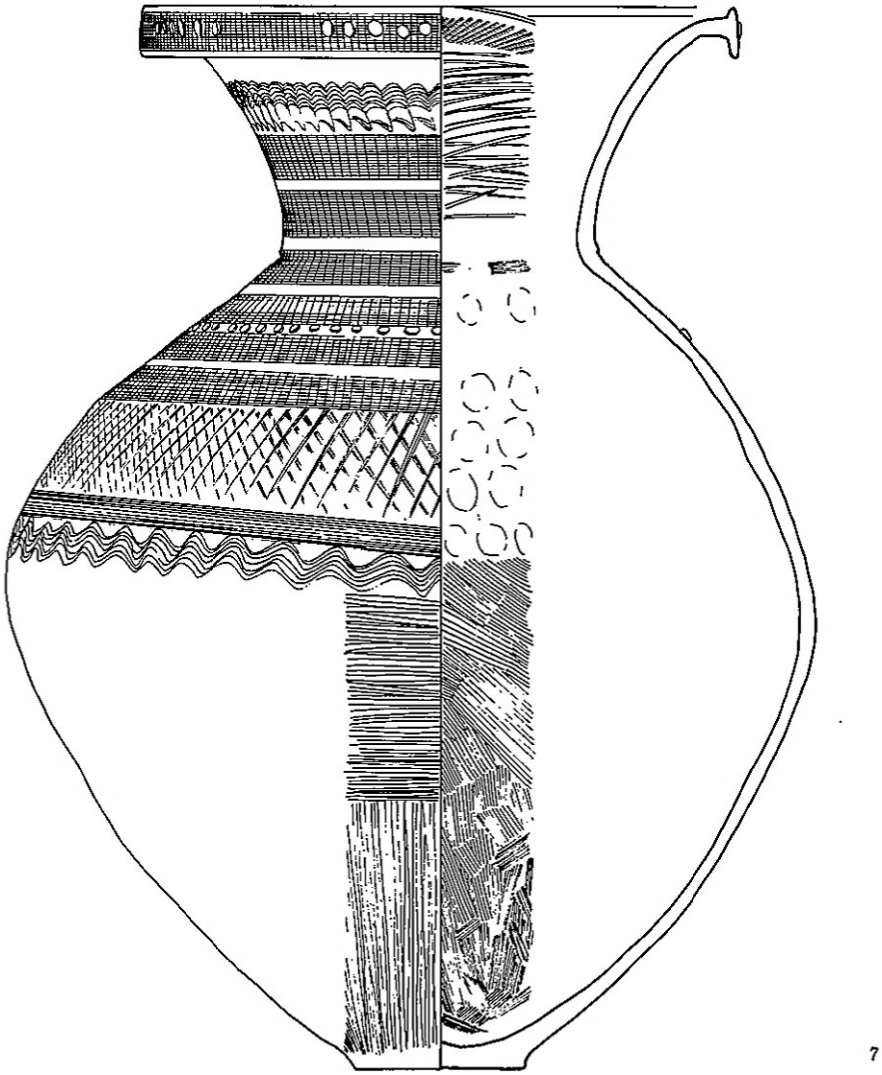
5.9cmをはかる。腰の強く張る体部からスムーズに外反して伸びる口頸部を有し、口縁端部は下方に拡張する。口頸部内外面はナデ、体部外面はヘラミガキ、内面上半はナデ、下半はハケ調整である。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。（２）は口径14.3cm、現高14.6cm、体径23.8cmをはかる。短く直立する頸部に短く外反する口縁部を有し、端部は粘土紐の附加によって上下に肥厚し、面をなす。口縁部に２孔１対の紐孔を３個穿つ。体部外面はハケ、内面は指押えとナデ調整である。色調は暗灰褐色を呈し、胎土に角閃石を多量に含む。生駒西麓産。（３）は口径7.2cm、器高14.8cm、体径9.8cm、底径4.4cmをはかる。下膨れの長胴の体部に屈曲して、外傾ぎみに立ち上がる口縁部を有する。調整は全体に雑で、外面は太く粗いヘラミガキ、体部内面上位はハケ、下位はナデ、底部外側面はヘラケズリ調整である。色調は黒褐色。

大型壺形土器（７）　口径31.3cm、器高56.1cm、体径42.8cm、底径8.9cmをはかる。口縁端部外面に簾状紋１帯を廻らし、その上に６個１組の円形浮紋を貼り付ける。口頸部には波状紋１帯、簾状紋２帯、体部上半に簾状紋２帯、円形浮紋、簾状紋２帯、斜格子紋、直線紋１帯、波状紋１帯を施す。頸部外面はナデ、内面はヘラミガキ、体部外面上半はナデ、下半はヘラミガキ、体部内面上半は指ナデ、下半はハケ調整である。色調は淡茶褐色。

水差形土器（５）　口径6.8cm、器高13.8cm、体径11.8cm、底径4.5cmをはかる。算盤玉状の体部から外反して直線的に伸びる口頸部を有し、肩部に半環状の把手をつける。口頸部上位に３条の凹線紋を施す。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は暗灰褐色。

甕形土器（４）　口径11.2cm、器高15.9cm、体径13.3cm、底径4.9cmをはかる。口縁部内面に沈線一条を施す。(註1) 体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は黒褐色。



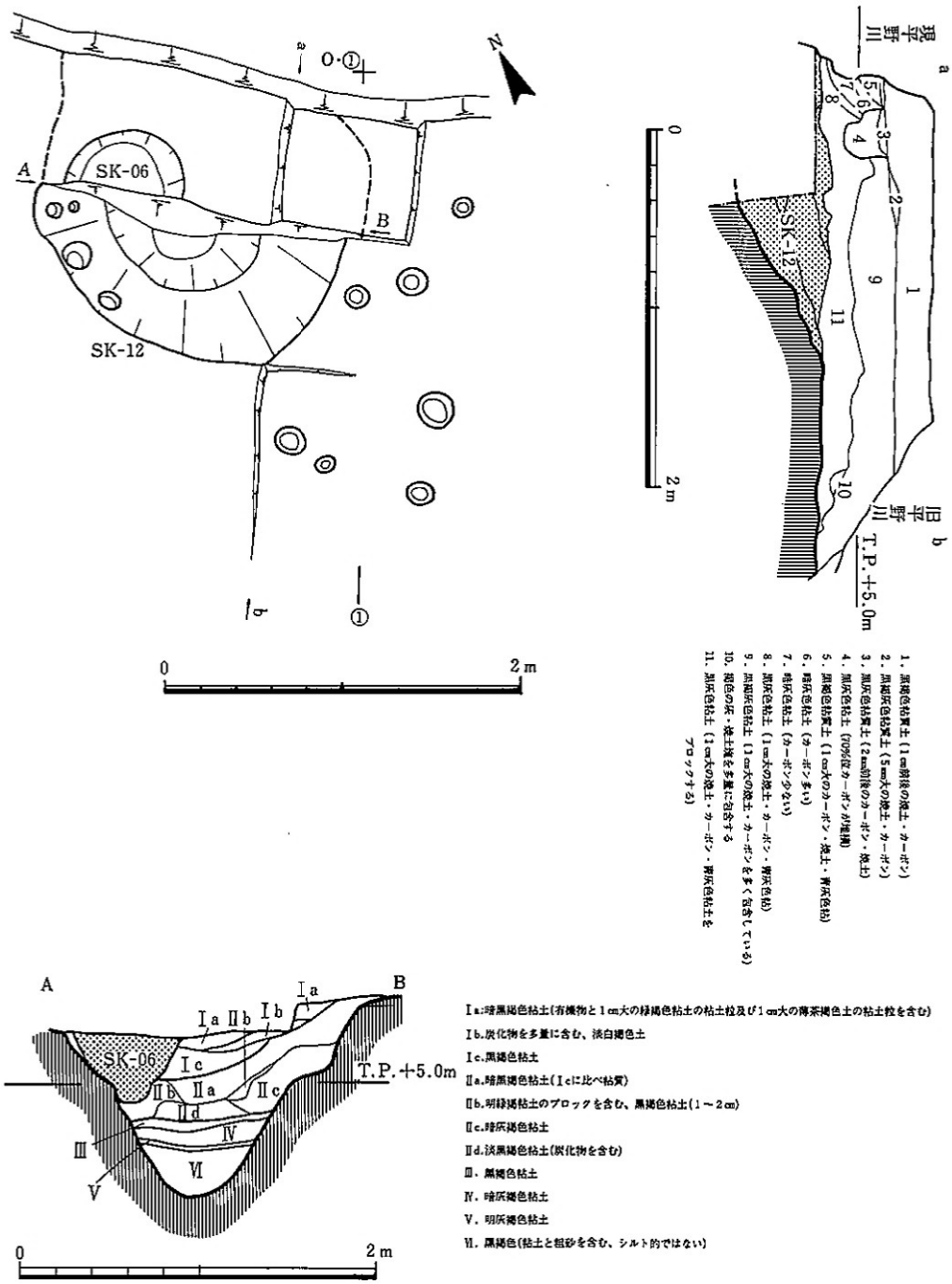


第37図　ＳＫ－05出土土器実測図（1/4）

飯蛸壺形土器（６）　口径4.8cm、器高8.0cmをはかり、端部は面を成す。口縁下に径1.1cmの円孔を１カ所穿つ。体部外面はナデ、内面は指頭圧痕調整である。色調は灰褐色（図版176－５）。

ＳＫ－12（第38図）

弥生時代中期～後期の遺物を多量に含む遺物包含層（第Ⅸ層）除去後、Ｎ・①地区第Ｘａ層上面にて検出した井戸である。北側は、予定掘削面に達していたため未調査であるが、プランは把握しえた。径1.85mの円形プランを有し、深さは1.1mをはかる。断面形態は擂鉢状を呈し、第



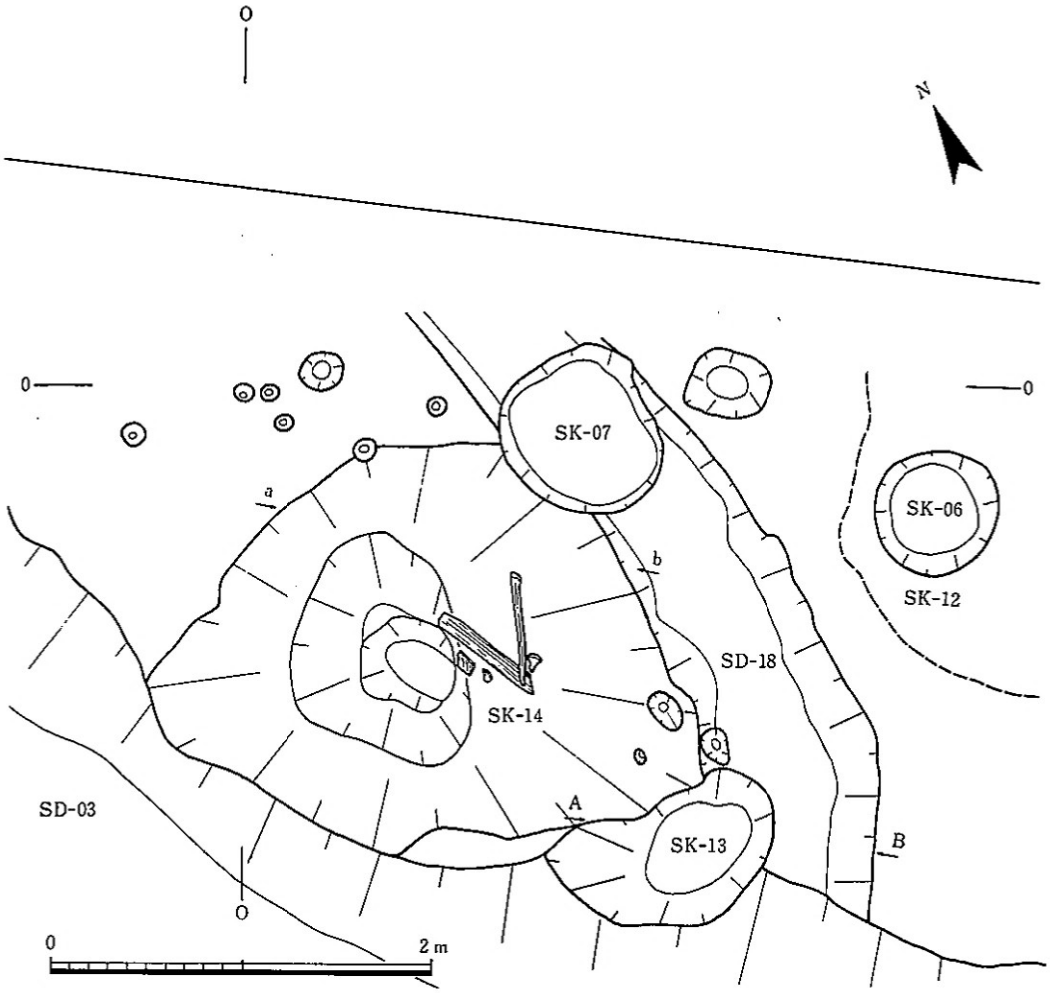
第38図　ＳＫ－06・12遺構平面図及び土層断面図（1/40）

Ｘｉ層まで掘削されていた。上面の西寄りに、ＳＫ－06が掘り込まれている。

埋土は土層断面の検討から６層に分層できる。（Ⅰ）～（Ⅱ）層は層中に含まれている内容物からして、人為的に埋められて、形成された土層と思われた。（Ⅱｂ）層には、第Ｘ層の青灰色シルトがブロック状に混入している。土坑機能としては、坑底が湧水層である第Ｘｉ層中にあることから判断して、井戸の可能性が考えられよう。遺物は弥生時代中期の土器片を得ているが、実測可能な遺物はない。

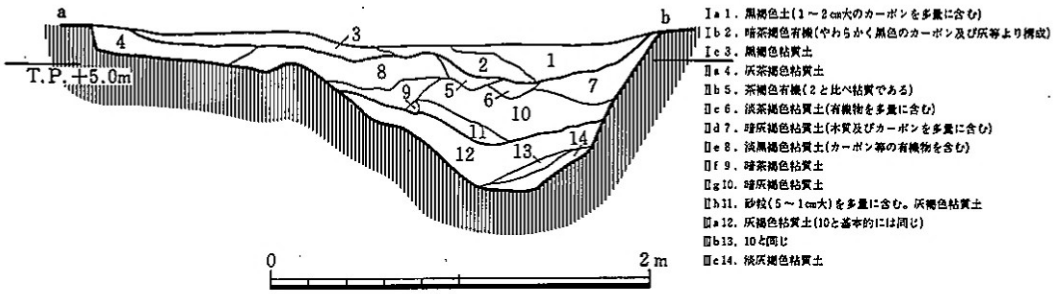
ＳＫ－14（第39・40図、図版16）

Ｎ・①地区の第Ⅸ層除去後、第Ｘ層上面にて検出した井戸である。平面プランは径2.25×2.2ｍの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは1.32ｍをはかる。西側はＳＫ－07・ＳＤ－18に一部破壊されている。断面形態は緩かな傾斜から段をもって急に深く下がる二段掘りで、井戸底は湧水層である第Ｘｉ層中（Ｔ.Ｐ.＋3.58ｍ）にある。



第39図　ＳＫ－06・07・13・14、ＳＤ－18遺構平面図（1/40）

埋土は、土層堆積状況から大きく３つの層に分けられる。各層に包含されていた遺物は少量で、弥生時代中期の土器10数片と、木製品では（Ⅲ）層中から板状木製品１点を検出したのみである（図版16ａ）。



第40図　ＳＫ－14土層断面図（1/40）

ＳＫ－15（第42図、図版17ａ）

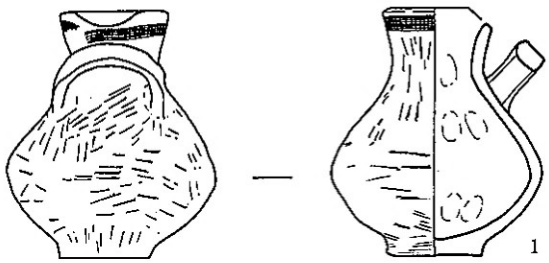
Ｍ・①地区、第Ｘ層の上面にて検出した井戸である。上部は、江戸時代自然河川によって削平を受けていた。北側は、弥生時代後期初頭の溝ＳＤ－14の開削のため一部失う。

平面プランは、推定径1.4×1.1mの不整円形を呈している。検出面からの深さは0.88mで、坑底はＴ.Ｐ.＋4.12mで第Ｘｊ層まで達している。

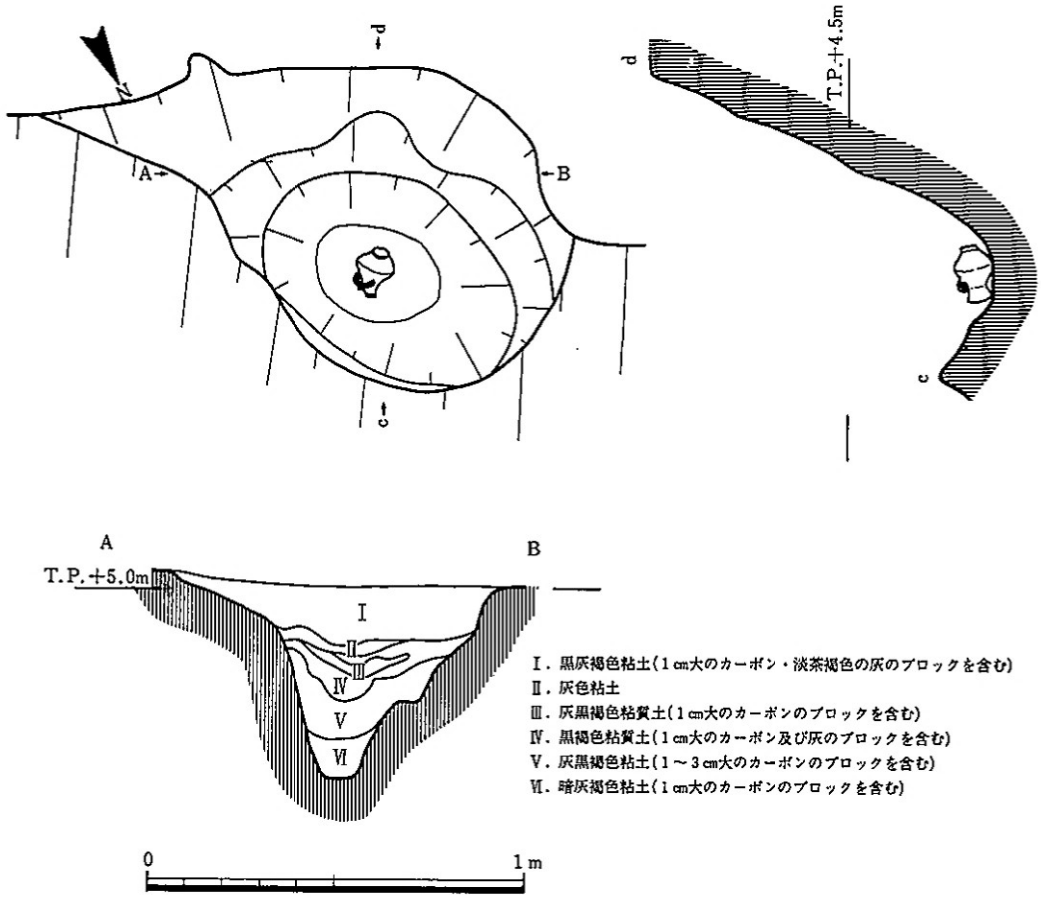
坑内の埋土は６層に分けられる。（Ⅰ）黒灰褐色粘質土（１cm大のカーボン・灰のブロックを含む）、（Ⅱ）灰色粘土、（Ⅲ）灰黒褐色粘質土、（Ⅳ）黒褐色粘質土（１cm大のカーボン・灰を多く含む）、（Ⅴ）灰黒褐色粘土（１～３cm大のカーボン粒を含む）、（Ⅵ）暗灰褐色粘土である。（Ⅵ）層の最下層からは、小型水差形土器１点が斜位に出土している（図版17ａ）。井戸掘削にともなって廃棄されたものであろう。（Ⅰ）～（Ⅴ）層から出土した土器は、いずれも弥生時代中期の細片である。

〔土器〕（第41図、図版81－25）

小型水差形土器（１）は、最下層に相当する（Ⅵ）層から、単独で出土した。口径5.4cm、器高13.0cm、体部最大径11.0cmをはかる。口縁部上位外面に、粗雑な簾状紋１帯を施している。外面調整は、粗いけずりでとどめている。内面および把手外面には白色物質（カルシウム分を多く含む）が残存していた。色調は暗赤褐色。水差形土器のプロポーションおよび口縁部にみる退



第41図　ＳＫ－15出土土器実測図（1/4）



第42図　ＳＫ－15遺構平面図及び土層断面図（1/20）

化した簾状紋から第Ⅳ様式の範疇に比定できよう。(註2)

土坑

ＳＫ－06（第39図）

Ｎ・①地区において検出した土坑である。平面プランは径0.64mの円形を呈し、深さ約0.3mをはかる。検出面は第Ⅸ層除去後、第Ｘａ層上面にて輪郭を確認したＳＫ－12の埋土上面である（図版15ｂ）。

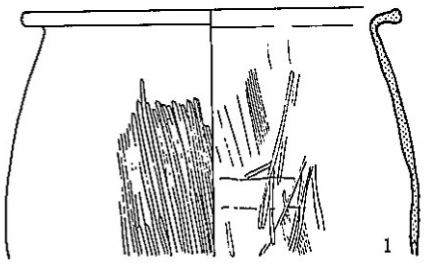
埋土は、1cm大の青灰色粘土・カーボン粒を含む黒褐色粘土の一層である。

埋土中より弥生時代中期の土器片の出土をみているが、いずれも細片で図示できない。

ＳＫ－07（第39図）

Ｎ・①地区において、厚さ約0.6mの第Ⅸ層除去後、第Ｘａ層上面にて確認した土坑である。平面プランは径0.89×0.87mの円形を呈し、深さ約0.2mを測る。ＳＫ－14・ＳＤ－18を切り込んでいる。

埋土は、1cm前後の青灰色粘土のブロックを含む黒褐色土である。得られた土器は、甕形土器（1）以外はすべて細片で、図示できない。弥生時代中期。



第43図　ＳＫ－07出土土器実測図（1/4）

〔土器〕（第43図、図版81－24）

甕形土器（１）は復元口径19.6cm、最大体径21.8cmをはかり、水平に屈曲する口縁部をもつ。色調は黒褐色を呈し、外面全体にススが附着している。口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整の後で粗いヘラミガキを部分的に施している。生駒西麓産の胎土をもつ。

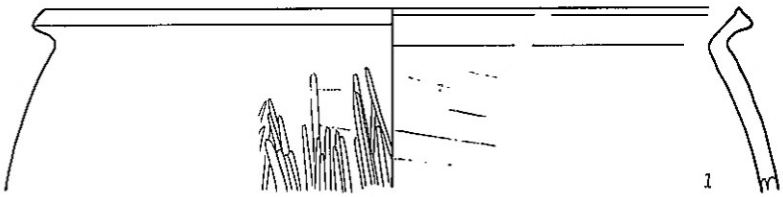
ＳＫ－08（第45図）

Ｎ・③地区の第Ｘ層上面にて検出した径1.14m（長軸），深さ約0.2mをはかる土坑。南側は、弥生時代後期の溝ＳＤ－10によって削平を受け、失う。

埋土は１cm大の青灰色粘土・カーボンのブロックを含む黒褐色粘土の単一層である。

〔土器〕（第44図）

第Ⅲ様式新段階の大型甕形土器１点を得た。その他の土器は細片で図示できない。甕形土器（１）は体部下半の大半を失うものの復元口径36.6cmをはかる大型である。「く」の字に屈曲する口縁部をもち、口唇部は粘土紐の附加によって上下に肥厚している。口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はハケ状ナデ調整である。色調は淡茶橙色。



第44図　ＳＫ－08出土土器実測図（1/4）

ＳＫ－09（第45図）

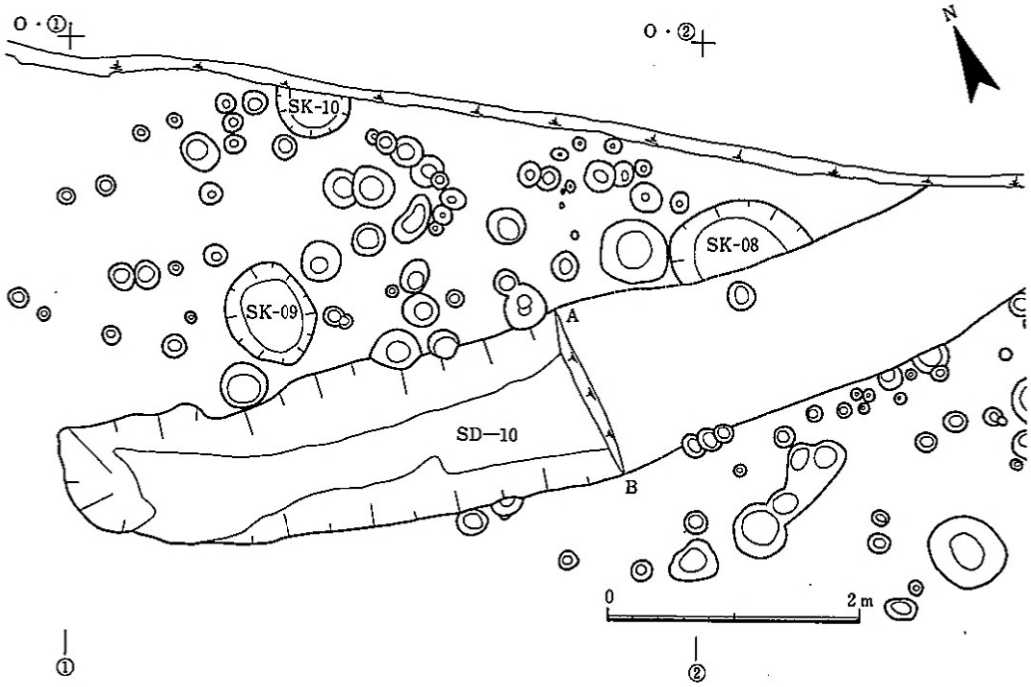
Ｎ・②地区の第Ｘ層上面において検出した土坑である。平面プランは径0.85×0.68mの円形を呈し、検出面からの深さは約0.36mをはかる。

埋土は１～２mm前後の青灰色粘土・シルトを多量に含む黒褐色粘質土の一層である。層中より弥生時代中期土器片を得ているものの、いずれも細片で実測図化できない。

ＳＫ－10（第45図）

Ｎ・②地区の第Ｘ層上面にて検出した小規模な土坑である。平面プランは径0.6×0.5mの円形を呈し、深さは約0.2mをはかる。

埋土は、青灰色シルトの小ブロックとカーボン粒を含む黒褐色粘土である。遺物は弥生時代中期の土器片、イヌの下顎骨片１を得ている。土器はすべて細片で実測図化できない。イヌ左下顎骨は、その大半を欠失し、残存していたのは連合部軟骨及び犬歯槽前縁の一部である。亀井１・２号犬の下顎骨[(註3)]との比較から、中小型犬の大きさのものと推察される。

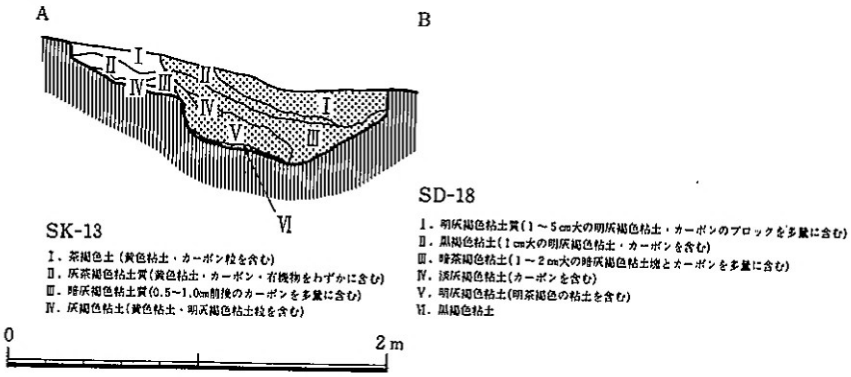


第45図　ＳＫ－08・09・10，SD－10遺構平面図　(1/60)

ＳＫ－13（第46図）

Ｎ・①地区にて検出した。径1.1×0.65mの楕円形を呈する土坑である。検出面からの深さは0.24mをはかる。西はＳＤ－18、南はＳＤ－03の開削によって切られている。

埋土は、土層堆積状況から４層に分けられ、（Ⅰ）茶褐色土（黄色粘土・カーボン粒を含む），（Ⅱ）灰茶褐色粘質土（黄色粘土・カーボン・有機物をわずかに含む），（Ⅲ）暗灰褐色粘質土（0.5～1.0cm前後のカーボンを多量に含む），（Ⅳ）灰褐色粘土（黄色粘土・明灰褐色粘土粒を含む）である（第39図）。得られた土器はいずれも細片で、図示することはできない。時期は、弥生時代中期である。

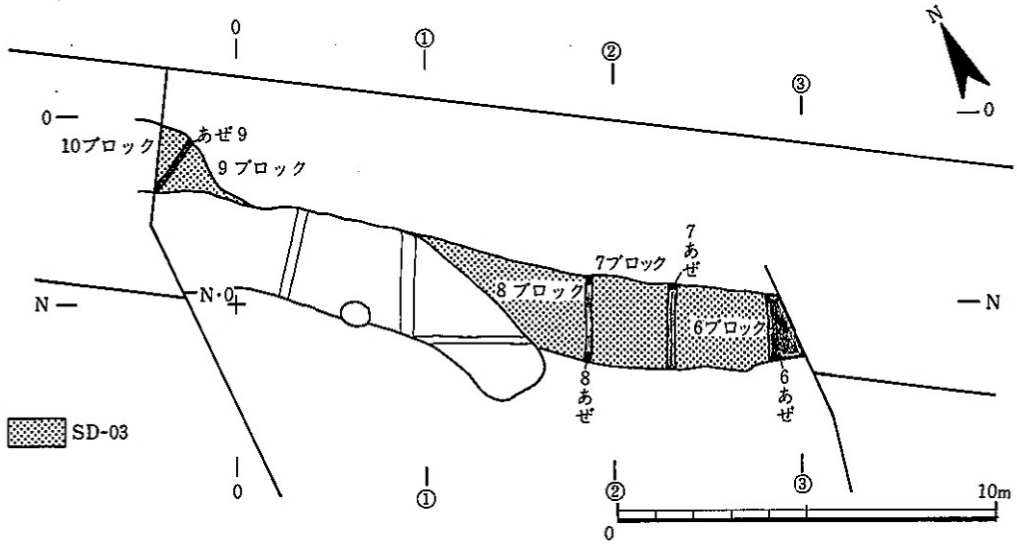


第46図　ＳＫ－13及びＳＤ－18土層断面図（1/40）

溝

ＳＤ－03（第47～50図、図版17～22）

ＫＭ－Ｈ３調査区の調査で検出した、溝ＳＤ－03から続く弥生時代中期末の溝である。上部幅2.5m、下部幅0.9m、深さ1.5mをはかり、トレンチ中央を東－西に走行する。上面は江戸時代平野川の河床に相当し、削平をうけている。



第47図　ＳＤ－03あぜ配置図（1/200）

調査は、遺物取り上げの便宜・遺物出土状況を把握するための方法として、任意に５つのブロックに分けて行っている（第47図）。各々のブロックを東から６ブロック、……、10ブロックと呼称している。実際の調査は、それらのブロックごとに行った。

８ブロックの西側及び９・10ブロックの南側は、弥生時代後期初頭に開削された溝ＳＤ－14によって切られ、半ばを失う。

溝中に堆積する埋土は、大きく４つの層に分けられる。遺物は各層より得ているが、大半は（II）～（III）層から出土した。

〔遺物出土状況〕　各ブロックから、弥生時代中期末の土器・石器・木製品・動植物遺存体等を得ている。旧平野川による削平を受けていたためか、土器の出土量は概して少なく、大半は破片であった。ただし、削平をまぬがれた10ブロックからは、完形に復元されえた無頸壺・小型甕・大型甕・浅鉢形土器を検出している。

木製品も３点と少ない。６ブロックの（Ｉ）層からえぶり（図版19a）、（II）層より有頭棒状木製品、８ブロックの（III）層から方形容器を得たのみである（図版21c）。

動物遺存体にはニホンジカ・イノシシ・イヌ・カエル・ヘビ・ネズミ・鳥類・魚類等豊富な遺存体がある。中でもニホンジカの出土量がめだっていた。６・７のブロックからはニホンジカの下顎骨を得ている（図版19b）。６ブロックから出土したものは左右下顎骨がそろっており、解体

処理後、一括して溝に投げ捨てたのであろう。おそらく解体は、近辺でおこなわれたものと思われた。

〔土器〕（第51・52図、図版81・82）

壺・短頸壺・無頸壺・細頸壺・高杯・浅鉢・大型鉢・小型甕・甕形土器等がある。(註4) 時期は第Ⅳ様式である。（2・4・8・9・11・12・21・26）は（Ⅰ）層、（5～7・10・13～17・20・23・24）は（Ⅱ）層、（1・3・18・22）は（Ⅲ）層、（19・25）は（Ⅰ）（Ⅱ）層から出土した。

なお、6ブロックから（13・15～17・19・23）、7ブロックから（6・7・18）、8ブロックから（1・8・9・14・21）、9ブロックから（2・4・11・26）、10ブロックから（5・10・12・20・24）、6～7ブロックから（25）、あぜ8から（3・22）の出土をみている。

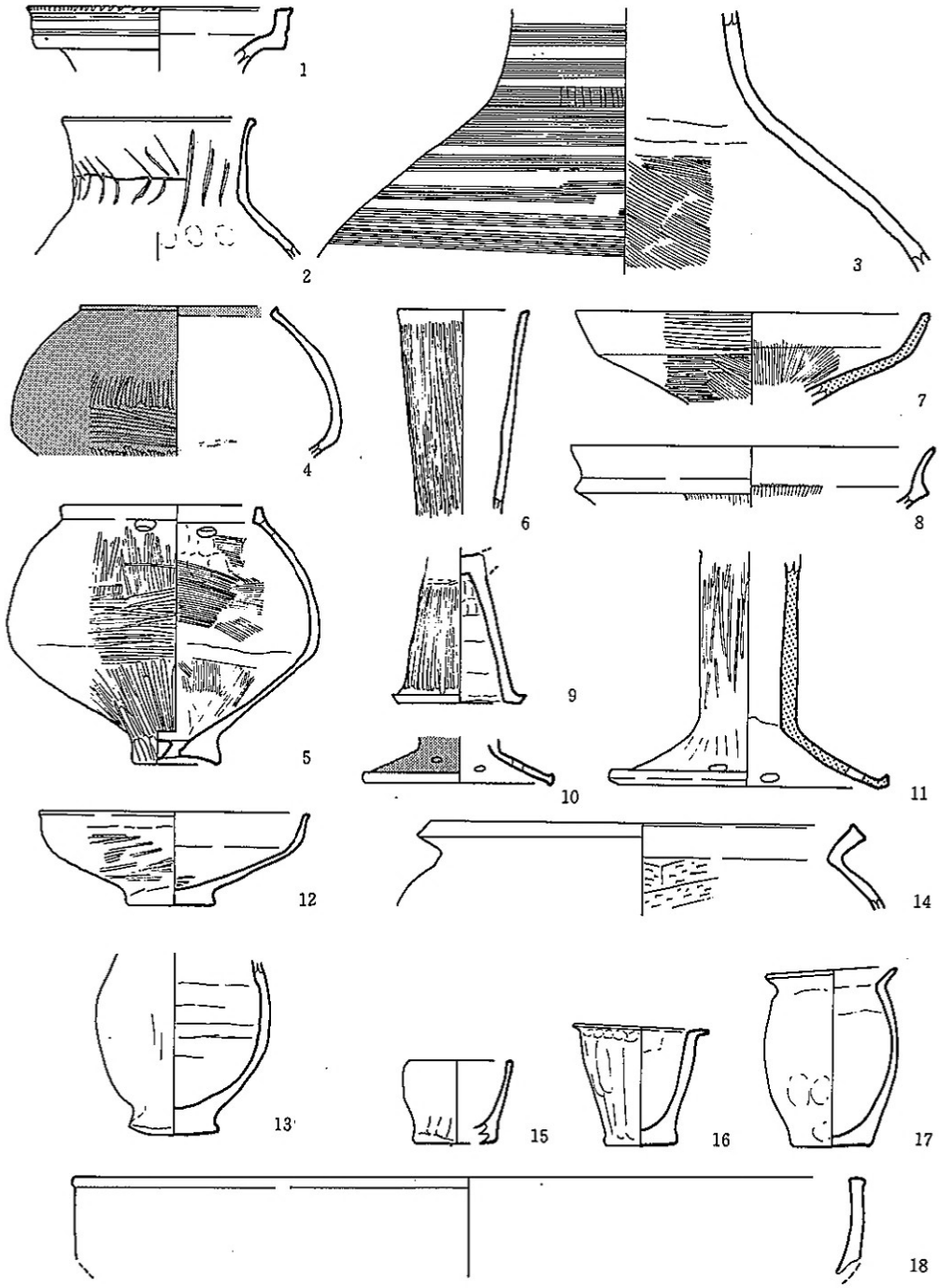
壺形土器（1・3・13）　（1）は口径14.5cmをはかり、外反する口縁部で、端部は上方に拡張する。端部外面に刻目、凹線紋2条を施す。口縁部内外面はヨコナデ調整である。（3）は現高14.4cmをはかり、頸部から体部にかけて櫛描直線紋、簾状紋を施す。外面はハケ状ナデ、内面はハケ調整である。色調は淡黄灰色。（13）は現高10.3cm、体径9.9cm、底径4.9cmをはかる。内外面ナデ調整である。色調は淡茶褐色。

短頸壺形土器（2）　口径10.7cmをはかり、外反して立ち上がる口頸部を有し、端部は丸くおさめる。口頸部にはヘラ状工具によって「|||」「⋙」の記号を描く（第236図1）。器内外面はナデ調整である。色調は灰白色（図版81－26）。

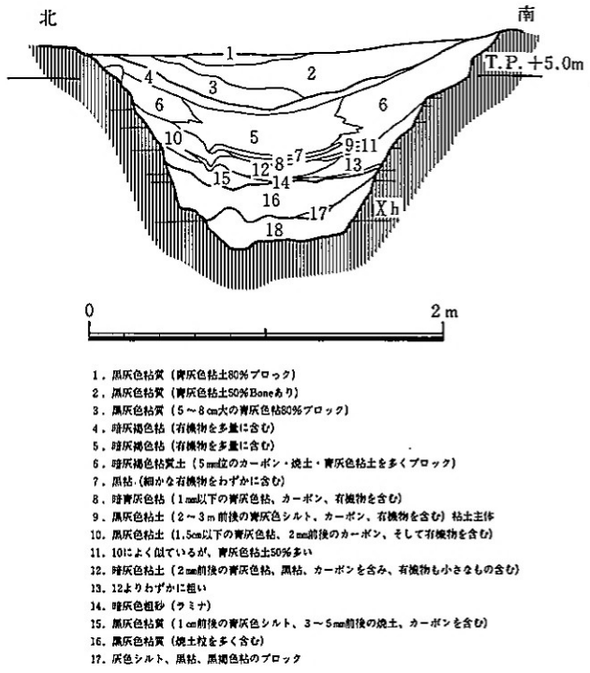
無頸壺形土器（4・5）　（4）は口径11.1cm、体径18.6cmをはかり、外面全体と口縁部内面に赤色顔料を塗布する。体部外面はヘラミガキ、内面上位はナデ、下位はハケ調整である。色調は灰色。（5）は口径11.1cm、器高14.6cm、体径17.7cm、底径5.1cmをはかる。口縁部直下に2孔1対の紐孔を2組穿っている。底部は著しく突出するあげ底で、焼成後に内外面から穿孔している。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整で、上位に指頭圧痕が残っている。色調は灰黄色で、体部外面に黒色物質を塗布する（図版81－27）。

細頸壺形土器（6）　口径7.3cmをはかり、細長い口頸部を有している。端部はわずかに内傾する。口頸部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整で、粘土紐の継ぎ目は顕著である。色調は淡茶褐色を呈している。

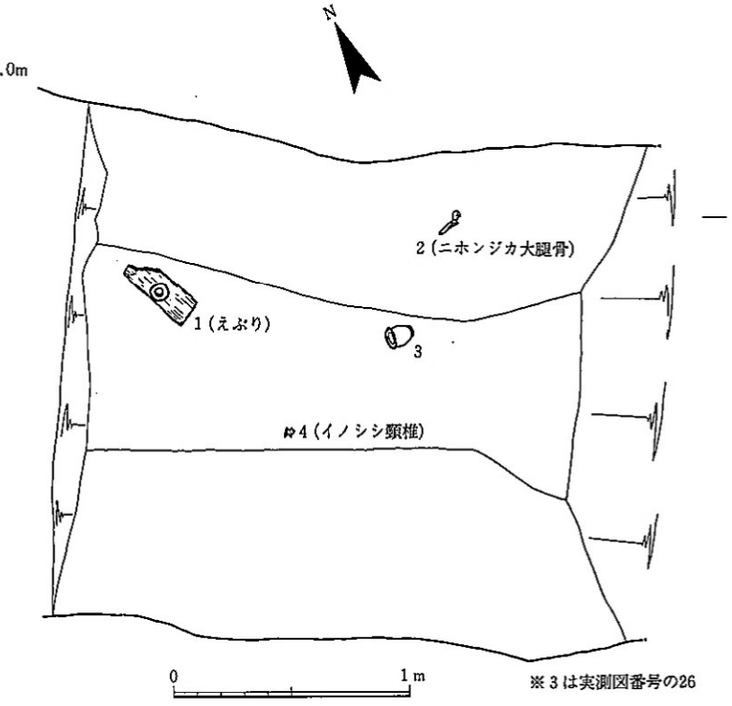
高杯形土器（7～11）　（7・8）は杯部片で、（7）は口径19.9cmをはかり、体部から口縁部への屈曲は緩やかである。端部は面をもち、少し外につまみ出す。口縁部外面と体部内外面はヘラミガキ、口縁部内面はナデ調整である。色調は淡茶褐色を呈し、生駒西麓産。（8）は口径20.6cmをはかり、体部から口縁部へかけての移行は、稜をもって屈曲、外反する。口縁部内外面はヨコナデ、体部は内外共にヘラミガキ調整である。色調は淡茶褐色。（9～11）は脚部片である。（9）は裾径6.7cmをはかり、色調は淡灰黒色を呈する。器外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。（10・11）はエンタシス状の柱状部を有するもので、（10）は裾径10.4cmをはかり裾端部をのぞく外面に赤色顔料を塗布している。透孔は3個＋α。裾部外面はハケ状ナデ、



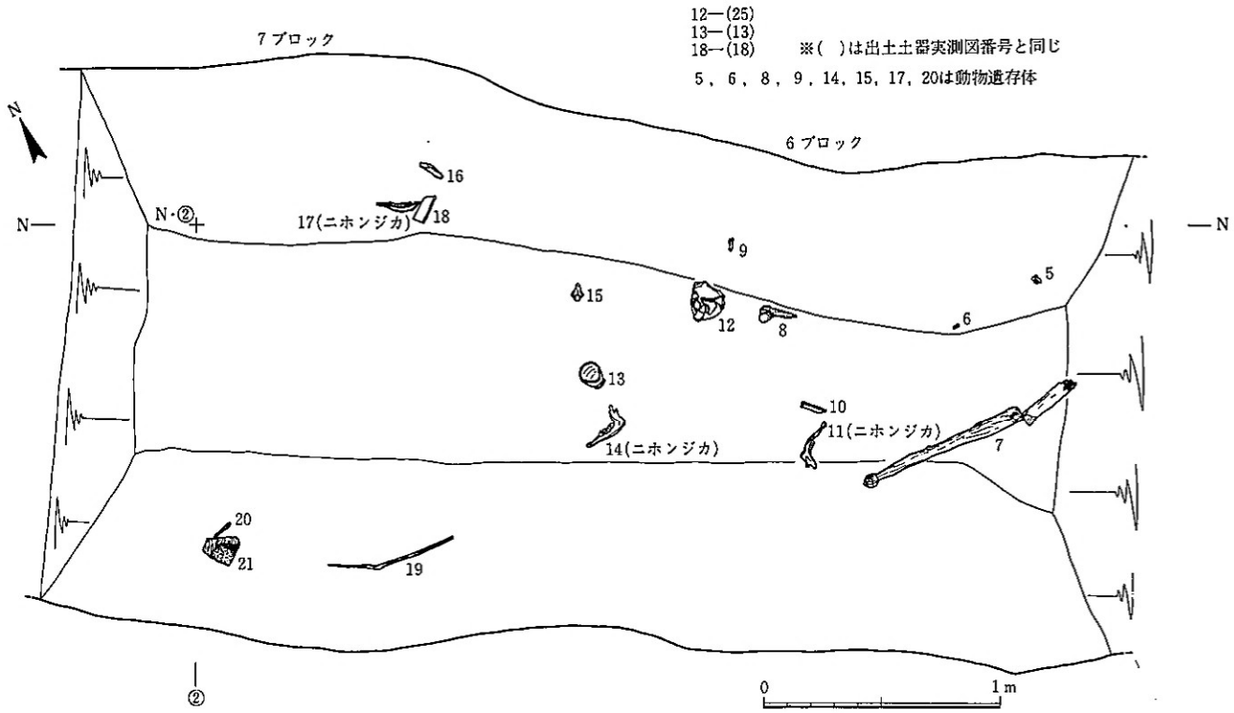
第51図　ＳＤ－03出土土器実測図（1/4）



第48図　ＳＤ－03あぜ８土層断面図（1/40）



第49図　ＳＤ－03　６ブロック（Ｉ）層遺物出土状況（1/30）



第50図　ＳＤ－03　６，７ブロック（II）層遺物出土状況（1/30）

内面はナデ調整である。色調はにぶい赤橙色。（11）は裾径14.7cmをはかり、色調は褐灰色を呈する。柱状部外面は粗いヘラミガキ、内面はナデ、裾部外面はハケ状ナデ、内面はナデ調整である。生駒西麓産。

浅鉢形土器（12）　口径15.1cm、器高5.2cm、底径4.9cmをはかる。口縁部内外面はナデ、体部外面はナデ後にヘラミガキ、内面上位はナデ、下位はヘラミガキ調整である。色調は淡黄色を呈する（図版82－29）。

小型鉢形土器（15）　口径5.9cm、器高4.7cm、底径4.5cmをはかるミニチュア鉢である。内外面は共にナデ調整である。色調は淡黄褐色。

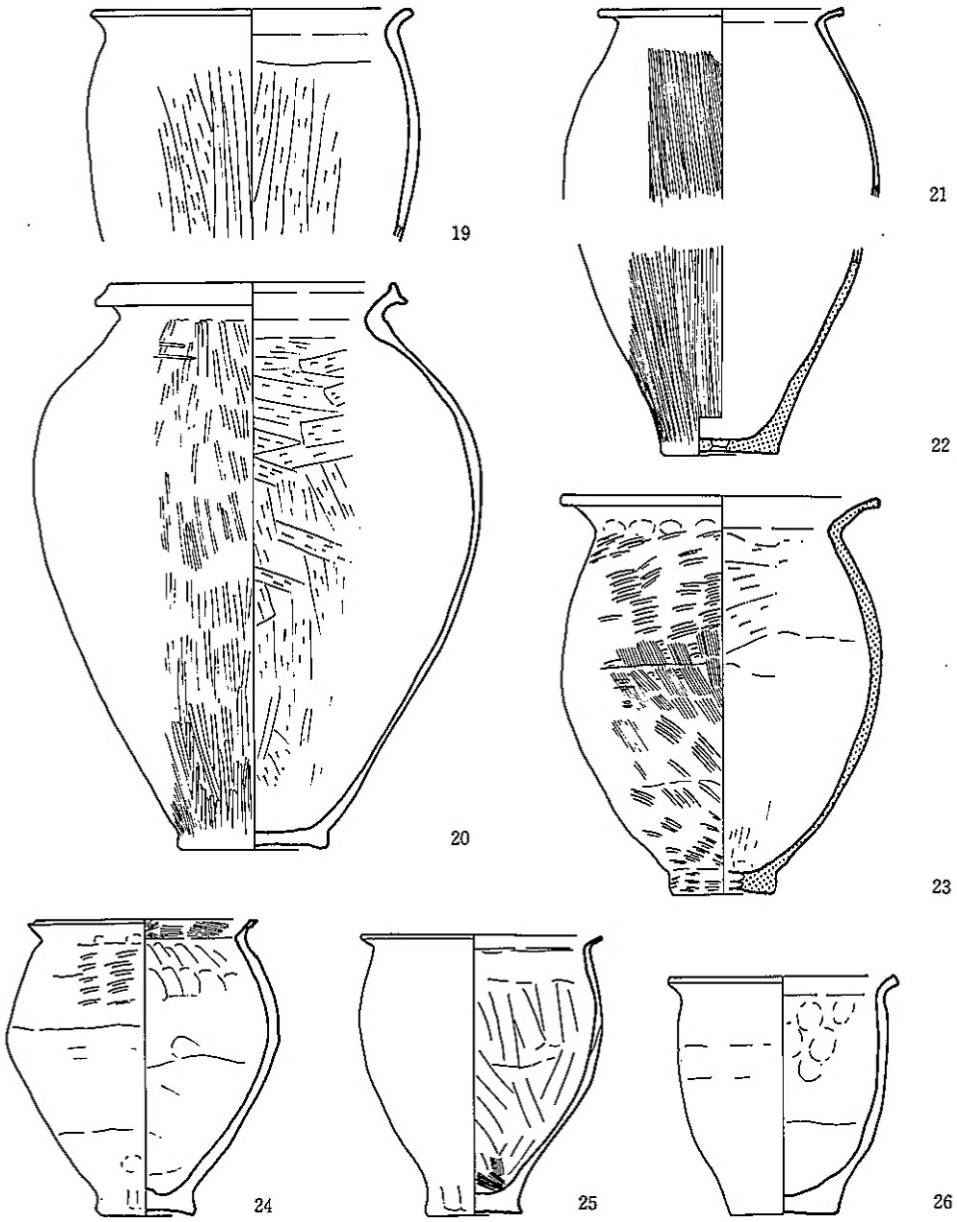
大型鉢形土器（18）　口径44.7cmをはかり、口縁端部は粘土紐の附加によって、外側に少し肥厚している。口縁部外面はハケ、内面はナデ後に粗いヘラミガキ調整を施している。色調は淡黄褐色。

小型甕形土器（16・17）　（16）は口径7.7cm、器高6.7cm、底径3.9cmをはかる。体部内外面は指ナデ調整である。色調は淡灰黄色。（17）は口径7.2cm、器高10.1cm、体径7.6cm、底径4.5cmをはかる。体部内外面はナデ調整である。色調は灰褐色。

甕形土器（14・19～26）　（14）口径23.9cmをはかり、体部外面はナデ、内面はヘラケズリ調整である。色調は淡茶褐色。（19）は口径16.7cm、体径17.6cmをはかる。体部外面はヘラケズリ後にヘラミガキ、内面はナデ後にヘラケズリ調整である。色調は淡茶褐色。

（20）は口径14.8cm、器高29.9cm、体径23.6cm、底径7.6cmをはかる。色調は灰褐色を呈す。「ハ」の字形の肩部に、屈曲して短く外反する口縁部を有し、端部は上下につまみあげ外傾する。口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ、底外面はヘラケズリ調整である。細部の形態、調整はやや異なるものの、全体的なプロポーションから、瀬戸内地方で出土する甕形土器によく似ており、当地の編年に照らし合わせると、弥生時代中期末に比定される資料(註5)である（図版82－33）。

（21～23）は胎土中に角閃石を多量に含み、生駒西麓産である。（21）は口径12.9cm、体径15.8cmをはかる。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は暗褐色。（22）は底径6.2cmをはかる。有孔の底部片である。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は暗褐色を呈する。（23）は口径16.7cm、器高21.1cm、体径16.9cm、底径5.5cmをはかる。口縁部はくの字状に外反し、端部は下方に折り曲げ肥厚する。体部外面はタタキ、内面はヘラケズリ、底外面はヘラケズリ調整である。色調は黒褐色。（24）は口径11.4cm、器高15.6cm、体径14.4cm、底径5.2cmをはかる。体部外面上位はタタキ後にナデ、下位はハケ状ナデ、内面は指頭圧痕とハケ状ナデ調整である。色調は灰白色。（25）は口径12.8cm、器高14.7cm、体径12.8cm、底径5.1cmをはかる。体部外面はナデ、内面上半はハケ状ナデ、下半はハケ調整である。色調は灰白色を呈する。（26）は口径11.8cm、器高12.5cm、底径5.8cmをはかり、口径は体径を上回る。体部外面はナデ、内面は指頭圧痕と指ナデである。



第52図 ・ＳＤ－03出土土器実測図（1/4）

ＳＤ－16

当初、中期の溝と認識して、調査を進めたのであるが、得られた土器には、第Ｖ様式の土器が含まれていた。土器の出土状況は、南側に中期の土器、北側に後期の土器が目立っていた。このことから重複していた後期と中期の遺構を同時に調査した可能性がある。

北側での形状は、南北走する幅約1.3m、深さ約0.7mをはかる。断面形態は逆台形を呈し、底はわずかに有機物を含み、カーボンを多量に含んでいる第Ｘｆ層中（Ｔ．Ｐ．＋4.61m）にある。

ＳＤ－18（第39・46図）

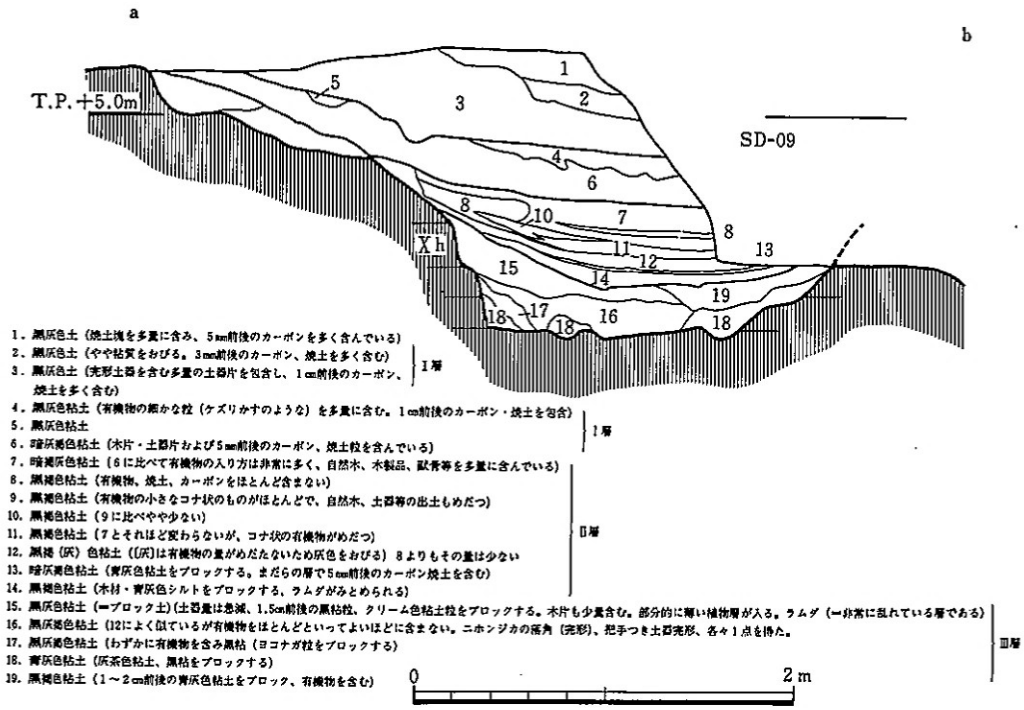
Ｎ・①地区，第Ⅹ層上面（Ｔ．Ｐ．＋5.3m）にて検出した北－南走する弥生時代中期の溝である。ＳＫ－13・14の東側一部を切り、北はＳＫ－07、南は弥生時代中期末の溝ＳＤ－03に削平されている。幅0.82m、深さ0.49mをはかる。

埋土は断面観察用セクションの検討から、６層に分層できる（第46図）。層中より得られた土器は、いずれも細片のため図示できない。

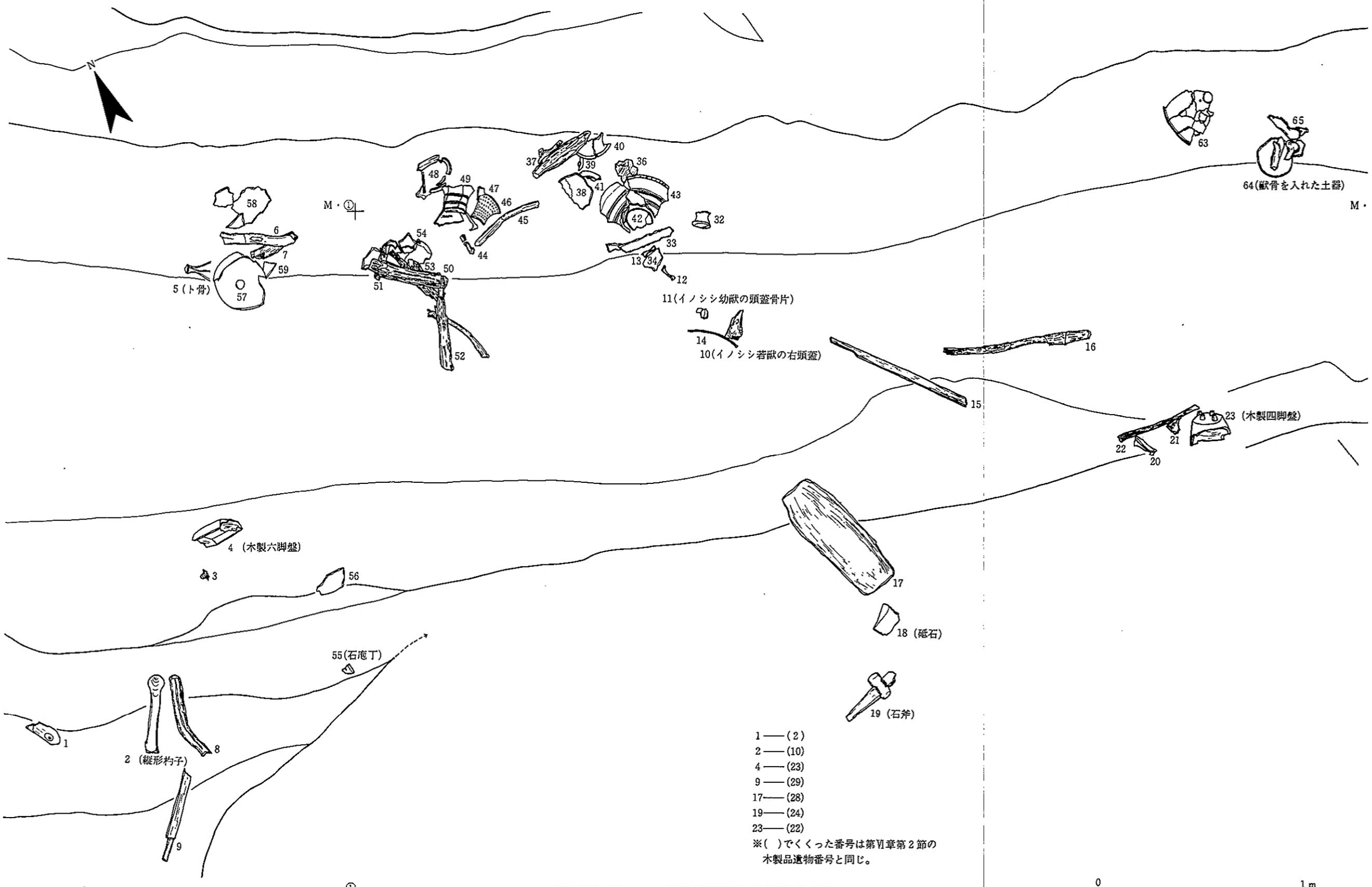
ＳＤ－19（第53・54図、図版29～35）

トレンチ南側において第Ⅸ層除去後、東－西に円弧をえがきつつ走行する溝の輪郭を確認した。上端幅3.6m、下端幅1.3m、深さは約1.5mをはかる弥生時代中期の大溝である。北側の一部を溝ＳＤ－16に切り込まれ、南、東側では弥生時代後期後半に開削された溝ＳＤ－09によって大きく切られ、その大半を失なう。南に接して流れる溝ＳＤ－20と重複している。

埋土は、大きく３つの層に分けられる。（Ⅰ）層は、溝が土の堆積によって埋没していく過程で一気に埋め立てられることなく、除々に埋没して形成されたものと考えられる。おそらく、二次的機能（壊れた土器等の遺物、炭、焼土のごみ捨て場）として利用されたのであろう。１つの遺構が埋没する過程での再利用を示すものといえる。（Ⅱ）層は溝の機能している間に形成された土層と思われる。（Ⅲ）層は溝掘削当初およびその直後に堆積した土層で、この層から把手付台付鉢・ニホンジカ左落角完存品(註6)・イノシシ幼獣の部骨を得ている（図版34）。

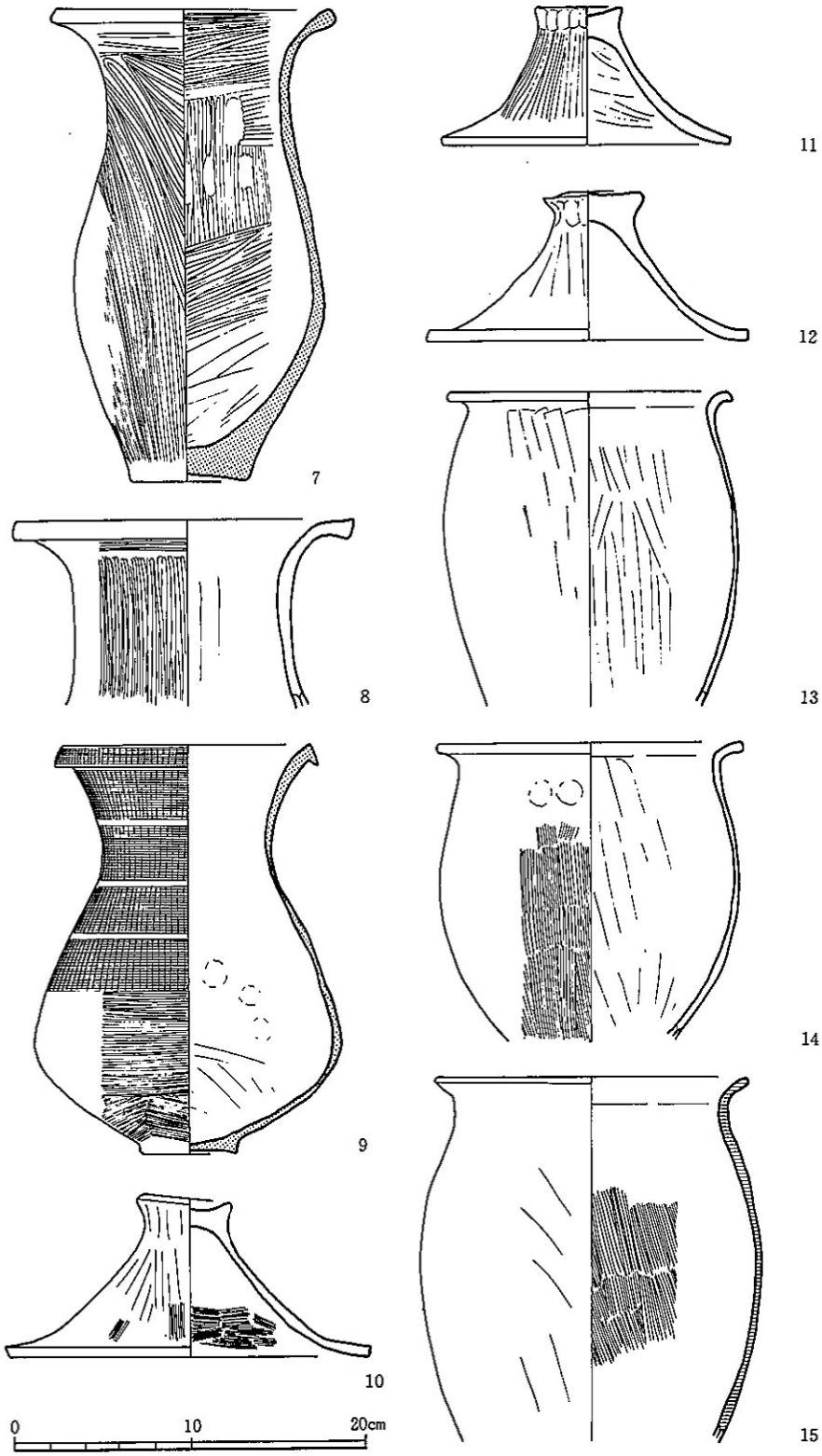


第53図　ＳＤ－19土層断面図（1/40）

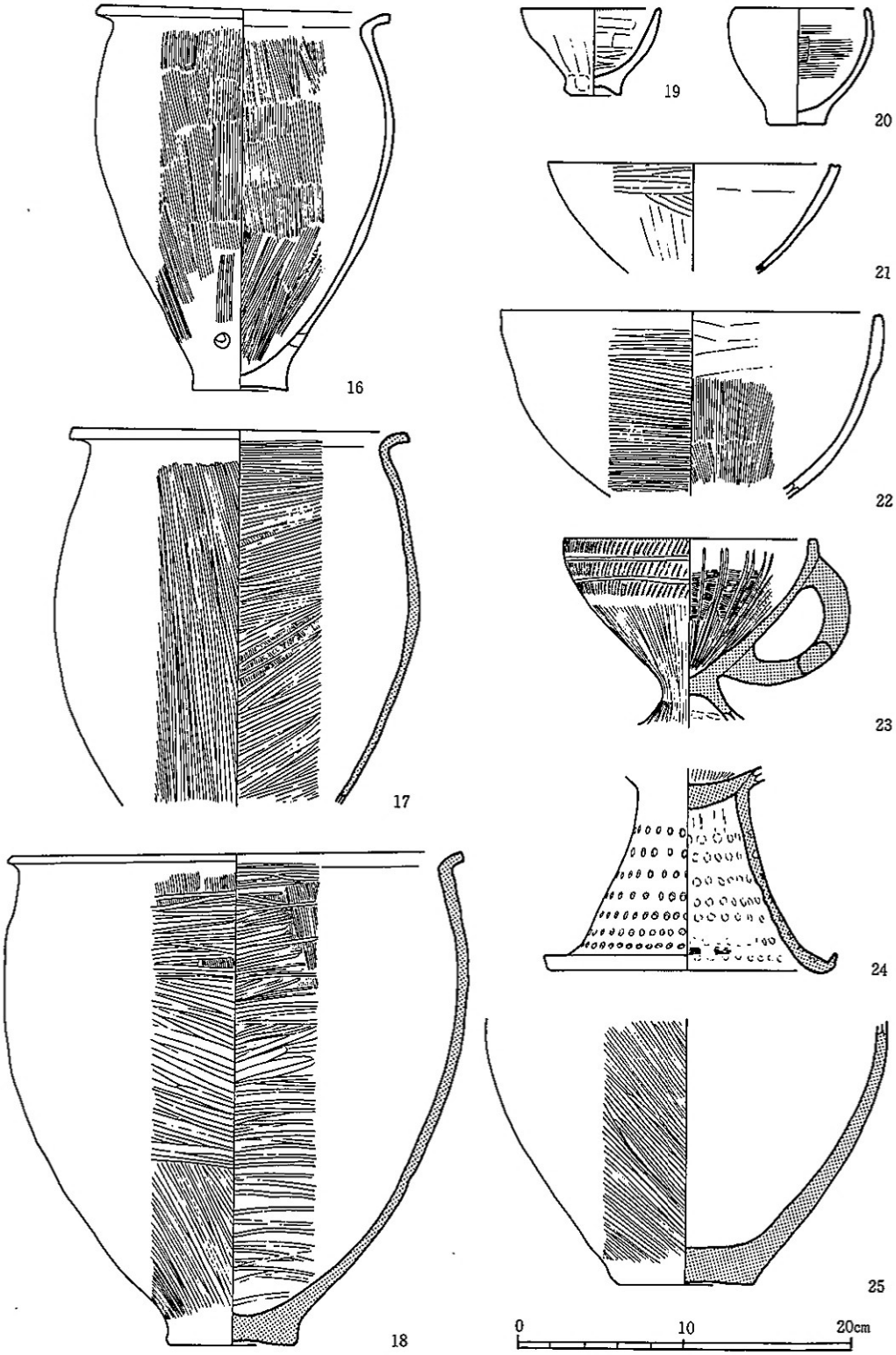


1 ―― (2)
2 ―― (10)
4 ―― (23)
9 ―― (29)
17 ―― (28)
19 ―― (24)
23 ―― (22)
※（　）でくくった番号は第Ⅵ章第２節の木製品遺物番号と同じ。

第54図　ＳＤ－19（II）層遺物出土状況（1/20）



第56図　ＳＤ－19出土土器実測図（1/4）



第57図　ＳＤ－19出土土器実測図（1/4）

外面はヘラミガキ、内面はナデ調整。

蓋形土器（10～12）　色調は淡茶褐色を呈している。（10）は口径20.4cm、器高9.1cmをはかる。外面はハケ後にナデ、内面上位はナデ、下位はハケ調整を施す。（11）は口径16.2cm、器高7.9cmをはかる。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整。（12）は口径18.3cm、器高8.4cmをはかる。内外面はナデ調整である。

甕形土器（13～18）　（15）は胎土中に結晶片岩を含む紀伊産の甕形土器である。口径17.7cm、体径19.4cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈している。体部外面はヘラケズリ後にハケ状ナデ、内面はハケ調整である。（13）は口径15.9cm、体径16.9cmをはかる。色調は淡茶褐色を呈している。外面はヘラケズリ後にナデ、内面はハケ状ナデ調整である。（14）は口径17.2cm、体径17.1cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈する。体部外面はハケ、内面は指ナデとハケ状ナデ調整である。（16）は口径17.3cm、器高22.9cm、体径17.9cm、底径5.8cmをはかる。色調は淡茶褐色を呈し、底側面に焼成後穿孔している。体部内外面はハケ調整である（第54図63）。（17）は口径20.2cm、体径21.9cmをはかる。色調は暗褐色。外面はヘラミガキ、内面はハケ後、ヘラミガキ調整を施す。（18）は口径26.8cm、器高29.4cm、体径27.9cm、底径7.6cmをはかる。色調は暗褐色。体部内外面は共にハケ後、ヘラミガキ調整を施す（図版83－38）。

小型鉢形土器（19・20）　いずれも椀状を呈する。（19）は口径8.3cm、器高5.2cm、底径3.3cmをはかる。色調は淡茶褐色で、端部内縁に刻目を施す。内外面共にナデ調整である。（20）は口径8.1cm、器高7.1cm、底径3.4cmをはかり、口縁部は内弯している。色調は淡茶褐色を呈する。体部外面はナデ、内面上位はハケ、下位はハケ状ナデ調整である。

鉢形土器（21・22）　内弯して上方に伸びる体部に直口する口縁部をもつ。（21）は口径17.6cmをはかり、色調は黒色を呈する。口縁部外面はヘラミガキ、体部内外面はナデ調整である。（22）は口径22.8cmをはかる。色調は淡茶褐色を呈し、内面下位に赤色顔料を塗布している。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。

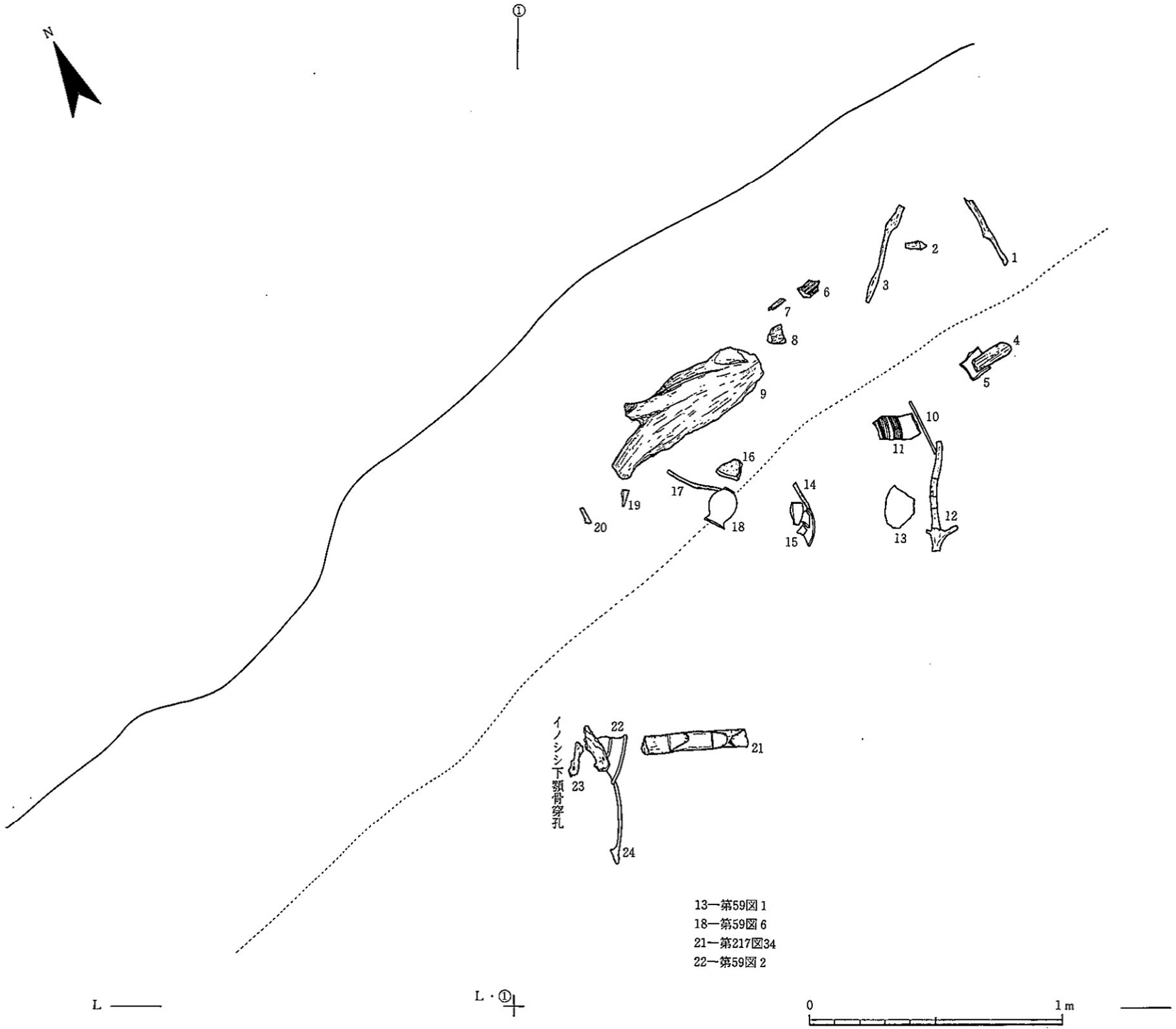
把手付台付鉢形土器（23）　口径15.0cmをはかり、片方に半環状の把手が付く。端部の内外縁には刻目、口縁部には列点紋３帯を飾り、紋様間は研磨している。色調は茶褐色を呈する。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ後にヘラミガキを紋様風に施す。

台付鉢形土器（24）　裾径16.0cmをはかり、脚部外面に竹管紋を施す。内外面には煤が附着している。色調は暗褐色で、内外面共にナデ調整。

ＳＤ－20（第58図、図版35・36）

Ｎ・①地区にて検出した。ＫＭのＳＤ－3004と同一の溝である。遺構の大半は弥生時代後期後半に開削された溝Sm、－09によって大きく抉りとられ、わずかにトレンチの北西コーナーにて残存していた。したがって埋土の堆積状況、溝の幅・深さはＫＭ－Ｈ７調査区のＳＤ－20を参照。

〔遺物出土状況〕　調査によって検出した遺物は、弥生時代中期中頃の土器、石器・木製品・動植物遺存体等がある。いずれもＳＤ－09の削平をまぬがれた（Ⅲ）層中より出土した。土器はま

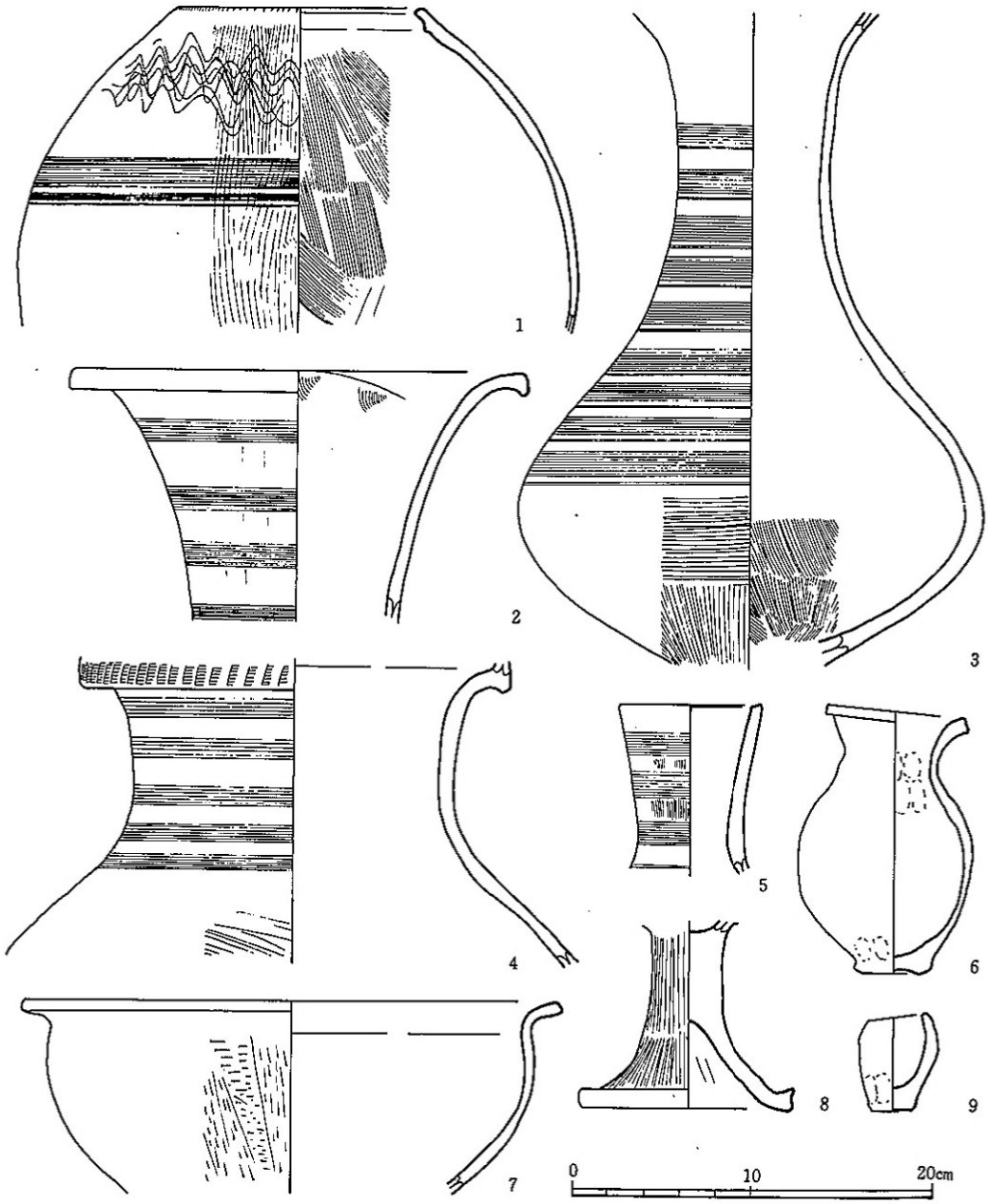


第58図　ＳＤ－20（Ⅲ）層遺物出土状況（1/20）

とまった状態で出土することはなく散在した状態で、大半は破片である。

木製品では自然木に混じって梯子、容器、横型杓子を各１点得ている（第271図33～35）。梯子は両端が欠損しており現存長41.2cm、幅7.1cmをはかる。梯子としては小さな部類に入ろう。

動物遺存体には、イノシシ・ニホンジカ・ハマグリ等がある。また特殊な遺物として、イノシシ左右下顎骨の下顎枝に粗孔を穿っている資料（図版173）を得ている（図版36a）。おそらくこの孔に紐もしくは棒を通して何かに吊していたものと思われる。(註8)



第59図　ＳＤ－20出土土器実測図（1/4）

〔土器〕（第59・60図、図版85－45）

第Ⅲ様式古段階の壺・小型壺・無頸壺・小型無頸壺・細頸壺・鉢・高杯・甕形土器等の器種資料を得ている。（1・8）の内外面には、黒色物質が塗布されていた。

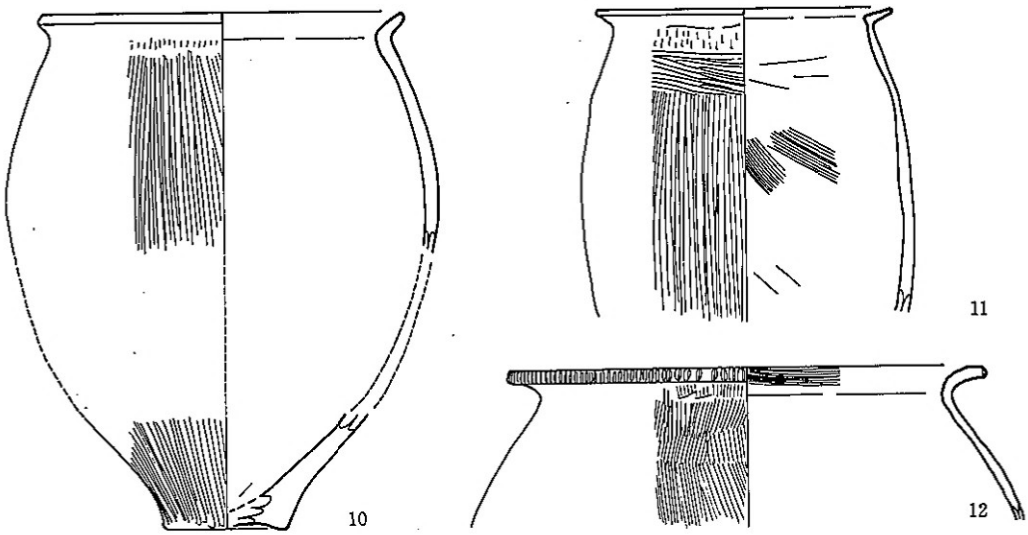
壺形土器（2～4）　（2・3）は長い筒状の頸部から外反してラッパ状に開く口縁部を有する。（2）は口径25.1cmをはかり、端部は下方に肥厚する。口縁部内面には扇形紋、口頸部には直線紋4帯以上を施す。頸部外面はハケ状ナデ、内面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。（3）は現高36.4cm、体径25.7cmをはかる。頸部から体部上半にかけて櫛描直線紋を施す。頸部および体部上半外面はナデ、内面は絞り目とナデ、体部下半外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は淡茶褐色。（4）は筒状の頸部に外反する口縁部を有し、端部は上下に拡張する。端部に櫛描簾状紋1帯＋α、口頸部に櫛描直線紋5帯を施す。頸部内外面はナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。

小型壺形土器（6）　口径7.7cm、器高14.7cm、体径9.6cm、底径3.7cmをはかる。頸部および体部外面はナデ、口頸部内面は粗いヘラミガキと指頭圧痕、体部内外面はハケ調整である。色調は黄灰色。

無頸壺形土器（1）　口径13.7cm、体径30.9cmをはかる。口縁端部外縁には刻目、体部上位には粗い波状紋、直線紋を施す。体部外面中位に赤色顔料が附着している。体部内外面はハケ調整である。色調は淡茶褐色。

小型無頸壺形土器（9）　口径3.1cm、器高5.2cm、底径2.4cmをはかるミニチュア品である。器内外面はナデ調整である。色調は黒灰色。

細頸壺形土器（5）口径7.8cmをはかり、端部は面を成す。口頸部には櫛描直線紋4帯を施す。頸部外面はハケ後ナデ、内外面はナデ調整である。色調は淡黄褐色。



第60図　ＳＤ－20出土土器実測図（1/4）

鉢形土器（7）　口径29.6cmをはかり、内弯ぎみに立ち上がる体部に、口縁部は短く外反する。体部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。

高杯形土器（8）　裾径11.7cmをはかる脚台部である。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。

甕形土器（10～13）　(10) は口径18.9cm、体径22.7cm、底径6.3cmをはかる。体部外面はヘラケズリ後にヘラミガキ、内面上半はハケ、下半はナデ調整である。色調は淡黄褐色。(11) は口径15.5cm、体径17.6cmをはかる。体部外面はヘラケズリ後にヘラミガキ、内面はハケとハケ状ナデ調整である。色調は淡茶褐色。(12) は口径25.1cmをはかる、所謂大和型甕形土器である。口縁端部に刻目を施す。口縁部内面はヨコハケ、口縁部、体部外面はタテハケ、体部内面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。

第２項　弥生時代後期

溝

ＳＤ－09

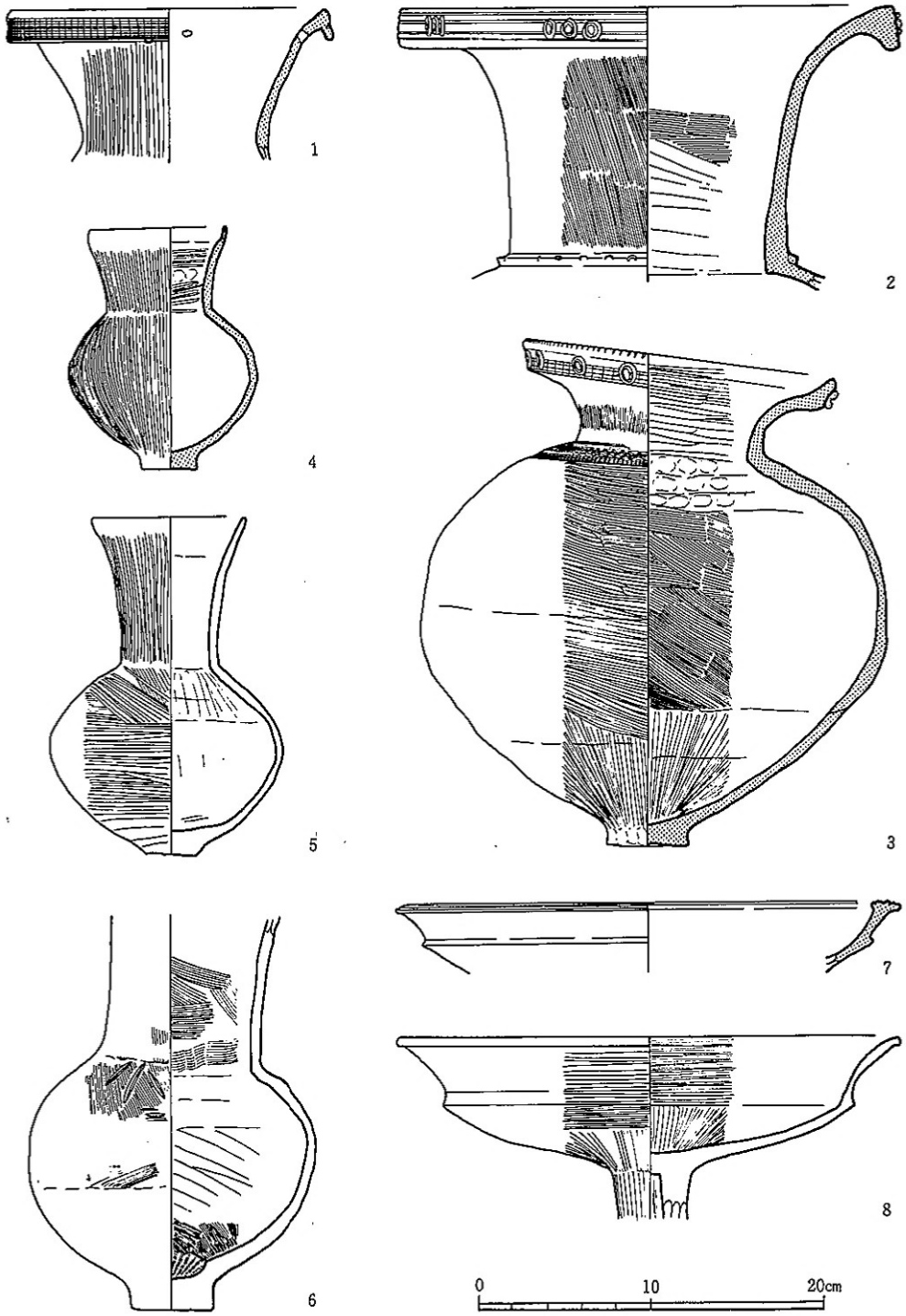
トレンチ内の南側において検出した。北東－南西走する幅６ｍ以上、深さ平均2.0ｍ前後をはかる弥生時代後期後半の大溝である。検出面は第Ⅵ層除去後の弥生時代遺物包含層上面（Ｔ．Ｐ．＋6.5ｍ）で、北肩は江戸時代平野川による削平をうけていた。断面形態は緩やかで、肩部直下は大きく抉りとられていることから水流の激しい様子を窺うことができよう。なお、本溝はＫＭの調査で検出されたＳＤ－3041と同一の溝である。

埋土は、溝中の土層堆積状況から大きく３層に分けられる。（Ⅰ）青灰色シルト、（Ⅱ）灰白色粗砂、（Ⅲ）白灰色砂礫である。（Ⅰ）層は基本層序の第Ⅶ層に相当し、層厚約1.0ｍをはかる。遺物は（Ⅲ）層に集中してみられた。弥生時代中期から後期後半にかけての多量の土器、石器・動物遺存体・自然木等を得ている。中期の土器を含んでいるのは、その時期の遺構・遺物包含層を切り込んで開削されているためであろう。土器の大半は後期後半の時期で、ついで後期前半～中頃、そして中期の土器につづく。

〔土器〕（第61・62図、図版85・86）

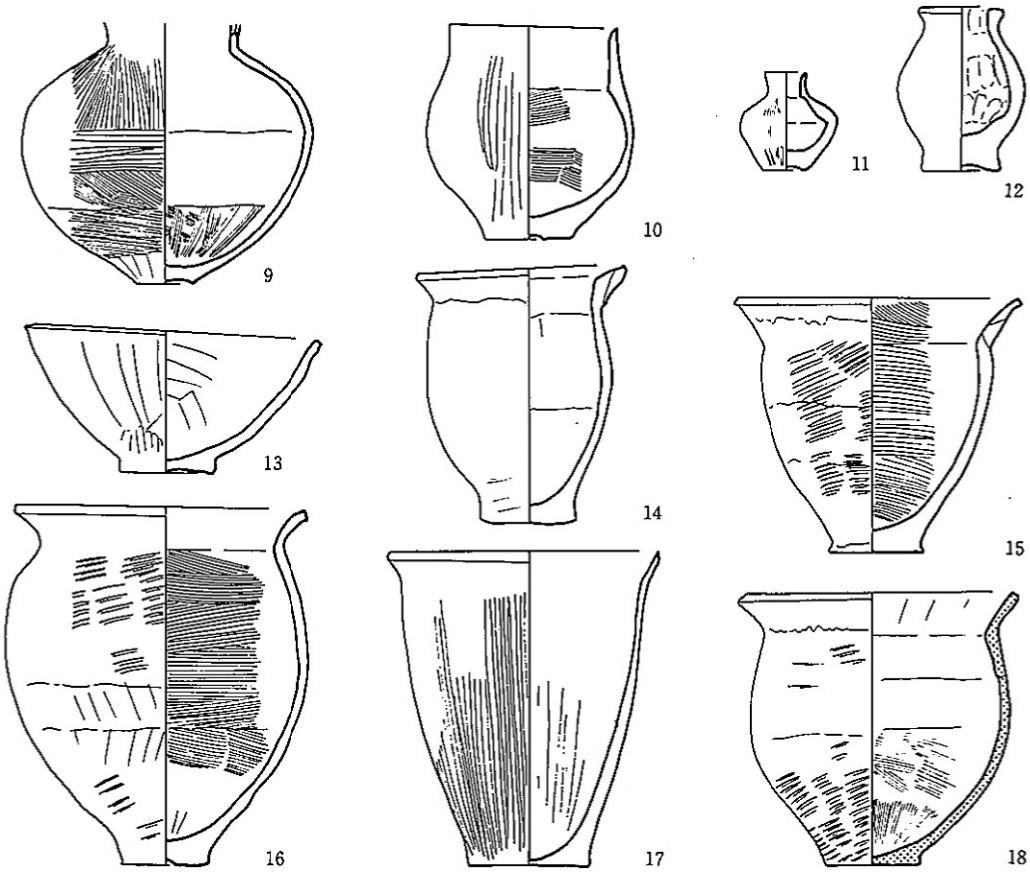
コンテナにして約50杯分の完形土器を多量に含む弥生時代中期から後期までの壺・鉢・高杯・甕形土器等の器種資料を得ている。いずれも表面は磨耗しているものの保存状況は良好といえる。中には、丹塗を施した土器もある。また、生駒西麓産の胎土をもつものや岡山地方の土器編年でいう後期前半に相当する「上東・鬼川市Ⅰ式」(註9)の特徴をもつ高杯口縁部片（7）も得ている。（1～4・7）は生駒西麓産の胎土をもつ。

壺形土器（1～3）　（1）は口径17.9cmをはかり、色調は暗褐色を呈す。肩部から緩やかに外反して上方に伸びる口頸部をもつ。端部は下方に垂下して、櫛描簾状紋１帯と刺突紋を施す。口縁部に２孔１対の紐孔を焼成後に２組穿つ。口頸部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。（2）は口径28.3cmをはかり、色調は暗褐色を呈す。肩部から屈曲して直立する頸部に、大き



第61図　ＳＤ－09出土土器実測図（1/4）

く外反して開く口縁部をもつ。端部は下方に肥厚して、擬凹線紋４条と、その上に３個１組の竹管円形浮紋を施す。竹管円形浮紋には赤色顔料を塗布する。くびれ部には断面三角形の突帯を貼



第62図　ＳＤ－09出土土器実測図（1/4）

り付け、その上に竹管紋をスタンプし、赤色顔料を塗布する。口頸部外面はハケ、内面はハケ後にナデ調整である。（３）は口径17.9cm、器高28.4cm、体径26.9cm、底径4.7cmをはかる。色調は暗褐色を呈す。肩部から外反して立ち上がる口頸部を有し、端部は屈曲して斜め上方に肥厚する。端部外面に刻目、粗雑な簾状紋、竹管円形浮紋を施す。肩部に直線紋、波状紋、簾状紋を各１帯施す。頸部外面はハケ、内面はヘラミガキ、体部外面はヘラミガキ、内面上位は指頭圧痕、中位はハケ、下位はヘラミガキ調整である。外面に黒色物質を塗布する。

小型壺形土器（４・９）　（４）は口径7.7cm、体径10.9cm、器高13.8cm、底径3.2cmをはかり、色調は暗褐色を呈する。器外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。（９）は現高 13.6 cm、体径15.4cm、底径3.1cmをはかり、色調は淡黄褐色を呈す。体部外面上半はヘラミガキ、下半はハケ、内面上半はナデ、下半はハケ調整である。

細頸壺形土器（５）　口径8.8cm、器高19.6cm、体径13.6cm、底径3.1cmをはかる。球形の体部に細長い頸部とラッパ状に開く口縁部を有する。色調は淡黄灰色を呈す。器外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。

長頸壺形土器（６）　口縁部を欠くものの、現高22.8cm、体径16.7cm、底径4.7cmをはかる。

肩部にヘラ描きによる「八」の記号文を付している。色調は淡茶褐色を呈す。頸部外面はハケか、内面はハケ、体部外面上半はハケ、下半はナデ、内面はナデ、下半はハケ調整である。

無頸壺形土器（10）　口径8.8cm、器高11.2cm、体径10.9cm、底径4.5cmをはかる。色調は灰褐色を呈す。体部から緩やかに外反して、直立する口縁部を有す。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。

ミニチュア壺形土器（11・12）　（11）は口径2.1cm、器高5.2cm、体径5.2cm、底径2.3cmをはかり、色調は灰茶褐色を呈す。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。（12）は口径4.2cm、器高8.7cm、体径6.6cm、底径4.1cmをはかり、色調は淡灰色を呈す。

高杯形土器（７・８）　（７）は口径28.1cmをはかり、色調は暗褐色を呈す。杯部は外反ぎみに開く体部から段をもって屈曲し、斜め上方に短く外傾する口縁部をもつ。口縁端部は内外に肥厚し、凹線紋４条を施す。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はヘラミガキ調整である。プロポーションから、畿内弥生時代の高杯形土器の系譜上にのらないもので形態・調整・手法の点から、明らかに山陽地方を中心として製作、使用された高杯形土器の模倣品といえる。(註10)（８）は口径28.9cmをはかり、杯部は内弯ぎみに低く開く体部から稜をもって屈曲し、外反して面をもつ口縁部を有する。色調は茶褐色。杯部内外面はヘラミガキ、柱状部外面はヘラミガキ調整、内面は絞り目が残る。

鉢形土器（13）　口径14.7cm、器高7.6cm、底径4.6cmをはかり、色調は橙褐色を呈す。椀状の体部に、多少外反する口縁部をもつ。体部外面上半はハケ、下半は粗いヘラミガキ、内面はハケと指ナデ調整である。

甕形土器（16）　口径15.3cm、器高19.0cm、体径16.0cm、底径4.5cmをはかる。色調は淡茶褐色。体部外面上位、下位はタタキ、中位はタタキ後にナデ、内面はハケ調整である。

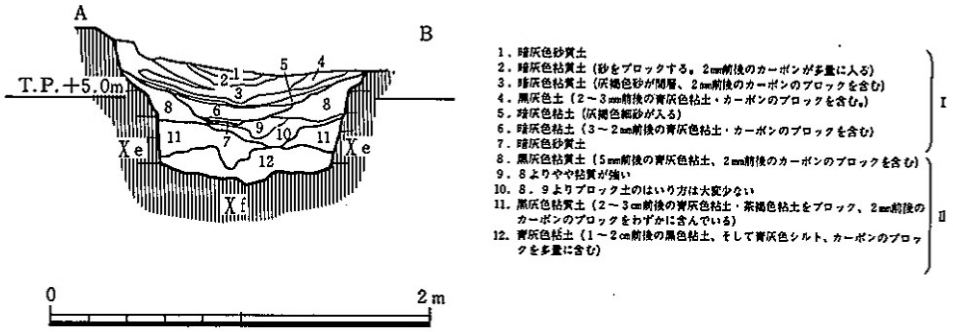
小型甕形土器　（14・15・17・18）　（14）は口径10.7cm、器高13.4cm、体径9.8cm、底径5.2cmをはかる。色調は淡灰黄色。体部内外面はナデ調整である。（15）は口径14.7cm、器高13.5cm、底径5.1cmをはかる。色調は淡赤褐色。口縁部外面はナデ、内面はハケ、体部外面はタタキ、内面はハケ調整である。（17）は口径14.1cm、器高16.4cm、底径6.5cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈す。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。（18）は口径13.9cm、器高14.4cm、体径13.7cm、底径4.9cmをはかる。色調は暗褐色を呈す。体部外面上半はタタキ後ナデ、下半はタタキ、内面上半はナデ、下半はハケ調整である。

ＳＤ－10（第63図、図版18ｃ）

弥生時代遺物包含層（第Ⅸ層）除去後、Ｎ・②～③地区第Ⅹ層上面においてＳＫ－08、ピットを切り込んで検出した。東－西走する弥生時代後期の溝である。上面はピット群によって攪乱をうけるものの幅約1.3m、深さ約0.85mをはかり、溝底は第Ⅹｆ層中にある浅い溝。東側は予定掘削面に達していた為未調査。溝ＳＤ－03・14と合流するところで収束している。

溝中に堆積する埋土は、２層に大別される。砂・シルト・粘土の互層（Ⅰ），青灰色シルト・

粘土、５～10cm大の第Ｘｅ層の暗青色粘土ブロックを含む（II）層である。各層より得た遺物はわずかであり、弥生時代後期の土器細片・イノシシ頸椎骨１・自然木である。土器は細片のため図示していない。

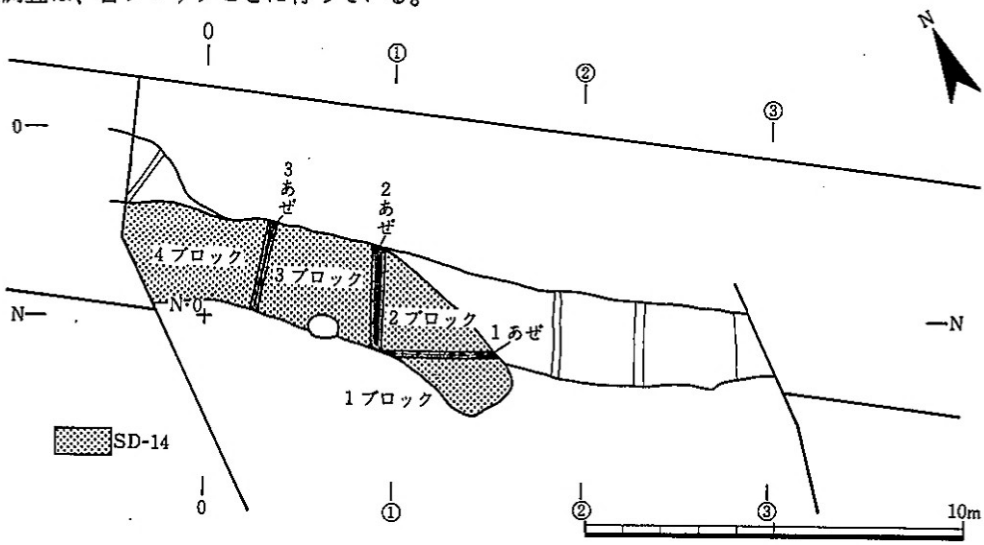


第63図　ＳＤ－10土層断面図（1/40）

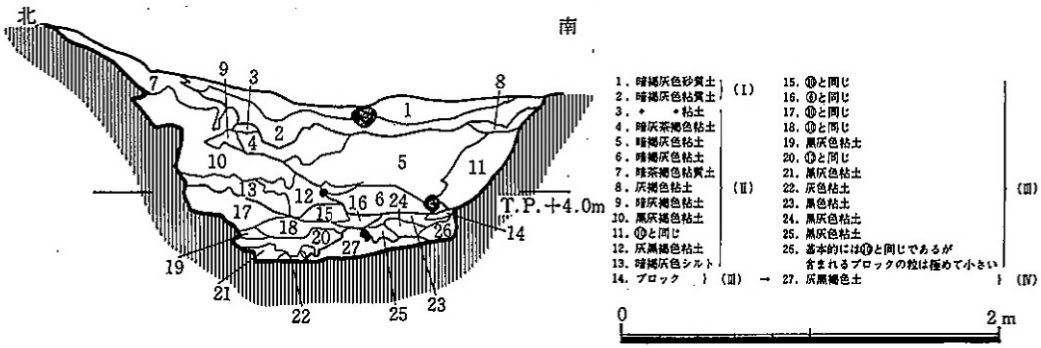
ＳＤ－14（第64～66・68～70図、図版23～28）

西接するＫＭ－Ｈ３調査区の調査で検出している、ＳＤ－12と同一の溝である。上面は江戸時代平野川の河床に相当し、Ｔ．Ｐ．＋4.9m（第Ｘｉ層）まで削平されていた。形状は北、南側にて溝ＳＤ－03・16を切り込んで、トレンチ内を東－西に走行する。上部幅2.5m、下部幅1.1m、深さ約1.5mをはかる。Ｍ・②地区で、急に南に曲がり収束する。収束するところで、意識的か否か不明であるが、完形の木製臼が横位にて出土している（図版24ａ）。

調査は、遺物取り上げの便宜及び遺物出土状況（拡がり）・土層の堆積状況（過程）を知るための手段として、任意に３つの断面観察用のあぜをもうけ、４つのブロックにわけて、これを行った（第64図）。各々のブロックを東から１ブロック、……、４ブロックと呼称している。実際の調査は、各ブロックごとに行っている。



第64図　ＳＤ－14　あぜ配置図（1/200）



第65図　ＳＤ－14・あぜ２土層断面図（1/40）

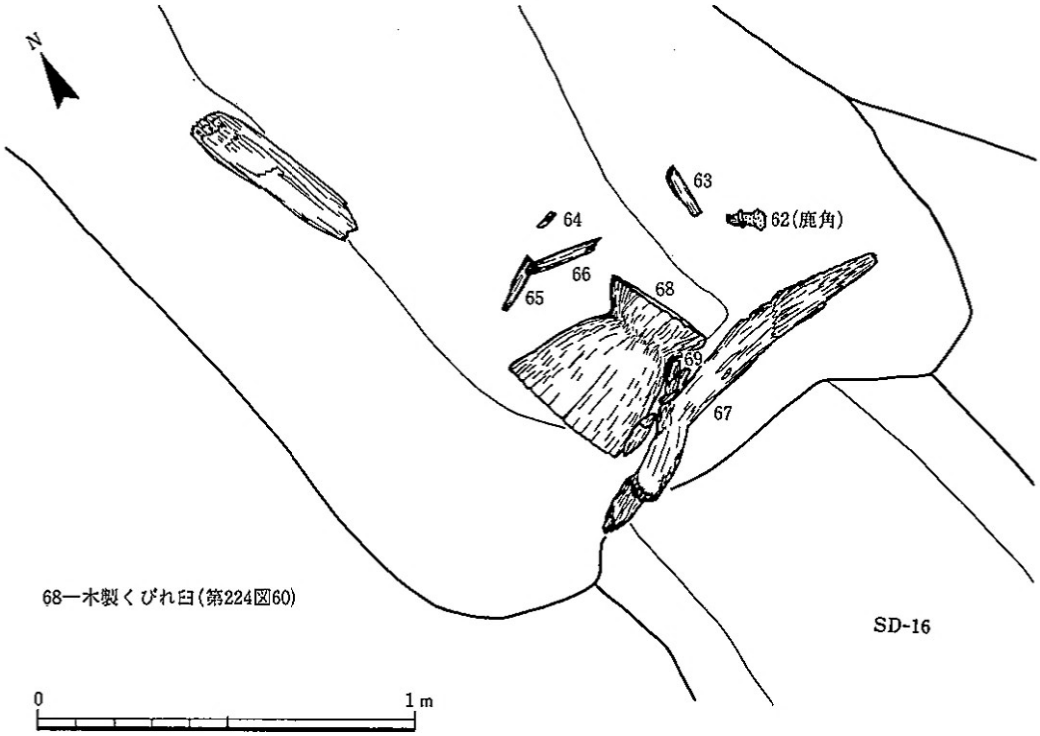
各ブロックとも上部は江戸時代平野川の河床にあたり、大きく削平を受けている。２～４ブロックでは、弥生時代中期末の溝ＳＤ－03と交差、重複していた。両溝の切り合い関係は、明確に把えている。各ブロックからは満遍なく多くの遺物を得ているが、特に１～２ブロックでは木製品・加工木が集中して出土していた（図版25a）。

溝内の堆積土は、大別して４つの層に分けられる。溝底は、暗灰色シルト上面（T.P.＋4.44m）まで及んでいる。遺物は（Ⅰ）～（Ⅲ）層に集中して出土した。各層に包含されていた遺物の残存状態は良好であった。器表面の残りもよく大半の土器は光沢をおびている。

〔遺物出土状況〕　４つに分けた各ブロックから土器・石器・木製品・骨角製品・動植物遺存体等が多量に出土している。土器は各ブロックから保存良好な資料を多量に得ているが、特に３・４ブロックに完形土器もしくは完形に復元されうる土器が目立った。中でも高杯形土器、器台形土器には見るべきものがあった。高杯形土器（第72図23）は、そのプロポーションから在地のものでなく、瀬戸内地域に通有にみるもので、上東・鬼川市Ⅰ式と型式設定され後期初頭の時期に編年されているものである。器台形土器（第73図33）は口径39cm、器高43.5cmをはかる大形品で、器内外面に赤色顔料を塗布している。いずれも、土器片の散在状況から壊れた後に、溝に廃棄されたものと思われた。また、４ブロックから出土した細頸壺形土器も当該期にあっては稀しい器種といえる（図版28c）。

木製品には農耕具である鋤（図版26b）、脱穀具である臼（図版158－63）、建築部材と思われるもの、高杯（図版28a）、そしてその他用途不明なものを多量に得ている。臼は横位にて出土したため土圧によって変形していた（図版24a）。

動植物遺存体は多量かつ豊富でイノシシ・ニホンジカ・イヌ・ネズミ・カエル・スッポン・ヘビ・鳥類・魚類・種子等がある。小動物遺存体の大半は断面観察用にもうけたあぜの土をすべて採集して、水洗選別した際に得た。４ブロックから出土したニホンジカ頭蓋骨には、角を切断した際の鋭利な加工痕が、前頭部中央には径3.5×2.4cmの粗孔が観察された（図版174－４）。前者の加工は鹿角製品の材料を得るための切断のあと、後者は脳髄摘出のための破壊のあと、と思われる。



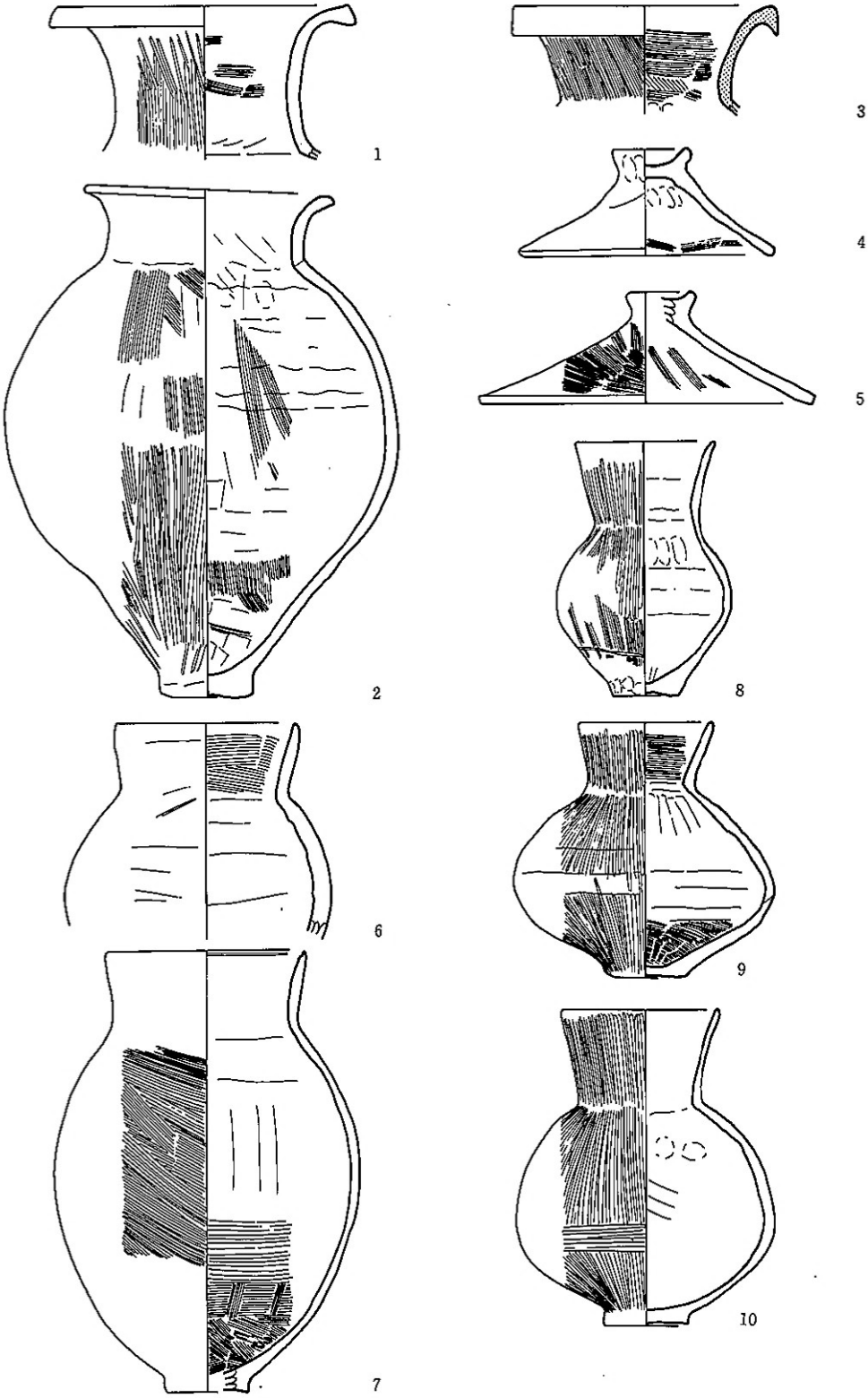
第66図　ＳＤ－14　１ブロック上位　遺物出土状況（1/20）

〔土器〕（第67・70～73、図版86～90）

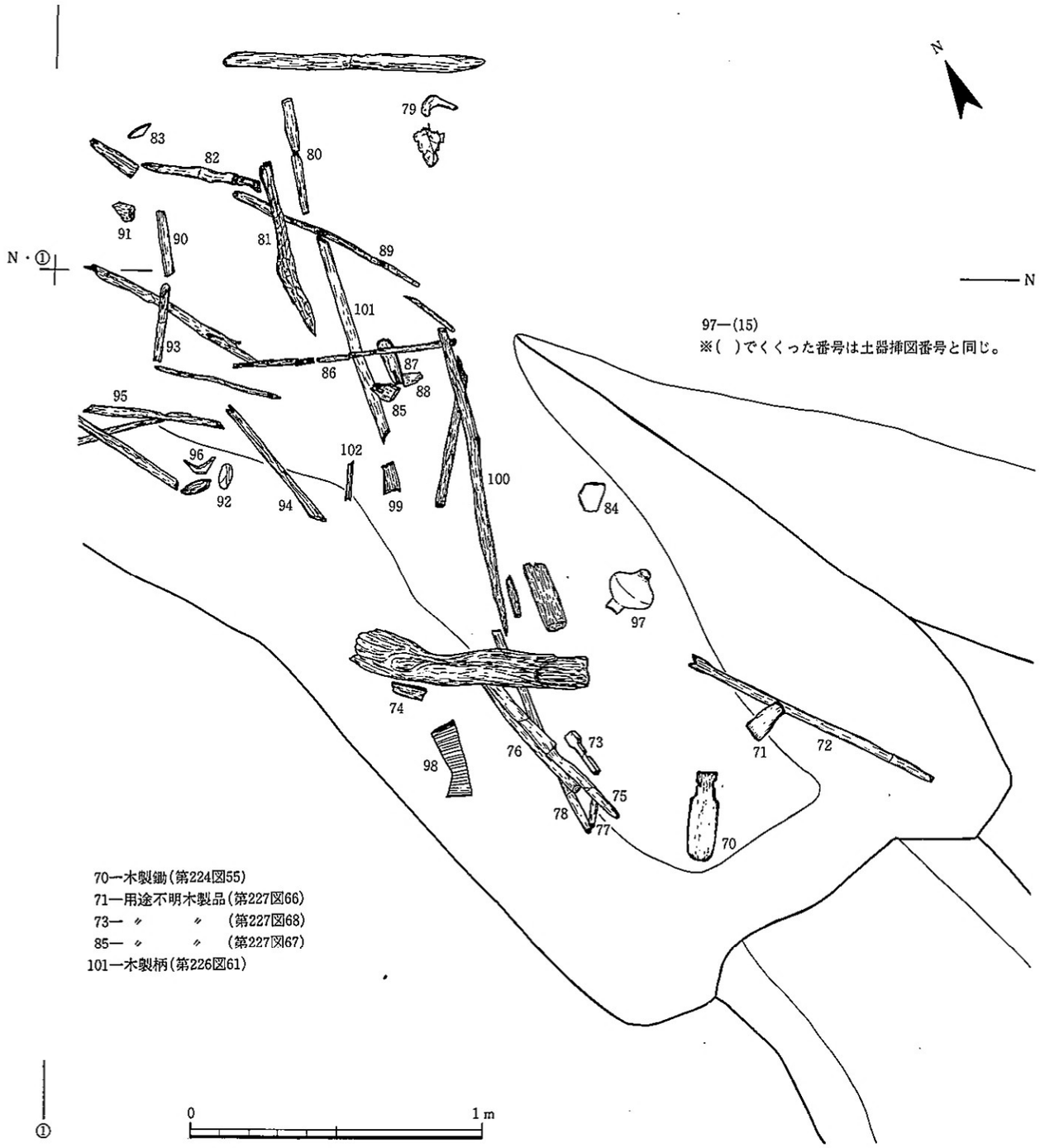
コンテナ約34杯の多量の土器が出土した。抽出は、各器種ごとに代表的なものを図化している。壺・短頸壺・蓋・小型壺・長頸壺・把手付壺・細頸壺・甕・小型甕・高杯・鉢・器台・大型器台形土器の器種資料がある。時期は第Ⅴ様式初頭である。各層出土土器は、接合資料の検討および型式学的な変化がほとんどないことから、一括して記述する。

(15) は１ブロック、（1・11・24）は２ブロック、（3～6・8・12～14・18・19・21・23・25）は３ブロック、（2・10・20・22・29・32）は４ブロック、（7・27・28・30・33）は２、３ブロック、（9・31）は２、３ブロックとあぜ２、(26) はあぜ２、(16・17) は３ブロック、あぜ２から出土した。

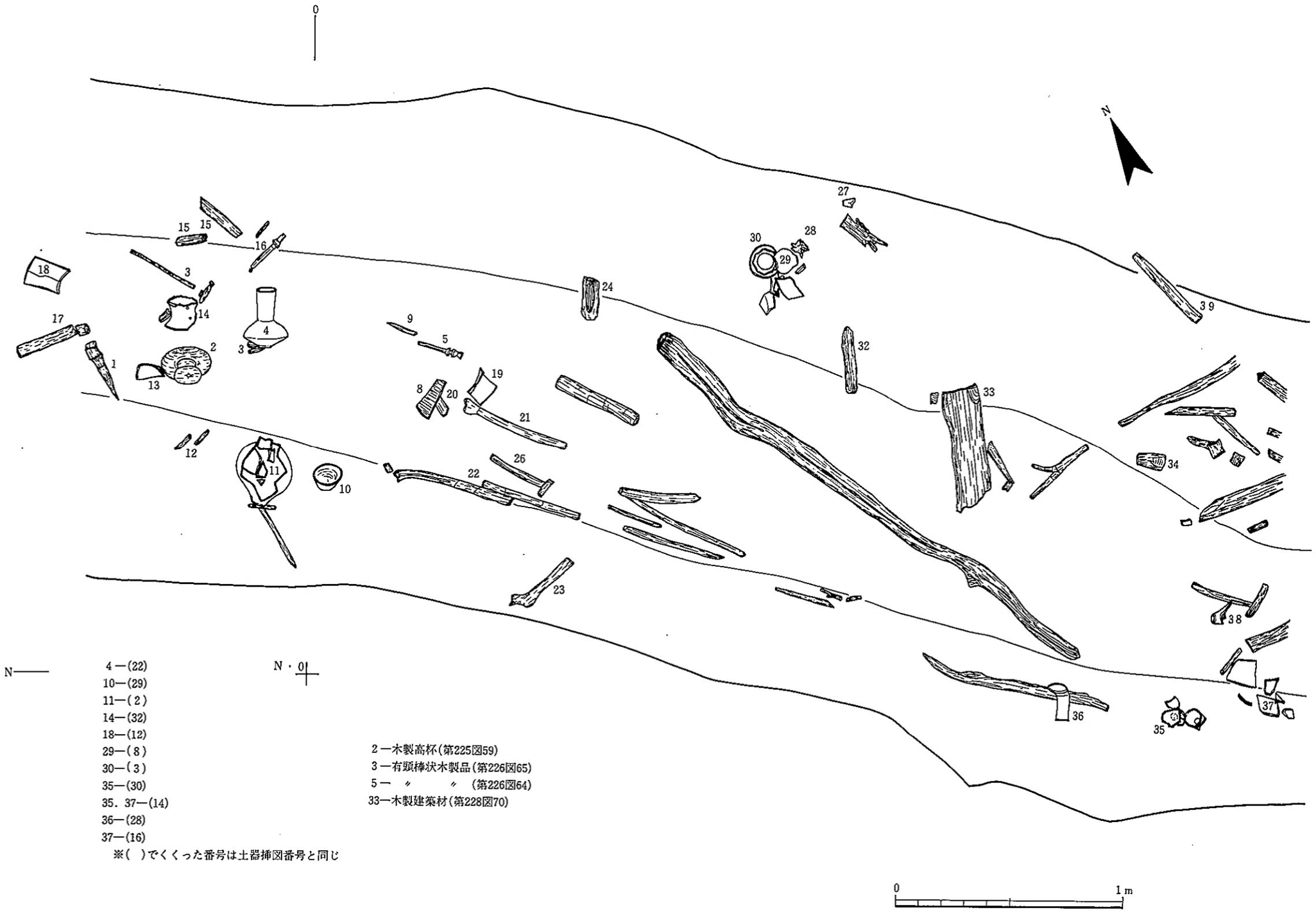
壺形土器（1～3）　（1）は口径17.2cmをはかる。外反して開く口縁部を有する。端部は多少下方に肥厚する。色調は淡茶褐色。口頸部外面はヘラミガキ、内面はハケとナデ調整である。（2）は口径14.3cm、器高29.9cm、体径23.1cm、底径5.4cmをはかる。長胴のいびつな体部から外反して短く直立する頸部に、短く外反する口縁部をもつ。色調は暗赤褐色。口頸部内外面はヨコナデ、体部外面上半はハケ、下半はヘラミガキ、内面はハケとハケ状ナデ調整である。（3）は口径15.2cmをはかり、口頸部は外反して上方に開く。口縁端部は下方に拡張する。色調は明灰褐色。端部はハケ、口頸部内外面はハケ調整である。



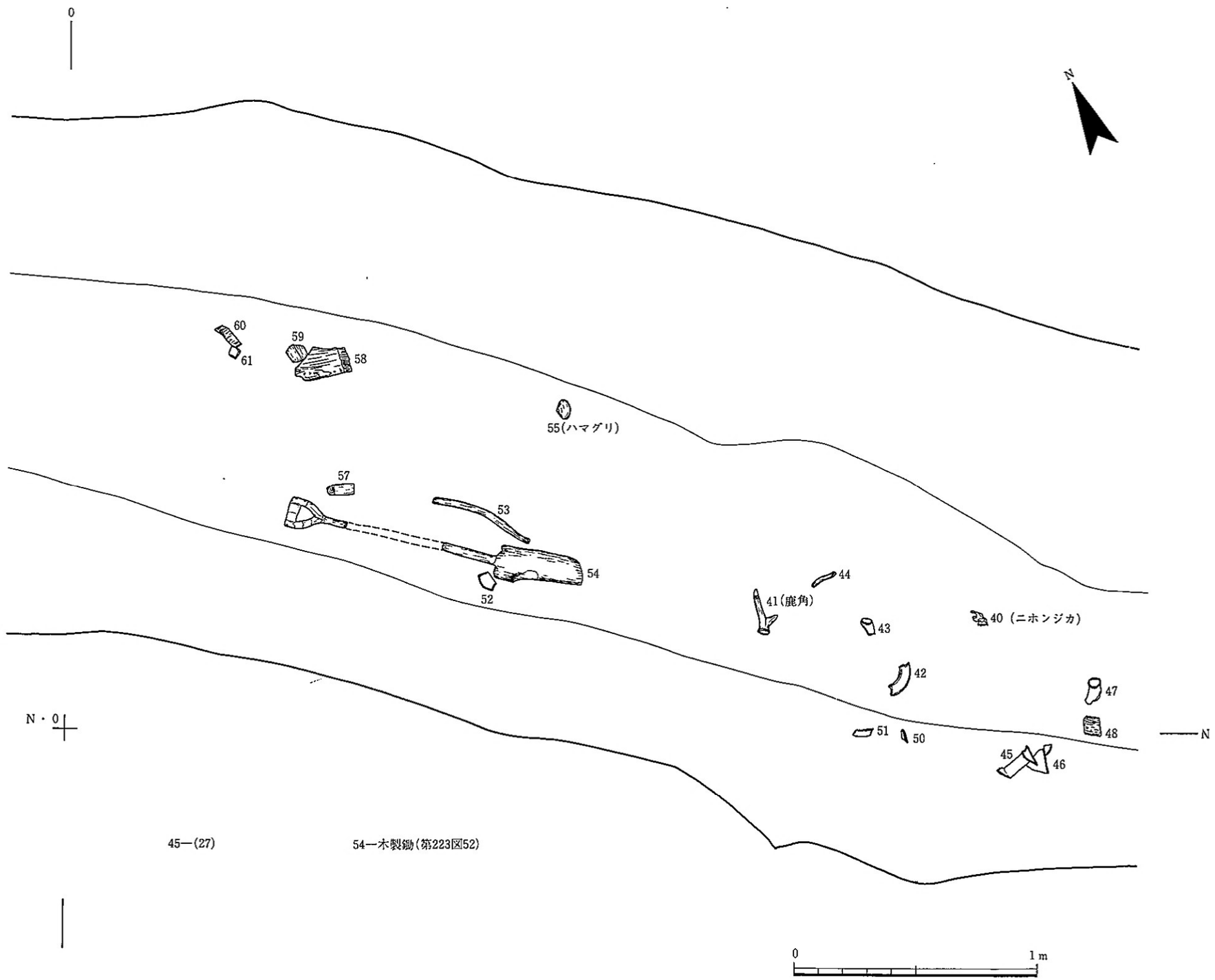
第67図　ＳＤ－14出土土器実測図（1/4）



第68図　ＳＤ－14　１、２ブロック下位遺物出土状況（1/20）



第69図　ＳＤ－14　３、４ブロック上位遺物出土状況（1/20）



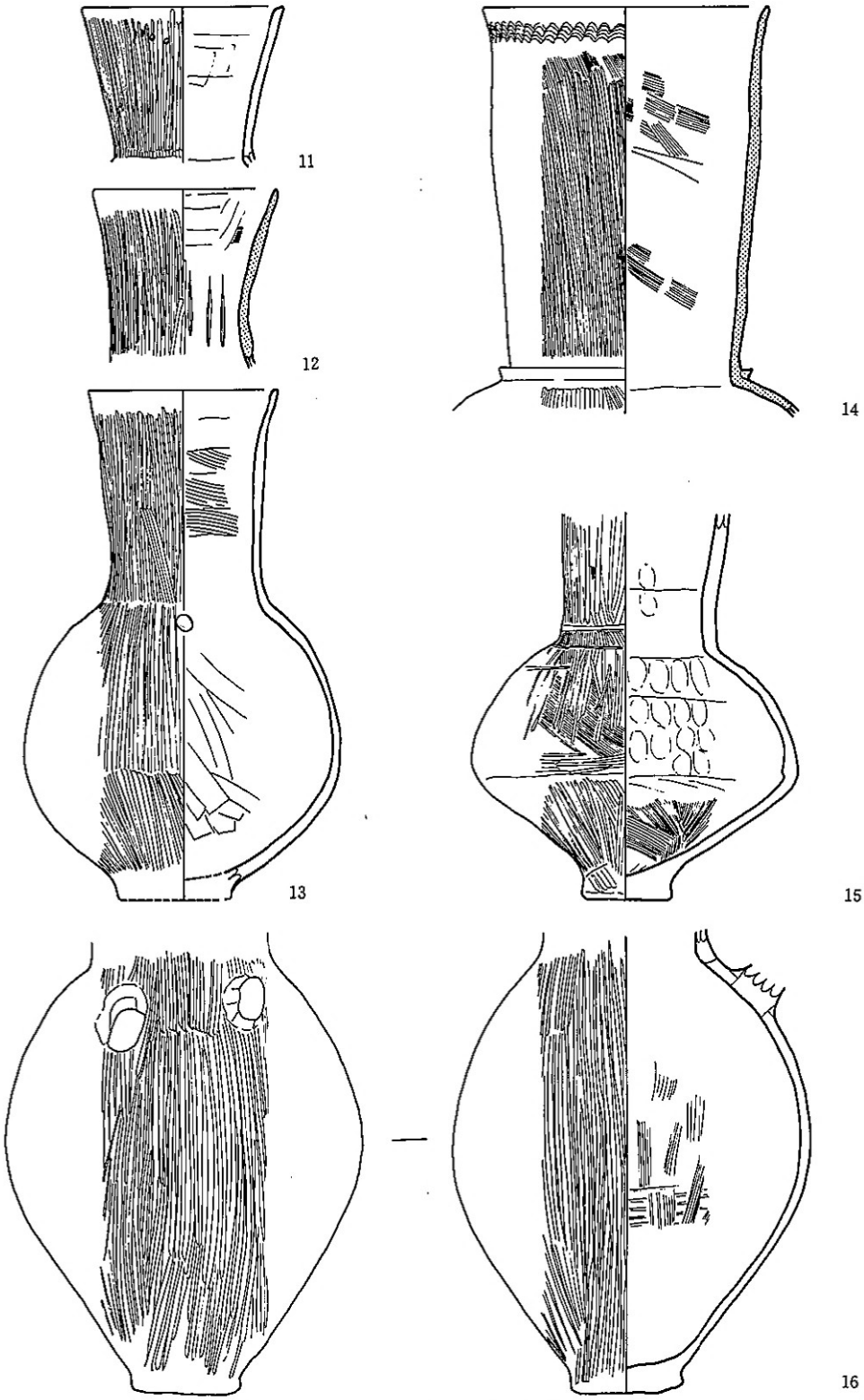
第70図　ＳＤ－14　３、４ブロック下位遺物出土状況（1/20）

短頸壺形土器（６・７）　（６）は口径10.6cm、体径15.7cmをはかり、色調は淡褐灰色を呈す。外傾して立ち上がる口頸部に、わずかに内弯する口縁端部をもつ。口頸部外面はナデ、内面はハケ、体部内外面はナデ調整である。（７）は口径11.7cm、器高25.9cm、体径18.2cm、底径4.9cmをはかる。胴中位に最大径をもつ長胴な体部に、外反して直立ぎみに立ち上がる口頸部を有す。口縁端部内面に沈線紋１条を施す。色調は明褐色。体部外面上半はハケ、下半はナデ、内面上半はナデ、下半はハケ調整である。

蓋形土器（４・５）　（４）は口径14.6cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈す。つまみ部は指頭圧痕、体部外面はナデ、内面上半はナデ、下半はハケ調整である。（５）は口径19.6cmをはかり、色調は灰褐色を呈す。つまみ部はナデ、体部外面はハケ、内面はハケ調整である。

小型壺形土器（８～10）　（８）は口径8.2cm、器高14.9cm、体径10.4cm、底径3.9cmをはかる。球形の体部から屈曲して、外反する口頸部を有する。色調は淡茶褐色。口頸部外面はヘラミガキ、内面はナデ、体部外面はハケ後にヘラミガキ、内面上・中位はナデ、下位はハケ調整である。（９）は口径7.9cm、器高14.9cm、体径15.5cm、底径4.8cmをはかる。扁平な体部から屈曲して、外傾ぎみに立ち上がる口頸部をもつ。色調は淡灰黄色。頸部外面はヘラミガキ、内面はハケ、体部外面はヘラミガキ、内面上半はナデ、下半はハケ調整である。（10）は口径9.3cm、器高18.6cm、体径15.3cm、底径4.9cmをはかる。胴下半に最大径をもつ体部から屈曲して、直線的に外反して立ち上がる口頸部を有する。色調は淡茶褐色。

長頸壺形土器（11～15）　（11・12）は、口径が口頸部高を凌駕する。口頸部は直線的に外反して立ち上がる。（11）は口径11.8cm、口頸部高8.9cmをはかり、口縁端部は内傾する。色調は黒褐色。口頸部上位に円形竹管紋４個を横位にスタンプする。口頸部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。（12）は口径10.7cm、口頸部高9.9cmをはかる。口縁端部は丸くおさめる。頸部中央にヘラ状工具による記号文「||||||」を施す。色調は灰褐色。口頸部外面はハケ後にヘラミガキ、内面上半は、ハケ状ナデ、下半はハケ調整である。（13）は口径11.0cm、口頸部高12.6cm、現高29.5cm、体径18.6cmをはかる。胴下半寄りに最大径をもつ体部から屈曲して、直線的に外反して立ち上がる口頸部を有する。肩部に円形浮紋１個を貼り付けている。色調は暗灰緑色。口頸部外面はヘラミガキ、内面はハケ、体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。（14）は口径16.7cm、口頸部高21.9cmをはかり、いまだ類例の少ない大型長頸壺形土器といえよう。色調は淡茶褐色。口頸部は直線的に上方に伸び、端部はわずかに外反する。口縁部外面に櫛描波状紋１帯を施し、頸部下位に断面三角形の突帯を貼り付けている。口頸部外面はハケ後にヘラミガキ、内面はハケとナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はハケとナデ調整である。（15）は口縁部を欠くものの、現高21.2cm、体径19.3cm、底径5.0cmをはかる。色調は灰白緑色。体部中位の張る体部から屈曲して、外反ぎみに直立する頸部を有し、底部は著しく突出する。頸部外面はハケ後にヘラミガキ、内面は指頭圧痕とナデ、体部外面上半はハケ後にヘラミガキ、下半はヘラミガキ、内面上半は指頭圧痕とナデ、下半はハケ調整である。



第71図　ＳＤ－14出土土器実測図（1/4）

把手付壺形土器（16）　口頸部を欠くため器種は限定できないが、現高27.1cm、体径21.2cm、底径6.5cmをはかる。外面全体に煤が附着しており二次的に煮炊に使用されたものと思われる。体部外面はヘラミガキ、内面上半は粗いハケ、下半はナデ調整である。

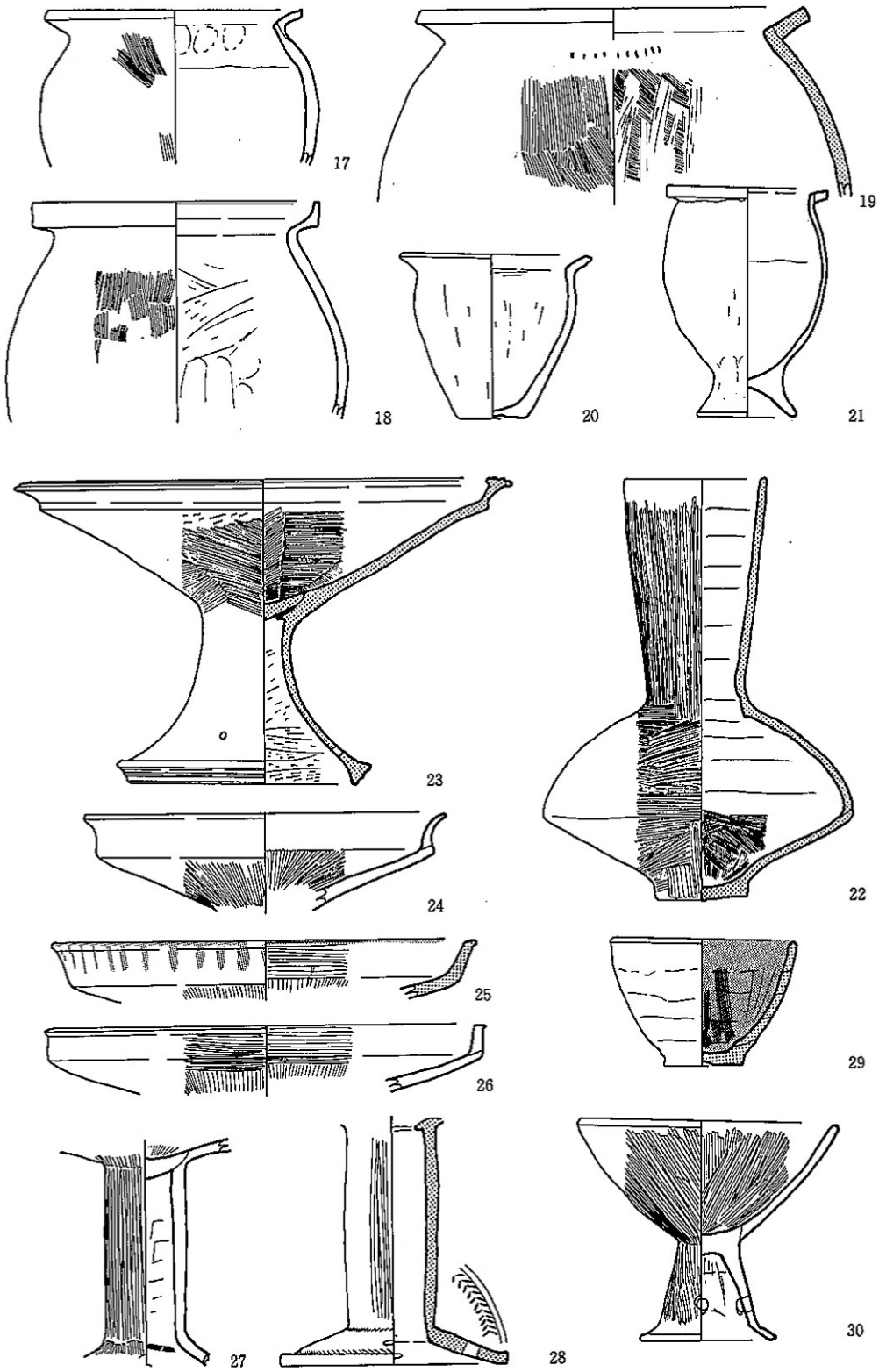
細頸壺形土器（22）　口径8.2cm、口頸部高8.7cm、器高25.5cm、体径18.6cm、底径5.5cmをはかる。算盤玉状の体部から外反して、直線的に伸びる細い筒状の口頸部を有する。色調は明緑灰色。口頸部外面はヘラミガキ、体部外面はヘラミガキ、内面上半はナデ、下半はハケ調整である（第69図４、図版88－61）。

甕形土器（17～19）　（17・19）はくの字状に屈曲する口縁部を有する。（17）は口径 15.3cm、体径16.8cmをはかり、色調は灰色を呈す。体部外面はハケ、内面は指頭圧痕とナデ調整である。（19）は口径23.0cmをはかり、肩部に10個の刻目を施す（記号文）。色調は灰褐色。体部外面はハケ、内面はハケ後にヘラケズリ調整である。（18）は口径17.1cm、現高13.3cm、体径20.5cmをはかる。受け口状の口縁部をもつ。色調は黒色を呈す。体部外面の調整はハケ、内面はヘラケズリ後に指頭圧痕を施す。

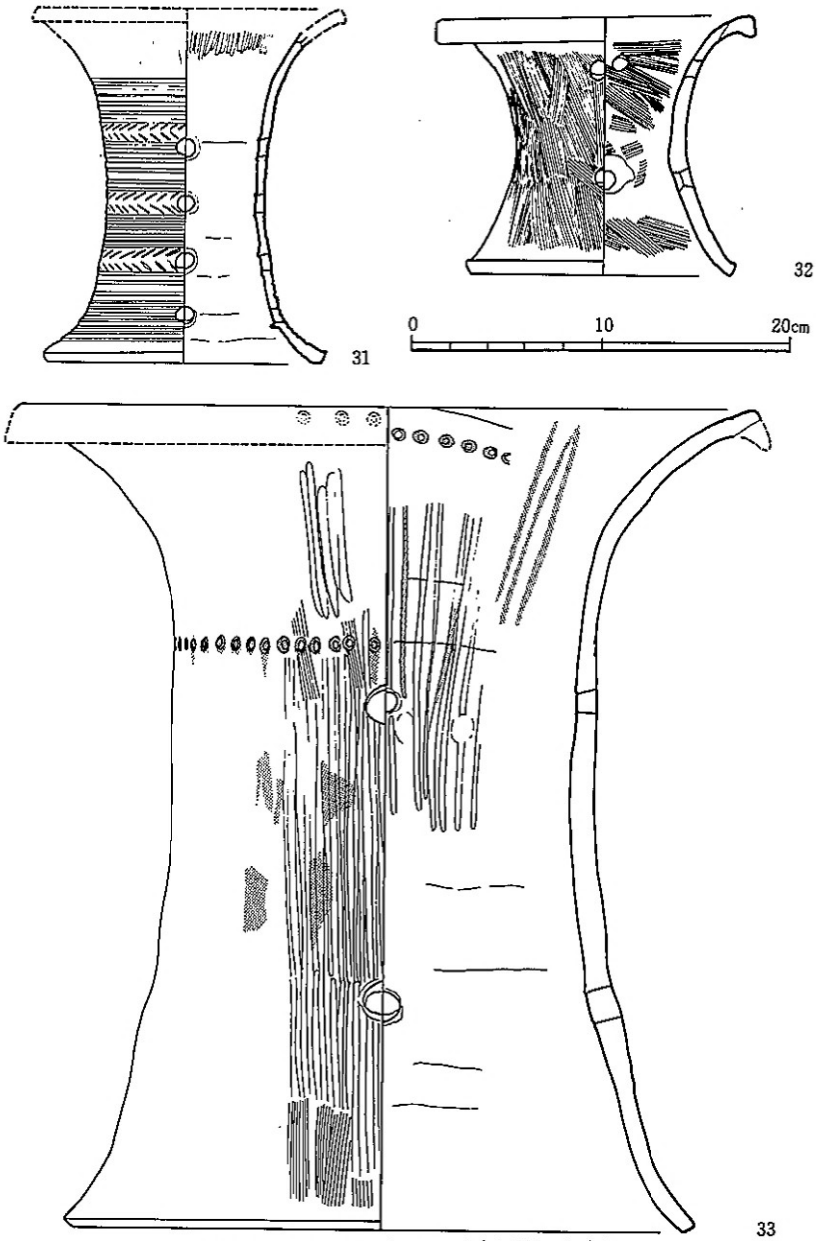
小型甕形土器（20）　口径10.6cm、器高9.9cm、底径4.0cmをはかる。色調は明褐灰色を呈す。体部外面はヘラケズリ後にヘラミガキ、内面はナデ調整である。

台付甕形土器（21）　口径9.5cm、器高13.9cm、体径10.1cm、裾径5.7cmをはかる。色調は灰白色を呈す。体部内外面はナデ、脚台部外面は指頭圧痕、内面はナデ調整である。

高杯形土器（23～28・30）　（23）は、その形態・調整・手法の点から、明らかに瀬戸内地方を中心とし分布するものである。瀬戸内地方の型式名で云えば、後期初頭に編年位置づけられている「上東・鬼川市Ⅰ式」に相当する。(註11)（23）は口径27.5cm、器高18.4cm、裾径13.5cmをはかる。杯部は外反ぎみに開く体部から段をもって屈曲し、斜め上方に短く外反する口縁部をもつ。口縁端部は内外に肥厚する。口縁端部に凹線紋３条、裾部端面に凹線紋２条を施す。色調は暗褐色を呈する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上端はヘラケズリ、下半はヘラミガキ、脚部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整である。（24～26）は杯部片。（24）は口径21.7cmをはかり、直線的に低く開く体部に、外反し立ち上がる口縁部を有する。口縁部内面はヨコナデ、体部内外面はヘラミガキ調整である。色調は灰白色。（25）は口径25.5cmをはかり、内弯ぎみに低く開く体部に、外傾して立ち上がる口縁部を有し、端部は外に突出させる。口縁部外面、端部内縁に赤色顔料を塗布している。口縁部外面はナデ、内面はヘラミガキ、体部内外面はヘラミガキ調整である。色調は茶褐色。（26）は口径26.2cmをはかり、内弯ぎみに低く開く体部に、短く直立して面をもつ口縁部を有する。器内外面はヘラミガキ調整である。色調は淡黄褐色。（27・28）は脚部片で、エンタシス状の柱状部に、屈曲して低く開く裾部を有する。（27）は現高13.6cmをはかり、色調は茶褐色を呈す。柱状部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ、裾部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。（28）は裾径13.5cmをはかり、色調は茶褐色を呈す。裾部上端に刻目、下端に綾杉列点紋を施す。柱状部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整であ



第72図　ＳＤ－14出土土器実測図（1/4）



第73図　ＳＤ－14出土土器実測図（1/4）

る。（30）は口径15.6cm、器高13.2cm、裾径8.0cmをはかる。「ハ」の字形に開く脚台に、椀形の深い杯部をもつ。色調は暗緑灰色を呈す。杯部内外面はヘラミガキ、脚部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。

鉢形土器（29）　口径11.1cm、器高7.7cm、底径4.8cmをはかる。内面全体に赤色顔料を塗布している。口縁部内外面はハケ、体部外面はナデ、内面はハケ調整である。色調は淡橙色。

器台形土器（31・32）　（31）は現高17.1cm、体径8.5cm、裾径14.6cmをはかる。色調は淡茶褐色を呈す。体部上半から裾部にかけて沈線紋６条、綾杉刻目紋１帯、沈線紋６条、綾杉刻目紋

1帯、沈線紋6条、綾杉刻目紋1帯、沈線紋12条を施す。また、縦位に4個1対の透孔を穿つ。口縁部外面はナデ、内面はヘラミガキ、体部・裾部外面はハケ状ナデ、内面はナデ調整である。

(32) は口径16.1cm、器高13.6cm、体径8.9cm、裾径13.8cmをはかる。色調は灰白色。体部に2孔1対の透孔を3個穿つ。口縁端部はハケ、体部・裾部内外面はハケ調整である。

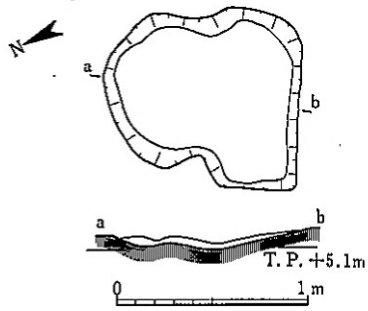
大型器台形土器 (33)　口径38.5cm、器高43.6cm、体部中央径22.3cm、裾径32.3cmをはかる。装飾大型中空器台である。体部から緩やかに外反してラッパ状に開く口縁部を有する。端部は下方に拡張するが、いま剝離している。色調は淡黄灰色。口縁部内面、口縁端部、体部上位に赤色顔料を塗布した円形竹管紋を施す。器内外面全体にわたって縦位に赤色顔料を塗布する。体部中央には縦位に2孔1対の透孔を穿つ。器外面はハケ後に粗いヘラミガキ、内面上半はナデ後、粗いヘラミガキ、下半はナデ調整である。

自然河川

ＳＤ－11

南側において検出した弥生時代後期後半の自然河川である。KMの調査で検出されている、ＮＲ－3001と同一の遺構で、本地点でＳＤ－09と合流している。

遺物は完形土器を多量に含む。後期後半の土器を主体に中期から後期の土器が混在して出土している。



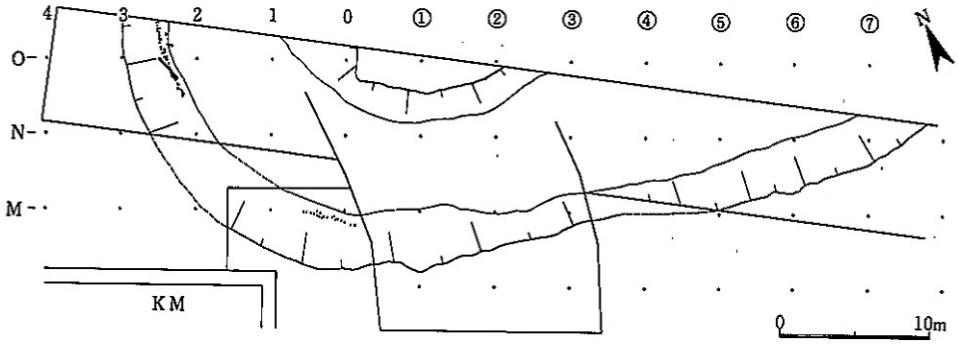
第74図　焼土坑遺構平面図 (1/40)
及び土層断面図 (1/40)

その他の遺構

焼土坑 (第74図)

Ｍ・③地区、ＳＤ－03の7ブロック埋土上面で、検出された (図版36b)。規模は、江戸時代の自然河川ＳＤ－11によって削平されているが、径1.2×1.0mの不整形を呈し、検出面からの深さは約0.12mをはかる。埋土は、焼土・有機物によって充填されていた。遺物は、弥生時代後期の土器を得ているが、細片のため図示することは不可能であった。

第３項　江戸時代及び江戸時代以降



第75図　江戸時代旧平野川遺構平面図 (1/500)

自然河川（第75図、図版37）

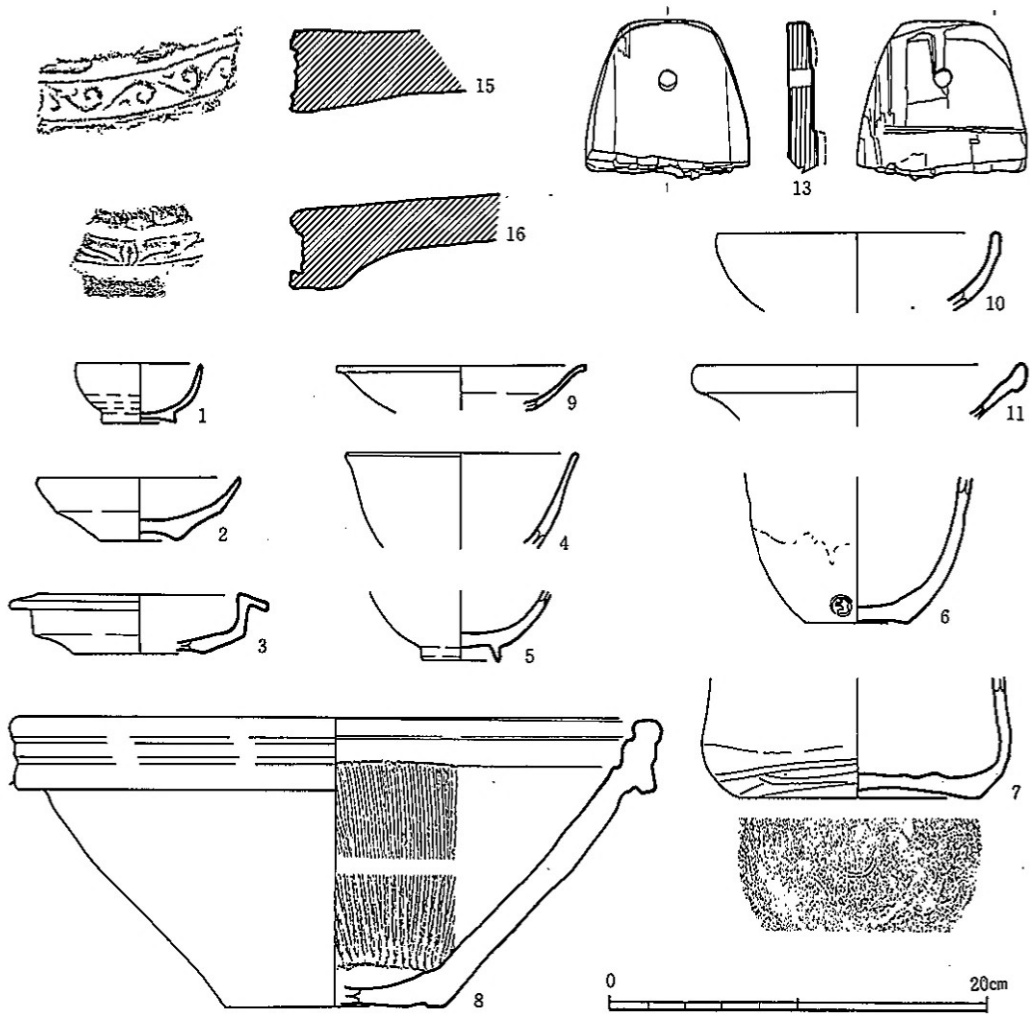
ＫＭ－Ｈ３～７調査区にまたがって、第Ⅳａ層上面で検出された。記述の便宜上等から、ＫＭ－Ｈ３・５・７調査区も一括してここに報告することとしたい。検出されたのは左岸で、右岸は調査範囲外にあり、全容は明らかでないが、幅15m以上、深さ約3.0mをはかる。

流路は、Ｈ５からＨ４調査区まで東から西へ直線的に流れているが、Ｈ７調査区では曲線的に流れを北に向け、Ｈ３調査区に至っては完全に南から北へ走っている。これが為か、Ｈ３・Ｈ７調査区では、曲流部に沿って護岸のための杭列が検出されている（図版12b、37a、71b）。

埋土は、基本層序第Ⅲ層がこれに相当する。

〔出土遺物〕（第76・77図、図版177）

長吉ポンプ場の本体部で検出している旧平野川（『亀井・城山』ＮＲ9001）の続きを、今回の調査でも検出しており、多数の遺物が出土した。



第76図　旧平野川、ＳＥ－01出土遺物実測図（1/4）

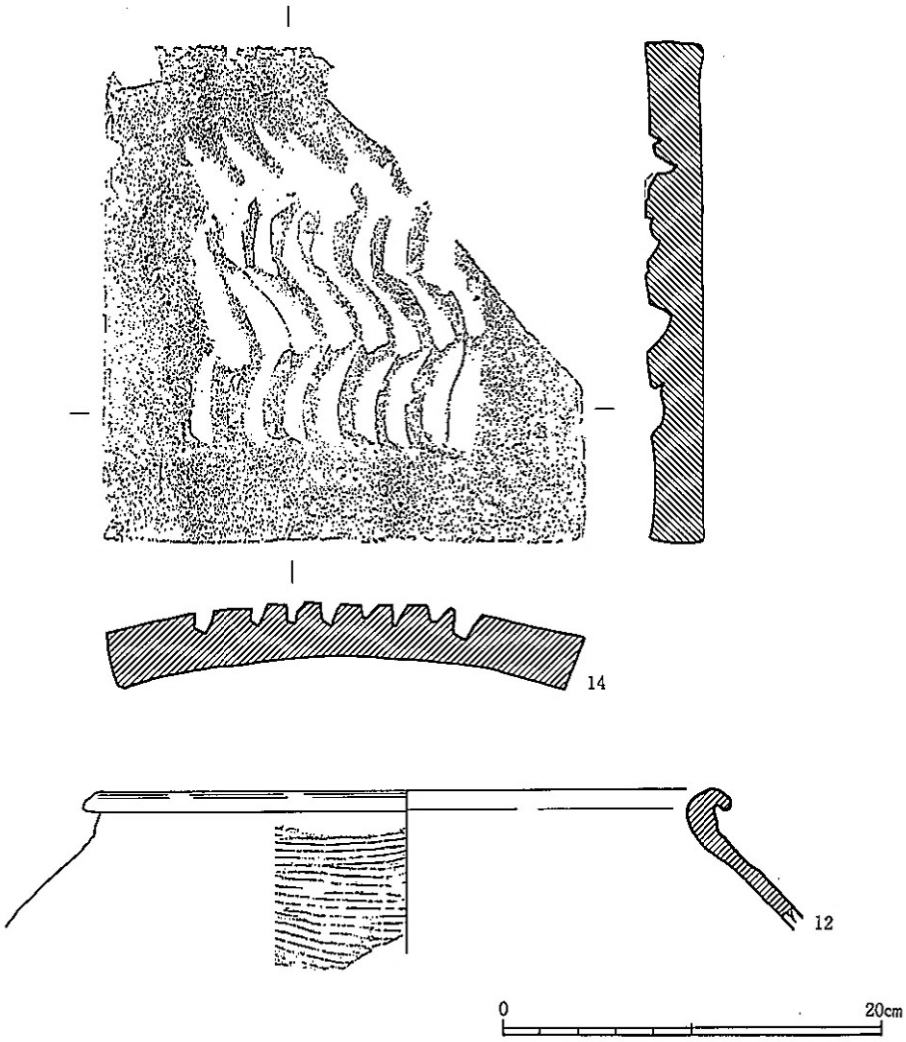
遺物は、弥生時代前期から近世にかけてのものを含み、その総量はコンテナ箱約35杯余りであったが、その大半は弥生時代中期から後期のものがほとんどであった。

今回の報告では、遺物整理の時間が限られていたために、平安時代以降の遺物に限って掲載すことにした。なお、とりあげた遺物は、陶器、青白磁器、瓦器、下駄、瓦などであるが、他に染付なども出土している。

陶器（1～7）　（1）はめだたない高台をもつ猪口で、口径6.6cm、高さ3cmの完形品。内面はロクロナデ、外面はロクロ削り調整を行う。内面と外面上半には、うす黄緑色の釉薬をかけており、貫入が入る。焼成は良好だが、胎土はやや柔らかい。色調灰白色。（2）は幅広の低くて短い高台をもった小鉢で、口径13.7cm、高さ3.3cmを測る。内外面ともロクロナデを行い、底にはヘラ切痕が残る。また、内面の底には、重ね焼のための（ツク）痕が残る。灰オリーブ色の釉薬は、底部外面の一部を除く全面にかかる。胎土良、焼成堅緻。色調は赤褐色。（3）は破片を見ていると鉢のようであるが、実際には中央に把手がつく壺蓋である。口径13.7cm、高さ3.1cmを測る。鍔部と内面はロクロナデで、外面はロクロ削り後に部分的なロクロナデ調整を行う。内面と鍔上部にはオリーブ灰色の釉薬をかけ、外面の一部には赤褐色の自然釉が付着する。胎土良、焼成堅緻。色調は灰褐色。（4）は口径12cmを測る椀。内外面ともロクロナデ調整を行い、全面に明緑灰色の釉薬がかかる。胎土良、焼成堅緻。（5）はしっかりした高台をもった椀で、底径4cmを測る。高台の端部を除く全面に釉薬がかかるために、調整は不明。釉薬は橙色で、内外面とも螺旋状の白色釉薬がつけられることから、唐津焼と考えられる。胎土良、焼成堅緻。（6）はトックリの下半に似るもので、底径は5.4cmを測る。内面はロクロナデ、外面下半はロクロ削りを行い、底には糸切痕が残る。外面の体部上半と内面には、暗赤褐色の釉薬がかかり、体部最下位には「⑪」の刻印がつく。胎土はやや荒く、焼成は堅緻。色調は赤色。（7）は甕、もしくは壺の底部で、底径は12.7cmを測る。内面と外面の体部はロクロナデ、外面の体部下半はヘラ削り、外面の底部はヘラ削りの後にナデ調整を行う。また、底部の中央付近には、草書の「上」に似た刻印をつけている。胎土は砂粒がやや多く、焼成は堅緻。色調は内面赤褐色。外面暗赤褐色。

磁器（9～11）　（9）は口径13.2cm、残存高2.4cmを測る皿で、体部内面の下方には段がつけられている。釉薬は灰白色のものがかけられており、焼成堅緻。灰白色を呈する胎土は精良。（10）は口径14.2cmで、口縁が内弯する青磁碗である。口縁の外面には文様が入る。全面に厚みが約0.5mmのやや緑がかった灰白色の釉薬をかけており、荒い貫入がはいる。胎土は精良で灰白色を呈す。焼成堅緻。（11）は口径17cmを測る白磁椀。口縁にはしっかりした玉縁がつくことからⅣ類とよばれているものである。(註12) 内外面とも明オリーブ色の釉薬がかかり、焼成は堅緻。胎土は精良で灰白色を示す。

瓦質甕（12）　口径32.6cmの甕口縁。外へ強く折れ曲がる口縁付近は指ナデを行い、外面は平行叩きを施す。内面は、横方向の細かい刷毛目の後に、部分的な指圧を行う。内面には、多量



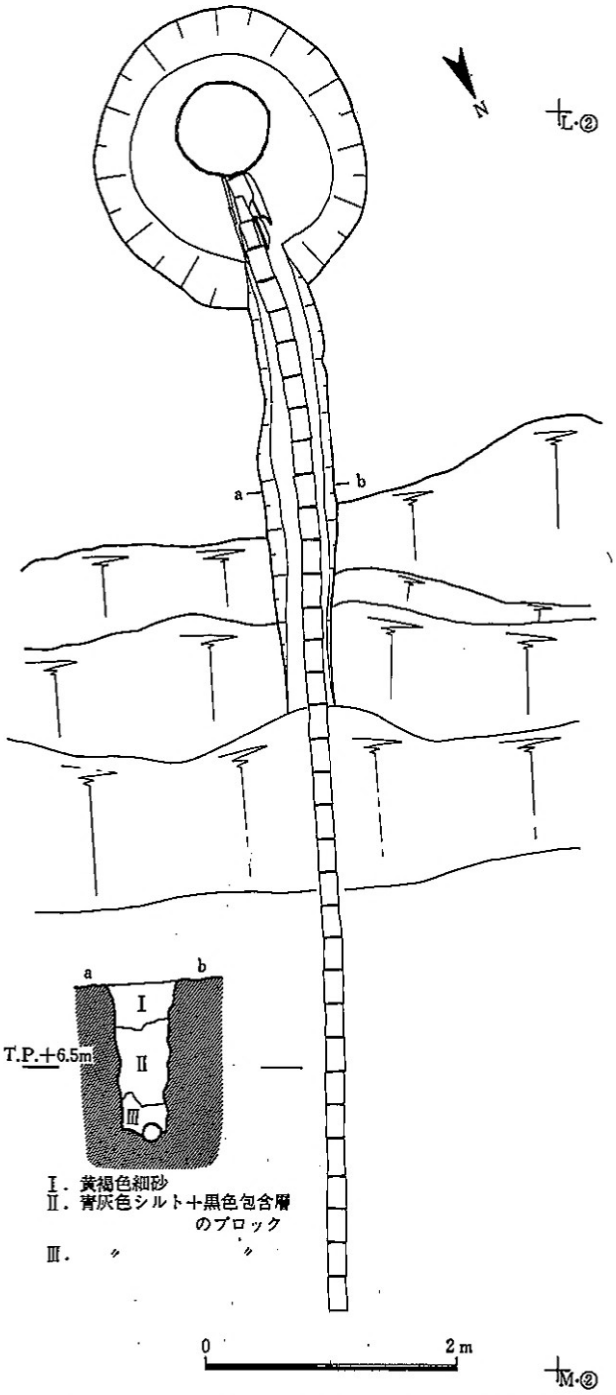
第77図　旧平野川、ＳＥ－01出土遺物実測図（1/4）

の煤が付着することから煮焚き用に使用したと思われる。なお、遺物の時期(註13)は、瓦器椀消滅後にあたるものと考えられている。

下駄（13）　残存長８cm、残存幅8.6cm、高さ２cmを測る。つくりが小さい女性用の下駄で前歯付近をノミ状刃物によって上、下方向から切断しいる。底の前端部は磨滅が激しい。

軒平瓦（15・16）　（15）は文様面の内区に４回反転唐草文を配し、外区には文様がつかないものである。顎は直線顎で、凹面には布目痕、凸面と側面は指ナデ調整を行う。全面に付着する煤は、割れ口にも付着している。胎土、焼成とも良。

（16）は内区に簡略化された唐草文を配し、外区には何もつかない。段のつく顎をもち、平坦部との境には接合痕が残る。凹面には布目痕、凸面はヘラ削りの後に指ナデを行う。胎土はやや荒く、焼成は良好。



第78図　ＳＥ－03遺構平面図及び導水管掘り方土層断面図 (1/60)

井戸

ＳＥ－01（図版38a）

第Ⅲ層上面にて、検出された取水用の井戸である。井戸本体の掘り方は、径1.2mの円形プランを呈し、深さは約1.5mをはかる。井戸枠は、底板を抜いた木桶を二段積み重ね、その上に瓦を縦積みにした構造である。下段の井戸枠から、導水管が北方向へ伸びている。導水管は、７個の瓦管をつないでつくられ、井戸側に傾斜させている。管の下には、瓦管が沈下するのを防ぐために、木板が敷かれていた。

〔出土遺物〕（第76・77図）

井戸枠内から、摺鉢・瓦が出土している。瓦は、井戸枠に使用されていたものと考えられ、井戸廃絶後に落ち込んだのであろう。

磁器（８）　口径32.2cm、高さ15.3cmとやや大型の摺鉢で、口縁の内外面には太くて幅広の溝を２本めぐらす。内面の櫛目は、９条のものを使っており、体部では底から口縁に向けて左回りの櫛目を重複しないようにつけ、底には荒い櫛目をつける。調整は、口縁ではロクロナデ、体部の内面はナデ、外面は左回りのロクロ削りの後にロクロナデを行う。胎土は、0.5～７mm余りの砂礫を含むやや荒いものを用いている。焼成は堅緻で、色調は暗赤褐色を呈す。なお、外面の一部には自然釉が付着し、底には離れ砂の付着が認められた。

瓦（14）　縦26.4cm、横25.5cm、厚み2.9cmを測る井戸枠用の平瓦。外面には、縦４，横８

の計32個の滑り止用刻みを深くつけている。内外面は、縦、横方向の指ナデ。端面は、ヘラ削りの後に指ナデを行う。

ＳＥ－02（図版38b）

第Ⅲ層上面で、検出された取水用の井戸である。井戸本体の掘り方は、径1.2mの円形プランを呈し、深さは約1.45mをはかる。井戸枠は、底板を抜いた木桶を二段に積み重ねた構造で、下段の井戸枠から導水管が北方向へ伸びている。導水管は、ＳＥ－01とは異なっており、竹管を利用している。やはり、竹管の下には、沈下を防ぐための木板が敷かれていた。

ＳＥ－03（第78図、図版39）

第Ⅳ層上面で、検出された取水用の井戸である。井戸本体の掘り方は、平面円形プランを呈し、上部径2.15m、下部径1.5m、深さは約1.8mをはかる。井戸枠は、底板を抜いた木樋を二段に積み重ねた構造である。下段の井戸枠から導水管が北方向へ伸び、ＳＥ－01と接するところで終っている。導水管は、34個の瓦管をつないでつくられ、井戸側に傾斜している。導水管の掘り方は、上部幅0.55m、下部幅3.5m、深さ1.25mをはかる。井戸枠と導水管の接合部には、接合部を補強するためであろう、管の両側と上部に瓦片が据られていた。

〔註〕

註１　大阪府東大阪市若江西新町３，４丁目に所在する若江北遺跡に、甕形土器の口縁部内面に沈線一条を施す類例がある。下記文献の第43図22を参照。
高橋雅子、尾上　実　「第３節　遺物」　『若江北』（財）大阪文化財センター　1983，5

註２　その他、井戸から水差形土器が出土している例は、ＫＭ－Ｈ４調査区ＳＫ－05（第37図５）、ＫＭ－Ｈ５調査区ＳＫ－16（第80図１）、ＫＭ－Ｈ７調査区ＳＫ－19（第117図１・２）、ＫＭ－Ｈ８調査区ＳＫ－25（第154図17・18）の４例ある。水差形土器の単独出土は本例のみである。

註３　本書第Ⅵ章第７節を参照。

註４　ＫＭ－Ｈ１調査区のＳＤ－03からは、蓋形土器・長頸壺形土器・コップ形土器・飯蛸壺形土器・邪視文土器等が出土している。下記文献の37～60頁を参照。
中西靖人、宮崎泰史、西村尋文編　『亀井遺跡』　（財）大阪文化財センター　1982，3

註５　倉敷考古館学芸員藤田憲司氏の御教示による。なお、器種は異なるが、瀬戸内系の土器として本調査で高杯形土器が２点出土している。１つはＫＭ－Ｈ４調査区ＳＤ－14から出土したもの（第72図23、図版89－64）、もう１点はＫＭ－Ｈ４調査区ＳＤ－09から出土した口縁部片（第61図７）である。

註６　シカの角はふつう１年ごとに生えかわる。夏の終りごろから初秋にかけて角は完成し、春には自然と落ちる。この角のことを落角という。図版174

註７　同一遺構であるＫＭ－Ｈ７調査区ＳＤ－19からもニホンジカ右側肩甲骨を利用した卜骨が出土している。本書第Ⅵ章第６節を参照。

註８　イノシシ下顎枝に粗孔を穿った資料は、佐賀県菜畑遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡、大阪府東大阪市鬼虎川遺跡、同八尾市恩智遺跡等から出土している。菜畑のものは実際に、この孔に棒を通した状態で出土している。なお、近畿自動車道建設用地内の亀井遺跡の調査（ＫＭ－Ｋ）イノシシ下顎枝に粗孔を穿った資料が５例出土している。
渡辺　誠　「動物遺体１・哺乳類」『菜畑－佐賀県唐津市における初期稲作遺跡の調査』
唐津市文化財調査報告第５集　唐津市教育委員会　1982
末永雅雄、小林行雄、藤岡謙二郎　『大和唐古弥生式遺跡の研究』　奈良県史蹟名勝天然記念物調

査報告第16冊　1943
東大阪市遺跡保護調査会　『鬼虎川遺跡調査概要Ⅰ』　第４・５・６次調査　1980
註９　柳瀬照彦「Ⅴ 結語－川入・上東遺跡の弥生式土器及び古式土師器について」『川入・上東』
都市計画道路（富本町・三田線）に伴う埋蔵文化財発掘調査　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16
岡山県文化財保護協会　1977
註10　ＫＭ－Ｈ４調査区の溝ＳＤ－14から、このタイプの完形品が出土している。本文の第72図23参照
註11　註９に同じ。
瓜生同遺跡調査会　『恩智遺跡Ⅰ』　1980
宮崎泰史　「祭祀遺物」『亀井』（財）大阪文化財センター1983．10
註13　尾上　実　『狭山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要』　大阪府教育委員会　1978

第３節　ＫＭ－Ｈ５調査区

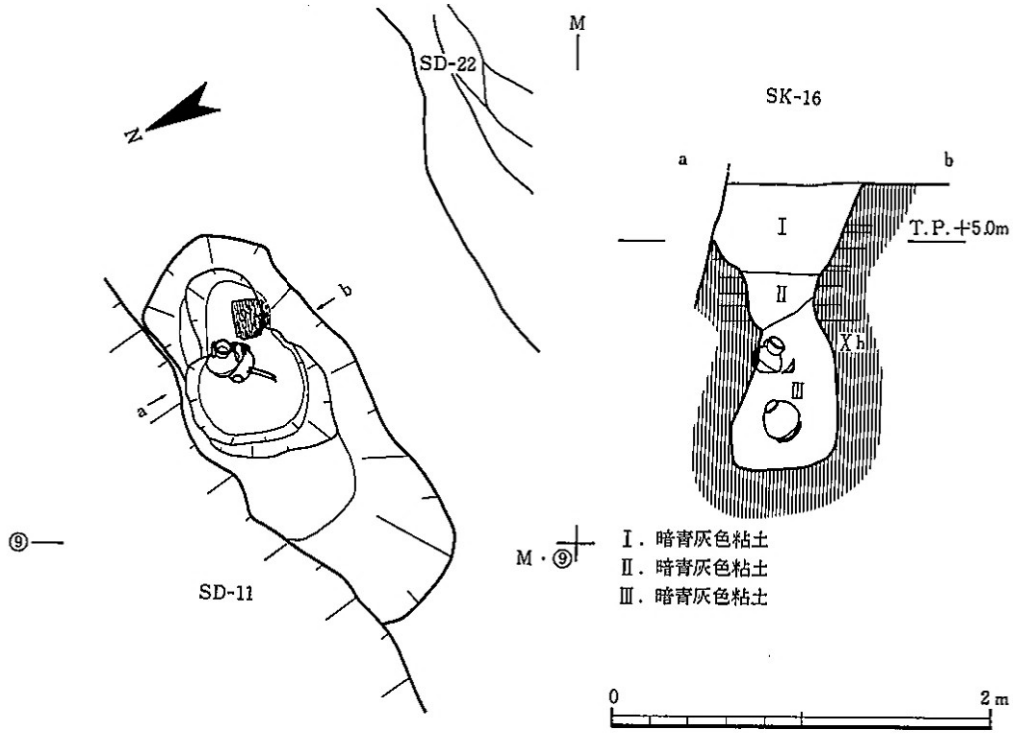
第１項　弥生時代中期

井戸

ＳＫ－16（第79図、図版40）

中期後半から後期初頭にかけて形成された、厚さ約0.5mの弥生時代遺物包含層（第Ⅸ層）を調査後、第Ｘａ層上面にて検出された。北側上部は、ＳＤ－11の流路によって破壊され、失う。平面プランは長径2.25m、短径1.0mを有する長楕円形を呈し、西側にテラス状の段を有している。検出面からの深さは1.5mをはかり、断面形態は下ぶくれ状を呈する。井戸底のレベルはＴ．Ｐ．＋3.8mで第Ｘｊ層中にある。

埋土は、大きく３層に分けられる。（Ⅰ）層は１cm前後の青灰色粘土・カーボン粒を多く含み、井戸埋没後、人為的に埋め立てられて形成された土層と考えられる。（Ⅱ）層は有機物を多量に含み、井戸廃絶後間もない時期の自然堆積と考えられる。（Ⅲ）層は粘性が強く、植物遺存体等の有機物を多量に含み、井戸使用中か廃絶前後の時期に堆積したものと考えられる。（Ⅱ）と（Ⅲ）層の間には、植物遺体が厚さ１cm前後の層をなして堆積していた。遺物には、第Ⅲ－Ⅳ様式の土器・動植物遺存体・木片等がある。（Ⅲ）層から出土した壺形・水差形土器の２点以外は、すべて小破片であり、ＳＫ－16が埋没もしくは埋め立てられていく過程で混入したものと



第79図　ＳＫ－16遺物出土状況及び土層断面図（1/40）

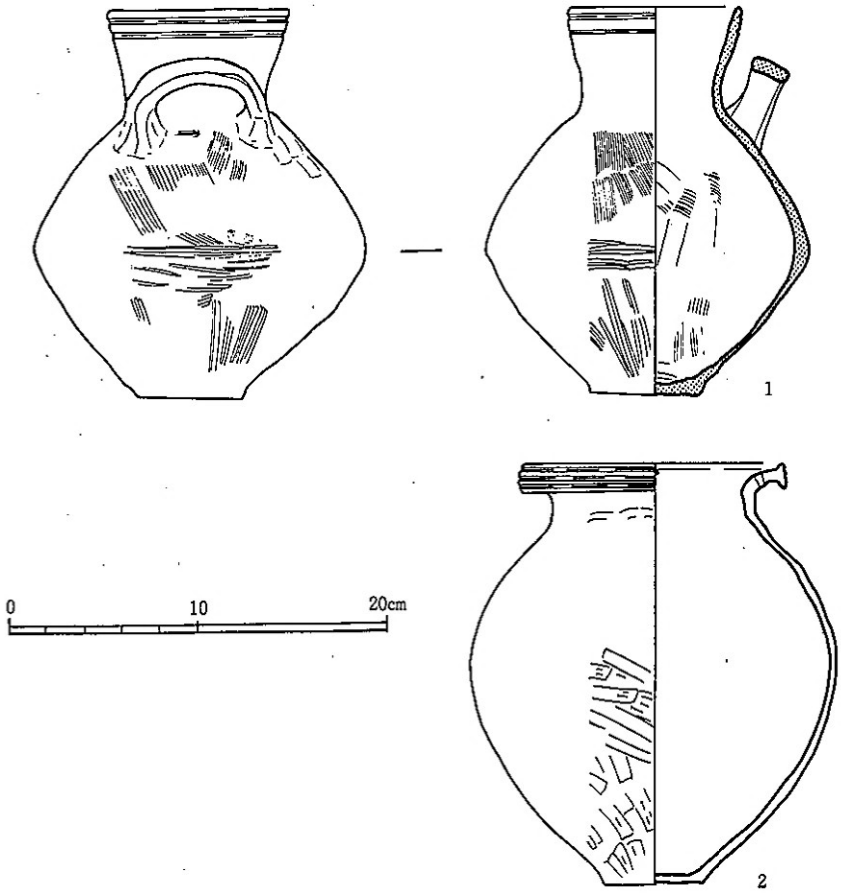
思われた。

〔遺物出土状況〕　水差形土器（第80図１）、壺形土器（第80図２）は（Ⅲ）層から約20cmのレベル差を有して出土した。水差形土器は体部と底部の２つに割れて、上位から出土した（図版40ａ）。壺形土器は下位から、底をやや斜め上方にして出土した（図版40ｂ）。頸部の残存状態から紐が巻かれていた可能性が強い。おそらく、ＫＭ－Ｈ８調査区のＳＫ－25（Ⅲ）層出土壺形土器同様、釣瓶として使用されていたものと想定される。いずれも外面には、煤の附着がみられた。特に、水差形土器に附着していた煤は著しく、薬罐（やかん）として使用されたか、と思うほどである。これらの土器は、出土状況から、廃棄の同時性を有する一括資料としては理解できないものの、型式学的に大幅な隔りはないものと思われ、同時代性を有する共存資料として理解されるものと考えている。

〔土器〕（第80図、図版91）

（Ⅲ）層から、第Ⅲ－Ⅳ様式の水差・壺形土器２点が出土した。

水差形土器（１）　口径8.8cm、器高20.5cm、最大体径17.0cm、底径5.7cmをはかる。胴部の張る算盤玉状の体部から緩やかに屈曲して、斜上方に外傾して伸びる口頸部をもつ。口縁部は心



第80図　ＳＫ－16出土土器実測図（1/4）

もち内弯して、端部は丸くおさめている。肩部外面にあるヘラ描き沈線紋は、同じ高さのところに把手を付けるための目印か。口縁部外面には凹線紋２条を飾る。口頸部外面はヨコナデ、内面上半はヘラミガキ、下半はナデ、体部外面上位はハケ、中位・下位はヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

壺形土器（２）　口径13.6cm、器高22.1cm、最大体径19.4cm、底径5.3cmをはかる。卵形の体部から屈曲して短く直立する頸部に、強く外反する口縁部を有する。口縁端部は上下に拡張して、外面に凹線紋３条を飾る。肩部から頸部にいたる移行部は「U」字形に凹んでいる。おそらく、縄紐を巻くための凹みと思われる。体部外面上半はハケ状ナデ（磨いているという感じ）、下半はヘラケズリ、内面は指ナデ調整である。色調は黄褐色である（図版91－76）。

溝

ＳＤ－22（第84図、図版48）

トレンチ東側において、東－西に走行する弥生時代中期の大溝である。畿内第Ⅴ様式初頭の夥しい完形土器群を得たＳＸ－03及び弥生時代遺物包含層（第Ⅸ層）の除去後、第Ⅹ層上面にて検出した。北側は、予定掘削面のレベルに達していた為未調査であるが、幅2.6m、深さ0.8mをはかる。ＫＭ－Ｈ７調査区で検出している溝ＳＤ－26・27・29と同一方向に掘削されていることから判断して、これらの溝と同様に亀井集落を画する機能を有していた溝と思われる。溝ＳＤ－22を境にして、東側には第Ⅸ層の堆積は希薄になる。おそらく、弥生時代中期の亀井集落をかぎる東隅の一角に相当するのであろう。

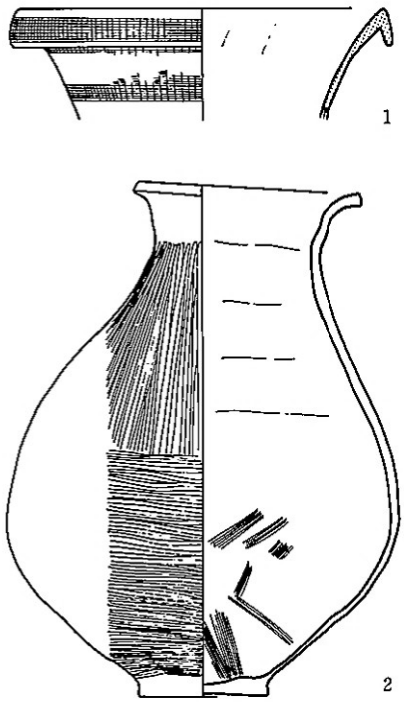
埋土は、４つの層に大別される。（Ⅰ）（Ⅱ）層は溝埋没後の凹みに堆積したと考えられる土層で、カーボン・焼土を多く含んでいる。（Ⅲ）層は自然堆積土と思われ、第Ⅲ－Ⅳ様式の土器，石器，木製品，動植物遺存体等が多く出土している。（Ⅳ）層は溝開削前後の自然堆積と考えられる。（Ⅲ）層から、完形に復元された大型台付鉢形土器が出土している（図版48ａ）。

〔土器〕（第81～83図、図版91・92）

（Ⅰ）～（Ⅲ）層から、壺・小型無頸壺・水差・鉢・大型鉢・大型台付鉢・高杯・甕・大型甕・大型蓋形土器等の器種資料が出土した。時期は第Ⅲ－Ⅳ様式である。（Ⅰ）層から（９）、（Ⅱ）層から（１・２・４・12）、（Ⅲ）層から（５～７・10・11・13・14）、（Ⅰ）～（Ⅱ）層から（３）、（Ⅱ）～（Ⅲ）層から（８）の出土をみている。

壺形土器（１・２）　（１）は口径19.2cmをはかり、色調は暗褐色を呈する。口縁部は大きく外反し、端部は粘土紐の附加によって下方に肥厚する。端部に簾状紋１帯、口縁部に簾状紋２帯を施す。生駒西麓産の胎土。（２）は口径11.7cm、器高27.1cm、体径20.7cm、底径6.8cmをはかる。下膨れの体部から短い頸部に短く外反する口縁部を有する。色調は淡茶褐色。体部外面はヘラミガキ、内面上位はハケ状ナデ、下位はハケ調整である。

小型無頸壺形土器（５）　口径3.4cm、器高4.4cm、底径2.9cmをはかるミニチュアである。内外面は指ナデ調整、色調は淡茶褐色を呈する。



第81図　ＳＤ－22出土土器実測図（1/4）

水差形土器（３）　口径10.5cmをはかり、口頸部外面に列点紋５帯、体部に簾状紋２帯以上を施している。把手上に14個の刺突紋を施す。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

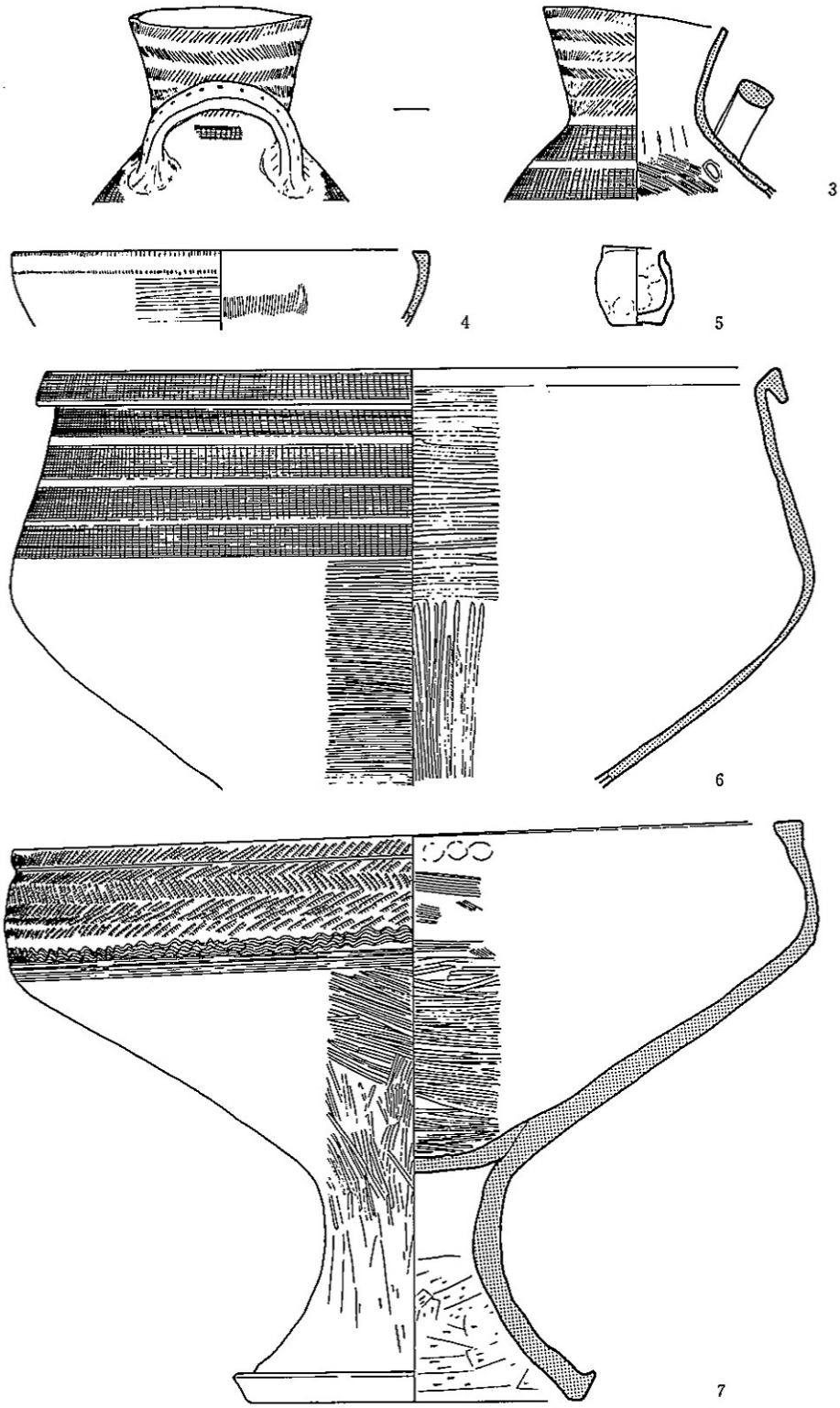
鉢形土器（４）　口径23.8cmをはかる。内弯ぎみに立ち上がる体部に直口する口縁部をもつ。端部は内側に突出させ平坦面を成す。端部の内縁および口縁部外面に刻目を施す。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産。

大型鉢形土器（６）　口径42.1cm、体径46.3cmをはかる。外に開く体部から屈曲して内傾、短く外反して、端部が下に拡張する口縁部をもつ。端部外面に簾状紋１帯、口縁部に簾状紋４帯を飾る。口縁部外面はナデ、内面はヘラミガキ、体部外面はヘラミガキ、内面はハケ後に雑なヘラミガキ調整を施す。色調は暗赤褐色を呈し、生駒西麓産の胎土。

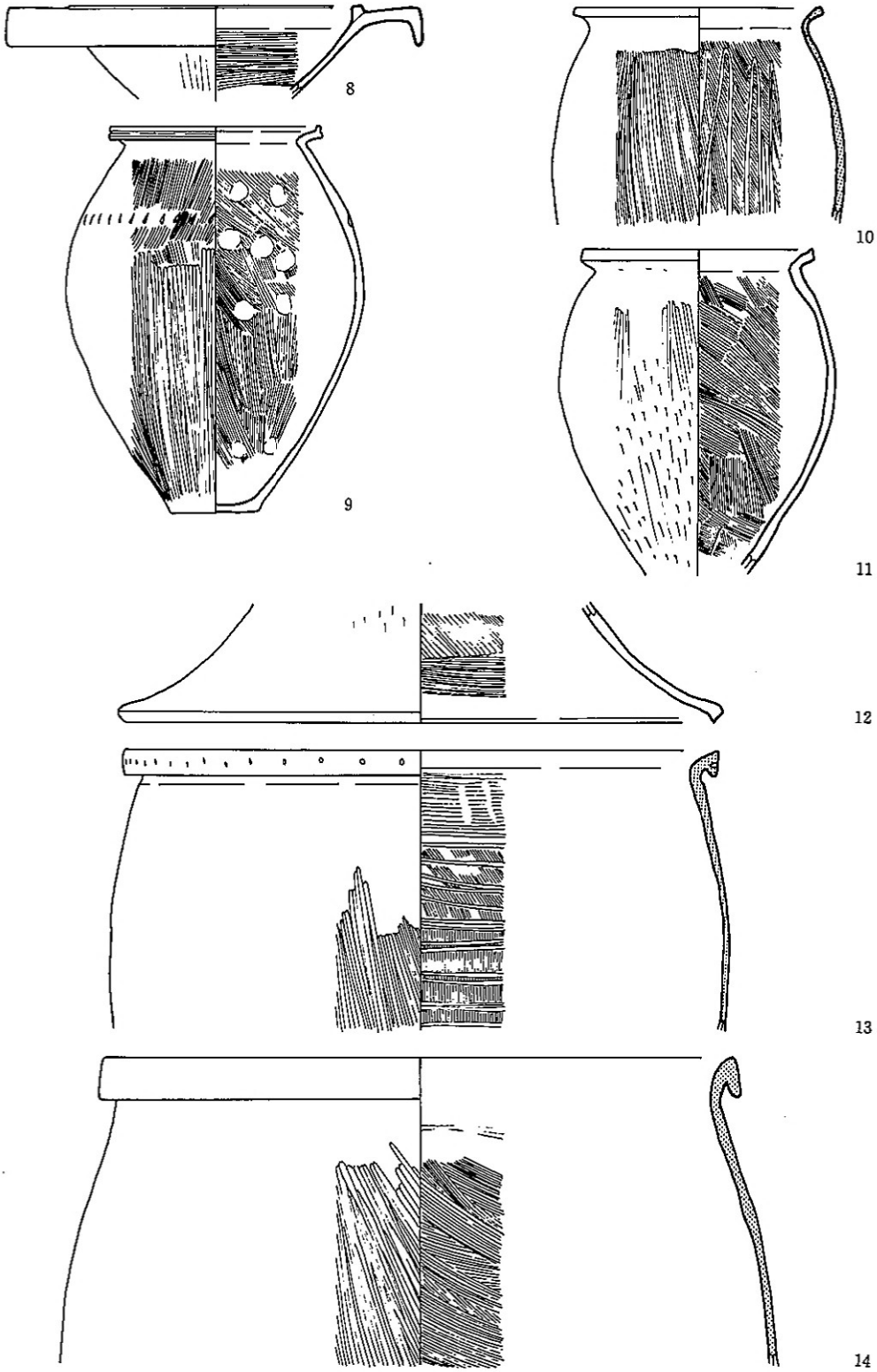
大型台付鉢形土器（７）　口径45.7cm、器高32.6cm、裾径18.9cmをはかる重量感あふれる土器といえる。体部から口縁部への移行は緩やかで、口縁部は内弯ぎみに立ち上がり、端部は内外に肥厚する。端部外面に列点紋１帯、口縁部には列点紋５帯、波状紋１帯、凹線紋２条を飾っている。口縁部外面上を飾る列点紋は、交互に向きをかえ綾杉状に配するようにしたものと思われるが、下方でくるいを生じた結果、併行する形となっている。口縁部内面はハケ、外面はナデ、体部内外面はハケ後にヘラミガキ、脚台柱状部外面上位はヘラミガキ、下位はヘラケズリ、内面上位はナデ、下位はヘラケズリ、裾部内外面はヨコナデ調整である。色調は暗赤褐色を呈し、生駒西麓産の胎土。

高杯形土器（８）　口径16.8cmをはかる水平口縁部をもつもので、端部は下方へ拡張する。口縁内端に、断面四角形の突帯を貼り付けている。体部内外面はヘラミガキ調整で、色調は淡茶褐色。

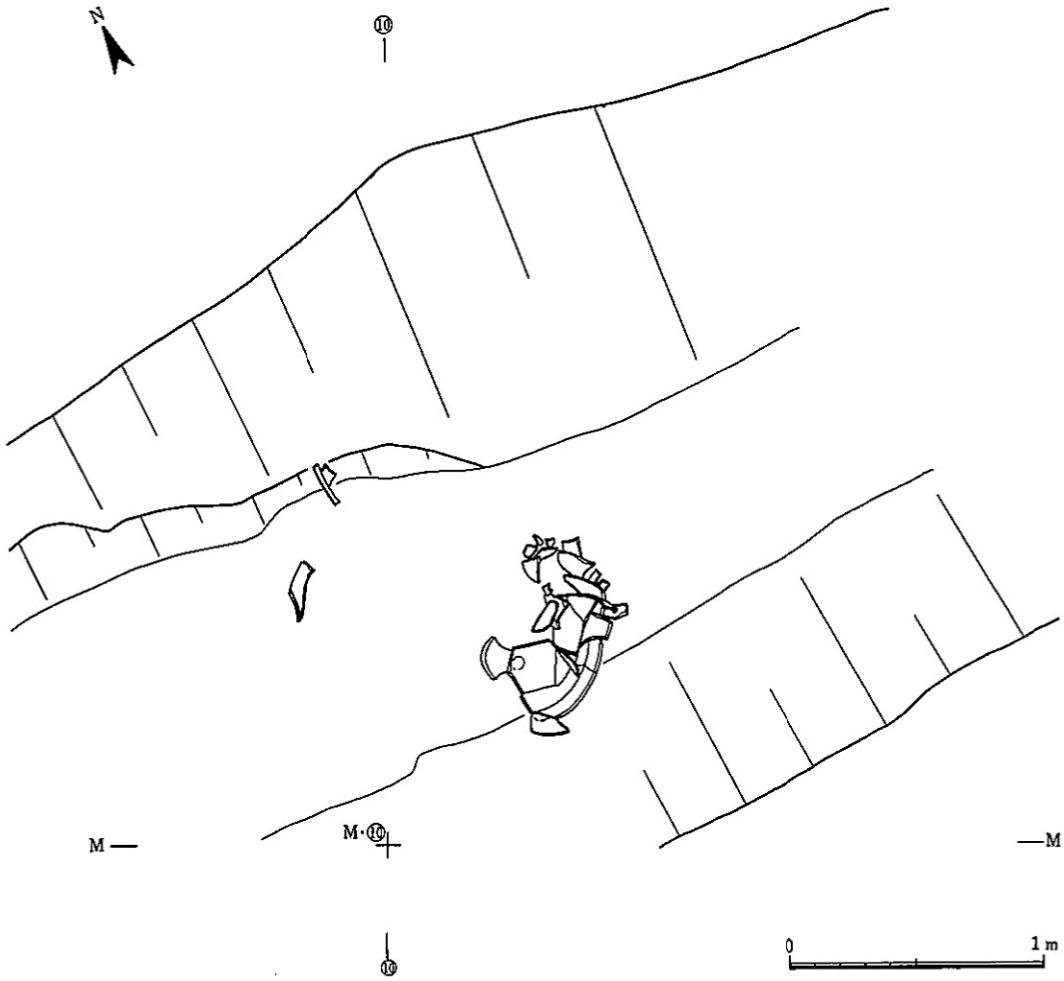
甕形土器（９～11）　「く」の字状に屈曲し面をもち、（９）は口径12.3cm、器高22.9cm、体径17.8cm、底径5.3cmをはかる。端部に凹線紋１条、肩部に刻目を施す。体部外面上位はハケ、下位はヘラミガキ、内面はハケと指ナデ調整である。色調は淡茶褐色。（10）は口径14.7cm、体径17.5cmをはかる。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ後に粗いヘラミガキ調整を施す。色調は暗褐色を呈し、内面に白色物質が附着している。生駒西麓産の胎土をもつ。（11）は口径13.6cm、体径16.3cmをはかる。体部外面はヘラミガキ後にヘラケズリ、内面はハケ調整である。色調は淡茶褐色。



第82図　ＳＤ－22出土土器実測図（1/4）



第83図　ＳＤ－22出土土器実測図（1/4）



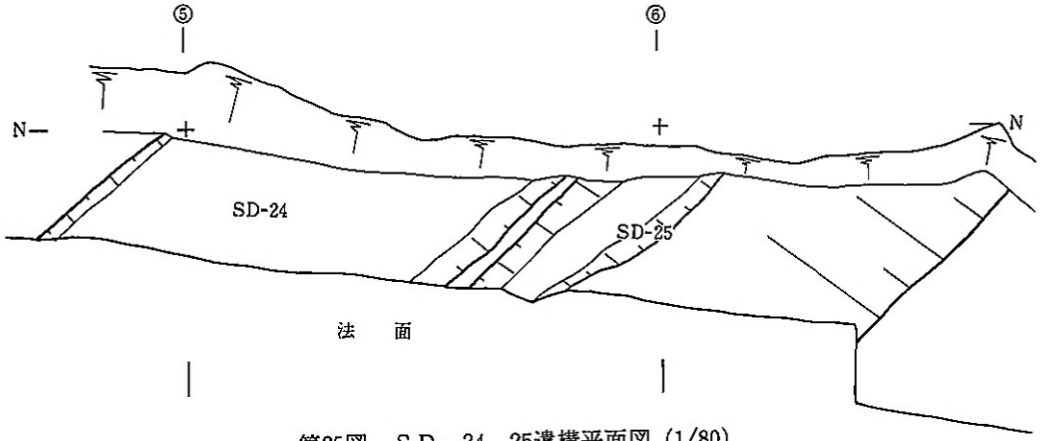
第84図　ＳＤ－22大型台付鉢形土器出土状況（1/30）

大型甕形土器（13・14）　口縁部は短く外反して、端部は下方に拡張する。生駒西麓産の胎土をもつ。（13）は口径35.6cm、体径37.1cmをはかり、端部に刺突紋を施す。体部外面上位はナデ、下位はヘラミガキ、内面はハケ後にヘラミガキ調整を施す。色調は茶褐色。（14）は口径37.4cmをはかる。体部外面上位はナデ、下位はヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は暗緑褐色を呈する。

大型蓋形土器（12）　口径35.3cmをはかる甕用蓋形土器である。外面はヘラケズリ、内面はハケ後にヘラミガキ調整を施す。色調は淡茶褐色。

ＳＤ－24（第85図、図版51a）

調査トレンチの西側において検出された。上部は、弥生時代後期の溝ＳＤ－09によって著しく削平されていたため、上面で確認することは出来なかった。規模は上部幅推定約4.9m、現存する深さは約1.0mをはかり、ＳＤ－25の埋土を切り込んで東－西に走行する大溝である。東側は



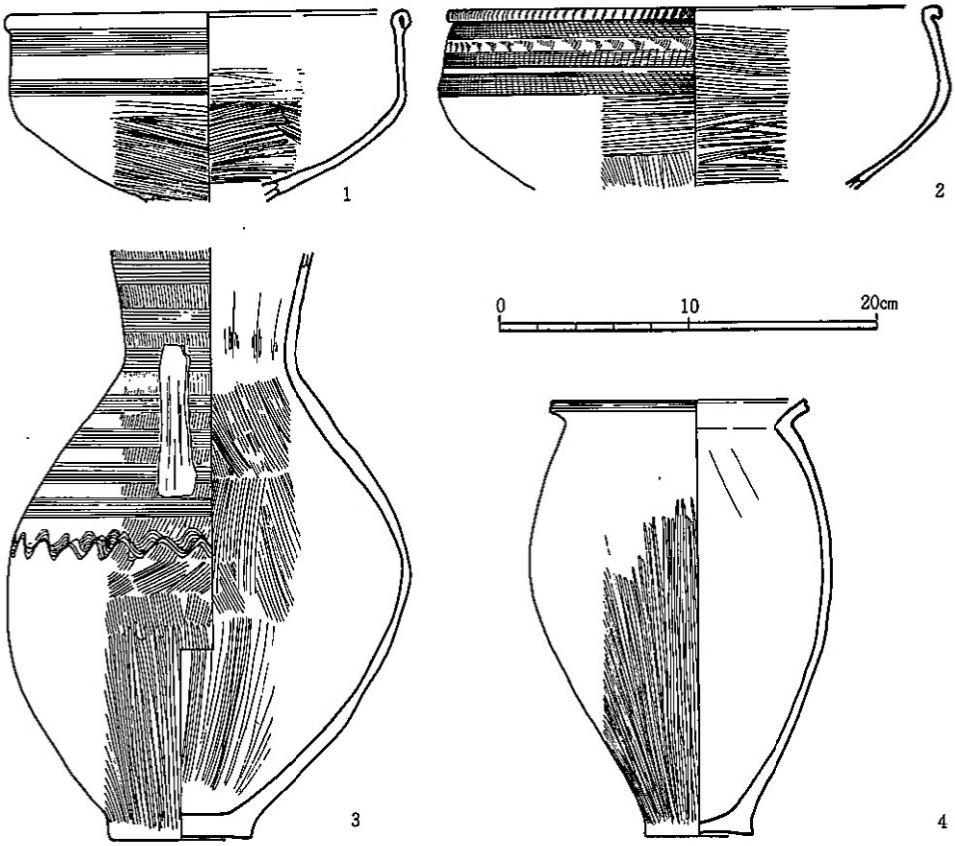
第85図　ＳＤ－24、25遺構平面図（1/80）

調査予定掘削面に達していたため未調査であり、検出全長は2.0mにすぎない。東、西側は調査区外に伸びている。調査は、限られた範囲であったが、第Ⅲ様式の土器、石器が出土している。

〔土器〕（第86図、図版92）

壺・鉢・甕形土器等の資料を得ている。時期は第Ⅲ様式である。

壺形土器（３）　口縁部を失うものの現高31.2cm、体径21.3cm、底径7.3cmをはかる。色調は



第86図　ＳＤ－24出土土器実測図

淡黄褐色を呈す。頸部から体部上半にかけて櫛描直線紋７帯＋α、波状紋１帯を施す。体部上位には乾燥時にヒビ割れを生じたのか、補修痕が観察された。頸部外面はハケ、内面は絞り目を残し、体部外面上半はハケ、下半はハケ後にヘラミガキ、内面はハケ調整である。

鉢形土器（１・２）　内弯ぎみに開く体部に屈曲して、直立および内傾する口縁部を有し、端部は折り曲げる。脚台部の付く可能性がある。（１）は口径20.6cm、体径20.9cmをはかり、色調は淡黄褐色を呈す。口縁部外面に櫛描直線紋２帯を施す。口縁部内面はヘラミガキ、体部は内外面ともにヘラミガキ調整である。（２）は口径25.8cm、体径26.9cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈す。口縁端部に刻目紋、口縁部に櫛描簾状紋１、扇形紋１、簾状紋２帯を施す。口縁部内面はヘラミガキ、体部は内外面ともにヘラミガキ調整である。

甕形土器（４）　口径13.4cm、器高23.0cm、体径16.1cm、底径5.7cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈す。口縁部はくの字状に屈曲して、面をもつ。口縁端部に凹線紋１条を施す。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。

ＳＤ－25（第85図、図版92）

調査トレンチの西側で検出された。上部は、弥生時代後期の自然河川ＳＤ－11の流路にあたっており、著しく削平されていた。西肩は、ＳＤ－24に破壊されていた。規模は東－西に走行する上部幅推定約5.0m、現存する深さ約1.0mをはかる。東側は調査区外に伸びている。出土遺物は、弥生時代中期の土器片と石器が出土している。時期は、ＳＤ－24との重複関係から、弥生時代中期以前に推定されよう。

第２項　弥生時代後期

井戸

ＳＫ－17（第87図、図版41・42）

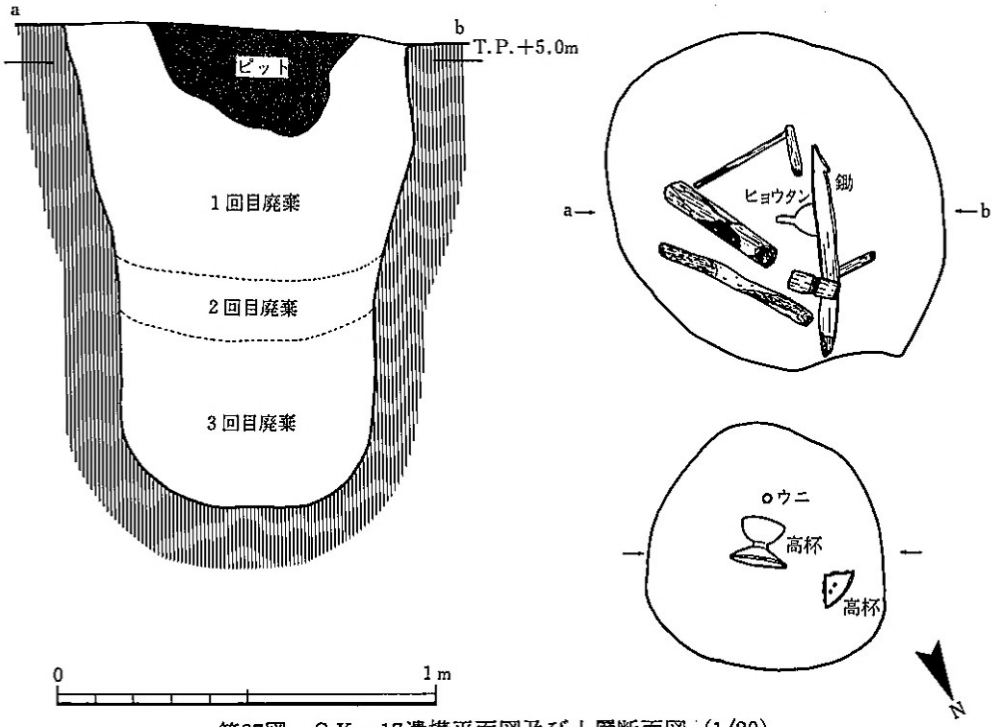
M'・⑫地区において検出した弥生時代後期末の井戸である。平面は不整円形で、断面形態は下ぶくれの台形を呈し、第Ｘｉ層暗灰色シルトまで掘削されている。規模は径1.0×0.8m、検出した面からの深さは約1.26mをはかる。上部は、径0.54m、深さ0.26mのピットによる攪乱をうけていた。

井戸内に堆積していた土層は単純で、青灰色粘質土・シルト（有機物を多量に含む）によって充填されている。これは、自然堆積と思われる。

遺物の平面的な出土状況より推して、３回にわたる垂直的な遺物の拡がりがみられた。第１回目はツル状の植物によって編まれた籠と少量の土器片を含んでいた（図版42ａ）。第２回目は小型椀形高杯完形品１とウニ（図版41ｂ）、第３回目は自然木に混ってヒョウタン５個・木製錘・二又鋤・鋤の柄を含んでいた（図版41ａ）。ヒョウタンはいずれも完形で、中にはぎっしりと種子が入ったままであった。下腹部には径１cmの円孔を穿っていた。

〔土器〕（第88図）

壺・鉢・甕・高杯形土器等の器種資料がある。時期は第Ⅴ様式後半である。

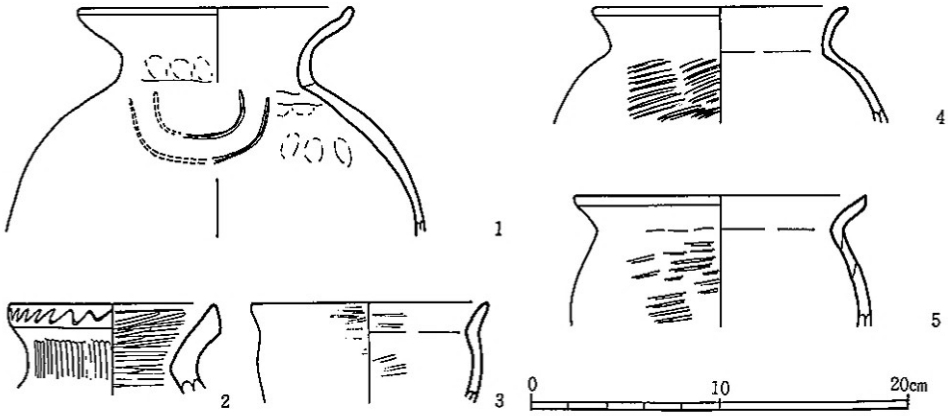


第87図　ＳＫ－17遺構平面図及び土層断面図（1/20）

壺形土器（１・２）　（１）は口径14cm、現高12cmをはかる。体部下半を失うが、球形の体部に、外反して短く直立する頸部から内弯ぎみに開く口縁部を有する。肩部にヘラ描きによる「Ⅷ」字形の記号文を施す。調整は磨滅のため不明である。色調は灰白色。（２）は口径 10.7 cmをはかり、口縁部外面にヘラ描き波状紋を施している。頸部内外面はヘラミガキ、口縁部内面はヘラミガキ、外面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。

鉢形土器 (3)　口径12.3cmをはかり、椀状の体部から緩やかに外反して、斜め上方に立ち上がる口縁部を有する。調整は磨滅のため不明である。色調は淡黄褐色。

甕形土器（４・５）　（４）は口径13.4cmをはかり、口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。



第88図　ＳＫ－17出土土器実測図（1/4）

体部外面はタタキ、内面はナデ調整である。色調は灰白色。（５）は口径15.4cmをはかり、口縁部は「く」の字に屈曲している。体部外面はタタキ、内面はナデ調整である。色調は灰白色。

溝

ＳＤ－09

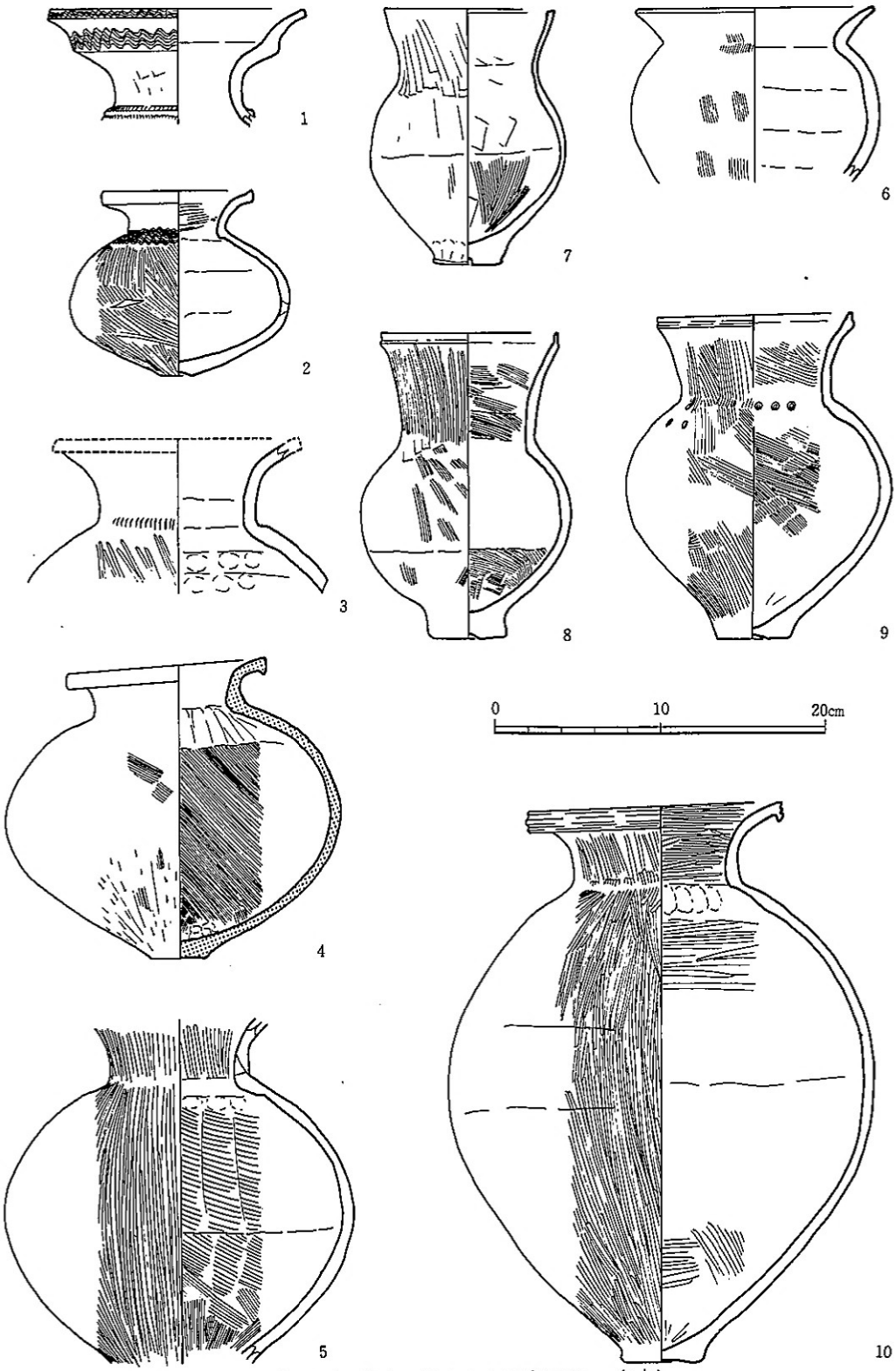
トレンチ西端にて検出した東から西へ流れる大溝である。南に併行して流れる自然河川ＳＤ－11とは、本地点で合流して、ＫＭ－Ｈ４調査区へ伸びている。調査面積が限定されていたものの埋土である砂層中から、多量の弥生時代中期～後期の土器をはじめとして、石器、自然木片等が出土している。

〔土器〕（第89図、図版92・93）

コンテナ30杯分の土器を得ているが、ここでは後期後半の代表的なものに限って図化している。第Ⅴ様式後半の壺・小型長頸壺・小型甕形土器等の器種である。

壺形土器（１～５・７・９・10）　（１）は口径15cmをはかる二重口縁壺である。口縁外面及び端部に櫛描波状紋を各１帯飾る。頸部には断面台形の貼り付け突帯を施し、その上下縁に刻目を加えている。調整は表面磨耗のため不明。色調は灰白色。（２）は口径９cm、器高11.3cm、体径13.3cm、底径1.9cmをはかる。扁平な体部に、外反して開く口頸部を有する。肩部に櫛描波状紋１帯を飾る。頸部内面はヘラミガキ、体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は暗黄橙色。（３）は球形の体部から屈曲して、短く直立する頸部に、外反して上方に開く口縁部をもつ。肩部外面に14個の刻目を施す。色調は黄褐色。（４）は口径12cm、器高17.7cm、体径20.3cm、底径3.3cmを呈し、（２）の土器を一回り大きくしたものである。体部外面上半はハケ、下半はヘラケズリ後にハケ、内面上半は指頭圧痕、下半はハケ調整である。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。（５）は現高20cmをはかる。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は褐灰色。（７）は口径10.2cm、器高15.5cm、体径11.7cm、底径4.2cmをはかる。球形の体部から緩やかに頸部へ移行して、口縁部は内弯ぎみに立ち上がる。頸部外面はハケ状ナデ、内面はハケ、体部外面上半はハケ状ナデ、下半はナデ、内面上半はナデ、下半はハケ調整である。色調は灰白色。（９）は口径11.6cm、器高19.6cm、体径16cm、底径4.5cmをはかる。やや肩の張る体部から屈曲して、上方に外反する口頸部を有する。端部は上方につまみあげ、凹線紋一条をめぐらす。肩部に、円形竹管の記号文「∴」「…」を施す。頸部から体部内外面はハケ調整である。色調は暗褐色。（10）は口径15.0cm、器高33.5cm、体径25.7cm、底径4.8cmをはかる。長胴な体部から屈曲して、短い頸部に、外反して開く口縁部を有する。端部は下方に肥厚して、凹線紋３条をめぐらす。頸部内外面はヘラミガキ、体部外面はヘラミガキ調整である。色調は暗黄褐色。

小型長頸壺形土器（８）　口径10.3cm、器高18.5cm、体径12.6cm、底径4.6cmをはかる。球形の体部に、外反して上方に伸びる口頸部を有する。端部は上方につまみ上げ、外面は緩やかに凹んでいる。頸部外面はヘラミガキ、内面はハケ、体部外面はハケ、内面上半はナデ、下半はハ



第89図　ＳＤ－09出土土器実測図　(1/4)

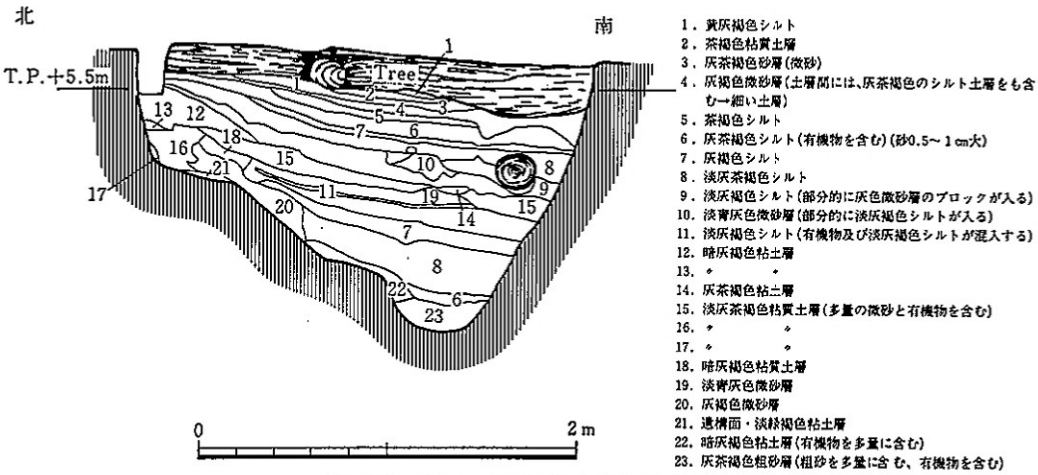
ケ調整である。色調は暗橙色。

小型甕形土器（６）　口径14cm、体径15cmをはかる。球形の体部に、くの字形に外反する口縁部を有する。体部外面はハケ、内面は粘土紐の継ぎ目が顕著に残る。色調は暗赤褐色。

ＳＤ－23（第90図、図版43）

トレンチの東端で、第Ⅶ層青灰色シルト除去後に、検出した。東西走する幅約4.1m、深さ約1.4mをはかる弥生時代後期前半の大溝である。西側にて、後期初頭のＳＸ－03を切り込んでいる。北側は、調査レベルが予定掘削面に達していたので、上面（Ｔ.Ｐ.＋5.3m）で調査を終えている。

埋土は、青灰色シルト・粘土の互層であることから緩やかな流れによる堆積と考えられる。埋土最上位にて、溝の方向に対して直角に、横断するような形で、径55cmをはかる大木を検出した。大木の半ばは調査範囲外にあり、全長は不明。樹種はケヤキ属である。出土状況から考えて、



第90図　ＳＤ－23土層断面図（1/40）

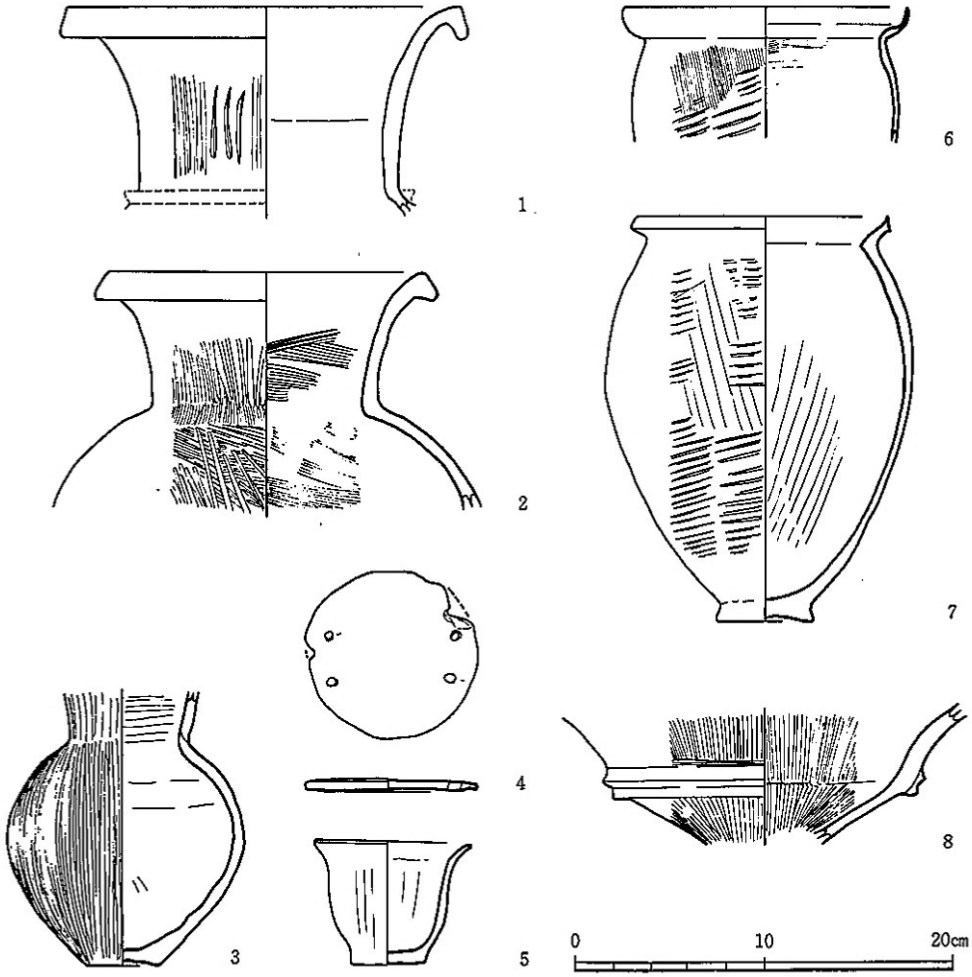
押し流されたものとは思われない。人為的に渡したものとすれば、溝を横断するための橋と考えることも可能であろう。遺物は第Ⅴ様式の土器、石器、動植物遺存体、自然木片等が出土している。遺物の出土量は少ない。

〔土器〕（第91図、図版93）

第Ⅴ様式の壺・小型壺・蓋・小型甕・甕・高杯形土器等の資料をコンテナ２杯分得ている。

壺形土器（１・２）　体部から外傾ぎみに短く直立する頸部に、外反して開く口縁部を有する。端部は下方に拡張する。（１）は口径20.8cmをはかり、くびれ部に突帯を貼り付ける。頸部に３本のヘラ描き記号文を施す。色調は淡茶褐色。頸部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。（２）は口径16.6cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈す。口縁端部上縁に４個１組の刻目を４ケ所に施す。頸部・体部外面はハケ後にヘラミガキ、内面はハケ調整である。

小型壺形土器（３）　現高14.5cm、体径12.7cm、底径3.8cmをはかる。色調は淡茶褐色。球形の体部に、頸部は外傾する。頸部外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ、体部外面はヘラミガキ、



第91図　ＳＤ－23出土土器実測図（1/4）

内面はナデ調整である。

蓋形土器（４）　口径9.1cm、器高0.7cmをはかる。色調は淡褐灰色を呈し、外面に黒色物質が附着する。２孔１対の紐孔を２個穿つ。内外面はともにナデ調整である。

小型甕形土器（５）　口径8.1cm、器高6.5cm、底径3.9cmをはかるミニチュア品である。色調は淡茶褐色を呈す。内外面はともにナデ調整である。

甕形土器（６・７）　（６）は口径15.0cm、体径14.2cmをはかる。口縁部は受け口状をなす。色調は、淡茶褐色を呈す。体部外面はタタキ後にナデ、内面はナデ調整である。（７）は口径13.3cm、器高21.3cm、体径16.1cm、底径5.2cmをはかる。長胴の体部にくの字状に外反する口縁部をもつ。色調は淡茶褐色。体部外面はタタキ後にナデ（上半部）、内面はナデ調整である。

高杯形土器（８）　エンタシス状の柱状部を有すると思われる杯部片である。外傾して直線的に開く体部に外反して開く口縁部を有する。体部と口縁部の境に突帯を貼り付けている。器内外面はともにヘラミガキ調整である。色調は淡茶褐色。

自然河川

ＳＤ－11

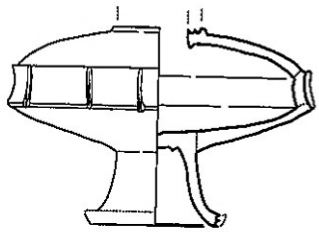
トレンチ西端にて検出した東から西へ流れる自然河川である。本地点で、後期の溝ＳＤ－09と合流して、ＫＭ－Ｈ４調査区からポンプ場本体部へ続いている。

埋土は、細礫を混じえた粗粒砂～細粒砂（植物遺体を含む）の砂層で、これらの砂層が複雑な堆積状況を呈し、激しい水の流れを想定できる。遺物は、調査面積が限定されていたにもかかわらず多量の完形品を含む弥生時代中期から後期の土器、石器、木製品（槽・高杯）、自然木等が出土している。

〔土器〕（第92図、図版93－85）

コンテナ32杯分の土器が出土した。整理の都合上及びＫＭ－Ｈ７調査区で代表的な器種を抽出図化しているので、ここでは類例の少ない台付細頸壺形土器１点を図化するにとどめた。

台付細頸壺形土器（１）　現高10.5cm、最大体径16.2cm、底径6.5cmをはかる。体部外面中位に、棒状浮紋を貼り付けている。体部外面上位はタテヘラミガキ、中位はヨコナデ、下位および脚部内外面は表面磨耗のため不明。体部内面上位は絞り目を残す、中位はナデ、下位はハケ状ナデ調整である。色調は淡茶褐色を呈する。



第92図　ＳＤ－11出土土器実測図（1/4）

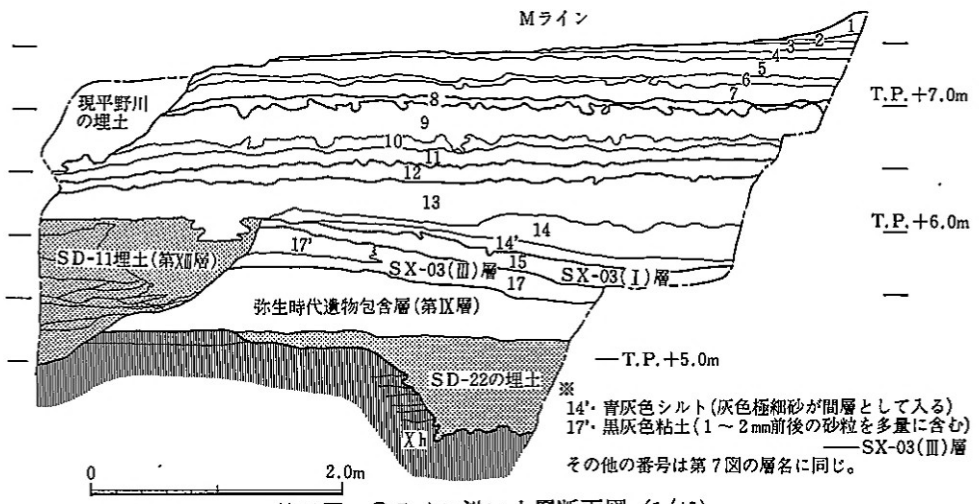
その他の遺構

ＳＸ－03（第93～96図、図版42～46）

⑨～⑩ラインにかけて、青灰色シルト第Ⅶ層除去後に、検出された土器集積遺構である。西側は自然河川ＳＤ－11、東側は後期の溝ＳＤ－23によって破壊されている。さらに、北、南側は調査区外にあるため、遺構の平面的な拡がりは明らかではない。現時点では、東西約14m、南北約５ｍの範囲内に遺物の集積がみられる。深さ（層厚）は、南壁土層断面及び⑩ライン沿い土層断面から、約0.3～0.33mをはかる。

埋土は３つの層に分けられる。（Ⅰ）層は青灰色粘土、（Ⅱ）層は１～２mm前後の砂粒を多量に含む青灰色粘土、（Ⅲ）層は暗青灰色粘土である。（Ⅱ）層は、Ｍライン以北には堆積していない。（Ⅰ）～（Ⅱ）層から、多量の完形品を含む数百個体の第Ⅴ様式初頭の土器、石器、土製品が出土している。土器の大半以上は（Ⅰ）層中に含まれていた。

調査は、まず⑩ラインに沿って土層断面観察用のあぜをもうけ、このあぜを界して東西に二分して行った。東、西地区調査終了後、⑩ラインあぜ内の調査に着手した。土器を包含していた青灰色粘土は、粘性が強く、ほとんど有機物を含まないもので、土器に密着していたため検出作業は困難を極めた。土器は出来うる限り出土状態のまま残すようにこころがけ、土器１点ごとに番号を与えて取り上げを行なった。ただし、割れて散在していた小破片は、現位置のままにしての調査は無理であったので、特に土器出土量の夥しい東地区に関しては、便宜的に１×１ｍの方形



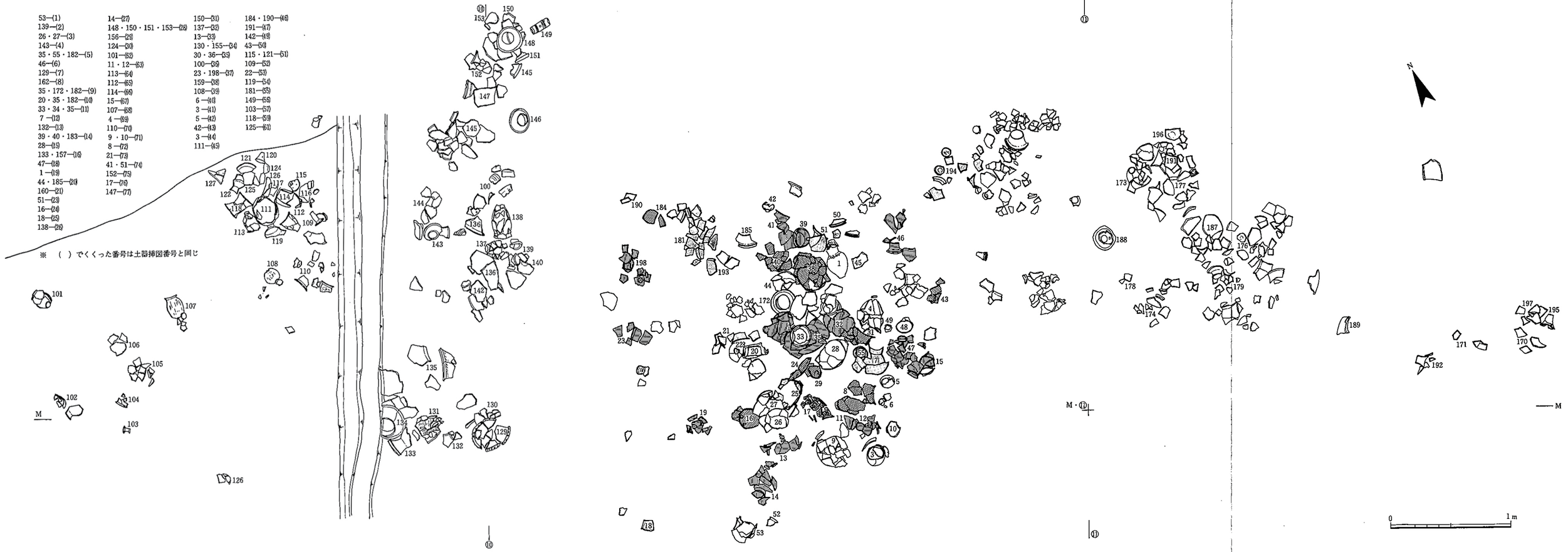
第93図　⑩ライン沿い土層断面図（1/40）

区画を設定して（第96図）、検出作業に支障をきたす小破片は、その地区ごとに取り上げている（図版42ｂ）。出土遺物には、第Ｖ様式初頭の一括土器、石庖丁等の石器がある。

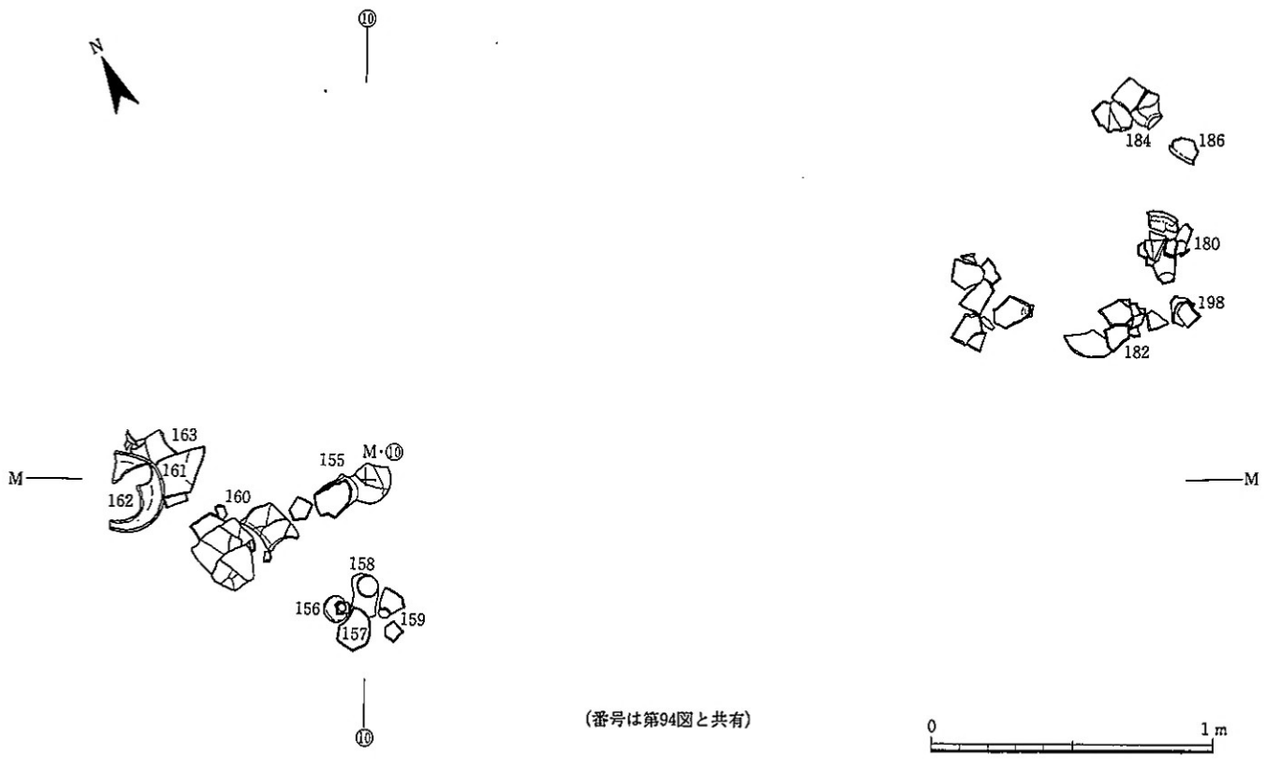
〔遺物出土状況〕　出土土器の大半は、廃棄された時点では完形を保っていたものと思われ、まとまった状態で出土している。西地区では、一定の範囲内に壺（第103図30）・高杯（第106図51・54）・甕（第107図61・62・64・65）・器台（第107図59）・台付無頸壺形土器（第105図45）等が相接して出土している（図版46ａ）。この土器群は出土状況からして、廃棄の同時性（または、使用時の同時性）を有する一括資料として理解される。また、意図的か否かの判定は明らかではないが、大型台付無頸壺形土器を中心として、甕形土器４点、高杯形土器２点、器台形土器２点をその回りに配列したような状況を呈していた（図版46ｂ）。大型台付無頸壺形土器をのぞく他の器種は、いずれも小型品であった。

東地区では、ほぼ全域にわたって土器の出土がみられた。特に、９～10・14～16・20～22・28・29・33～35・39・40地区の範囲内に集中していた（図版43～44）。45～４8地区より以東は激減していく。土器の出土は、散在した状況ではなく、密着集合して、重なり合うような状況を示していた。器種では、大型壺形土器が15地区の小さな範囲に６個体集合して出土している点、あたかも好んで配置させたと想像させる状況であったのは注目されよう。また、20地区では、セットをなす無頸壺形土器（第105図44）と、蓋形土器（第105図41）が重なるようにして出土している（図版44ｂ）。出土土器の分布からみた場合、⑪ライン以東には大型土器（主に壺・甕）の出土はほとんどなく、14～16地区、21・22地区に限定される。また、器種の中で、長頸壺形土器の出土が著しく少ない点、無頸壺・台付無頸壺形土器の出土が目立っている点、第Ｖ様式初頭の様相を如実に示しているものと云えよう。

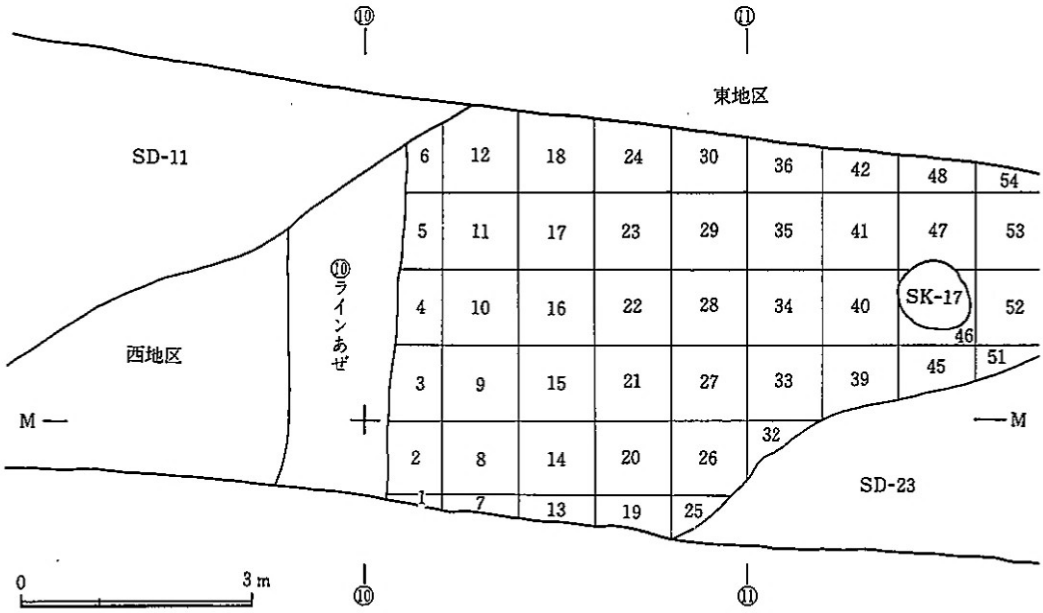
⑩ラインあぜ内では、満遍なく分布している。東地区同様に、南側に大型壺形土器５点が集中して出土している（図版45ａ）。



第94図　ＳＸ－03遺物出土状況（1/25）　第１回目



第95図　ＳＸ－03遺物出土状況（1/25）　第２回目



第96図　ＳＸ－03地区割り図（1/100）

〔土器〕（第97～110図、図版96～110）

コンテナ150杯の多量の土器中から、各器種ごとに抽出している。なお、今回報告する以外にも完形もしくは完形に近いものが多量にある。

壺・短頸壺・長頸壺・台付鉢・小型鉢・無頸壺・台付無頸壺・高杯・器台・小型甕・中型甕・大型甕形土器等の器種資料がある。時期は第Ⅴ様式で、この土器群をもって、第Ⅴ様式初頭に位置づけたい。

東地区から（1・3・5・6・9～12・14・15・17～20・22～25・27・33・35～37・40～44・46～48・50・53・55・58・63・67～69・71～74・76)、西地区から（30・39・45・51・52・54・57・59・61・62・64～66・70)、⑩ラインあぜ内から（2・4・7・8・13・16・21・26・28・29・31・32・34・38・49・56・60・75・77）の出土をみている。

壺形土器（1～17・20・28～30・35）　（1）は口径11.9cm、器高20.6cm、体径16.8cm、底径5.2cmをはかる。体部上半に、ヘラ描きによる格子状の記号文を施している。口頸部内外面はタテヘラミガキ、体部外面はタテヘラミガキ、内面上半はハケ、下半はナデ調整である。色調は淡赤褐色。（2）は口径14.0cm、器高25.9cm、体径19.0cm、底径6.4cmをはかる。胴中位に最大径をもつ長胴の体部に、屈曲して斜め上方に外反する口頸部を有する。端部は粘土紐を附加して、下方に肥厚する。頸部内外面はナデ、体部外面上半はナデ、下半はヘラミガキ、内面上半はハケ、下半はヘラケズリ調整である。外面の色調は灰白色、内面は黒色を呈する。（3）は現高 22.5cm、体径23.5cm、底径6.3cmをはかる。くびれ部には断面三角形の突帯を貼り付けている。外面に赤色顔料を塗布している。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ状ナデ調整である。色調は暗緑灰色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ長頸壺形土器の可能性もある。

（4・5）は短く直立する頸部に、外反して開く口縁部を有し、端部は下方に拡張する。（4）は口径14.4cmをはかり、口縁端部には、9本の線刻が見られる。頸部外面はハケ、内面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。（5）は口径14.2cm、器高25.9cm、体径26.5cm、底径6.4cmをはかる。体部外面はヘラミガキ、内面上半は絞り目と粘土紐の継ぎ目を残す、下半はハケ調整である。色調は淡黄褐色。

（6）は口径16.7cm、推定器高32.5cm、体径25.9cm、底径5.4cmをはかる。胴中位の張る体部から緩やかに頸部に移行して、口頸部は外反して開く。端部は上下にやや肥厚させる。くびれ部に3条の凹線紋、体部上半に櫛描波状紋5帯を施している。頸部外面はハケ、内面はナデ、体部外面上半はハケ、内面はナデ調整である。色調は灰白色。胎土・混和材から、他地域産のものと思われる。

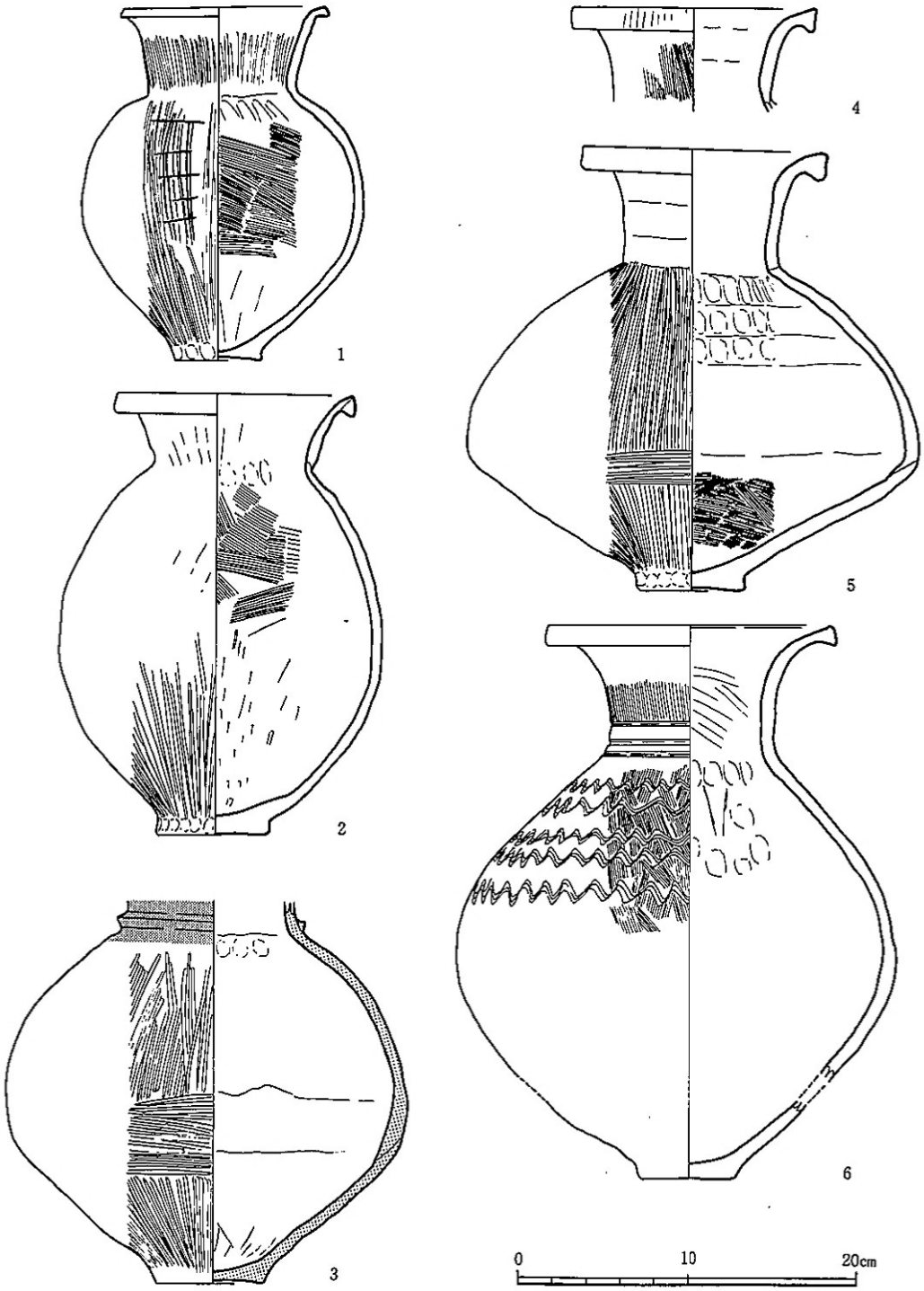
（7・8）はいずれも斜め上方に外反して、大きく開く大型壺形土器の口頸部で、端部は下方に粘土紐を附加して拡張している。（7）は口径29cmをはかり、端部外面、口縁部内面に円形浮紋を貼り付けている。色調は灰白色を呈す。口頸部内外面はヘラミガキ調整である。（8）は口径28.2cmをはかる。口頸部外面はハケ、内面はハケ状ナデ調整である。口縁部と頸部は、別々の粘土でつくられ、色調は口縁部黄褐色、頸部淡褐色を呈している。生駒西麓産の胎土をもつ。

（9・20・28・35）は口径20.1cm～22.6cm、器高42.0～48.3cm、最大体径32.6～36.9cmをはかる超大型品である。胴の張る体部に、斜め上方に外反して開く口縁部を有し、端部は下方に拡張する。同タイプの土器は、調査例多しといえども未だ類例の少ないもので、ほぼ同該期に併行すると考えられる溝ＳＤ－06・12・14からも出土していない。現在のところ系譜関係をみいだしえない土器といえ、大型壺形土器の中でも特定の機能・用途を有していたものと考えられよう。

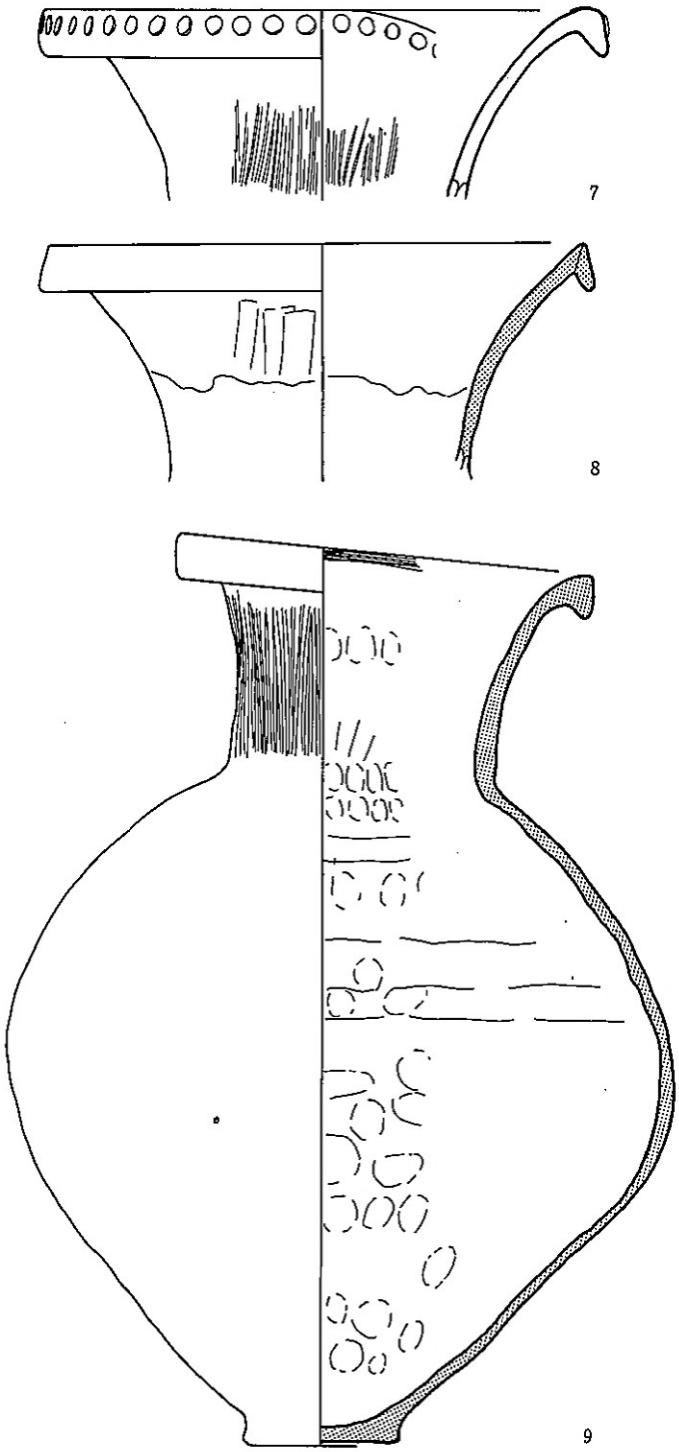
（9・28・35）は生駒西麓産の胎土をもつ。（9）は口径21.9cm、器高48.3cm、体径35.3cm、底径8.0cmをはかる。器壁は約0.7cmと他の3点に比べて薄手作りである。口縁部外面はナデ、内面はヘラミガキ、頸部外面はヘラミガキ、内面はナデ、体部外面は表面磨滅のため不明であるが、部分的にヘラミガキが観察された。内面は指頭圧痕とナデ調整である。（28）は口径21.3cm、現高41.5cm、体径32.6cmをはかる。胴の張りはやや弱い。上下に拡張した口縁端部に、2条の凹線紋を廻らしている。口縁部内外面はヨコナデ、頸部内外面はハケ、体部外面はヘラミガキ、内面上半はハケ、下半は指ナデ調整である。（35）は口径20.1cm、器高47.5cm、体径36.9cm、底径7.7cmをはかる。口縁端部外面には、ヘラ状工具による「||」の記号文を描く。頸部外面はヘラミガキ、内面はナデ、体部外面はヘラミガキ、内面上半はハケ、下半はナデ調整である。

（20）は口径22.6cm、器高42.0cm、体径33.6cm、底径7.7cmをはかる。肩部には、円形竹管紋4個の「‥‥」記号文を有する。口縁部外面はヨコナデ、内面はヘラミガキ、頸部外面はハケ後にヘラミガキ、内面は表面磨滅のため不明。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は淡黄褐色（図版100－123）。

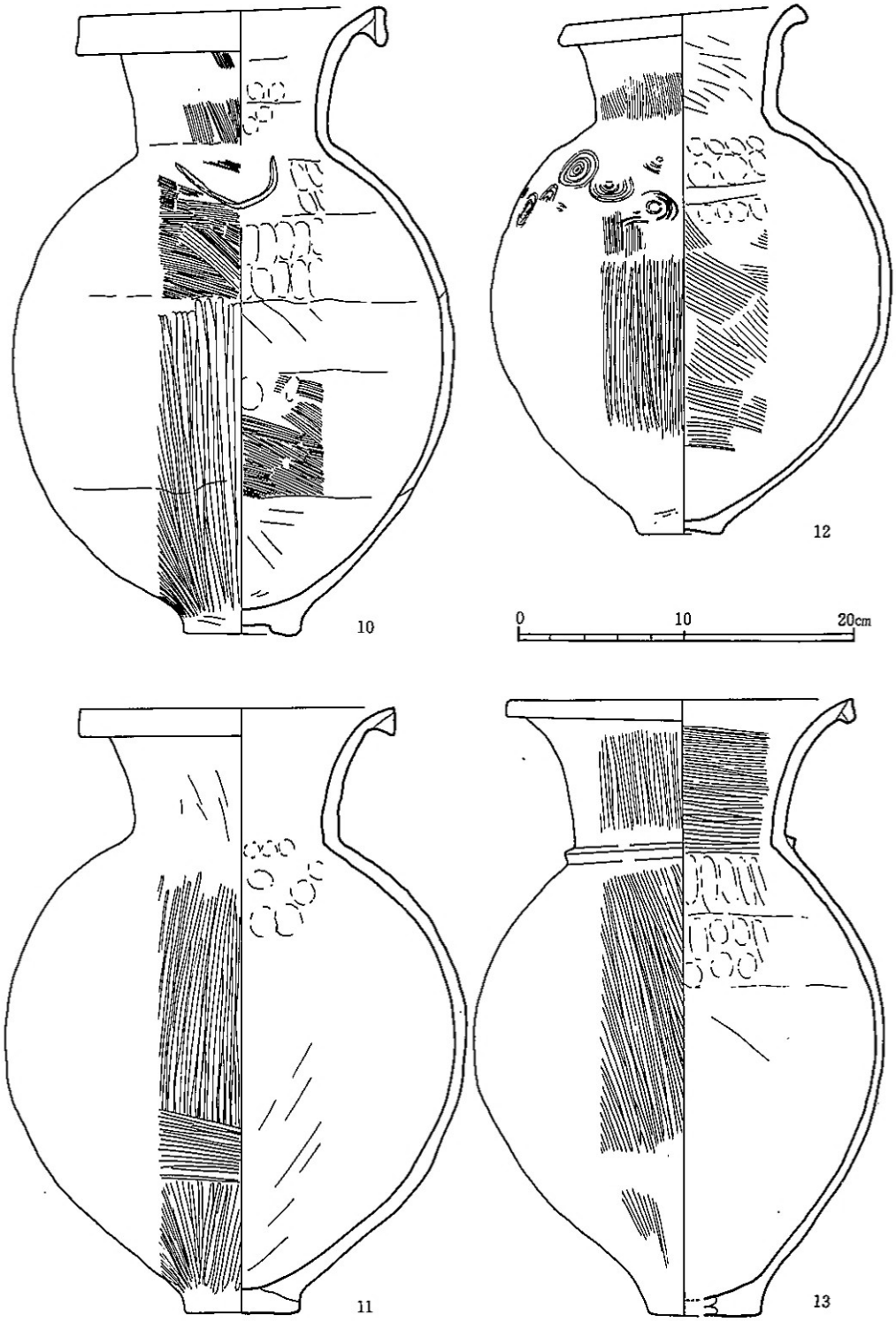
（10～17）は口径14～20cm、器高32～37cm、体部最大径23～27cmをはかるものである。卵形



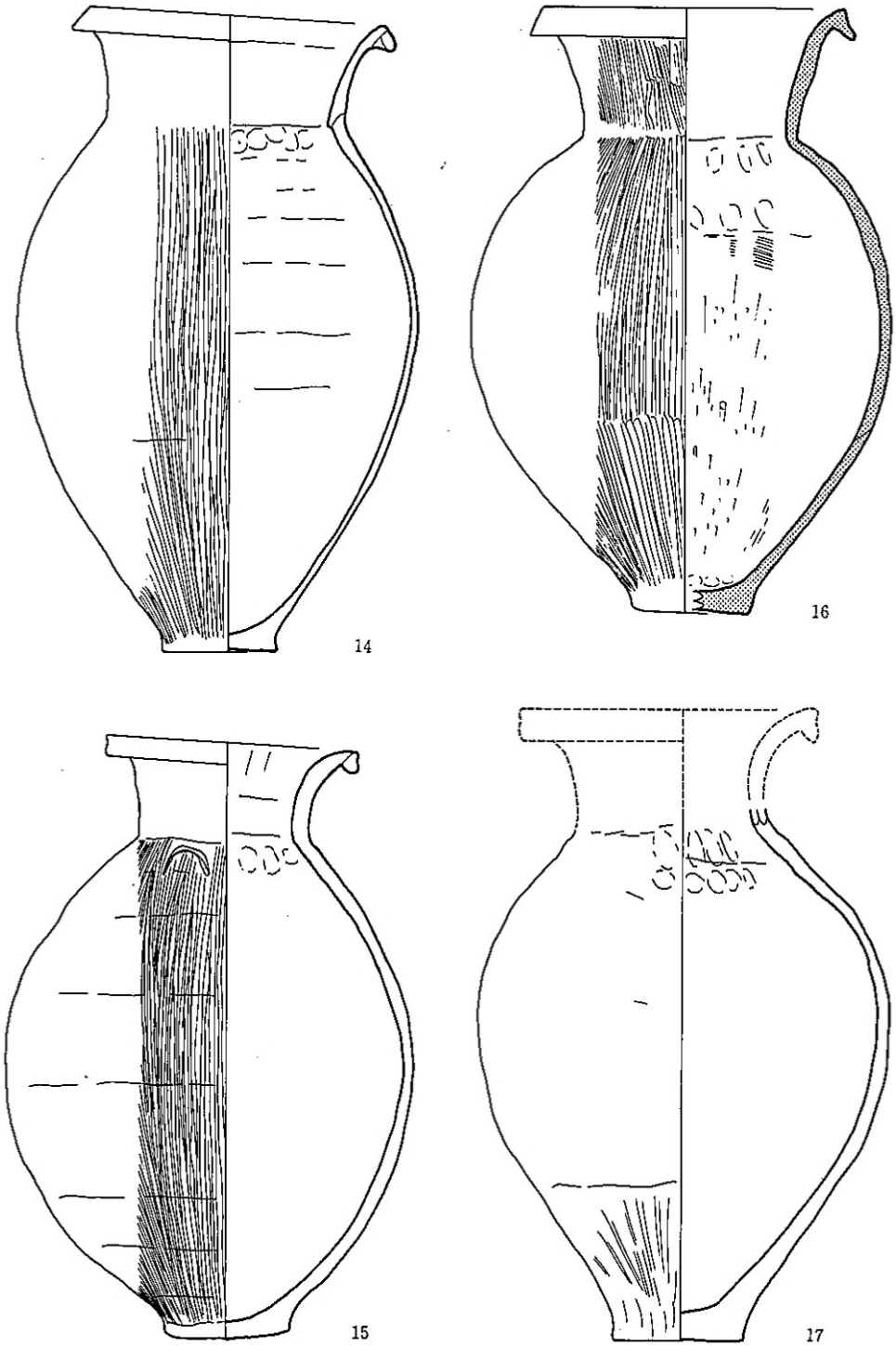
第97図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）



第98図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）



第99図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）



第100図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）

の体部のもの（10）、球形の体部を有するもの（11・12）、無果花形のもの（13・16・17）、長胴のもの（14）、胴下半に最大径をもつ長胴のもの（15）等バラエティがあり、口頸部は外反もしくは外傾して上方に立ち上がる。端部は粘土紐を附加して下方に拡張させる。

（10）は口径17.8cm、器高37.1cm、体径26.2cm、底径6.9cmをはかる。肩部にヘラ描による記号文「U」を有する。頸部外面はハケ、内面はナデ、体部外面上半はハケ、下半はタテヘラミガキ、体部内面上半は指頭圧痕、下半はハケ調整である。色調は淡茶褐色。

（11）は口径18.9cm、器高36.0cm、体径27.5cm、底径6.8cmをはかる。頸部外面はハケ状ナデ、内面はナデ、体部外面はヘラミガキ、内面上半は指頭圧痕、下半はハケ状ナデ調整である。色調は淡黄褐色。（12）は口径13.9cm、器高30.8cm、体径23.9cm、底径4.8cmをはかる。体部上半には同心円紋のスタンプを2/3周施す。頸部外面はハケ、内面はハケ状ナデ、体部外面上半はハケ、下半はヘラミガキ、内面上半は指ナデ、下半はハケ調整である。色調は暗赤褐色。

（13）は口径20.4cm、器高36.7cm、体径24.5cm、底径6.8cmをはかる。くびれ部には断面三角形の突帯を貼り付けている。頸部外面はヘラミガキ、内面はハケ、体部外面はヘラミガキ、内面上半は指ナデ、下半は表面磨滅のため不明。色調は淡茶褐色。（16）は口径17.3cm、器高34.3cm、体径23.9cm、底径6.5cmをはかる。口頸部外面はヘラミガキ、内面はナデ、体部外面はヘラミガキ、内面上半はハケとナデ、下半はヘラケズリ調整である。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。（17）は口頸部を欠くが、現高30.4cm、体径23.5cm、底径7.5cmをはかる。体部外面上半はナデ、下半はヘラミガキ、内面は表面磨滅のため不明。色調は淡赤褐色。

（14）は口径16.8cm、器高36.2cm、体径22.8cm、底径6.7cmをはかる。体部外面はヘラミガキ調整である。色調は淡赤褐色。

（15）は口径14.3cm、器高34.0cm、体径23.3cm、底径7.2cmをはかる。肩部にヘラ描きによる記号文「∩」を有する。体部外面はヘラミガキ、内面は表面磨滅のため不明。色調は淡赤褐色。

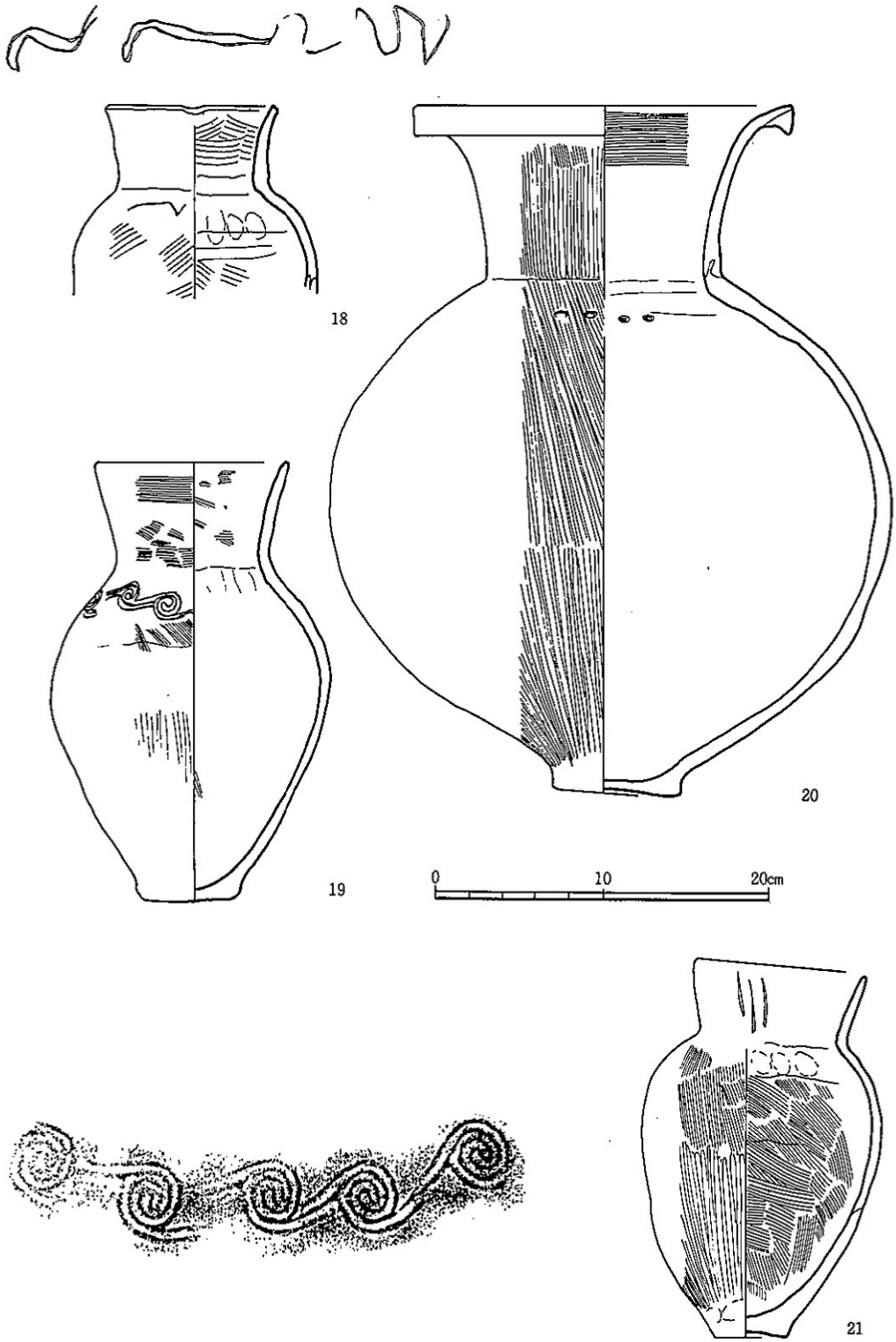
（29）は口径5.4cm、器高10.8cm、体径9.0cm、底径3.3cmをはかる小型品である。球形の体部に、外反して開く口頸部を有する。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。

（30）は口径7.1cm、器高13.8cm、体径12.1cm、底径5.0cmをはかる。外面に赤色顔料を塗布している。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は灰白色。

（31）は口径13.9cm、現高8.1cmをはかる。肩部は把手を貼り付けている。口頸部外面はナデ、内面はハケ調整である。色調は淡黄色。

（32）は口径8.8cm、現高17.2cm、体径10.6cm、底径4.2cmをはかり、口頸部は内弯ぎみに立ち上がる。内外面はナデ調整である。色調は淡赤橙色。

短頸壺形土器（18・19・21～27）　肩部の張るもの（18・21・22）、体部やや上位に最大径をもつもの（19・24・27）、長胴形の体部を有するもの（23・26）、球形の体部を有するもの（25）等バラエティがある。



第101図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）

(18) は口径9.6cm、現高11.3cmをはかり、口頸部は外反して直立する。口縁部は片口である。口頸部外面全体（一部、肩部）に絵画文を描いている。左からナメクジ、ヘビ、ヘビの軌跡を描いたものと思われる。口頸部外面はナデ、内面はハケ、体部内外面はハケ調整である。色調は赤褐色。(21) は口径10.1cm、器高22.6cm、体径14.4cm、底径4.4cmをはかる。口頸部は内弯ぎみに直立して、端部は尖頭状をなす。口頸部にヘラ描きによる「|||」記号文を有する。口頸部内外面はヨコナデ、体部外面上半はハケ、下半はヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は明褐灰色を呈する。(22) は口径12.3cm、器高22.0cm、体径14.6cm、底径4.4cmをはかる。体部から緩やかに移行して、上方に開く口頸部を有する。端部は尖頭状をなす。他の短頸壺形土器に比べて、器高に対する口頸部の占める割合いは高い。口頸部外面はハケ、内面はハケ状ナデ、体部外面上半はタタキ、下半はハケ状ナデ、内面上半はハケ、下半はハケ状ナデ調整である。

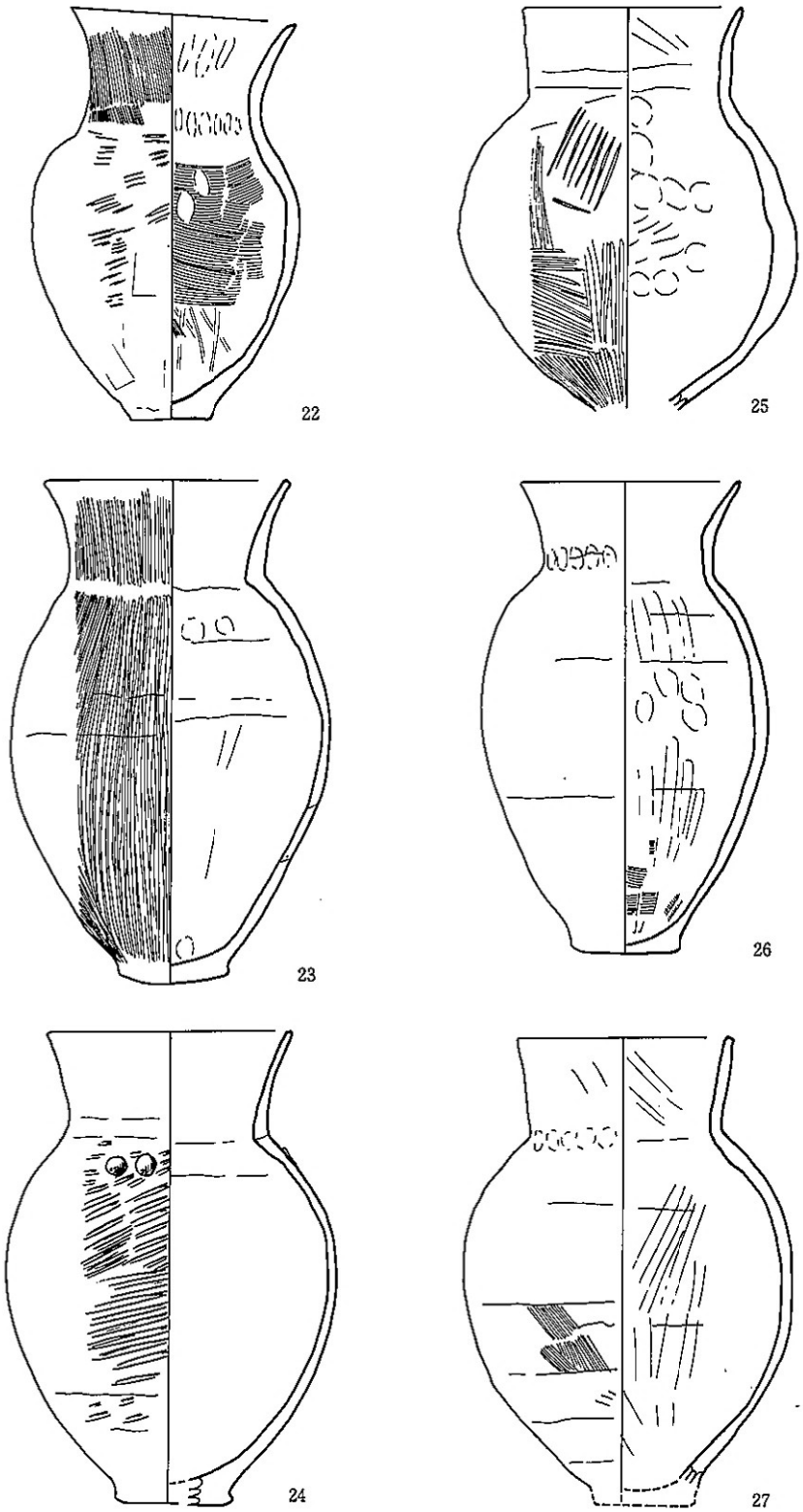
(19) は口径11.3cm、器高26.4cm、体径16.6cm、底径5.3cmをはかる。口頸部は外傾して立ち上がり、端部は円頭状をなす。肩部に、結合渦巻紋を連続してスタンプし、紋様帯を形成している。口頸部内外面はハケ、体部外面上半はハケ、下半はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。(24) は口径13cm、器高25.8cm、体径18.2cm、底径6cmをはかる。口縁部は外反して、上方に立ち上がる。端部は円頭状をなす。肩部に、円形浮紋2個を貼り付けた記号文を有する。口頸部内外面はヨコナデ、体部外面上半はタタキ、下半はタタキ後にナデ、内面はナデ調整である。底部外面に木葉痕が観察された。色調は淡黄灰色。(27) は口径11.5cm、現高25.6cm、体径18.1cmをはかる。口頸部はやや外傾ぎみに直立して、端部は面をもつ。口頸部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ（一部、ハケ）、内面はナデ調整である。

(23) は口径13.2cm、器高27.6cm、体径17.4cm、底径5.0cmをはかる。口頸部は外反して上方に立ち上がる。口頸部外面はヘラミガキ、内面はナデ、体部外面はヘラミガキ、内面上半はナデ、下半は表面磨滅のため不明。色調は淡茶褐色。(26) は口径12cm、器高25.7cm、体径15.7cmをはかる。口頸部は外反して上方に立ち上がり、端部は尖頭状をなす。体部内面上半は指ナデ、下半はハケ、その他は表面磨滅のため不明。色調は淡茶褐色。

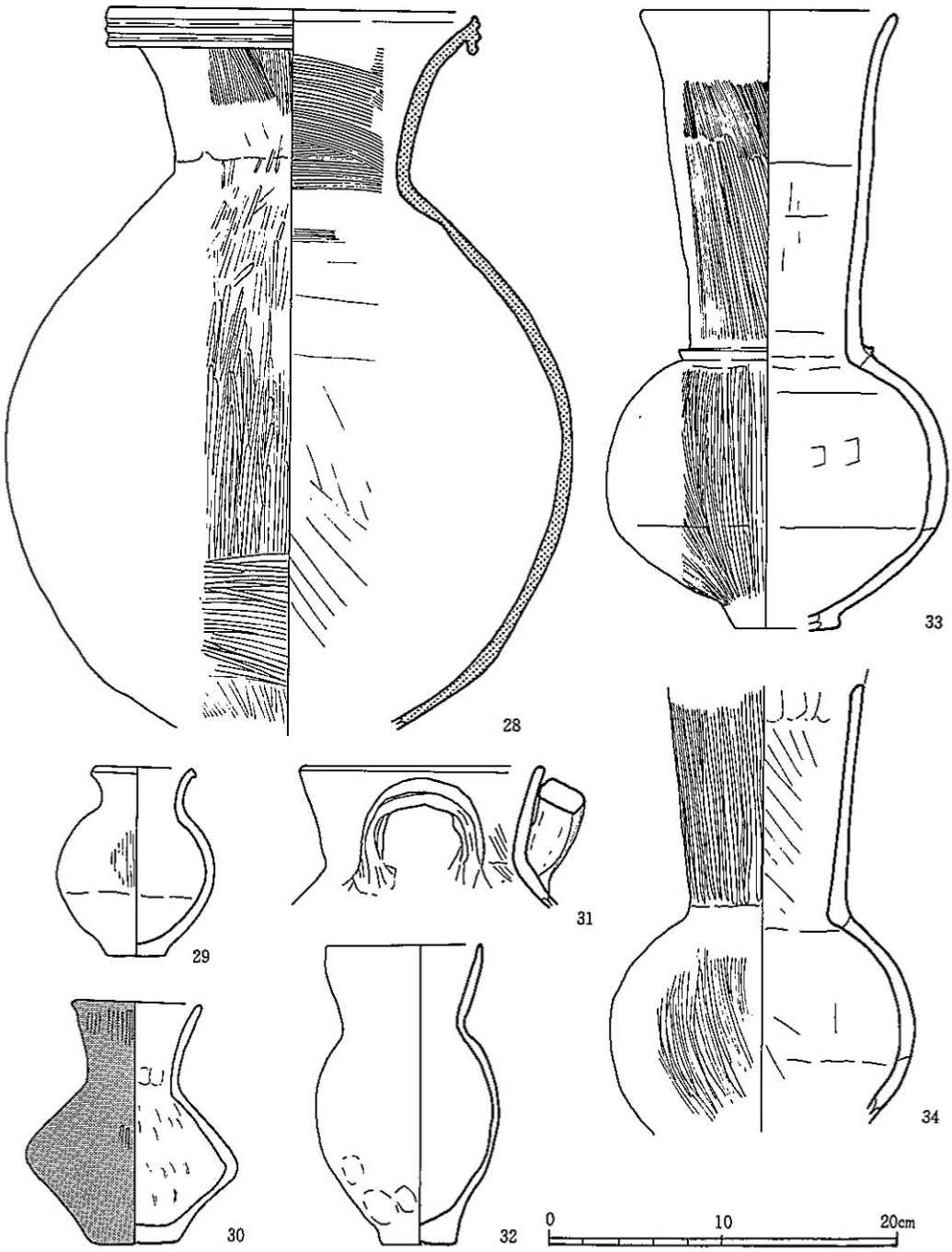
(25) は口径11.9cm、現高22.0cm、体径18.4cmをはかる。口頸部は直立ぎみに外反して立ち上がる。端部は尖頭状をなし、その上縁に7個1組の刻目を4組施す。体部上半には、ヘラ状工具による記号文を有する。口頸部内外面はヨコナデ、体部外面上半はナデ、下半はヘラミガキ、体部内面はハケ状ナデ調整である。色調は茶褐色（図版102－133)。

長頸壺形土器（33・34）　(33) は長い筒状の口頸部と扁平な体部をもつ厚手の土器である。口径14.5cm、器高35.3cm、口頸部高19.3cm、体径19.5cm、底径5.9cmをはかる。くびれ部には断面三角形の突帯を貼り付けている。頸部外面はハケ後にヘラミガキ、内面はナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は淡黄灰色。(34) は現高25.3cm、体径17.5cmをはかる。頸部外面はヘラミガキ、内面はナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。

台付鉢形土器（36）　口径28.1cm、器高22.1cm、裾径15.6cm、をはかる。「ハ」の字状の脚

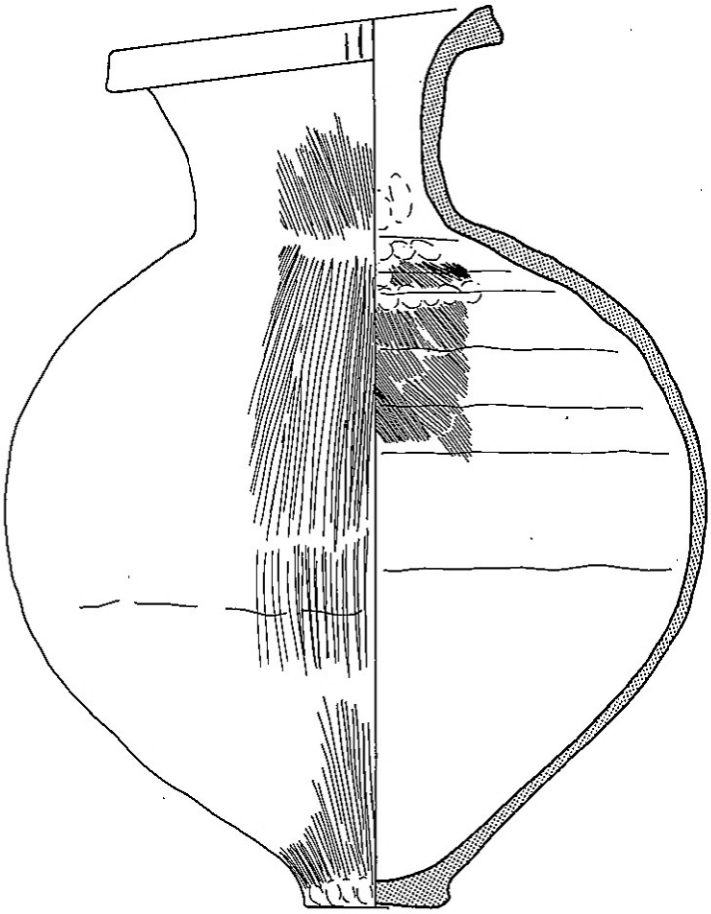


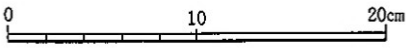
第102図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）

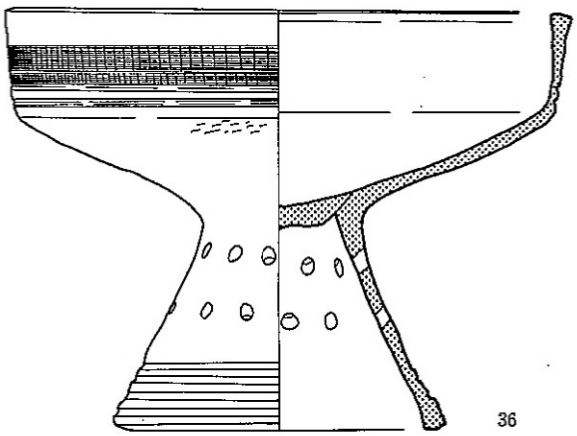


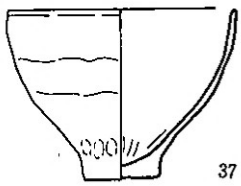
第103図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）

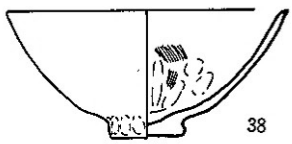
台部に、屈曲して内弯ぎみに開く体部と直立する口縁部を有する。口縁端部はいくぶん内外に肥厚して面を成す。口縁部外面に櫛描簾状紋２帯と凹線紋２条、裾部に凹線紋４条を施す。体部外面上位はヘラケズリ、その他の調整は表面磨滅のため不明。色調は淡灰褐色を呈し、生駒西麓産の胎土を有する。











第104図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）

小型鉢形土器（37・38）　椀状の体部に直口する口縁部を有する。（37）は口径12.1cm、器高8.9cm、底形3.9cmをはかる。色調は橙色を呈す。体部外面はナデ、内面上半はナデ、下半は廉状ハケ調整で仕上げる。（38）は口径14.8cm、器高6.7cm、底形3.8cmをはかる。体部外面はハケ、内面は指頭圧痕とハケ調整である。色調は淡橙色。

蓋形土器（39～41）　笠形を呈するもの（39）と扁平な円盤形を呈するもの（40・41）の二者がある。

（39）は口径12.8cm、器高6.2cmをはかる甕用蓋形土器である。外反する体部に中凹みの摘み部を有する。色調は淡赤褐色。調整は磨滅のため不明。胎土。色調および出土状況から甕形土器（64）の蓋である可能性がある。

（40）は口径7.9cm、器高1.5cmをはかる。口縁部は粘土紐を附加して、下方に拡張させている。口縁部周縁に２孔１対の紐孔を２組穿つ。内外面の調整はナデ仕上げである。色調は灰黄色。出土状況から無頸壺（42）とセットになると思われる。（41）は口径10.5cm、器高1.3cmをはかる。口縁部周縁に２孔１対の紐孔を２組穿つ。内外面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。出土状況から無頸壺形土器（44）とセットになる（図版104－139）。

無頸壺形土器（42・44・48）　球形および胴、腰の張る体部に外反して短く直立する口縁部を有する。口縁直下に２孔１対の紐孔を２組穿つ。（42）は口径7.1cm、器高7.9cm、体径12.9cm、底径3.6cmをはかり、腰の低い扁平な体部をもつ。調整は磨滅のため不明。色調は灰黄色。（44）は口径10.4cm、器高13.0cm、体径15.8cm、底径5.4cmをはかる。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整で仕上げる。色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。（48）は口径12.1cm、器高24.9cm、体径25.9cm、底径5.3cmをはかる大型品である。体部外面上半は粗いヘラミガキ、下半は表面磨滅のため不明、体部内面上半は絞り目と指頭圧痕、下半はナデ調整である。色調は淡茶褐色を呈す。

台付無頸壺形土器（43・45～47）　無頸壺形土器に「ハ」の字形に外反して開く脚台部をプラスしたものである。口縁部は短く直立し、口縁直下に２孔１対の紐孔を２組穿っている。（43・46・47）の色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。また、体部下半から上半にかけての移行が緩やかに屈曲する点も共通している。

（43）は口径8.9cm、器高14.9cm、体径16.5cm、底径9.5cmをはかる。調整は磨滅のため不明。（46）は口径13.5cm、器高21.7cm、体径23.0cm、裾径11.4cmをはかる。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ、脚台部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整で仕上げる。（47）は口径12.6cm、現高17.0cm、体径21.1cmをはかる。体部外面上位・下位はハケ、中位はヘラミガキ、内面は指頭圧痕とナデ、脚台部外面はハケ、内面は指頭圧痕とナデ調整である。

（45）は口径13.1cm、器高18.9cm、体径24.0cm、底径11.4cmをはかる。体部下半から上半にかけての移行は、稜をもって強く屈曲する。口縁部直下に櫛描波状紋１帯を施す。体部外面はヘラミガキ、内面は指頭圧痕とナデ、脚台部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は淡

茶褐色を呈する。

高杯形土器（49～57）　（49～51・53・54）は「ハ」の字形に外反する脚台を有する。

（49）は口径22.5cm、器高17.1cm、裾径12.6cmをはかり、椀状の杯部をもつ。透孔は7個。杯部内外面はヘラミガキ、脚部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は淡黄褐色。（50）は口径18.7cm、器高10.5cm、裾径7.8cmをはかる。杯部は内弯ぎみに低く開く体部に、緩やかに屈曲して短く内弯して立ち上がる口縁部をもつ。口縁部外面はナデ、内面はヘラミガキ、体部内外面はヘラミガキ、脚部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は灰白色。（51）は口径21.4cm、器高15cm、裾径9.5cmをはかる。外弯ぎみに開く体部に、屈曲して外傾する口縁部をもつ。脚部には3個1組の透孔を2組穿つ。調整は（50）に同じである。色調は淡黄褐色。（53）は口径15.5cm、器高11cm、裾径8.2cmをはかる。杯部は内弯ぎみに開き、口縁端部は面を成す。透孔は6個。体部内外面はヘラミガキ、脚部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は淡黄褐色。（54）は口径21.2cm、器高14.3cm、裾径10.7cmをはかる。杯部は斜上方に浅く開く体部に、屈曲して強く外反して開く口縁部をもつ。屈曲部に貼り付け突帯を施す。口縁部外面はヘラミガキ、内面はナデ、体部内外面はヘラミガキ、脚部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。

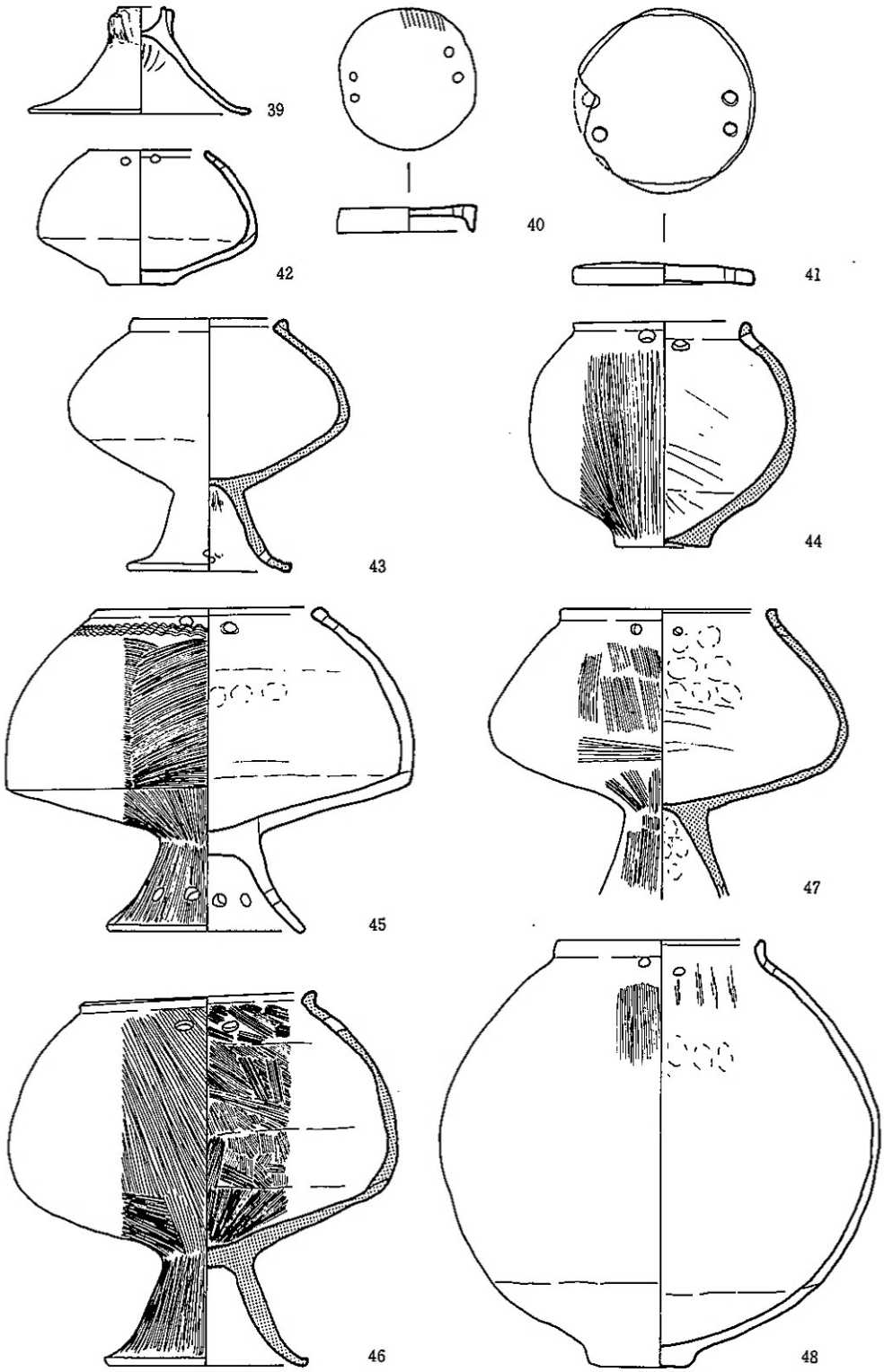
（55）は口径33.4cm、器高24.1cm、裾径15.4cmをはかる。筒状の柱状部から緩やかに外反して拡がる裾部を有し、杯部は直線的に低く開く体部に、屈曲して短く直立する口縁部をもつ。口縁端部は外につまみ出して、内傾する面を形成している。口縁部はヨコナデ、体部内外面は放射状のヘラミガキ、脚部外面はヘラミガキ、内面上半は絞り目、下半はナデ調整で仕上げている。色調は淡黄褐色。

（52）は口径15.7cm、器高17.4cm、裾径8.0cmをはかり、椀状の杯部を有している。器高は口径を上回っている。体部内外面はヘラミガキ、柱状部外面はヘラミガキ、内面は指頭圧痕とナデ調整である。色調は灰白色。

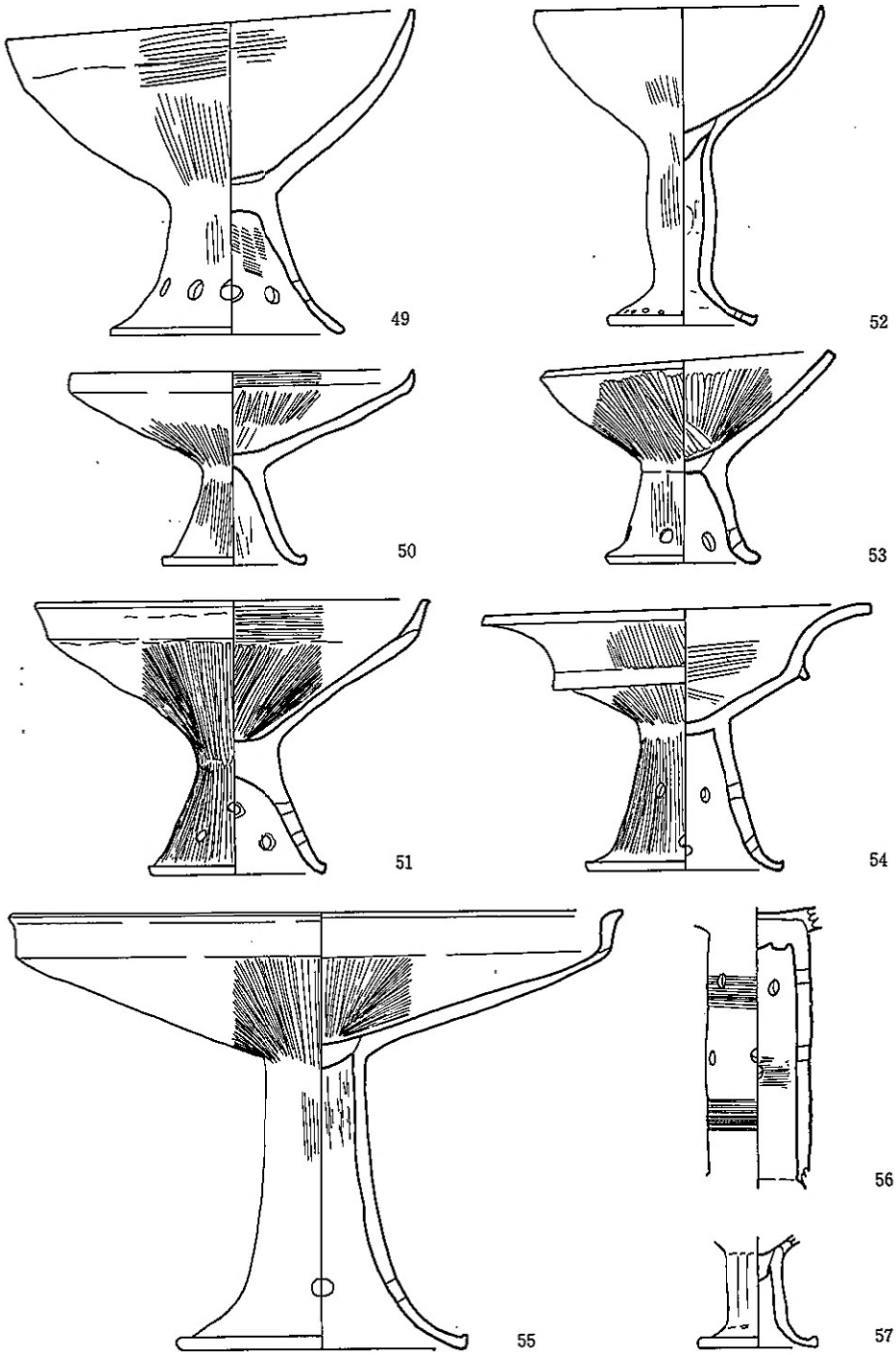
（56・57）は高杯脚部片である。

（56）はエンタシスの柱状部外面に5条と6条1組の沈線紋を施している。外面は不明、内面はナデ調整で一部ハケ目が残っている。（57）は裾径6.4cmをはかる小型品で、椀状の杯部を有するものと思われる。体部内外面はヘラミガキ、脚部外面はヘラミガキと指ナデ、内面はナデ調整である。

器台形土器（58・59）　（58）は口径19.9cm、器高18.8cm、体径8.9cm、裾径15.7cmをはかる。裾部からなめらかに移行する体部に、屈曲して大きく開く口縁部を有する。口縁端部は粘土紐の附加によって下方に拡張させ、幅広い面を成す。口縁端部にヘラ状工具によって、外向（上向）する鋸歯紋（内を斜線で充填）を飾る。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は暗赤褐色。（59）は口径12.7cm、器高16.4cm、体径8.5cm、裾径13.9cmをはかり、色調は暗黄褐色を呈す。裾部から口縁部への移行は曲線的である。口縁端部は粘土紐の附加によって、斜下



第105図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）



第106図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）

方に拡張させ面を成す。外面はヘラミガキ、内面はナデ（上部のみヘラミガキ）調整である。

小型甕形土器（60・61・62・64・65）　肩部に最大径をもつ体部に、「く」の字状に屈曲する口縁部を有するもの（60・61・62）、口縁部が体部径を凌駕して、腰高のもの（64・65）である。

（60）は口径9.1cm、器高10.2cm、体径9.3cm、底径4.2cmをはかる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。（61）は口径12.5cm、器高13.4cm、体部13.1cm、底径4.7cmをはかる。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は灰褐色。（62）は口径13.6cm、器高14.3cm、体径13.7cm、底径5.0cmをはかる。体部内外面はナデ調整である。

（64）は口径12.3cm、器高16.2cm、体径11.7cm、底径5.2cmをはかる。体部外面はハケ状ナデ、内面上半はナデ、下半はハケ調整である。色調は淡橙色。（65）は口径13.2cm、器高 15.4 cm、体径12.6cm、底径4.9cmをはかる。口縁部はヨコナデと指頭圧痕、体部外面は指ナデ、内面はハケ状ナデ調整である。色調は淡赤橙色。

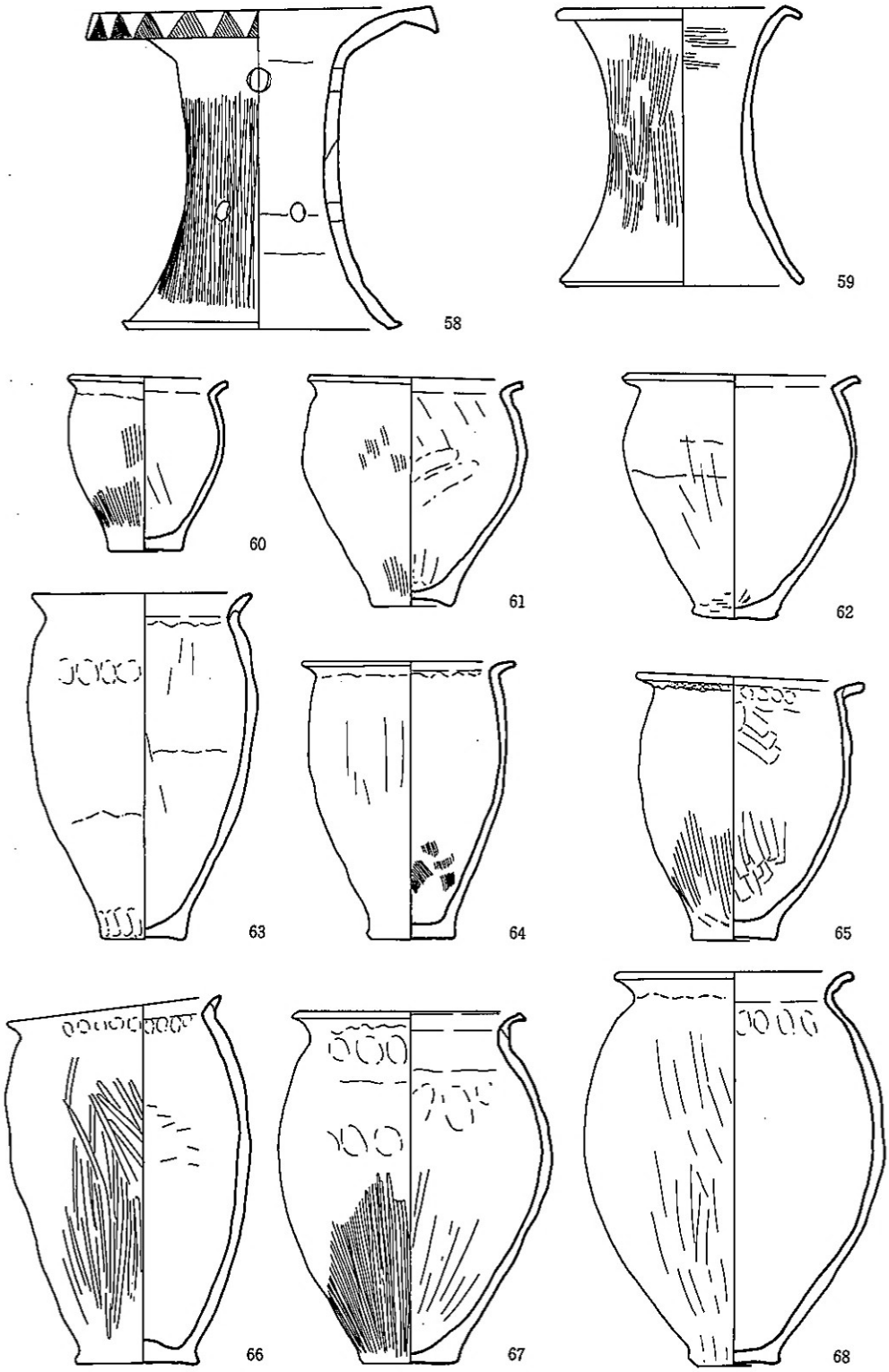
中型甕形土器（63・66・67～70・72～76）　腰高の体部をもつもの（63・66）、体部中位に最大径をもつもの（67・68）、体部中位やや上に最大径をもつ長胴のもの（70・72・75・76）、肩の張る体部を有するもの（69・73・74）がある。

（63）は口径12.8cm、器高20.4cm、体径13.5cm、底径4.8cmをはかる。体部内外面ともにハケ状ナデ調整である。色調は明褐灰色。（66）は口径12.4cm、器高21.0cm、体径14.2cm、底径7.2cmをはかる。他の３点に比べて器壁の厚いものである。口縁部は指頭圧痕とヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はハケ状ナデ調整である。色調は灰白色。

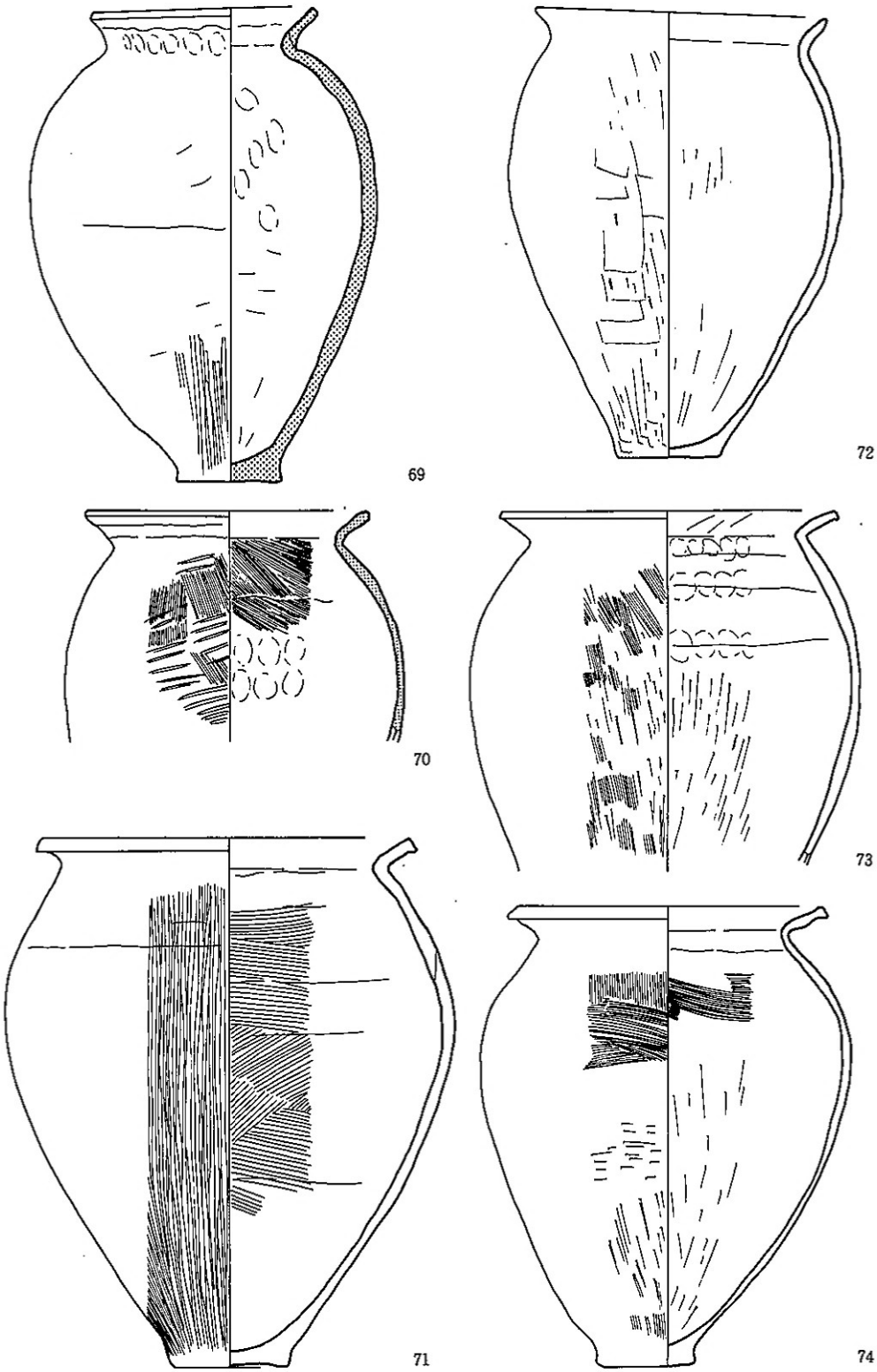
（67）は口径12.9cm、器高20.7cm、体径16.1cm、底径5.5cmをはかる。体部外面上半はナデ、下半はヘラミガキ、内面上半は指ナデ、下半はハケ状ナデ調整である。色調は淡橙色。（68）は口径13.7cm、器高23.0cm、体径17.9cm、底径5.4cmをはかる。体部外面はヘラケズリ、内面は磨滅のため不明。色調は淡橙色。

（70）は口径16.9cm、体径20.3cm、現高13.9cmをはかる。体部外面はタタキ後にハケ状ナデ、内面はハケ調整である。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。（72）は口径17.2cm、器高26.5cm、体径19.9cm、底径6.2cmをはかる。体部内外面はヘラケズリ調整である。色調は茶褐色。（75）は口径18.9cm、器高23.2cm、体径19.6cm、底径5.7cmをはかる。口縁部は強く屈曲して、端部は面をもつ。体部外面はハケ、内面はナデ調整である。色調は淡橙色。（76）は口径14.7cm、器高24.5cm、体径18.2cm、底径5.8cmをはかる。体部外面はタタキ、内面は上半はハケ、下半はナデ調整である。色調は淡褐灰色。

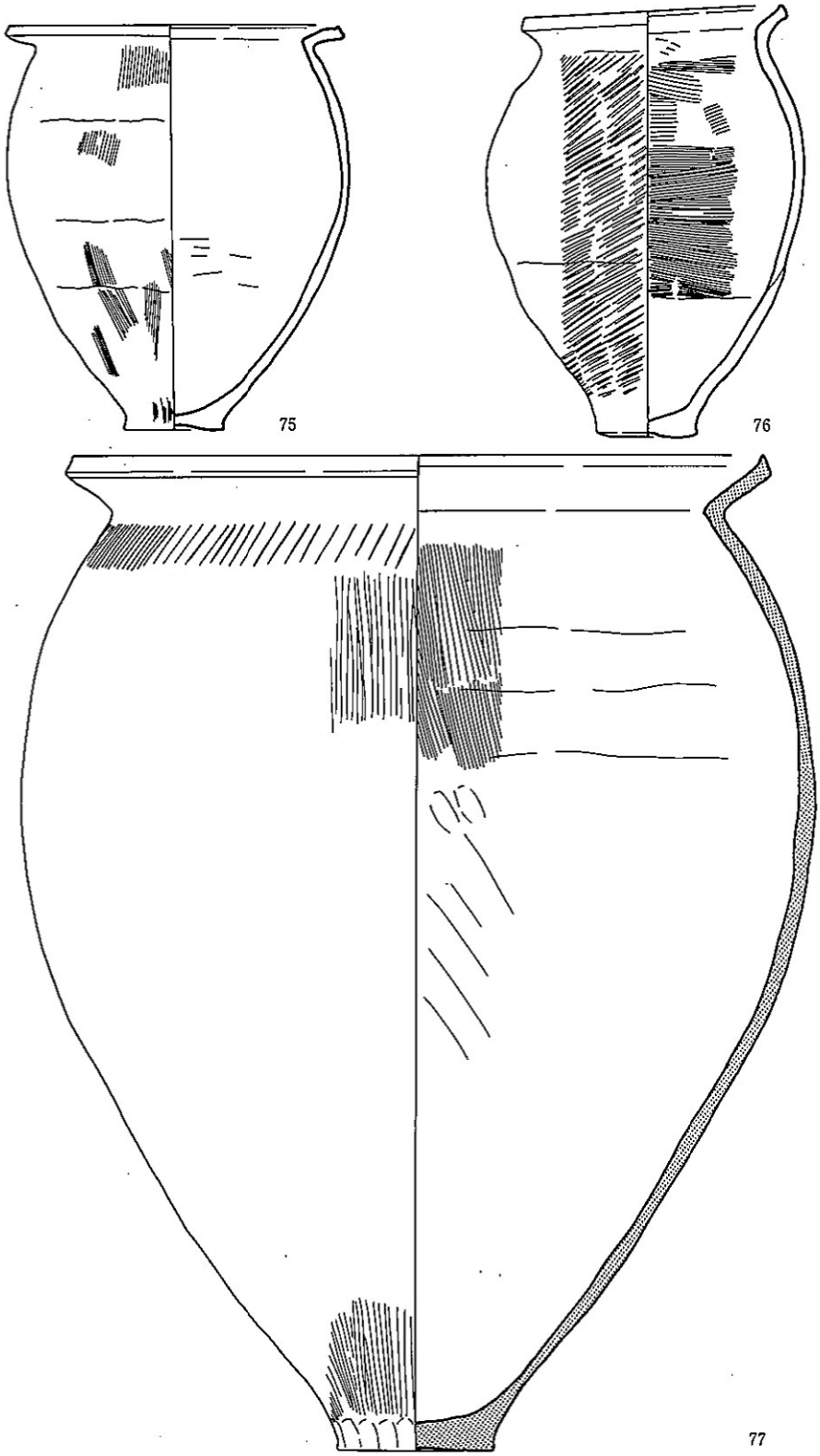
（69）は口径13.1cm、器高28.1cm、体径20.7cm、底径6.2cmをはかる。口縁部はヨコナデと指頭圧痕、体部外面はハケ状ナデ、内面はナデ調整である。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。（73）は口径19.9cm、現高21.5cm、体径23.4cmをはかる。体部外面上半はハケ、下半はハケ後にヘラケズリ、内面上半はナデ、下半はヘラケズリ調整である。色調は淡橙色。



第107図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）



第108図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）



第109図　ＳＸ－03出土土器実測図（1/4）

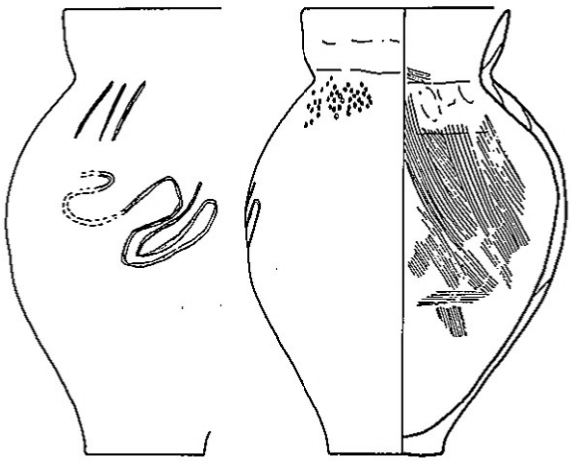
(74) は口径17.9cm、器高27.5cm、体径22.2cm、底径5.8cmをはかる。口縁部は「く」の字状に外反して、端部は上下に肥厚する。体部外面上位はハケ、下半はヘラケズリ、内面上半はハケ、下半はヘラケズリ調整である。色調は黄褐色。

大型甕形土器（71・77）　(77) は口径39.5cm、器高56.8cm、体径45.3cm、底径8.8cmをはかる。肩のやや張る体部に、「く」の字状に屈曲する口縁部を有し、端部は上方につまみだして、面をなす。肩部には刻目を施している。体部外面はヘラミガキ、内面上半はハケ、下半は指ナデ調整である。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。(71) は口径21.8cm、器高 31.5 cm、体径26.9cm、底径6.8cmをはかる。肩の張る体部から、「く」の字状に屈曲して、端部に面をもつ口縁部を有している。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は淡茶褐色。

第Ⅶ層

M・⑬地区基本層序第Ⅶ層青灰色シルト中から単独で出土した、第Ⅴ様式の短頸壺形土器である。

短頸壺形土器（第110図）　口径10.7cm、器高23.5cm、体径16.9cm、底径 6 cmをはかる。肩部の張る体部から、屈曲して内弯ぎみに斜め上方に立ち上がる口縁部を有する。端部は円頭状。体部に記号文を描いている（第237図14）。体部内外面ともにハケ調整である。色調は淡褐色（図版115－173）。



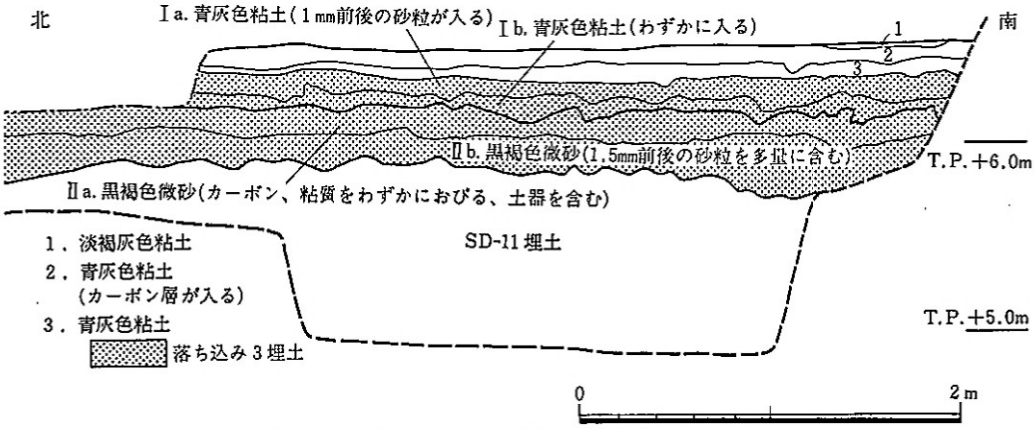
第110図　第Ⅶ層出土土器実測図（1/4）

第３項　古墳時代前期

落ち込み３（第111・112図、図版47）

M・⑧～⑨地区第Ⅶ層暗灰色シルト上面で検出された落ち込み状遺構である。規模は、東西約7.2m以上、南北5.4m以上、深さは約0.4mをはかる。断面形態は幅0.6mの平坦面を有する２段掘りの逆台形である。

埋土は、大きく２つの層に分けられる。（Ⅰ）層青灰色粘土、（Ⅱ）層黒褐色微砂である。遺物は（Ⅱ）層から、古墳時代初頭の土器、馬歯が出土した。

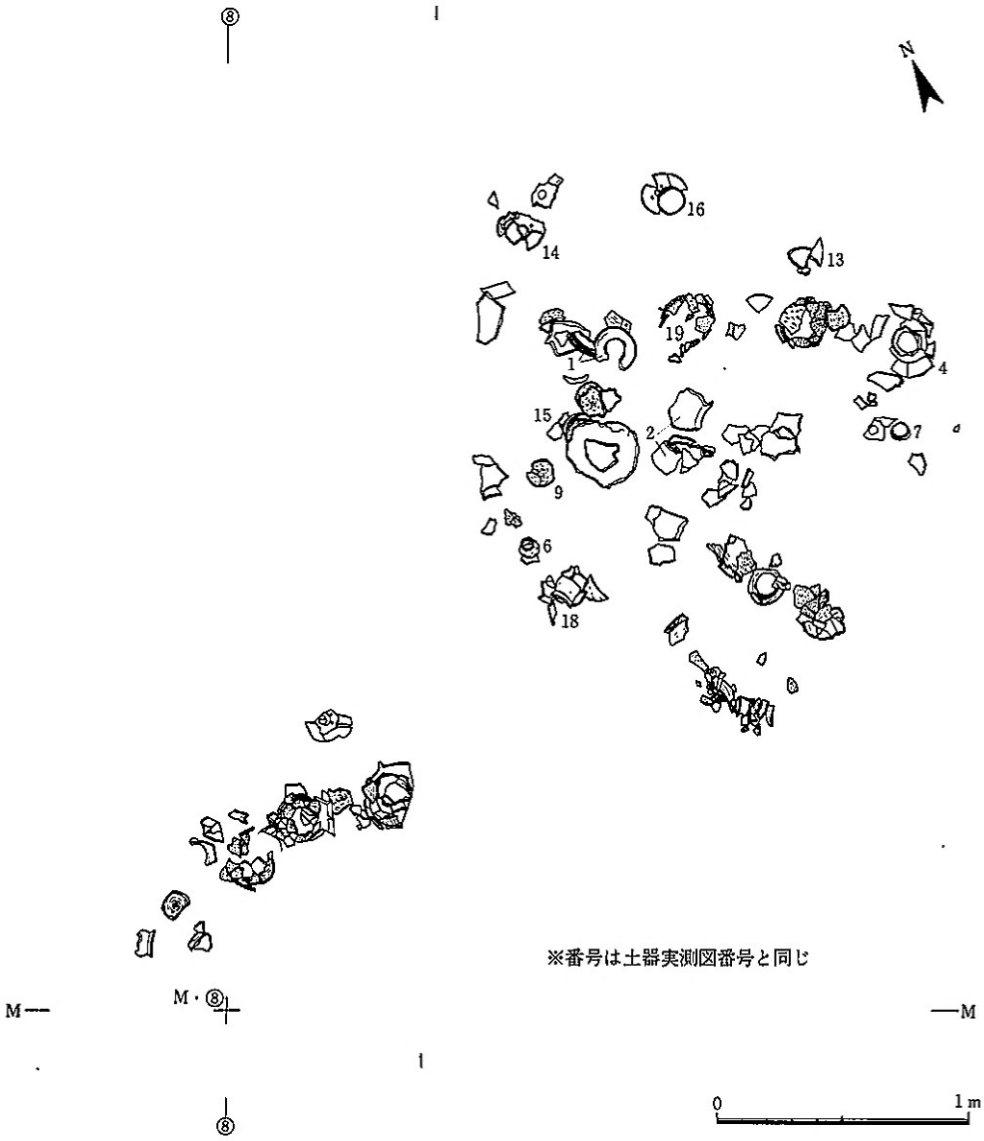


第111図　落ち込み３　南北土層断面図（1/40）

〔土器〕（第113・114図、図版94～96）

壺・鉢・高杯・甕・小型甕形土器等の器種資料を得ている。時期は第Ⅴ様式末～庄内式である。

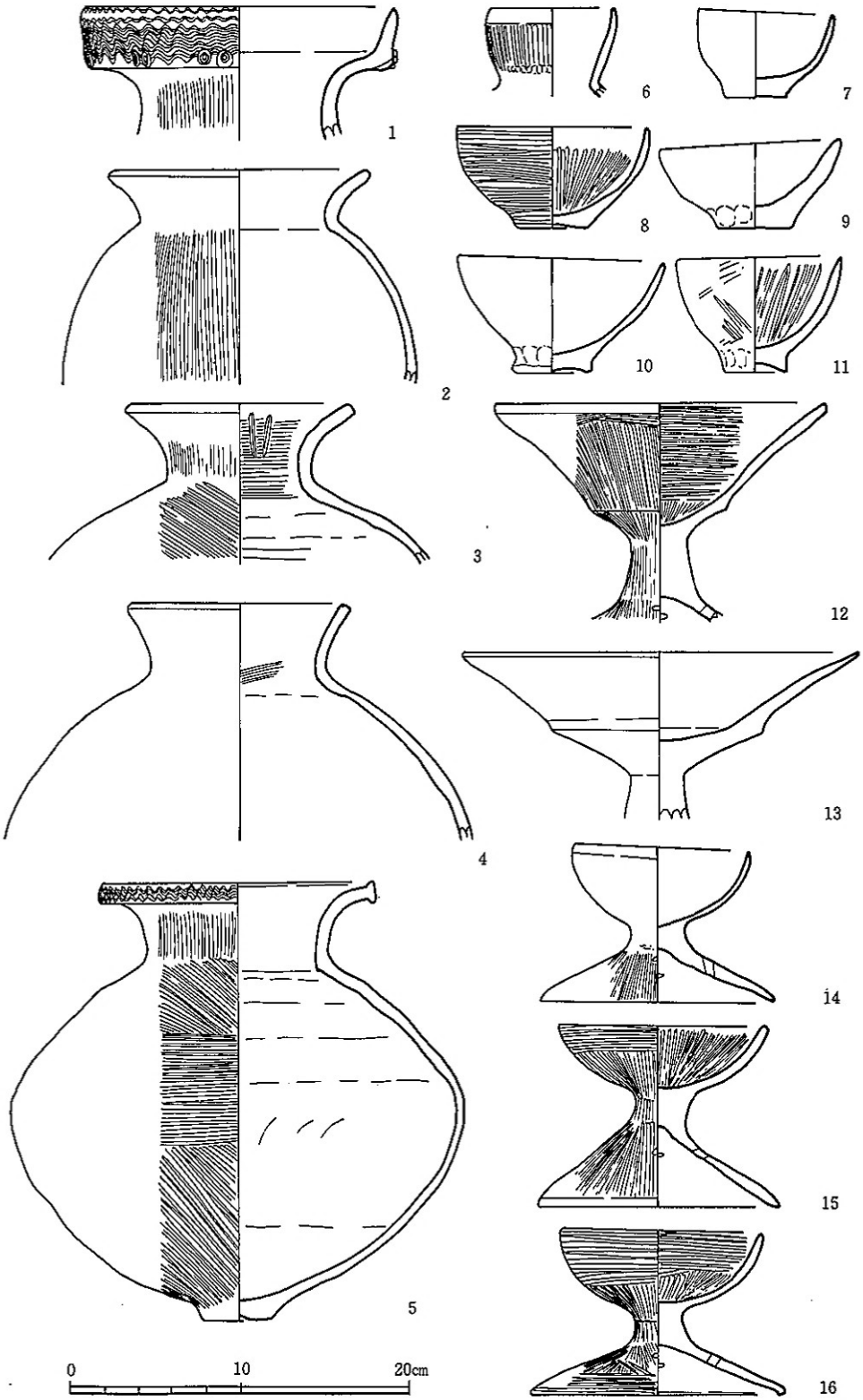
壺形土器（１～６）　（１）は口径18.1cmをはかり、色調は茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。直立する短い頸部に短く外反する口縁部を有す。端部は上方に立ち上り、下にも粘土紐を貼り付けて広い面を形成する。口縁端部に櫛描直線紋３帯を施し、その上に２個１組の竹管円形浮紋を貼り付ける。口頸部外面はヘラミガキ調整、内面は磨滅のため不明である。（２）は口径14.9cm、現高12.7cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈す。球形の体部に外反して、端部を丸くおさめる口縁部をもつ。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。（３）は口径 12.8cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈す。体部から屈曲して直立する頸部に、短く外傾する口縁部をもつ。端部は丸くおさめている。口縁部内面にヘラ状工具による記号文を施す。頸部内外面はヘラミガキ、体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。（４）は口径12.5cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈す。短い頸部に斜上方に外傾して立ち上がる口縁部を有する。内外面の調整は表面磨滅のため不明である。（５）は口径15.9cm、器高25.8cm、体径26.7cm、底径4.2cmをはかる。色調は淡茶褐色を呈す。胴部中位の張る体部から屈曲して外反する口頸部を有し、端部は上下に多少肥厚する。口縁端部に櫛描波状紋１帯を施す。頸部外面はヘラミガキ、内面はナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。（６）は口径7.2cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈す。くの字状に短く外反する頸部に、内弯ぎみに立ち上がる口縁部を有する。口縁部外面は



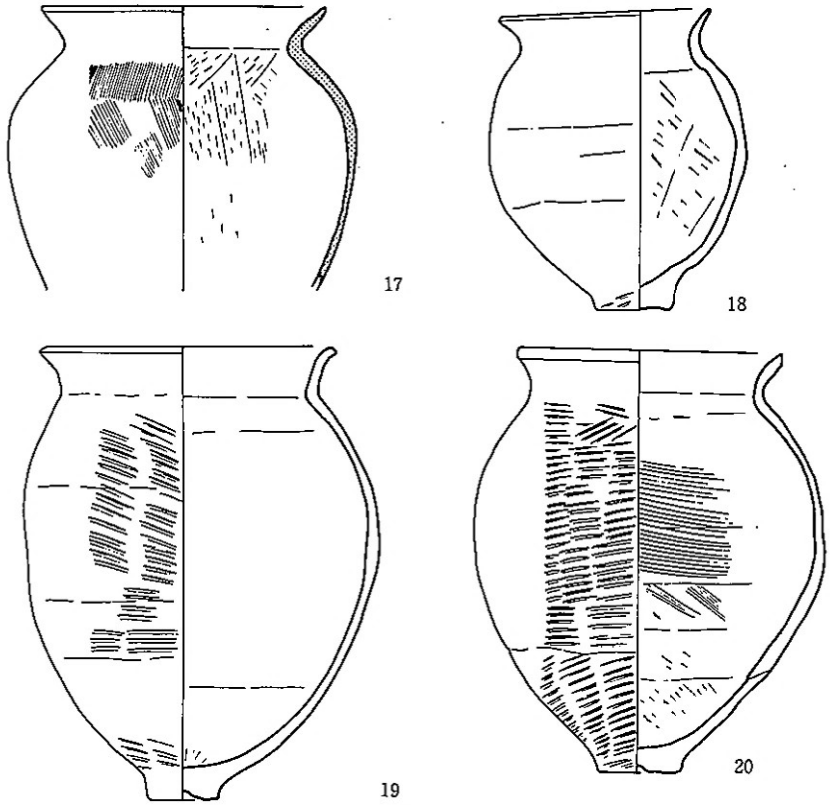
第112図　落ち込み３　遺物出土状況（1/30）

ヘラミガキ、内面はナデ調整である。

鉢形土器（７～11）　内弯ぎみに立ち上がる体部に直口する口縁部を有し、端部は丸くおさめる。色調はいずれも、淡茶褐色を呈する。（７）は口径7.8cm、器高5.2cm、底径3.6cmをはかる。内外面はともにナデ調整である。（８）は口径11.2cm、器高5.9cm、底径4.3cmをはかる。体部外面上半はタタキ後にナデ、下半はタタキ後にヘラミガキ、内面はナデ後に粗いヘラミガキ調整である。（９）は口径10.5cm、器高4.9cm、底径4.2cmをはかる。内外面はともにナデ調整である。（10）は口径12.0cm、器高6.8cm、底径4.7cmをはかる。体部内外面はナデ調整である。（11）は口径9.6cm、器高6.8cm、底径3.6cmをはかり、体部内外面はヘラミガキ調整である。



第113図　落ち込み３　出土土器実測図（1/4）



第114図　落ち込み３　出土土器実測図（1/4）

高杯形土器（12～16）　色調は淡茶褐色を呈する。（12・13）は直線的に短く開く体部に、外反して大きく開く口縁部をもつ。（12）は口径19.3cm、体径8.0cm、現高13.1cmをはかる。内外面はともにヘラミガキ調整である。（13）は口径23.3cm、体径12.5cm、現高9.8cmをはかり、内外面の調整は表面磨滅のため不明である。（14～16）は椀状の杯部に、短い柱状部と低く直線的に開く裾部をもつ。（14）は口径10.2cm、器高9.2cm、裾径13.6cmをはかる。裾部中位に透孔を４個穿つ。体部内外面はナデ、裾部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。（15）は口径12.2cm、器高10.8cm、裾径14.2cmをはかる。裾部に透孔を４個穿つ。杯部内面はヘラミガキ、脚部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。（16）は口径11.8cm、器高9.7cm、裾径14.9cmをはかる。裾部に透孔を４個穿つ。杯部内外面はヘラミガキ、脚部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。

甕形土器（17・19・20）　(17)は口径14.9cm、現高15.0cm、体径18.3cmをはかる。色調は淡茶褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。胴上位に最大径をもつ体部から屈曲して、上方に伸びる口縁部を有し、端部は丸くおさめる。他の甕形土器にくらべて器壁は薄い。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ調整である。(19)は口径15.2cm、器高23.9cm、体径18.5cm、底径3.8cmをはか

る。いびつな長胴の体部に、「く」の字状に外反する口縁部を有する。色調は淡茶褐色。体部外面はタタキ、内面はナデ調整である。(20)は口径13.9cm、器高22.3cm、体径18.7cm、底径4.6cmをはかる。色調は淡茶褐色。体部外面はタタキ、内面上半はハケ、下半はヘラケズリ調整である。

小型甕形土器（18）　口径11.1cm、器高15.8cm、体径13.7cm、底径4.1cmをはかる。色調は淡茶褐色。体部外面はナデ、内面はヘラケズリ、底部側面はタタキ調整である。

第４項　古墳時代後期

基本層序第Ｖ層中から、後期の須恵器杯蓋１点が出土した。なお、ＫＭ－Ｈ７調査区の第Ｖ層中からも１点出土している（第150図３、図版175b－３）。

第115図 第Ｖ層出土土器実測図 (1/4)

〔土器〕（第115図、図版175b－４）

口径12.6cm、器高3.4cmをはかる。内外面ヨコナデ調整。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。

第５項　奈良時代～江戸時代以降

奈良時代の遺構は、調査区のほぼ全域に亘ってウシ・ウマ等の足跡が検出された。また、トレンチの西端では、奈良時代のものと思われる自然河川の南肩を検出した。

自然河川の大部分は江戸時代平野川、現在の平野川によって破壊されていた。なお、足跡を充填している砂・シルトは自然河川が氾濫した際に堆積したものである。

第４節　ＫＭ－Ｈ７調査区

第１項　弥生時代中期

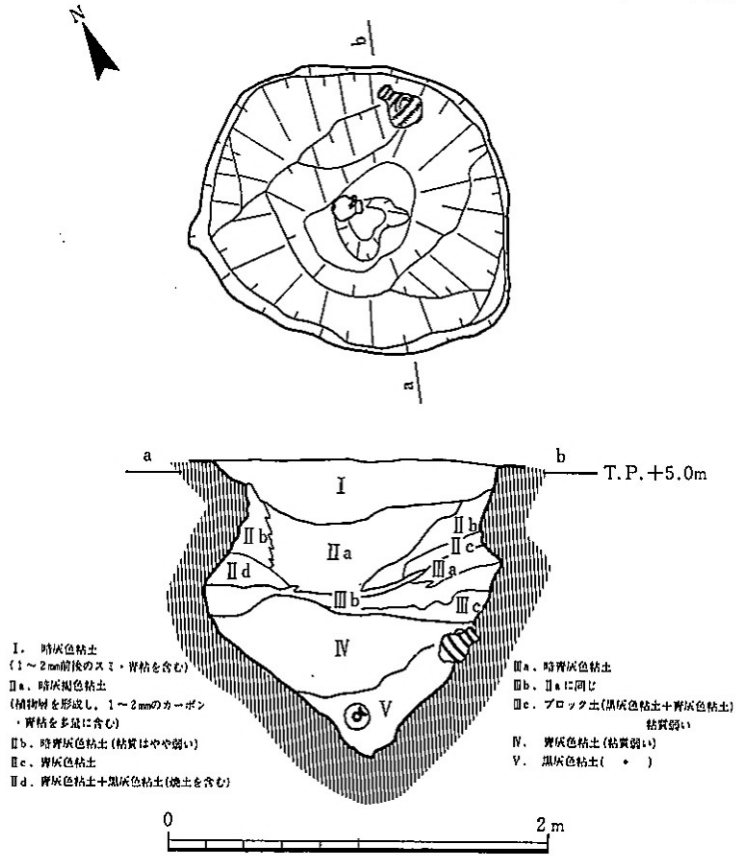
井戸

ＳＫ－19（第116図、図版53）

G・④地区の第Ⅸ層除去後、第Ⅹ層上面にて検出した井戸である。ＳＫ－18同様、弥生時代中期後半の溝ＳＤ－26と27に挟まれた平坦面（Ｄ地区平坦面）に位置する。平面プランは径1.8×1.55mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは1.62mをはかる。坑底はＴ.Ｐ.＋3.51mまで達している。

断面形態は下ぶくれの形状で、坑底中央においてさらに一段、円形にくぼむ。その上部にて小型水差形土器（第117図１）を得ている。

坑内の堆積状況から、埋土は5層に大別される。(Ⅱ)と(Ⅲ)層の間には、カーボンが堆積していた。(Ⅰ)～(Ⅳ)層は、井戸使用廃絶後に自然・人為的要素により堆積した土層である。（Ⅰ）層より、ほぼ完形に復元できた浅鉢形土器を得た。また、（Ⅴ）層からは、水差形土器の大小各１点の出土をみている（図版53ａ）。出土状況から大小の水差形土器は、共存資料として理解で



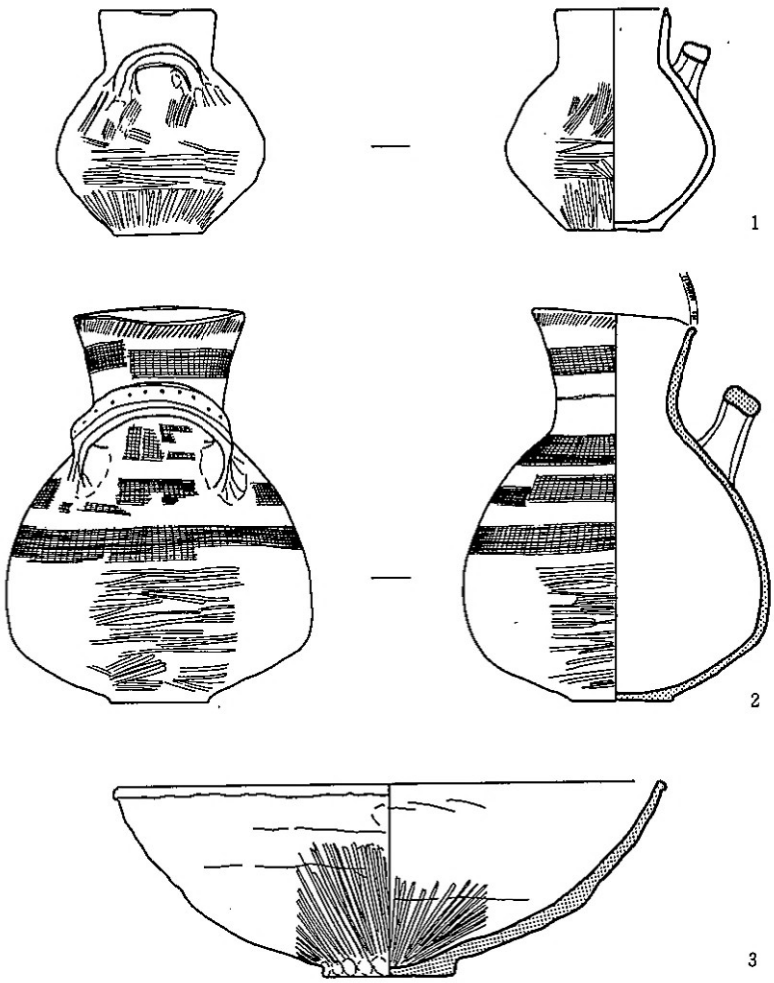
第116図　ＳＫ－19平面図及び土層断面図（1/40）

きるものの、廃棄の同時性をおう一括資料としては理解できない。ただし、廃棄の時間的な新旧関係は極小と思われた。

〔土器〕（第117図、図版111）

第Ⅲ－Ⅳ様式の水差・浅鉢形土器を得ている。（２・３）は生駒西麓産の胎土をもつ。

水差形土器（１・２）　いずれも（Ⅴ）層より出土した。（１）は口径5.9cm、器高11.8cm、最大体径10.9cm、底径4.9cmをはかる小さなものである。把手と同一面の口縁部に指おさえのためのえぐりを入れている。色調は淡黄褐色を呈する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上位はハケ、下位はヘラミガキ、体部内面はハケ調整である。（２）は口径9.0cm、器高20.9cm、最大体径16.1cm、底径5.2cmをはかる。腰の低い体部に外反して立ち上がる口頸部を有し、端部は平坦面を成す。口頸部は傾斜しており注ぎ部が突出する。把手は大振りで、外側に刺突紋を11個施している。口縁端部に刻目、口頸部に不規則な櫛描列点紋１帯、簾状紋１帯、体部上位に不揃い



第117図　ＳＫ－19出土土器実測図（1/4）

な簾状紋３帯を飾っている。色調は茶褐色で、焼成は良好といえる。体部外面下半はヘラミガキ、口頸部・体部内面上位はナデ、下位はハケ調整である。器表面はわずかに磨滅している。

浅鉢形土器（３）　口径28.6cm、器高10.3cm、底径6.8cmをはかる。色調は暗赤褐色を呈し、内外面に煤が附着している。口縁部内外面はハケ状ナデ、体部内外面はヘラミガキ調整である。（Ⅰ）層より出土した（図版111－177）。

以上、下層における水差形土器の出土および坑底が湧水に達しているという点から判断して、本土坑は井戸としての機能を有していたものと考えられる。なお、水差形土器（１・２）のレベル差を有する出土状況・大きさの相違・紋様の有無・器表面の残存状況等から、両者に実質的な機能差を想定することも可能であろう。（１）は（Ⅴ）層最下位の凹みから出土し、器表面はほとんどといってよいほどに磨耗をうけていない点から、井戸の掘削に伴い投入されたものと思われる。（２）は（Ⅴ）層上位から出土し、器表面は著しく磨滅している点から一定の期間、使用されたと考えられ、井戸廃絶と前後する段階、または井戸廃絶に伴い投入されたものと想定される。

ＳＫ－21（第118図、図版54b）

Ⅰ・０地区において基本層序第Ⅸ層除去後、第Ⅹ層上面にて輪郭を確認した中期後半の井戸である。南側上部は、自然河川（ＳＤ－11）によって削平されている。本来の掘り込み面は、０ライン沿いセクションの観察（第132図）から弥生包含層中にあり、深さは1.4mをはかる。形状は、径0.89×0.98ｍの円形プランを有する。

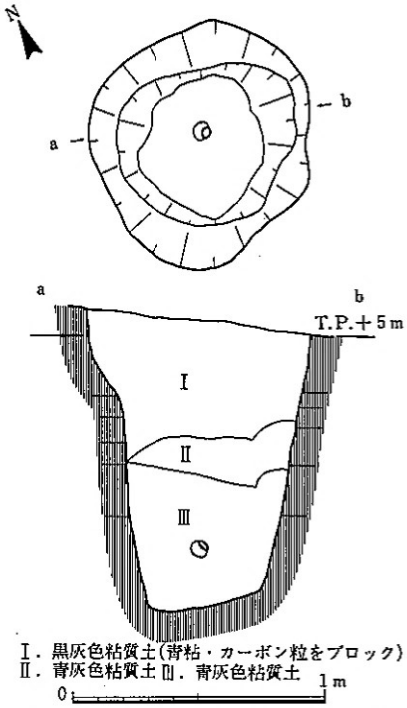
井戸中の埋土は、３層に大別される。（Ⅰ）黒灰色粘質土（細かな青粘・カーボン粒をブロック）、（Ⅱ）青灰色粘質土、（Ⅲ）青灰色粘質土である。土層の断面観察から、（Ⅰ）（Ⅱ）層は人為的に埋められたものと思われた。（Ⅲ）層からは、坑底からやや浮いた状態で小型無頸壺の出土をみている（図版54ｂ）。木製品では、扁平片刃石斧の柄の破片を得た。

以上、最下層での小型無頸壺形土器の単独出土及び坑底が湧水層まで達している点から、土坑機能として井戸の可能性が考えられよう。

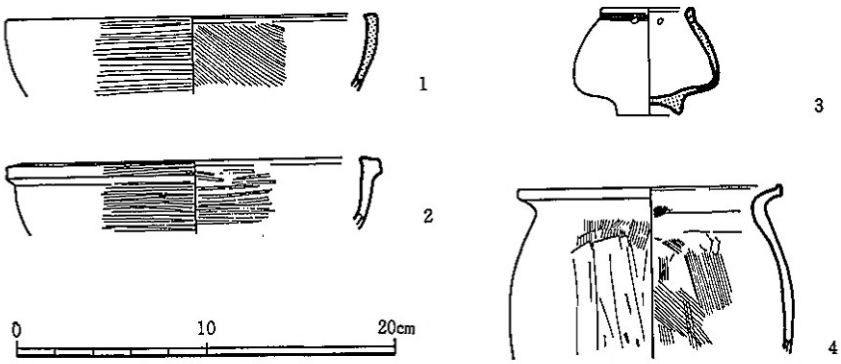
〔土器〕（第119図、図版111）

コンテナ１杯分の土器を得ている。その大半は（Ⅱ）層からであるが、ほとんど細片で図示できたのは甕・鉢形土器の３点である。（Ⅲ）層からは小型無頸壺完形品１点を得たほかは、いずれも細片であった。

小型無頸壺形土器（３）　口径4.8cm、器高5.7cmをはかり、体部下半で腰の強く張るプロポーションを呈する。底部は著しく突出するあげ底で、高台状を呈



第118図 ＳＫ－21平面図及び土層断面図（1/30）



第119図　ＳＫ－21出土土器実測図（1/4）

す。表面は剝離して、わずかに頸部近くで簾状紋の痕跡をみた。本来は、体部中位まで施していたのであろう。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

鉢形土器（１・２）　（１）は口径19.5cmをはかり、直口する口縁部をもつ。端部は、内側にややつまみ出している。外面はヨコヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。内外面には黒色物質が塗布されている。（２）は口径19.6cmをはかる。直口する口縁部を有し、端部は外側に粘土紐を附加して突出させている。内外面はヨコヘラミガキ調整である。色調は灰白色。

甕形土器（４）　口径13.8cm、現存高9.0cm、体部径15.1cmをはかる。口縁部はくの字状に外反して、端部は面をもつ。体部外面上半はハケ、下半はハケ状ナデ、内面はハケ調整である。色調は黒色。

ＳＫ－22（第15図）

Ｊ・①地区において、溝ＳＤ－20の調査時にかろうじて遺構の輪郭を確認した。平面プランは径1.1m（推定）の円形を呈し、深さ0.7m以上の弥生時代中期の井戸である。なお、坑底は第Ｘｉ層中にあり、レベルはＴ.Ｐ.＋4.3mである。出土土器は、細片のため図示していない。

ＳＫ－24（第124図、図版55b）

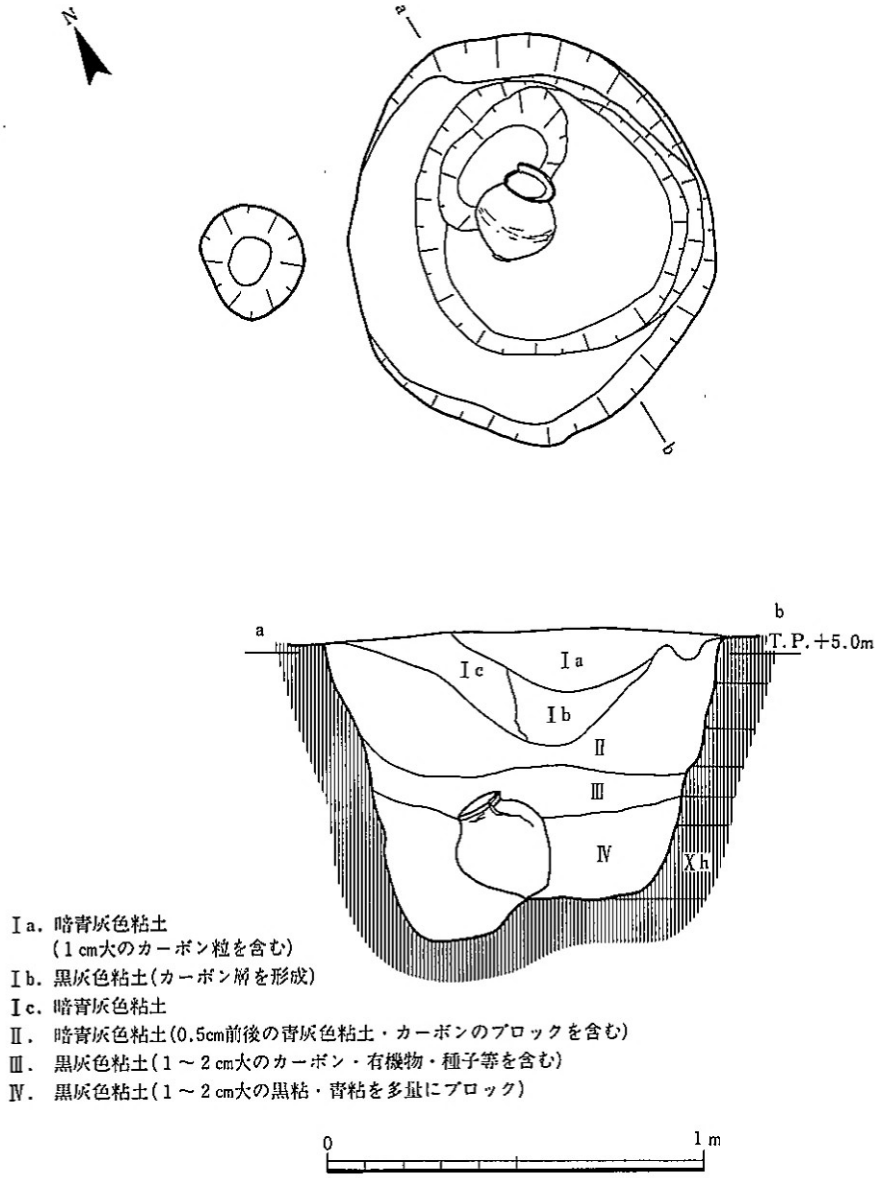
Ｌ・０地区において、溝ＳＤ－19を切り込んで検出された。規模は、平面円形プランを呈し、径約0.68m、深さ約0.83mをはかる。

埋土は、大きく５つに大別される。土器は各層から出土しているが、いずれも細片で、図示は不可能であった。

土坑

ＳＫ－18（第120図、図版54a）

Ｇ・③地区の第Ｘ層面にて検出した土坑である。溝ＳＤ－26・27に囲まれた平坦面のほぼ中央に位置する。平面プランは径1.08×0.97mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは0.82mをはかる。断面形態は片寄り二段掘りで、坑底の北壁よりに径0.43×0.25m、深さ約0.12mの一段深い掘り込みがみられた。坑底は第Ｘｉ層中にあり、レベルはＴ.Ｐ.＋4.35～4.24mである。



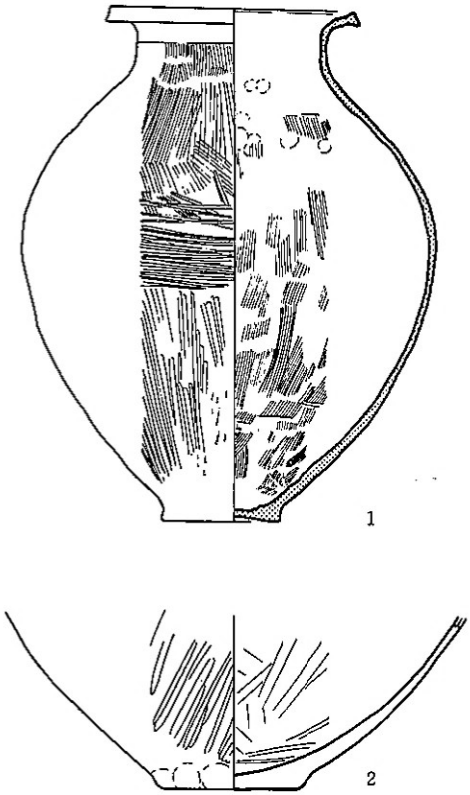
第120図　ＳＫ－18遺構平面図及び土層断面図（1/20）

埋土は、土層堆積状況から４層に分けられる。各層より少量の遺物を得ている。（Ⅳ）層からは単独で、壺形土器完形品１点が出土した（図版54ａ）。おそらく、土坑廃絶にともなって廃棄されたのであろう。

なお、本土坑は出土土器のプロポーション及び掘削位置（亀井集落全体の中での）から判断して、ＳＫ－19、ＳＤ－26・27と有機的関係にあったと、考えられる。

〔土器〕（第121図、図版111－174）

壺形土器がある。時期は第Ⅲ－Ⅳ様式である。（1）は（Ⅳ）層から、（2）は（Ⅰ）層から出土し



第121図　ＳＫ－18出土土器実測図（1/4）

たものである。

壺形土器（1）　口径13.0cm、器高27.2cm、体径21.8cm、底径6.0cmをはかる。口縁部は短く外反し、口縁端部は、わずかに上下に肥厚し面をもつ。体部は中位に最大径をもち、底部は、わずかに突出し、やや上げ底。頸部外面はハケ、内面はナデ、体部外面上半はハケ、下半はヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は茶褐色を呈し、器壁は薄く、焼成は良好である。生駒西麓産の胎土をもつ。（2）は底径7.0cmをはかる壺形土器底部である。体部外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整を施す。色調は灰白色を呈し、外面全体に煤の附着がみられる。

ＳＫ－20（第15図）

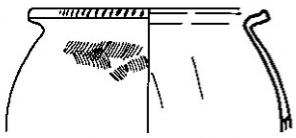
Ｊ～Ｋ・①地区の第Ｘａ層上面にて確認した。北側は、弥生時代後期後半に開削された溝ＳＤ－09によって切られている。形状は長軸1.73m、短軸0.31m（以上）の平面プランを有し、深さは0.31mをはかる。残存形状から、おそらく長楕円形プランを有していたものと考えられる。

埋土は２層に分けられ、（Ｉ）黒灰色粘土（青灰色シルト・カーボンのブロックを多量に含む）、（II）黒灰色粘土（わずかに青灰色シルト・カーボンを含む）である。時期は遺構の重複関係及び、少ない弥生時代中期の土器片から考えて、中期後半以前に求められよう。

〔土器〕（第122図）

（Ｉ）・（II）層から、ポリ袋１杯分の弥生時代中期の土器を得ているが、甕形土器１点以外は、いずれも細片のため図示していない。

甕形土器　口径12.4cm、現存高6.3cmをはかる。くの字状に屈曲する口縁部を有し、端部は若干肥厚して面をもち、部分的に刻目を施している。体部外面はハケ、内面はナデ調整である。色調は灰褐色を呈する。



第122図ＳＫ－20出土土器実測図（1/4）

ＳＫ－23（第123・141図）

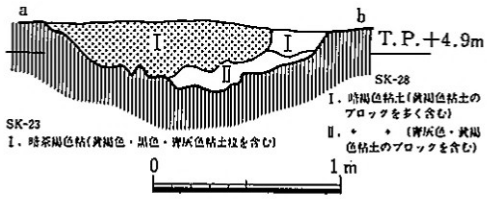
Ｈ・③地区の第Ｘ層上面にてＳＫ－28を切り込んで、検出した土坑である。平面プランは径1.2mの不整円形を呈し、深さは0.3mをはかる。中期後半の溝ＳＤ－27に切られ、北半部を失う。

埋土は暗茶褐色粘土（黄褐色、黒色、青灰色粘土の小粒をブロック）によって充填されていた。

遺物は弥生時代中期土器片を得ているが、細片のため図示していない。遺構の切り合い関係から、中期後半以前に掘削されたのであろう。

ＳＫ－28（第123図、141図）

Ｇ・③地区の第Ⅹ層上面にて検出した土坑である。ＳＫ－23，ＳＤ－27に切られているが、形状は円形プランを有し、径0.43m以上、深さ0.36mをはかる。



第123図　ＳＫ－23、28土層断面図　(1/40)

埋土は２層に分けられ、（Ⅰ）暗褐色粘土（黄褐色粘土を多く含む）、（Ⅱ）暗褐色粘土（青灰色・黄褐色・茶褐色粘土の小粒ブロックを多量に含む）である。出土遺物はいずれも細片で、時期を明確に決めるこはできないが、遺構の重複関係から中期後半以前に掘削されたのであろう。

溝

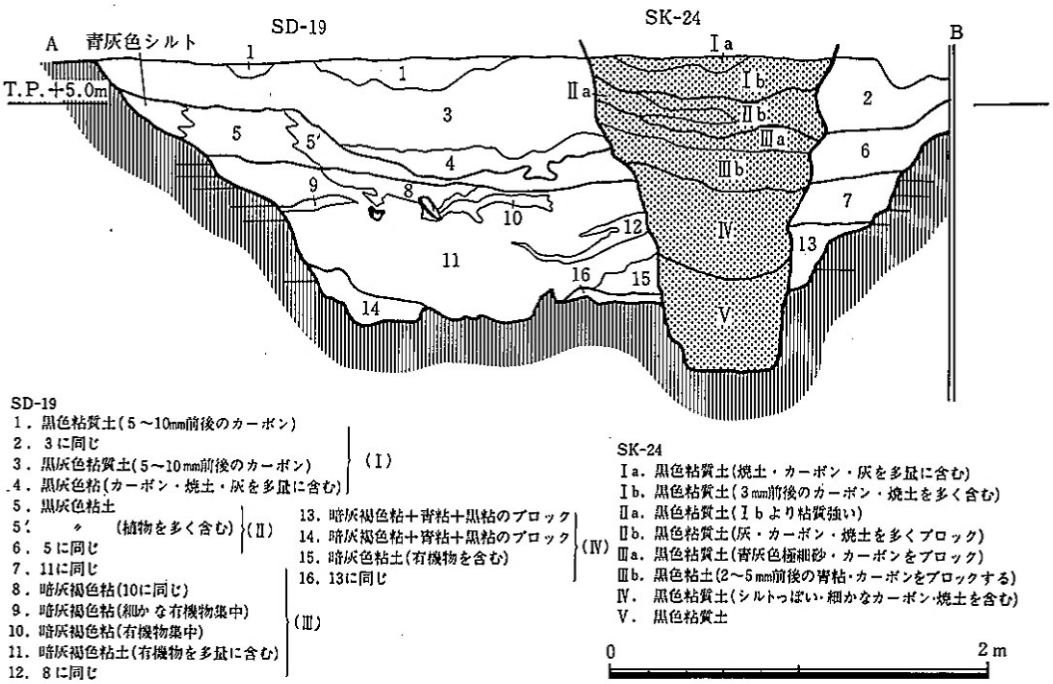
ＳＤ－19（第124～126図、図版55～61）

Ｌ～Ｍ・１～①地区にて検出した東－西に走行する上部幅4.5m、下部幅1.5mの弥生時代中期の大溝である。検出面は第Ⅹ層上面（Ｔ．Ｐ．+5.2m）で、上部には層厚約1.3mの弥生時代遺物包含層が堆積していた。なお、本溝はＫＭ－Ｈ４調査区の調査で検出しているＳＤ－19より続く、同一の溝である。断面形態はほぼ逆台形を呈し、深さは約1.4mをはかる。北側の一部は江戸時代平野川の流路によって、Ｔ．Ｐ．+4.9mまで削平をうけていた。また、上部はピット・ＳＫ－24に切り込まれている。

埋土は、溝中の土層堆積状態から４つの層に大別される。（Ⅰ）黒灰色粘質土、（Ⅱ）黒灰色粘土（有機物を多量に含む）、（Ⅲ）暗灰褐色粘土、（Ⅳ）暗灰褐色粘土である。（Ⅰ）層は、溝の機能消失後に堆積した土層。（Ⅱ）（Ⅲ）層は、溝が機能している間に形成された土層で、出土土器の大半は弥生時代中期前半に比定される資料。（Ⅳ）層は、溝を開削した際に掘残した土が再堆積したものと思われる。

調査はまず１ラインに沿って溝断面観察用のあぜをもうけ、このあぜを界して便宜的に東地区と西地区に分け、遺物の取りあげを行っている。その際、４つの層に分けられた層位ごとに調査を行い、そこに包含される遺物の変化、特に土器の時期の変化をみた。なお、ＫＭ－Ｈ７調査区の（Ⅰ）（Ⅱ）層、（Ⅲ）層、（Ⅳ）層はＨ４調査区の（Ⅰ）層、（Ⅱ）層、（Ⅲ）層に各々対応する。

〔遺物出土状況〕　（Ⅰ）～（Ⅲ）層から、土器・石器・木製品・土製品・骨角製品・動植物遺存体等の遺物を多量に得ている。出土土器の半ば近くは、層厚約0.6mをはかる（Ⅰ）層から出土している。これらは、出土状況から溝が溝としての機能消失後に、廃棄物として、その凹みに捨てられたものと思われ、第Ⅲ様式の多量の土器を主に第Ⅱ様式の土器を包含していた。（Ⅱ）層は、（Ⅰ）層の影響を受けたためか、第Ⅱ様式の土器を主に第Ⅲ様式の土器が混在して出土している。と同時に、鉄器を着装したと考えられる木製縦斧の柄も出土している（図版60ｃ）。（Ⅲ）層出土の土器は第Ⅱ様式に比定される。この層には、腐植した葉・茎・種子が多く含まれ、木製品も良く保存されていた（図版56ａ）。



第124図　ＳＤ－19及びＳＫ－24土層断面図（1/40）

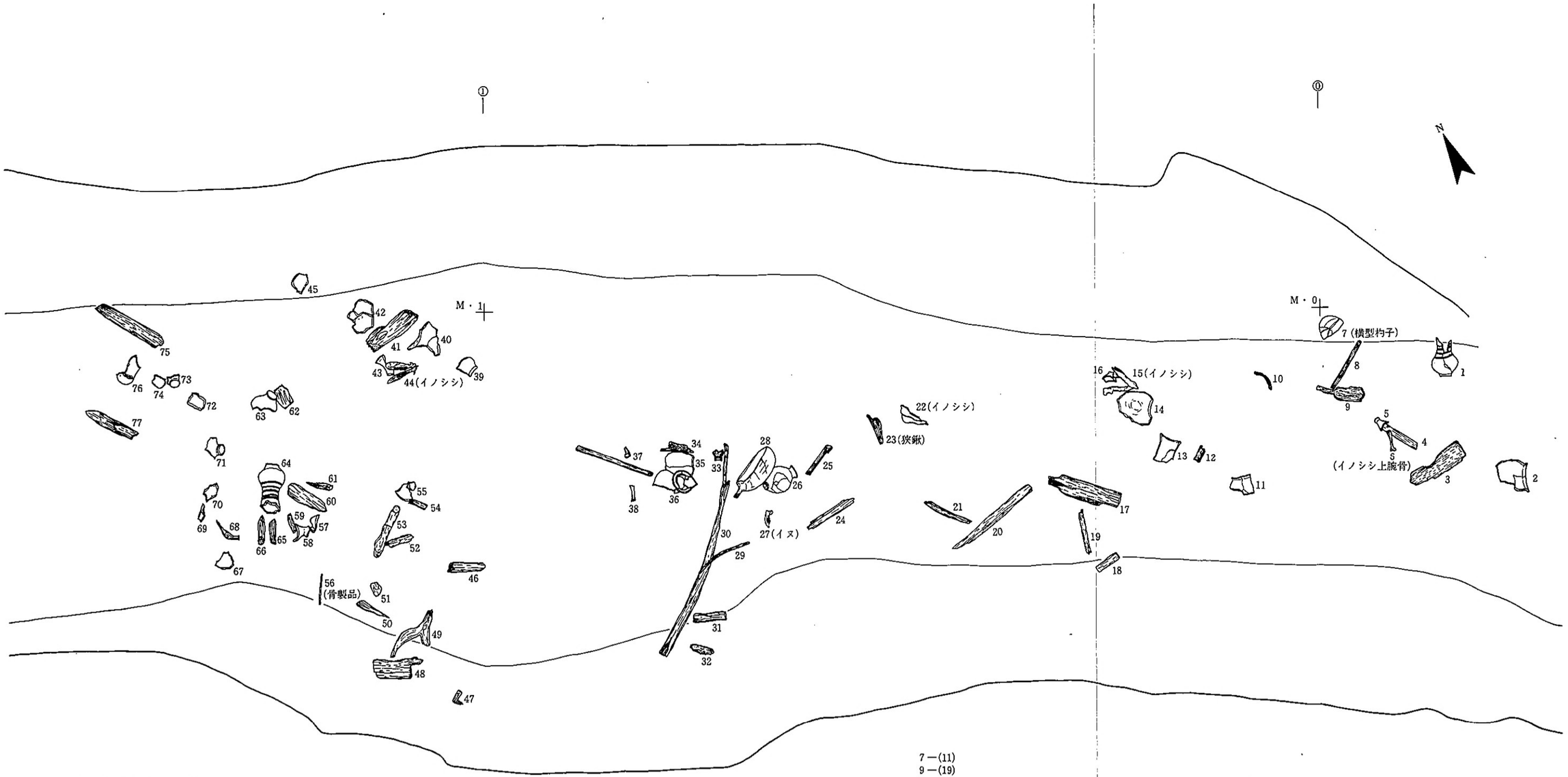
木製品には、えぶり・鋤・鍬等の農耕具をはじめとして、小型臼（第209図17、図版34－15)、飲食器である横型杓子（図版59ｂ)、匙，そして流水紋・鋸歯紋を飾る冠状木製品（図版58ｂ、巻頭カラー写真図版１)、黒漆塗長弓（図版140－26）や用途不明の木製品も多く出土している(図版57ａ)。骨角器では、鹿角加工品のほかに、骨製棒状加工品１点が出土している（図版61b)。

動物遺存体にはイノシシ・ニホンジカ・イヌ・スッポン等の豊富な遺体を検出した。イノシシ下顎骨は完存していたものが３例あり、いずれも雌（♀）の個体であった（図版60ａ)。イヌ（亀井７号犬）は左前頭骨、右下顎骨のみが接して出土していた（註１）（図版59ａ)。頭蓋骨は破壊され、下顎骨には、頭蓋骨から取りはずす際に附された解体痕が観察された（第252図)。食用に供された例として、興味深い事例といえる。なお、計測成果から、大きさは「小型犬」のものに比定される（註２）。また、祭祀関係の遺物として、ニホンジカの肩甲骨を利用したト骨（第245図）も１点出土している。

〔土器〕（第127～131図、図版112～114)

壺・細頸壺・無頸壺・鉢・台付鉢・深鉢・高杯・蓋・甕形土器等の器種資料を得ている。時期は第Ⅱ～Ⅲ様式である。（Ⅰ）層から（３・４・９・10・17・19・21～27・32・37・39・40・48・51・53)、（Ⅱ）層から（８・11・18・20・30・38・45・46・52)、（Ⅲ）層から（１・２・５～７・12～16・28・29・31・33～36・41～44・47・49・50）の出土をみている。（２・５・６・12・

第125図　ＳＤ－19遺構平面図及びピット群（1/50）



1・2・5・10～14・16・26・35・36・39・40・42・43・45・55・57・58・63・64・67・69～74・76は土器
3・4・7～10・12・17～21・23～25・28～31・41・46～50・52～54・59～62・65・66・68・75・77は木製品及び加工木、自然木
32・51は石器
6・15・22・27・33・34・37・38・44は動物遺存体
56は骨製品

1－(15)
2－(43)
5－(35)
11－(47)
13－(2)
26－(7)
35・36－(6)
43－(36)
64－(14)
※(　)でくくった番号は土器実測図番号と同じ。

7－(11)
9－(19)
10－(27)
17－(30)
23－(4)
25－(17)
28－(15)
48－(7)
59－(20)
※(　)でくくった番号は第Ⅵ章第2節の木製品遺物番号と同じ。

32－(58)

※(　)でくくった番号は第Ⅵ章第1節の石器遺物番号と同じ。

0　1m

第126図　ＳＤ－19（Ⅲ）層遺物出土状況（1/25）

13・14・25・35・39）は生駒西麓産の胎土をもつ。（46・50）は紀伊産の胎土をもつ。なお、（4・5・6・12・15・16・40）は、内外面に黒色物質が塗布されている。

壺形土器（1～8・14・15・17）　（1）は口径15.7cmをはかり、色調は灰白色を呈する。頸部外面はナデ、体部外面はヘラミガキ調整である。（2）は口径15.4cmをはかり、色調は暗褐色で、内外面にススが附着していた。外面はヘラミガキ、頸部内面はナデ、体部内面はナデ後、粗くヘラミガキ調整。（3）は口径26.6cmをはかる。色調は淡茶褐色で、胎土にはくさり礫を多量に含んでいる。口縁端面に斜格子紋、体部に波状紋を施し、くびれ部に断面三角形の突帯2つを貼り付けている。外面はハケ、内面はナデ調整である。（4）は口径15.0cm、体径31.9cmをはかり、口径の割りに体部は著しく膨らむ。色調は淡茶褐色。紋様は、頸部から体部上位にかけて直線紋3帯、扇形紋2帯、扇形紋2帯、直線紋6帯を飾っている。各紋様帯間は研磨している。頸部外面はハケ、内面はヘラミガキ、体部外面はヘラミガキ、内面はハケと指ナデ後、粗いヘラミガキ調整。

（5・6）は短い頸部に短い口縁部を有している。（5）は口径15.8cmをはかり、色調は暗褐色。口縁部端面に直線紋を巡らし、その上に三角形のスタンプ文を加える。頸部には直線紋1帯、肩部には流水紋を飾っている。内外面はナデ調整である。（6）は口径12.9cm、体径18.9cmをはかる。色調は暗褐色を呈し、外面全体にわたってススが附着していた。口頸部はヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、内面は指ナデ調整である（図版112の181）。

（7）は口径13.8cm、器高19.0cm、体径16.9cm、底径5.1cmをはかる。色調は淡茶褐色を呈し、体部内外面にスス附着。頸部外面は粗いハケ、内面はナデ、体部外面上位はヘラミガキ、下位はハケ状ナデ、内面はナデ調整である（図版113の183）。

（8・14・15・17）は球形、無花果形の体部に太く長い頸部と短く外反する口縁部をもち、体部径に対して器高が著しく長い壺形土器である。いずれも口縁端部は面をなす。（8）は口径16.8cm、体径17.5cm、復元器高30.5cmをはかる。色調はにぶい橙色を呈している。肩部外面には直線的な変化をみせる波状紋2帯を飾っている。頸部外面はナデ、内面はハケ、体部外面上位はナデ後に一部ヘラミガキを加え、下位はヘラケズリ、内面は指頭圧痕とハケ調整である。（14）は口径16.2cm、体径16.2cm、器高27.3cm、底径8.0cmをはかる。色調はにぶい橙色。頸部から肩部にかけて直線紋5帯を飾り、紋様帯間は研磨している。口縁部内面、器外面はヘラミガキ。頸部内面は指ナデ、体部内面はハケ状ナデ調整である。（15）は現存器高24.0cm、体径15.6cm、底径6.4cmをはかる。色調は淡茶褐色を呈する。頸部から体部上位に直線紋10帯以上を飾り、紋様帯間は研磨している。体部外面下半はヘラミガキ調整である。（17）は現存高8.5cm、体径8.7cm、底径3.7cmをはかる。小型細頸壺の可能性もある。色調は淡茶褐色で、内外面にスス附着。肩部に簾状紋3帯以上を飾る。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。

細頸壺形土器（9～11・16）　算盤玉形の体部に外反する細長い頸部とわずかに内弯する口縁部をもつ壺形土器である。

（９～１１）は細部において若干異なるものの、形態はもちろんのこと色調、紋様、調整はまったくいっしょである。色調は淡黄灰色。体部外面はヘラミガキ、内面上位は指ナデ、下位及び頸部内面はハケ調整である。（９）は直線紋12帯、（10）は13帯、（11）は６帯以上で各紋様帯間は研磨している。（９）は口径8.6cm、体径22.2cmをはかる。

（16）は口径7.0cmをはかり、色調は茶褐色を呈する。口頸部に直線紋４帯を飾る。内外面はナデ調整である。

無頸壺形土器（12・13・38）　いずれも内弯して直口する口縁部を有する。いずれも色調は茶褐色。（12）は口径15.1cmをはかる。体部上位に直線紋５帯＋αを飾り、各紋様帯間は研磨している。外面はハケ、内面はナデとハケ調整である。（13）は口径12.5cmをはかる。体部上位に簾状紋、扇形紋を各１帯、直線紋４帯＋αを飾り直線紋様帯間は研磨している。体部内面はハケと指ナデ調整である。（38）は口径13.5cm、体径14.8cmをはかる。

鉢形土器（18～26）　口縁部の形状から直口する（19・20）、「く」の字に屈曲する（21・22）、緩やかに外反する（24～26）、外に開く体部から稜をなして内傾ぎみに立ち上がる（18・23）の４つの形式がある。

（18）は口径16.8cmをはかり、色調は淡黄灰色を呈している。口縁端部に刻目を施す。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整。

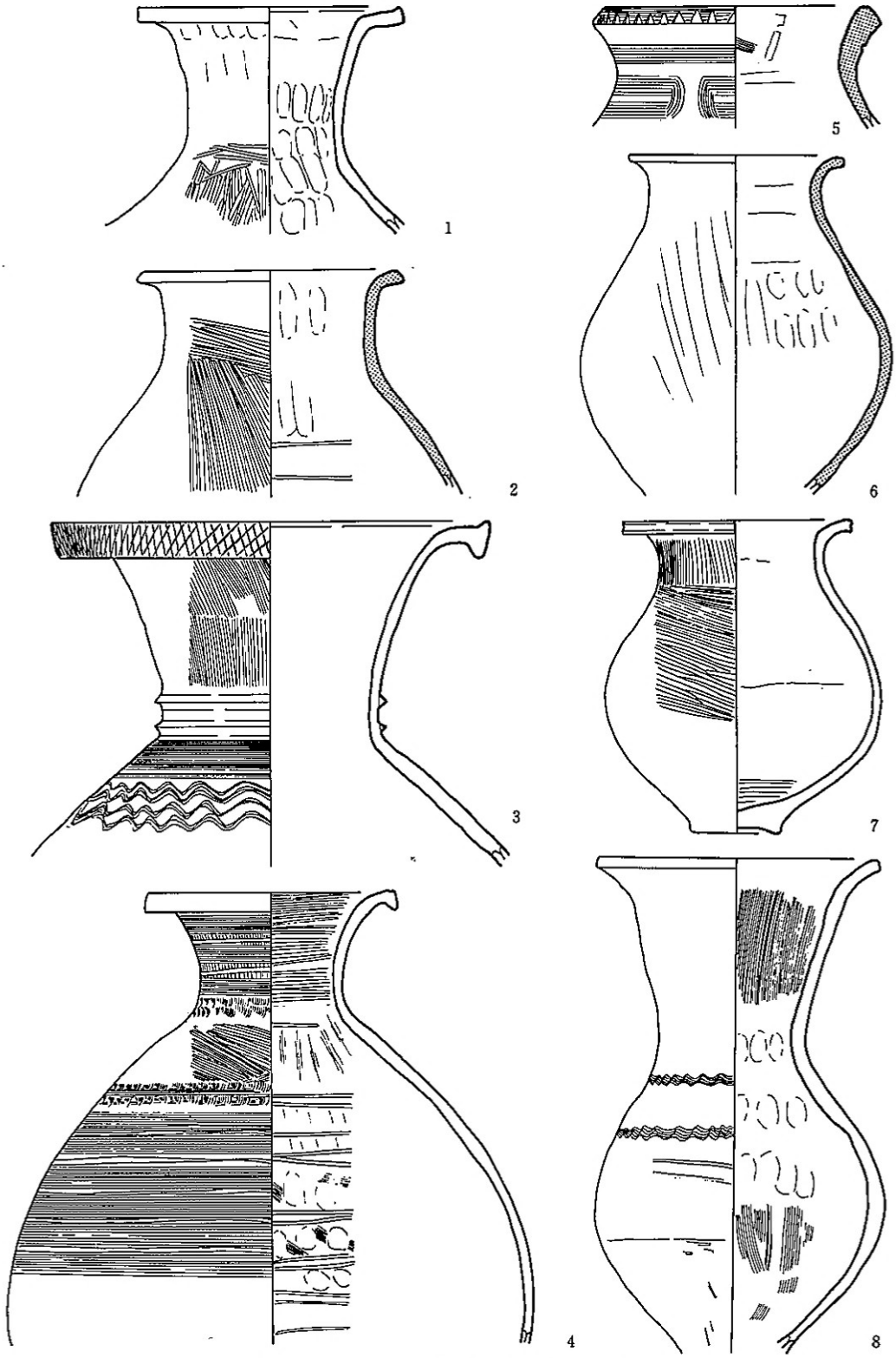
（23）は口径30.5cmをはかり、口縁端部は内外に突出する。色調は淡黄褐色。口縁部に斜格子紋、凹線紋２条を飾っている。口縁部内面は粗いヘラミガキ、体部外面はヘラケズリ調整。

（19）は口径19.1cm、器高8.9cm、底径5.5cmをはかる。色調は淡茶褐色。口縁端部上縁、内縁に刻目を加える。外面ヘラミガキ、内面ナデ調整。（20）は口径20.1cm、器高16.1cm、底径7.4cmをはかる。端部はヨコナデ調整をして内外に若干肥厚させ、面をもつ。体部外面上半はヘラミガキ、下半はヘラケズリ、体部内面はナデ調整である。色調は淡黄褐色。

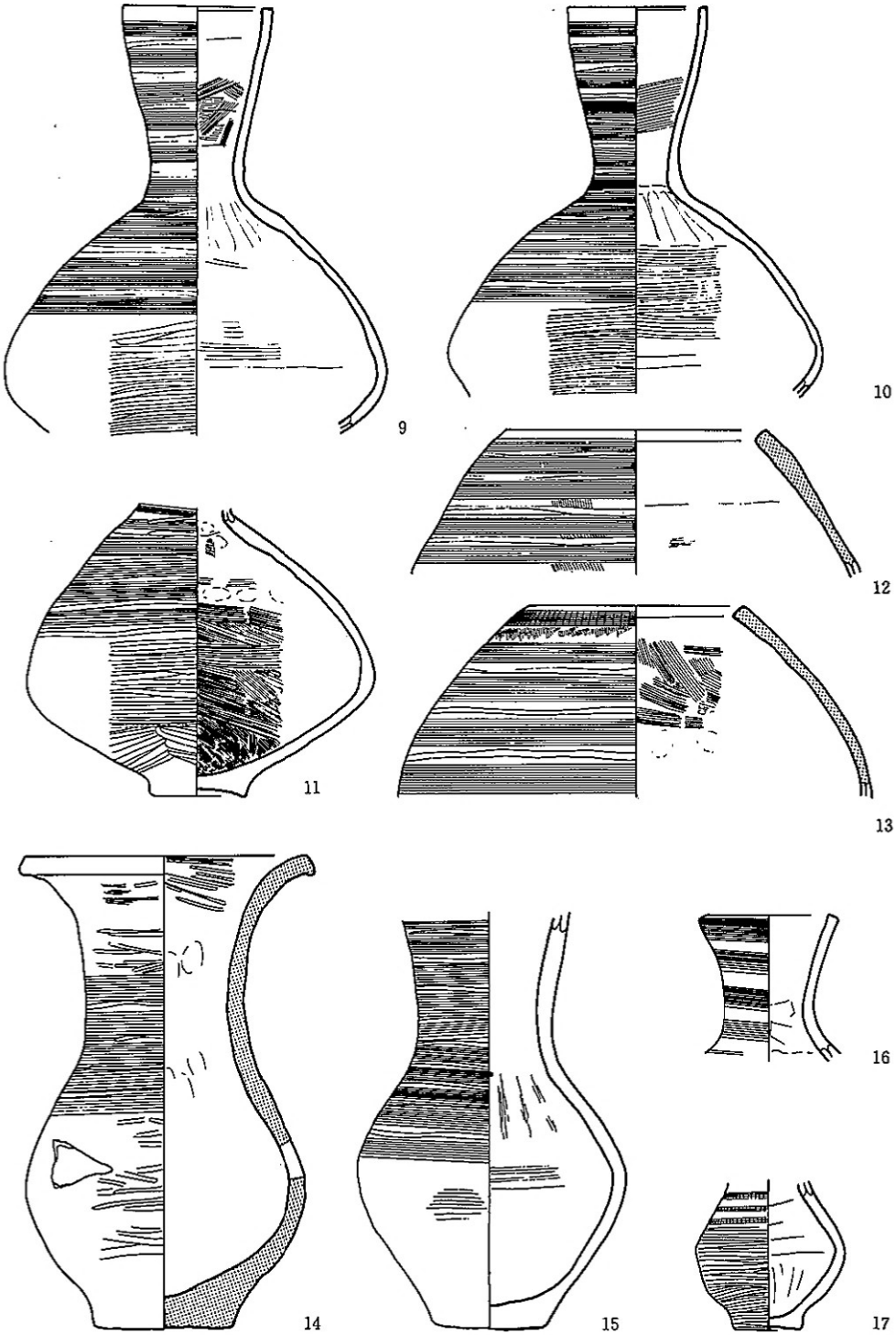
（21）口径20cm、器高11.5cmをはかる。色調は淡黄褐色で、外面に黒色物質を塗布している。口縁端部は強いナデ、体部外面上半はヘラミガキ、下半はナデ、体部内面はハケ後にヘラミガキを加える。（22）口径33.8cmをはかり、色調は淡茶褐色。口縁端部は強いヨコナデ、体部内外面はヘラミガキ調整。

（24）は口径30.8cmをはかる。色調は淡茶褐色で、外面に黒色物質を塗布している。体部には扇形紋を飾る。体部内外面はヘラミガキ調整である。（25）は口径24.7cm、器高13.8cm、底径7.1cmをはかる。（26）は口径27.0cm、器高17.3cm、底径6.2cmをはかる。色調は淡黄灰色。体部内外面はナデ調整である。

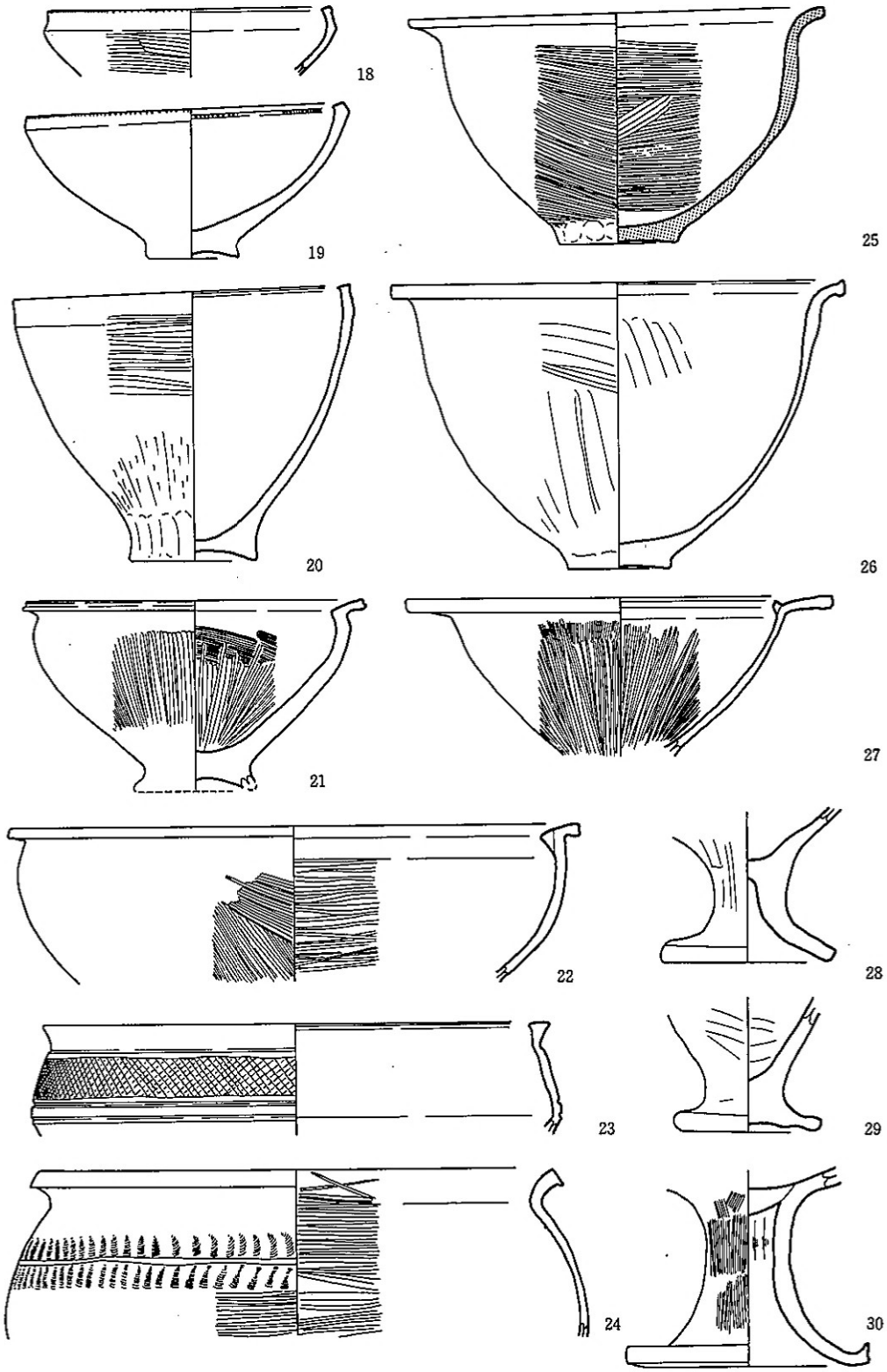
台付鉢形土器（28～30・39・40）　（28～30）は脚台部のみ残存している。色調はいずれも淡黄褐色を呈する。（28）は底径9.9cmをはかる。内外面はナデ調整である。（30）は底径12.6cmをはかり、外面はハケ、内面は絞り目とナデ調整である。色調は赤褐色。（29）は底径7.8cmをはかる。内外面はナデ調整である。



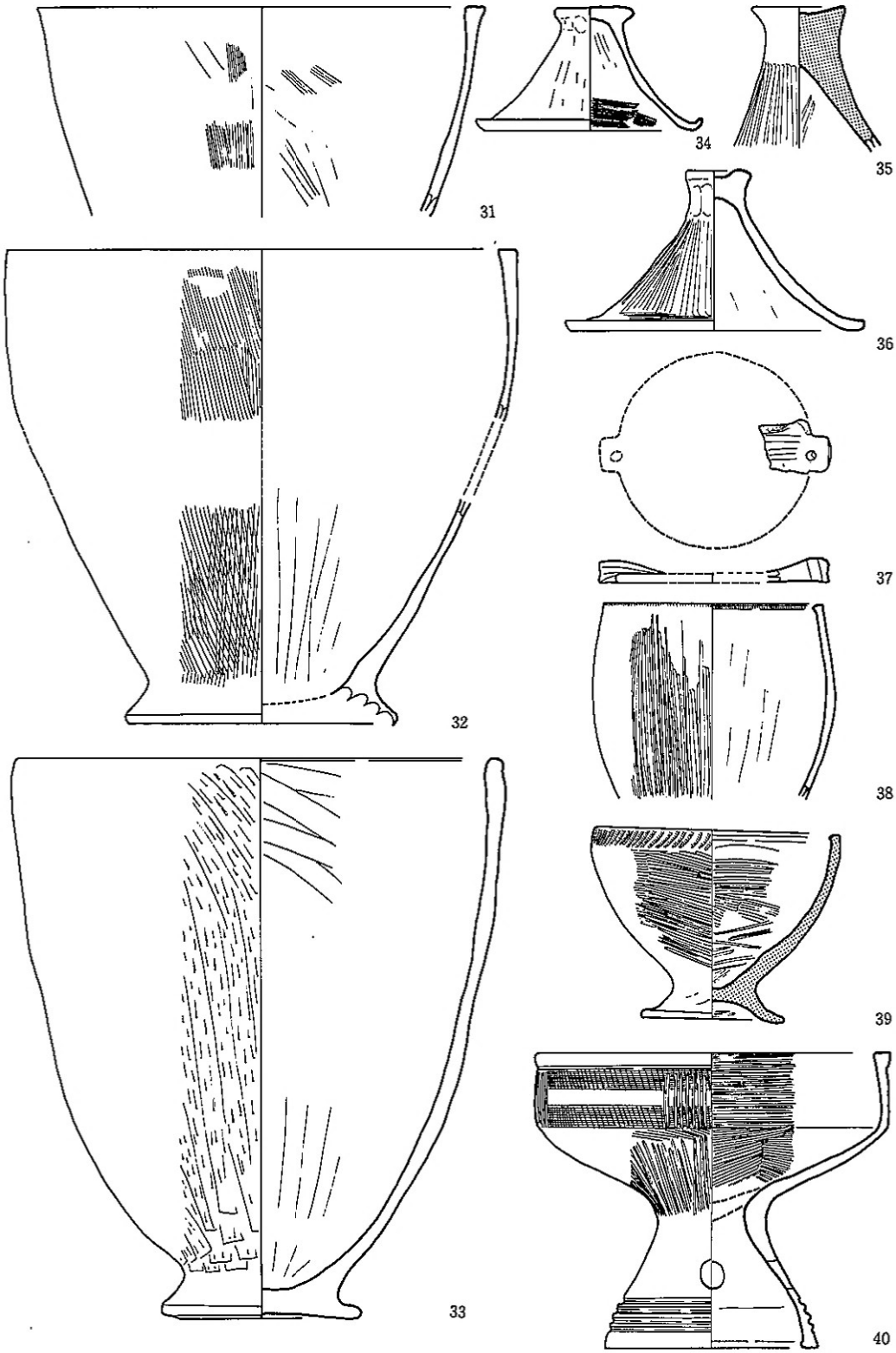
第127図　ＳＤ－19出土土器実測図（1/4）



第128図　ＳＤ－19出土土器実測図（1/4）



第129図　ＳＤ－19出土土器実測図（1/4）



第130図　ＳＤ－19出土土器実測図（1/4）

(39) は口径14.9cm、器高11.7cm、台部径8.0cm、をはかり、口縁部は直口する鉢である。口縁部外面に列点紋1帯を飾る。色調は明褐色。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ、台部外面はナデ、内面はヘラミガキ調整である（図版114の193)。

(40) は口径21.4cm、器高18cm、台部径13cmをはかる。色調は淡茶褐色。口縁部外面に簾状紋2帯を施し、その上に8条を1単位とするヘラミガキを紋様風に施す。脚台部に4つの透孔を穿ち、裾部に凹線紋4条を施す。口縁部外面はナデ、内面および体部外面はヘラミガキ、体部外面はハケ後にヘラミガキ、脚台部内面はナデ調整である。破片の一部は、KM－H3調査区の江戸時代自然河川から出土した（図版114の194)。

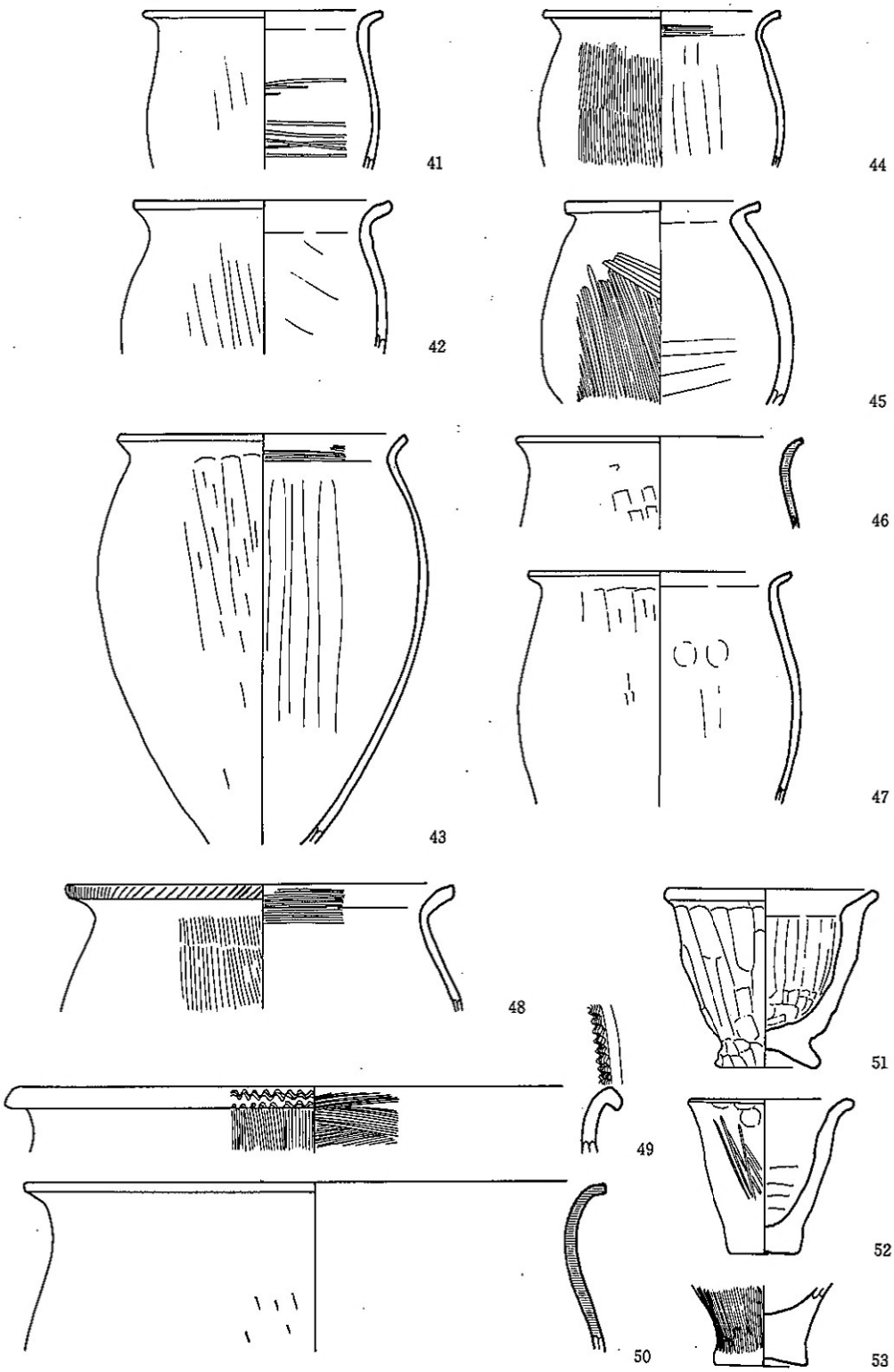
深鉢形土器（31～33・38）　(31) は口径27.2cmをはかり、端部は若干外側に肥厚して、幅1.0cmの平坦面を有する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はハケ状ナデ調整である。色調は淡茶褐色。(32) は口径30.9cm、復元器高29.1cm、底径16.1cmをはかる。口縁部は若干内弯して、端部は面をなす。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ、内面はハケ状ナデ調整である。色調は淡黄褐色。(33) は口径29.4cm、器高34.2cm、底径11.4cmをはかる大型品である。口縁部は直口する。体部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整である。色調は淡茶褐色を呈し、内外面に煤が附着している。

(38) は口径13.4cmをはかり、口縁部は内弯ぎみに立ち上がり、端部は内側につまみ出している。端部内外縁に刻目紋を施している。口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は淡茶褐色を呈し、内外面には煤が附着している。

蓋形土器（34～37）　(34) は口径12.7cm、器高7.6cmをはかる。色調は淡黄褐色を呈し、内外面にスス附着。体部外面はナデ、内面上位はナデ、下位は粗いハケ調整である。(35) は現器高8.6cmをはかる。色調は暗褐色を呈し、内外面にスス附着。体部外面ヘラミガキ、内面ナデ調整である。(36) は口径17.7cm、器高9.7cmをはかる。色調は淡黄褐色で、内外面にスス附着。口縁部内面ヨコナデ、外面ヘラミガキ、体部外面ヘラミガキ。内面ナデ調整である。(37) は復元口径12.0cmをはかり、平面は円形で、左右対称の位置に方形の突起をつくりつけ、中央に紐孔各1個を穿つ。類例をみないめずらしいものと云える。色調は淡茶褐色で、内外面はヘラミガキ調整。

甕形土器（41～53）　(41) は口径14cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈している。体部外面はハケ状ナデ、内面はナデ調整後に間隔の粗いヘラミガキを加える。(42) は口径14.9cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈している。体部外面はナデ、内面はハケ状ナデ調整である。(43) は口径16.8、体径19.5cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈している。口縁部内面はハケ、体部外面はヘラケズリ、内面は指ナデ調整である。(44) は口径14cm、体径14.5cmをはかる。色調は淡茶褐色。口縁部内面はハケ、体部外面はハケ、内面はハケ状ナデ調整である。(45) は口径11.4cm、体径15.0cmをはかり、色調は淡黄褐色を呈する。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。

(46・50) の口縁部はいずれも体部から緩やかに外反して立ち上がり、端部は丸くおさめてい



第131図　ＳＤ－19出土土器実測図（1/4）

る。色調は明褐色を呈し、紀伊産の胎土をもつ。体部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整を施している。（46）は口径16.8cmをはかる。（50）は口径34.3cmをはかる大型品である。

（47）は口径15.2cm、体径16.7cmをはかる。色調は淡灰褐色。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整である。（48）は口径22.9cmをはかり、口縁端部は面をなし、刻目を巡している。色調は淡茶褐色。口縁内面はハケ、体部外面はハケ、内面はナデ調整である。（49）は口径35.0cmをはかる大型品。色調は淡茶褐色。口縁部内面、口縁端部には波状紋を飾る。頸部内外面はハケ調整。

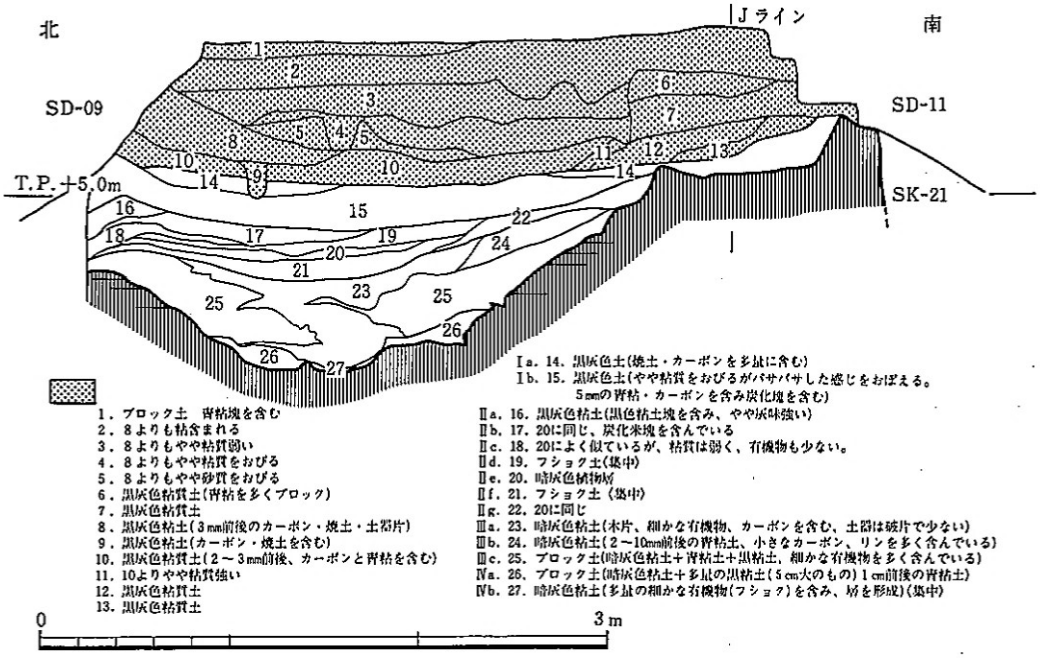
（51・52）は口径が体径を凌駕する。（52）は口径9.4cm、器高9.2cm、底径4.0cmをはかる。色調は淡黄褐色。体部外面はヘラミガキとナデ、内面はナデ調整である。（51）は口径12.2cm、器高10.7cm、底径5.6cmをはかる。体部内外面は面取り状の粗いヘラケズリ調整である。

（53）は底径5.4cm、底部厚2.5cmをはかる甕底部片である。色調は淡黄褐色。外面はハケ、内面はナデ調整である。

以上の状況からして、溝ＳＤ－19が開削・使用された時期は、第Ⅱ様式で、溝の機能停止・廃絶の時期は第Ⅲ様式であると判断される。

ＳＤ－20（第132図、図版62・63）

厚さ約0.75mの第Ⅸ層を地山面（第Ⅹ層上面）までさげた段階で、東西に曲走する遺構の輪郭を確認した。上部はピット、ＳＫ－20・22，ＳＤ－28によって切られているが、幅2.65m、深さ1.12mをはかる弥生時代中期中頃の大溝である。北側は後期後半の溝ＳＤ－09の掘削の為切られ、



第132図　ＳＤ－20土層断面図（1/40）

消失している。KMのSD3004(註3)から続く、同一の溝である。

溝中の堆積状況から、土層は5層に分けられ、（Ⅰ）黒灰色土（焼土・カーボンを多量に含む），（Ⅱ）黒灰色粘土（有機物が集中して層を形成している），（Ⅲ）暗灰色粘土，（Ⅳ）暗灰色粘土（5cm大の黒粘、1cm前後の青粘を多量に含んでいる），（Ⅴ）暗灰色粘土（細かな有機物を多量に含み、これらが層を形成）である。（Ⅰ）層は溝埋没後の凹みをゴミ捨場として再利用した時に、形成された層であろう。（Ⅱ）～（Ⅳ）層は溝の堆水時の堆積層と考えられる。遺物の大半は（Ⅰ）～（Ⅲ）層から出土した。

〔遺物出土状況〕　出土遺物には土器・石器・木製品・動植物遺存体等がある。各層からは第Ⅲ様式の土器が出土している。特に、（Ⅲ）層中には第Ⅲ様式の土器と少量の第Ⅰ様式～第Ⅱ様式の土器を含んでいた。他に、（Ⅰ）層から完形の石槍1点（第175図60）、（Ⅱ）層から横型杓子（図版63a）、えぶり未製品（第216図31）等の木製品が出土している。

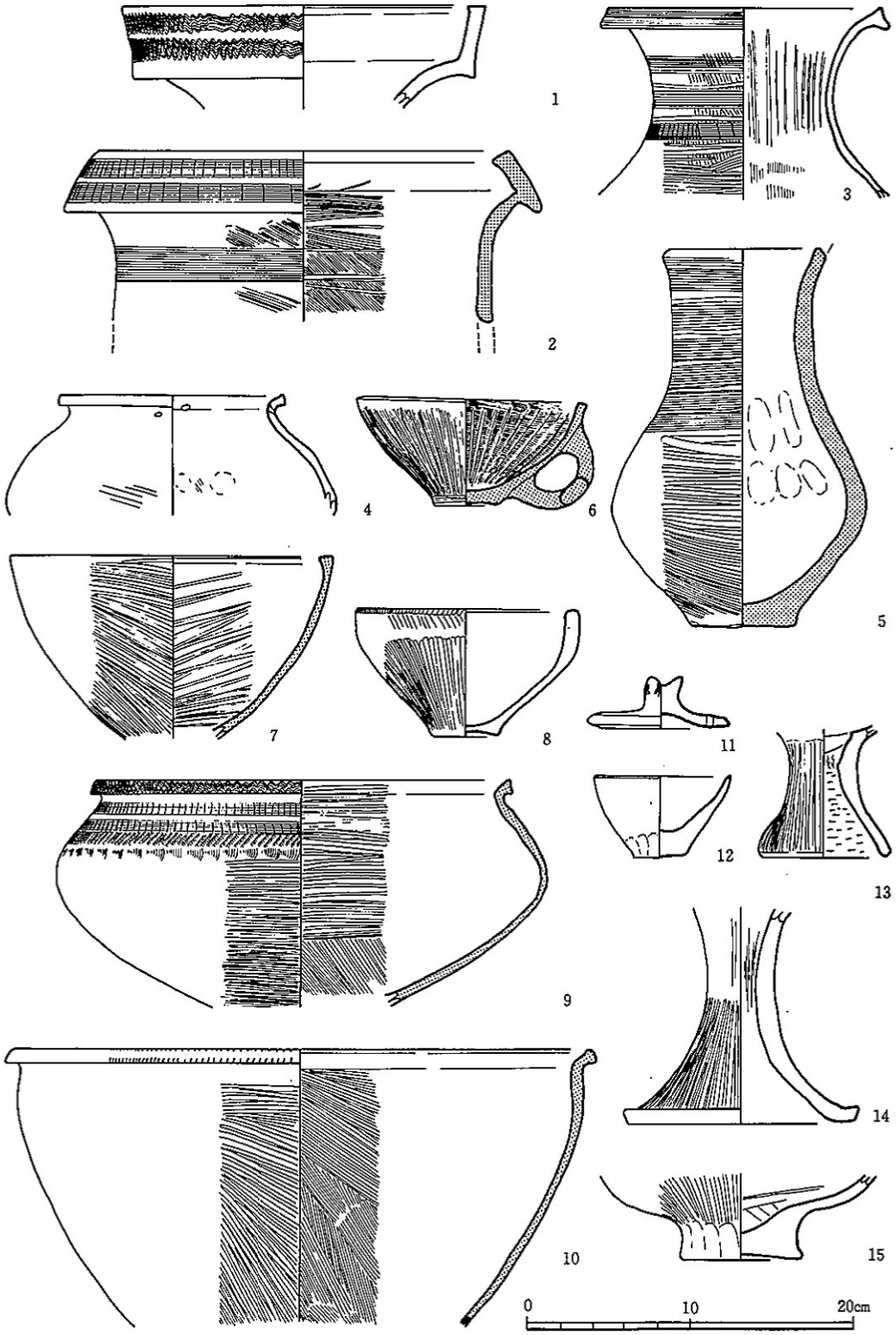
〔土器〕（第133・134図、図版115）

検出された土器は、第Ⅲ様式古段階の壺・無頸壺・鉢・蓋・台付鉢・高杯・甕形土器等の器種資料である。（Ⅰ）層から（1・3・4・7・9・12～14・17），（Ⅱ）層から（2・6・8・10）、（Ⅲ）層から（5・11・15・16・18・19）の出土をみている。なお、（1・3・4・8・10～18）の色調は淡茶褐色を呈し、（2・5～7）は生駒西麓産の胎土をもつ。

壺形土器（1～3・5・15・19）　（1）は口径22.1cmをはかり、口縁部は外反し、端部は粘土紐附加によって大きく上下に拡張させ、口唇部は平坦面を成す。口縁端部外面に波状紋2帯を飾る。（2）は口径35.0cm、筒状の頸部に外反する口縁部をもち、端部は上下に拡張する。端部外面に簾状紋2帯、頸部外面に直線紋1帯以上を飾っている。色調は暗褐色を呈する。口頸部外面はハケ、内面はハケ調整後に粗いヘラミガキを加える。（3）は口径16.5cmをはかり、緩やかに外反して立ち上がる口頸部をもち、端部は粘土紐の附加によって下方に拡張する。口縁端部外面に直線紋1帯、頸部外面に直線紋2帯・簾状紋1帯を飾る。頸部外面はハケ調整後に紋様間を研磨し、内面は粗いヘラミガキ。体部内面はハケ・ナデ、外面はヘラミガキ調整である。（5）は擬口縁径6.0cm、現高23.3cm、最大体径15.5cm、底径6.2cmをはかる。長い筒状の頸部をもち、口縁部は擬口縁のところで剝離している。頸部外面に7帯の直線紋を飾り、紋様間を研磨している。体部外面はヘラミガキ、内面は指頭圧痕を残す。(15) は底径7.0cmをはかる。底部は高台状に著しく突出している。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ状ナデ調整である。(19) は底径8.0cmをはかる。底部片である。色調は暗褐色を呈している。外面はヘラミガキ、下位にヘラケズリを施し、内面はハケ調整である。

無頸壺形土器（4）　口径13.6cmをはかり、口縁部は外反し、端部は面をもつ。口縁直下に2孔1対の紐孔を2組穿つ。内面はハケ調整、外面は表面剝離のため不明。

鉢形土器（6～10・12）　椀形直口のもの（6～8・12)、口縁部外反後、端部を肥厚させるもの（9・10）がある。



第133図　ＳＤ－20出土土器実測図（1/4）

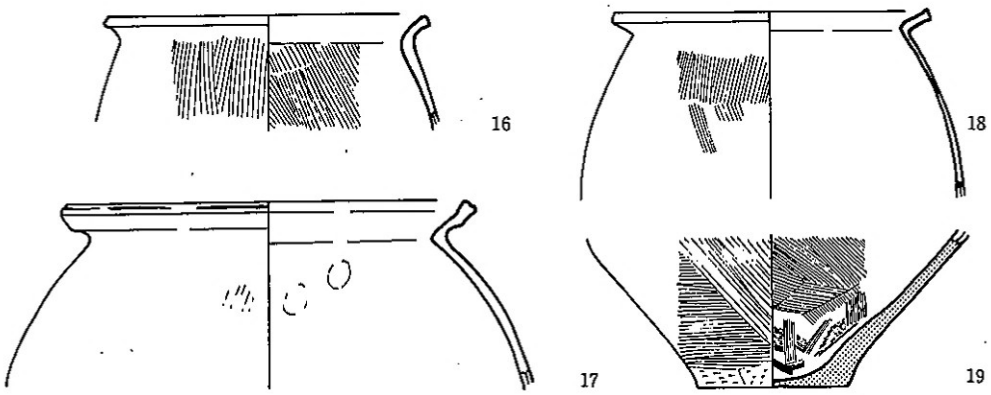
（6）は把手付きで、口径13.0cm、器高6.5cmをはかる。色調は暗緑褐色。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整後に放射状にヘラミガキを施している。（7）は口径14.5cmをはかり、端部は内側に突出させ稜線が入る。色調は暗緑褐色を呈する。内外面はヘラミガキ調整である。（8）は口径13.3cm、器高7.9cm、底径4.0cmをはかる。端部外縁に刻目を施す。(12) は口径8.2cm、器高4.9cm、底径3.1cmをはかる。内外面はナデ調整である。

（9）は口径25.2cm、最大体部径30.0cmをはかる。扁平な体部をもち、口縁端部外面に波状紋1帯、肩部に簾状紋2帯・刻目紋1帯・扇状紋1帯を施す。色調は暗褐色を呈する。体部内外面はヘラミガキ調整である。脚台の付く可能性がある。(10) は口径35.2cmをはかり、口縁端部上下に刻目を施している。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。

蓋形土器 (11)　口径8.6cm、器高3.1cmをはかる。双頭の摘をもち、1孔1対の紐孔を穿つ。内外面共にナデ調整である。

台付鉢形土器 (13)　裾部径7.7cmをはかる脚台片である。外面はヘラミガキ、内面上位は絞り目、下位はヘラケズリ調整である。

高杯形土器 (14)　裾径13.7cmをはかる脚部片である。外面はヘラミガキ、内面上位は絞り目、下位はナデ調整である。

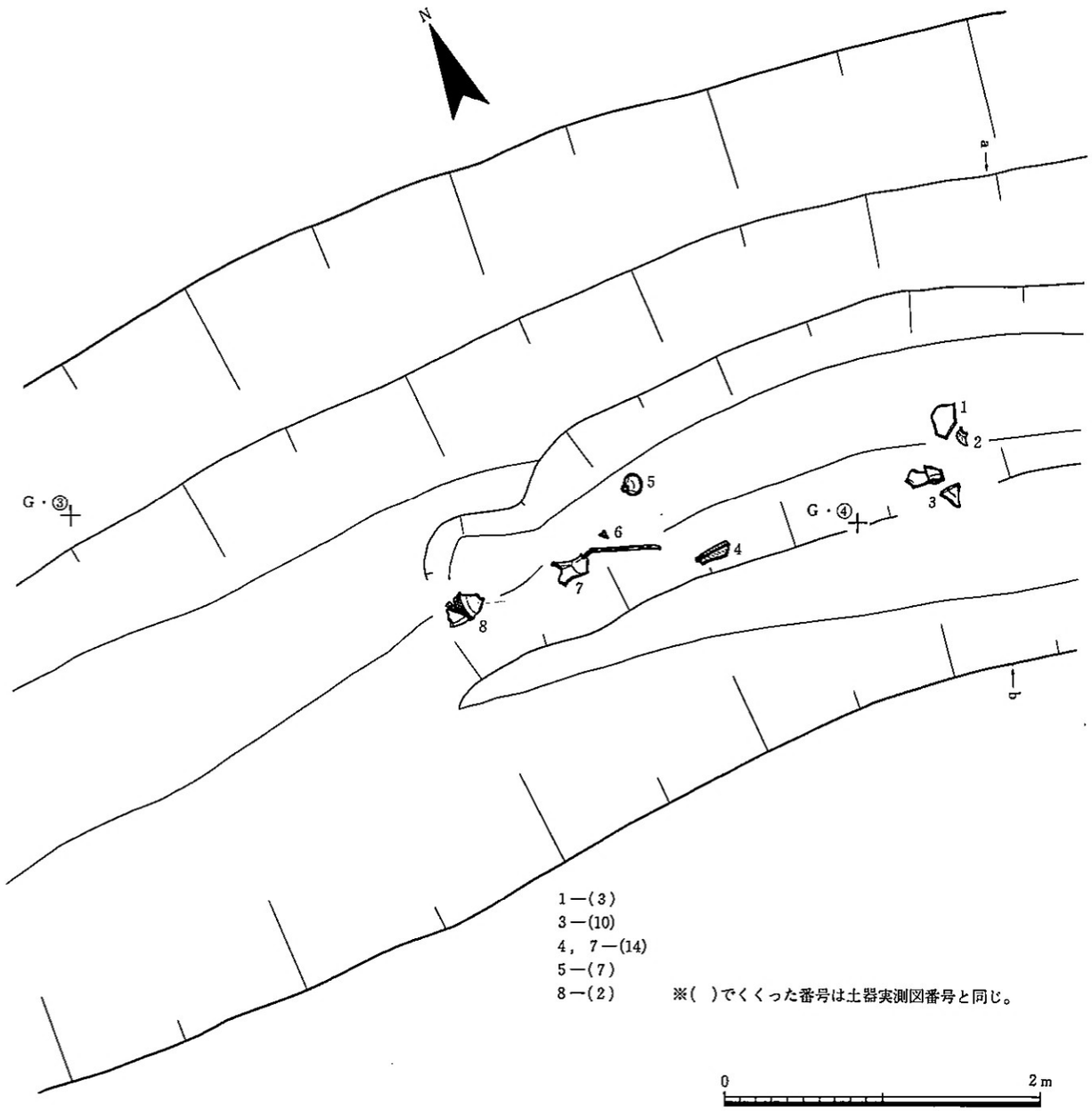


第134図　ＳＤ－20出土土器実測図 (1/4)

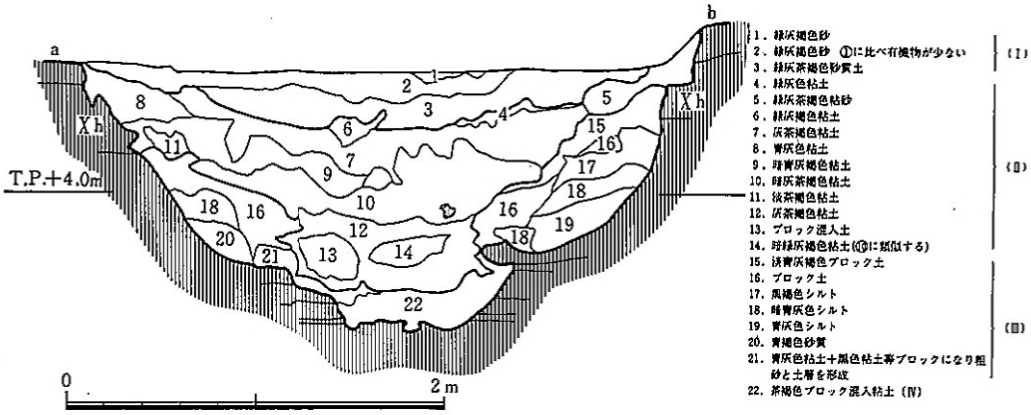
甕形土器 (16～18)　(16・18) の口縁部は屈曲して外反する。(17) は外反後、端部はわずかに内弯し、受け口状を成す。(16) は口径16.6cmをはかる。内外面共にスス附着。体部内外面共にハケ調整である。(18) は口径16.6cmをはかり、体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。(17) は口径20.8cmをはかり、口縁端面に一条の沈線を部分的に施している。体部内外面共にナデ調整である。

ＳＤ－26（第135～137図、図版63ｂ）

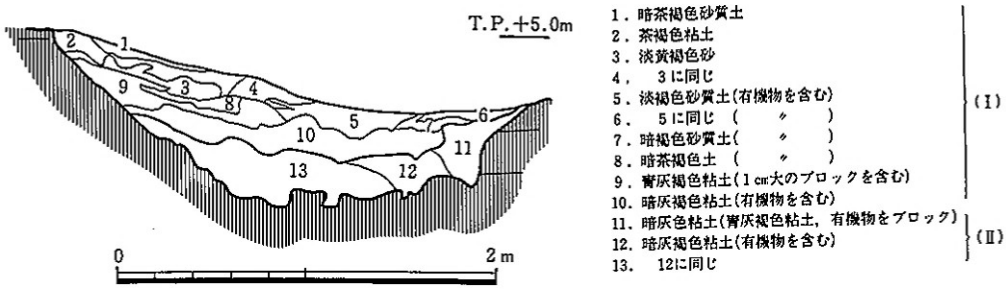
トレンチ南側にて、自然河川（ＳＤ－11の支流）の埋土除去後、検出された。溝の形状は上部幅4.2m、下部幅1.6mをはかり、ＳＤ－27・29同様に、東西に走行す。延長約24.5mを検出している。溝の中央西寄りの位置で、検出している5m四方の坑は、昭和47年のNo.7試掘トレンチの



第135図　ＳＤ－26遺物出土状況（1/40）



第136図　ＳＤ－26東端土層断面図（1/40）



第137図　ＳＤ－26西端土層断面図（1/40）

跡である。(註4)

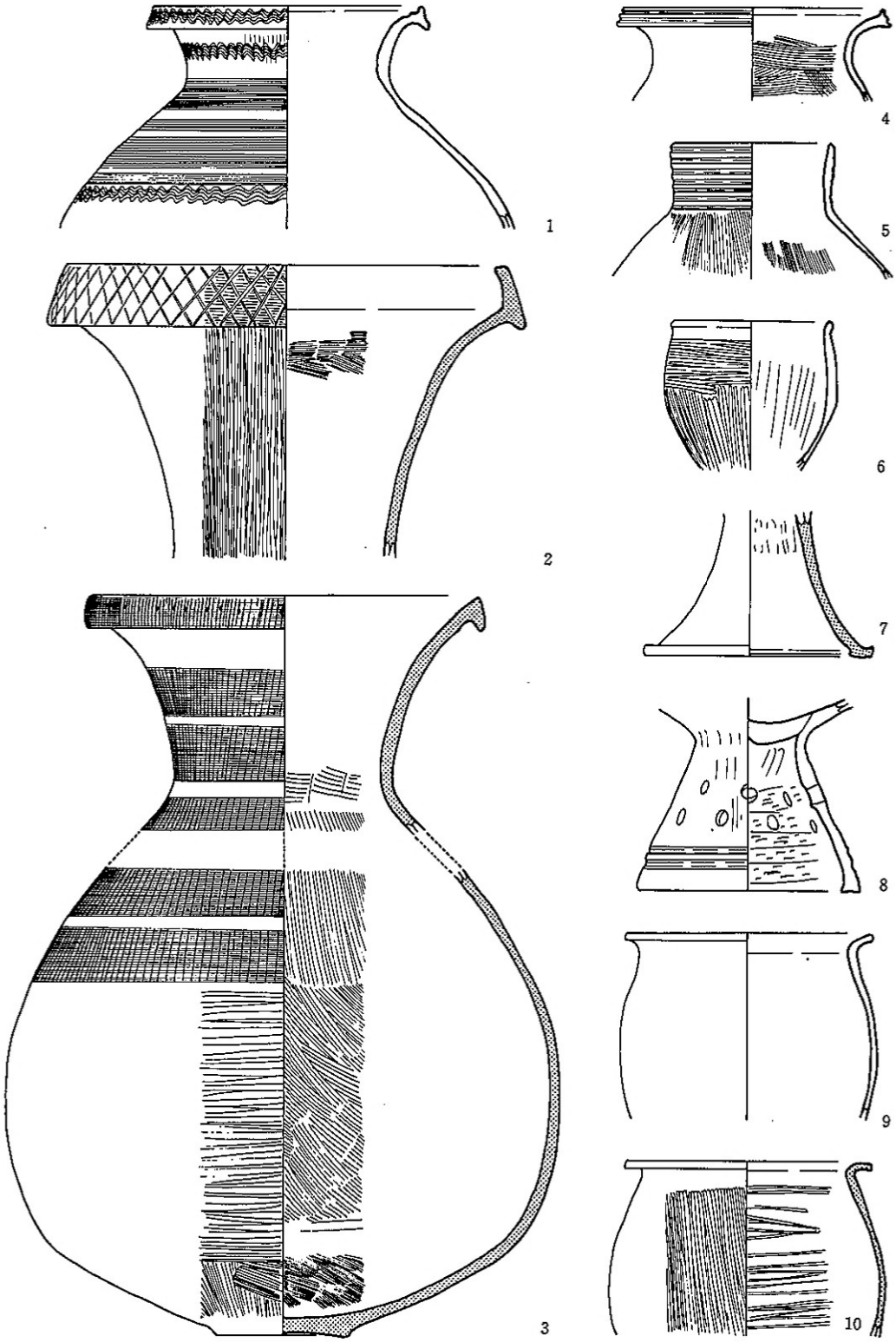
溝の断面形態及び深さは、③ラインを界してやや異なっている。東側は二段掘りの逆台形を呈し、溝底面は凹凸著しく、第Ⅹ層上面からの最大深は1.94mをはかる。それに対して、南側は傾斜の緩かな逆台形を呈し、溝底面は比較的フラットであり、最大深は1.1mと浅くなっている。東端の溝底レベル高はＴ．Ｐ．＋3.26m、西端ではＴ．Ｐ．＋4.10mと、溝底は東に傾斜している。その比高差は約0.84mをはかる。なお、中央において東西に走行していた溝は、その両端のＧ・⑤地区、Ｅ・①地区において南側にわずかに反り、調査外に伸びている。

埋土は、土層の堆積状況から、大きく４つの層に分けられる（第136図）。③ライン以西では、埋土は２つの層に大別される。（Ⅰ）層は青灰色シルトと粘土、（Ⅱ）層は暗灰褐色粘土（有機物を多く含む）である（第137図）。

遺物の大半は、③ライン以東から出土している（図版63ｂ）。出土遺物には、弥生時代中期の土器・石器・木製品・土製品・動植物遺存体等がある。また、破片ではあるが、縄紋時代後期の土器１点を得ている。

〔土器〕（第138・139図）

第Ⅲ－Ⅳ様式の壺・短頸壺・鉢・台付鉢・甕・高杯・甕形土器の器種資料を得ている。（Ⅰ）層から（１・４～６・８・11・12）、（Ⅱ）層から（２・３・７・９・10・13・14）の出土をみた。



第138図　ＳＤ－26出土土器実測図（1/4）

壺形土器（1～4）　（1）は口径16.3cmをはかり、上下に拡張した端部外面と頸部に櫛描波状紋を各1帯、体部に直線紋3帯、波状紋1帯を飾る。口頸部・体部内外面はナデ調整である。色調は淡茶褐色を呈し、内外面に煤が附着している。（2）は口径26.7cmをはかり、上下に拡張させた口縁端部にヘラ描きによる斜格子紋を飾る。頸部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。（3）は口径23.6cm、器高45.1cm、体径33.5cm、底径8.1cmをはかる。口縁端部に櫛描簾状紋1帯、その上に刺突紋を施し、頸部から体部上半にかけて簾状紋5帯を飾る。頸部内外面はナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は暗褐色。（4）は口径15.6cmをはかり、口縁端部に2条の凹線紋を施す。体部外面は表面剝離のため不明、内面上半は粗いハケ、下半はヘラケズリ調整である。色調は淡茶褐色。

短頸壺形土器（5）　口径9.5cmをはかり、口頸部外面に7条の凹線紋を施す。体部外面はヘラミガキ、内面はハケとナデ調整である。色調は淡茶褐色。

鉢形土器（6）　口径9.5cmをはかる。口縁部は内弯ぎみに直立して、端部はわずかに外弯する。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ状ナデ調整である。色調は淡赤褐色。

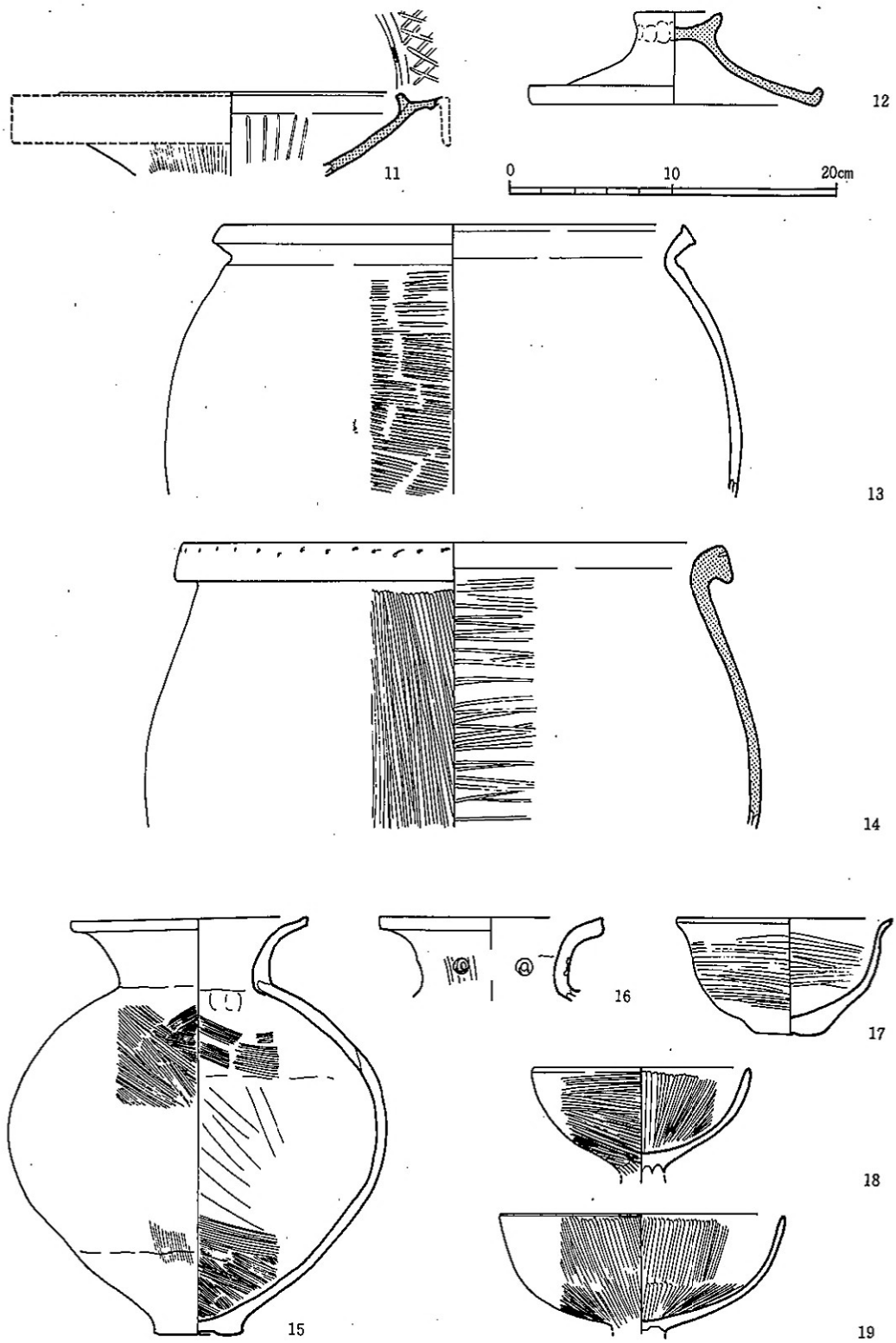
台付鉢形土器（7・8）　いずれも脚台部片である。（7）は裾径13.8cmをはかり、内外面に煤が附着している。内外面はナデ調整である。色調は暗褐色。（8）は裾径13.4cmをはかり、裾部に2条の凹線紋を施す。外面はヘラミガキとナデ、内面上半はナデ、下半はヘラケズリ調整である。色調は淡茶褐色を呈し、内外面には黒色物質を塗布している。

甕形土器（9・10・13・14）　（9）は口径14.8cmをはかり、口縁部は緩やかに外反する。体部内外面はナデ調整で、色調は淡茶褐色を呈する。（10）は口径14.8cmをはかり、口縁部は水平ぎみに外反する。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ後に粗いヘラミガキ調整である。色調は淡茶褐色。（13）は口径28.0cmをはかり、口縁端部はわずかに肥厚させ幅広い面を形成する。体部外面はタタキ、内面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。なお、この土器はＳＤ－27出土の土器片と接合した。（14）は口径32.9cmをはかり、口縁端部は粘土紐を附加することによって幅広い面を形成し、刺突紋を施している。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ後に粗いヘラミガキ調整を施す。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土である。

（15～19）は、ＳＤ－26の上部を覆っていた砂層中（図版68ａ）から出土したものである。時期は第Ⅴ様式末である（図版116－206）。

壺形土器（15・16）　（15）は口径14.4cm、器高20.4cm、体径23.1cm、底径5.4cmをはかる。体部外面上半はハケ、下半はナデ調整、内面上位と下位はハケ、中位はナデ調整である。色調は淡赤褐色。（16）は口径13.6cmをはかる。短い頸部に、外反して開く口縁部を有し、端部は面をもつ。頸部には円形竹管紋2個を横位にスタンプしている。内外面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。

鉢形土器（18）　口径13.1cm、器高7.2cm、底径4.0cmをはかる。椀状の体部に、外反して斜め上方に短く開く口縁部を有する。端部は尖頭状をなす。体部内外面はヘラミガキ調整である。



第139図　ＳＤ－26出土土器実測図（1/4）

色調は淡茶褐色を呈する。

高杯形土器（18・19）　いずれも椀形の杯部を有する。（18）は口径13.2cmをはかる。体部内外面はヘラミガキ調整である。色調は茶褐色。（19）は口径17.4cmをはかる。体部内外面はヘラミガキ調整である。色調は淡茶褐色。

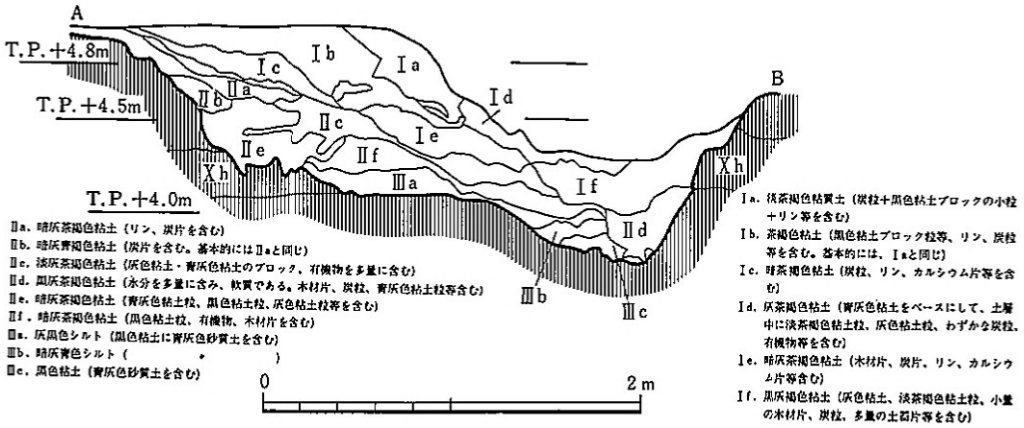
図版175ａ－２はＧ・４地区（Ⅳ）層から出土した縄紋土器体部破片である。胴部上位の破片で、外反して口縁部に至るものと考えられる。口縁と胴部は沈線で画されており、縄紋（ＬＰ）が残る。後期前半に相当か。ローリングはさほど受けておらず、近辺に遺跡の存在が予想される。

ＳＤ－27（第140・141図、図版64～66）

トレンチ南側にて、自然河川（ＳＤ－11の支流）の埋土除去後、検出された。規模は、上部幅3.5m、下部幅2.0m。検出面からの深さは約1.22mをはかる。延長約27.3mを検出している。南肩の断面形態は約50°の傾斜角をもってさがるのに対して、北肩は最大幅約1.3mのフラットなテラスを有している。なお、本溝はＫＭのＳＤ3001（註５）と同一の溝である。

調査は、遺物取り上げの便宜・遺物出土状況（拡がり）を把握するために、ほぼ等間隔に２つのあぜを設定して、このあぜを界して任意に３つのブロックに分けて、行った。各ブロックを東からＡ，Ｂ，Ｃブロックと呼称している。実際の調査は各ブロックごとに行った。Ｃブロックの西端は、東から西へ流れる自然河川ＳＤ－11の流路の攻撃面にあたっていたため大きく削り取られ、破壊されていた。

埋土は、カーボンの間在によって大きく３つの層に分けられる。遺物は両層に含まれており、第Ⅲ－Ⅳ様式の土器とともに、石器、木製品、土製品、動植物遺存体等が多量に出土している。



第140図　ＳＤ－27　Ｂブロック東側のあぜ土層断面図（1/40）

〔土器〕（第142～144図、図版115）

（Ⅰ）～（Ⅱ）層から、壺・細頸壺・水差・蓋・鉢・把手付鉢・高杯・甕形土器等の器種を得ている。時期は第Ⅲ－Ⅳ様である。Ａブロックから（２・７・８・10・18・19・22・24・25・28）、Ｂブロックから（１・３・５・６・９・11～17・20・23・26・27）、Ｃブロックから（４・21）

が出土した。

（2・3・5～7・9・11・16・21・25）は（Ⅰ）層から、（1・4・8・12・13・17・20・22～24・27・28）は（Ⅱ）層から、（10・14・15・18・19・26）は土層堆積観察用にもうけたトレンチから出土をみている。

壺形土器（1・3～7）　（1）は口径8.9cm、器高22.3cm、体径16.5cm、底径5.4cmをはかる。色調は淡黄灰色。頸部から体部上位にかけて櫛描簾状紋、直線紋を施す。器外面はヘラミガキ、内面上位はしぼり目を残し；下位はハケ状ナデ調整である。（3）は口径23.1cmをはかり、色調は暗褐色を呈す。生駒西麓産の胎土をもつ。口頸部外面はナデ後、粗いヘラミガキ、内面はハケと指ナデ調整である。

（4・5）は短い頸部から外反して立ち上がる口縁部を有し、端部は直立している。色調は淡茶褐色を呈する。（4）は口径24.1cmをはかり、端部外面に凹線紋3条と刻目を施している。（5）は口径25.3cmをはかり、端部外面下位に凹線紋2条を施し、肩部上位に刻目突帯を貼り付けている。内面はハケ状ナデ、外面はハケ調整である。

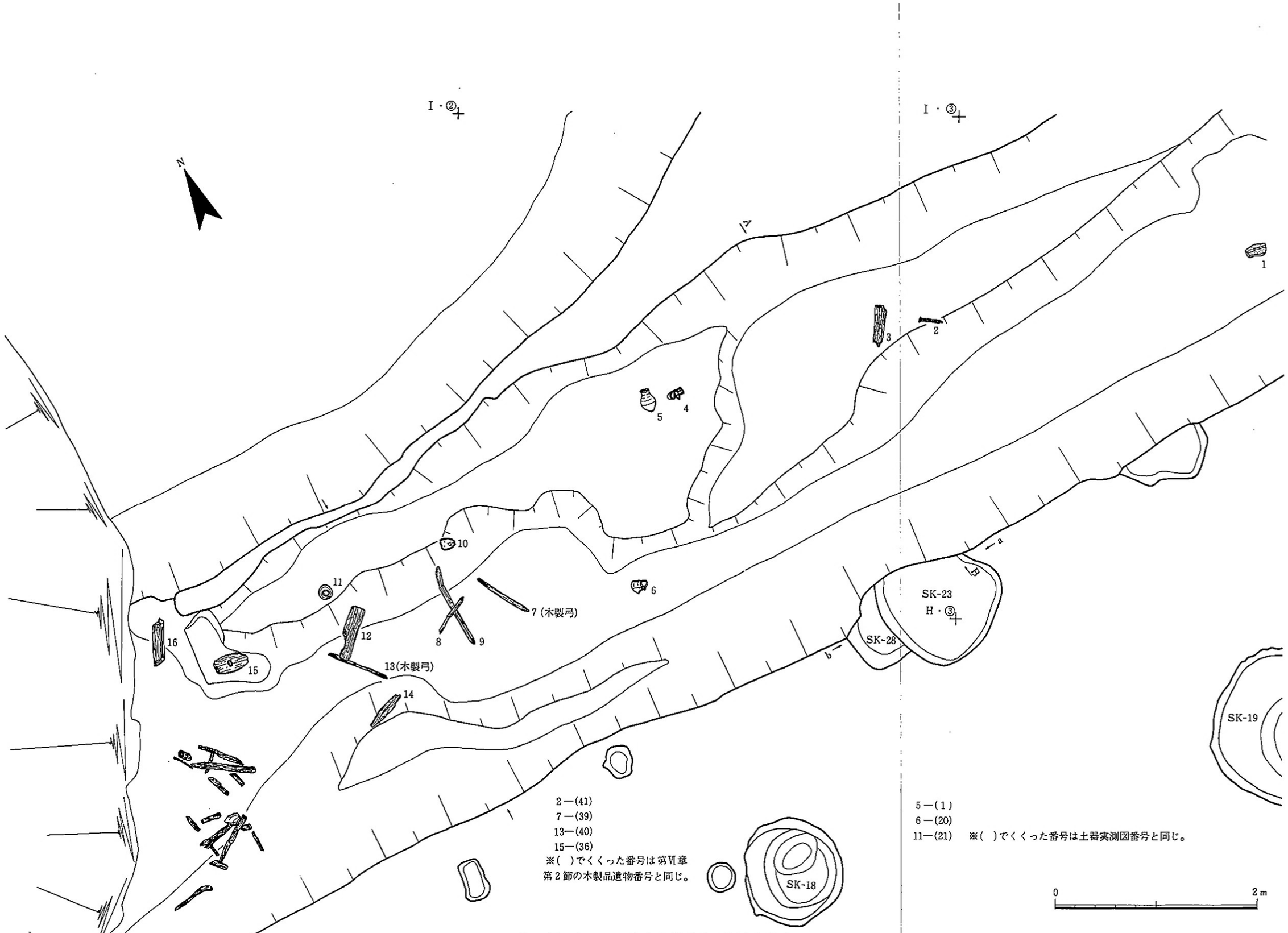
（6）は体部から緩やかに外反して立ち上がる口頸部を有し、端部は内傾ぎみに上下に拡張する。口径25.9cmをはかる。色調は淡茶褐色。端部外面に簾状紋2帯と刺突紋、頸部に直線紋2帯、簾状紋8帯、扇形紋1帯を施す。頸部外面はナデ、外面はナデ後に粗いヘラミガキ、体部外面はヘラミガキ、内面はハケとナデ調整である。（7）は口径10.4cmをはかり、色調は暗褐色を呈する。口縁部外面に簾状紋、内面に円形浮紋を、頸部に列点紋を施す。内外面ナデ調整。

細頸壺形土器（2）　口径10.5cmをはかり、筒状の短い頸部に内弯ぎみに立ち上がる口縁部を有する。口頸部から体部上位にかけて波状紋、凹線紋、直線紋、列点紋を施している。色調は暗褐色で、生駒西麓産の胎土をもつ。口頸部外面はハケ後にナデ、体部外面上位はハケ、下位はヘラミガキ、内面はハケ調整である。

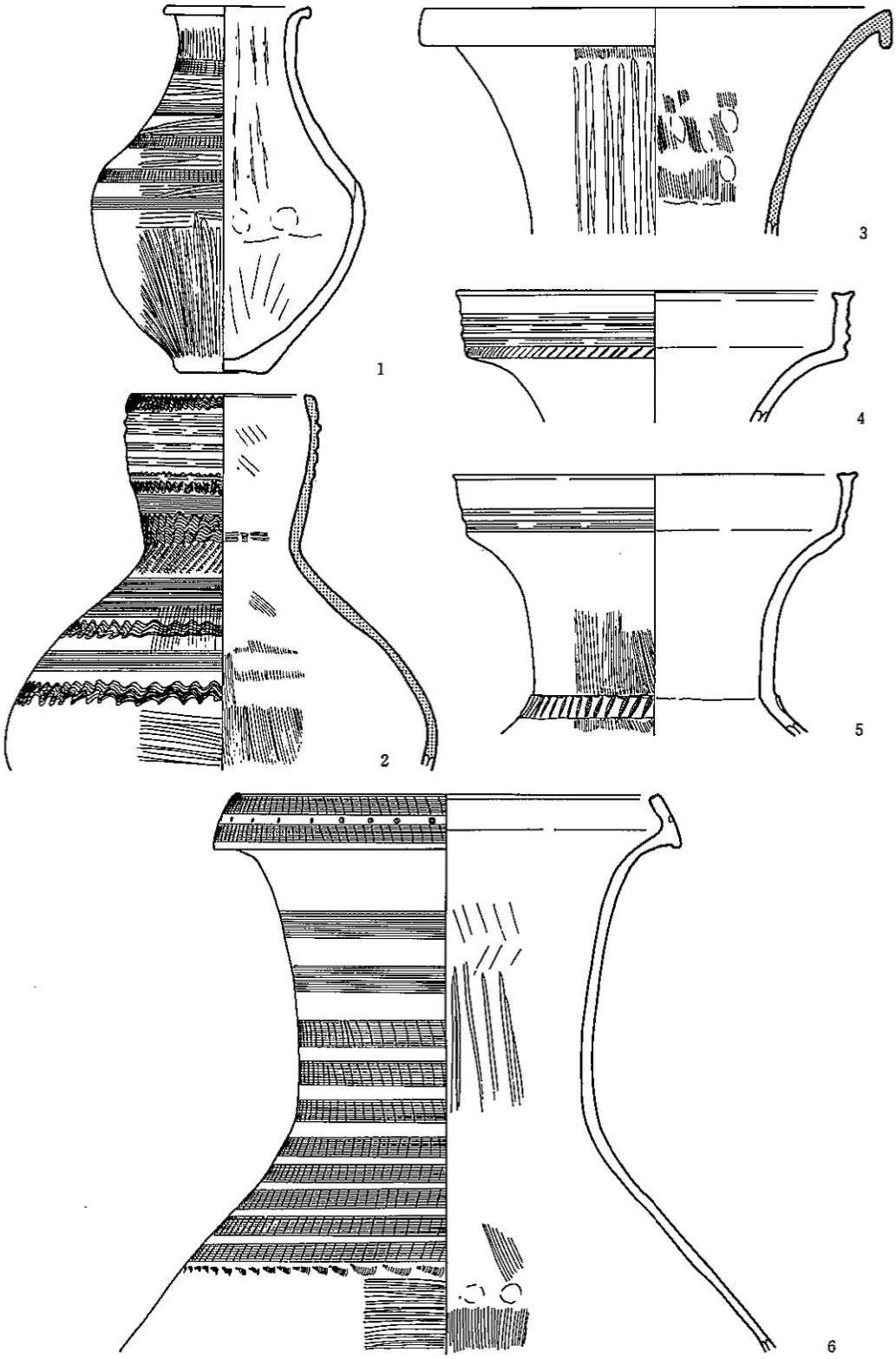
水差形土器（8・9）　（8）は口径8.8cmをはかり、口頸部は外傾して立ち上がる。色調は淡茶褐色を呈する。口頸部外面に凹線紋9条、直線紋1帯を施している。内外面はナデ調整。（9）は口径10.1cmをはかり、口頸部に列点紋5帯、体部に簾状紋2帯以上、端部に刻目、把手上に7個の刺突紋を施す。色調は暗褐色を呈している。体部内外面はハケ調整である。

蓋形土器（10・24）　口径12.3cm、器高3.2cmをはかり、色調は暗褐色を呈する。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整を施す。（24）は口径26.6cmをはかる大型品である。口縁部と体部外面はヘラミガキ、体部内面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。

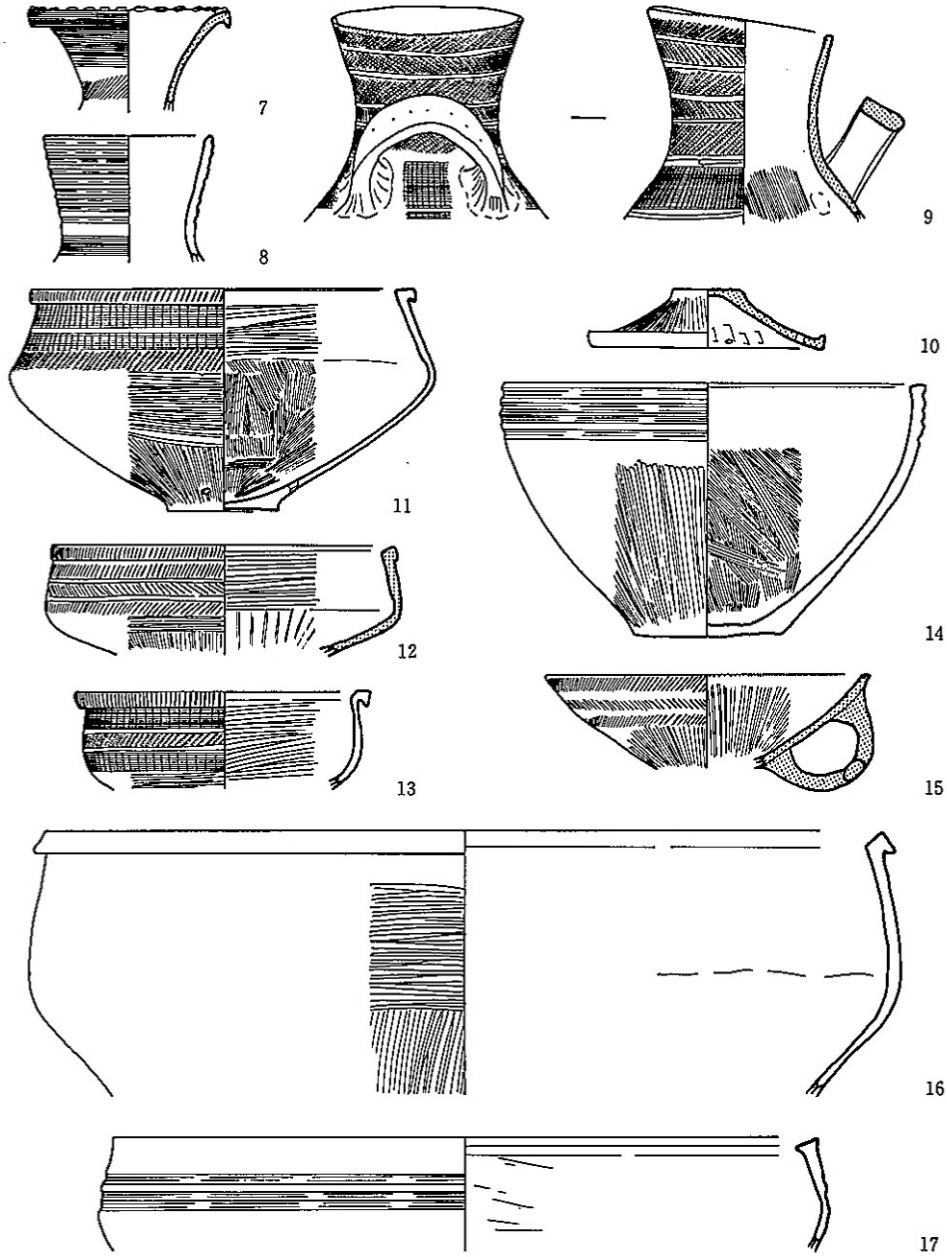
鉢形土器（11～14・16・17）（11・12・17）は外に開く体部から屈曲して内傾する口縁部をもち、端部は外に折れ曲がる。（11）は口径19.9cm、器高11.8cm、体径22.5cm、底径5.9cmをはかる。端部に刻目、口縁部に簾状紋2帯と列点紋を施す。色調は淡茶褐色を呈する。底部側面は穿孔している。口縁部内面および体部外面はヘラミガキ、体部内面はハケ調整である。（12）は口径17.9cmをはかり、色調は暗褐色を呈する。端部に列点紋1帯、口縁部に列点紋3帯を施す。



第141図　ＳＤ－27（II）層遺物出土状況（1/40）



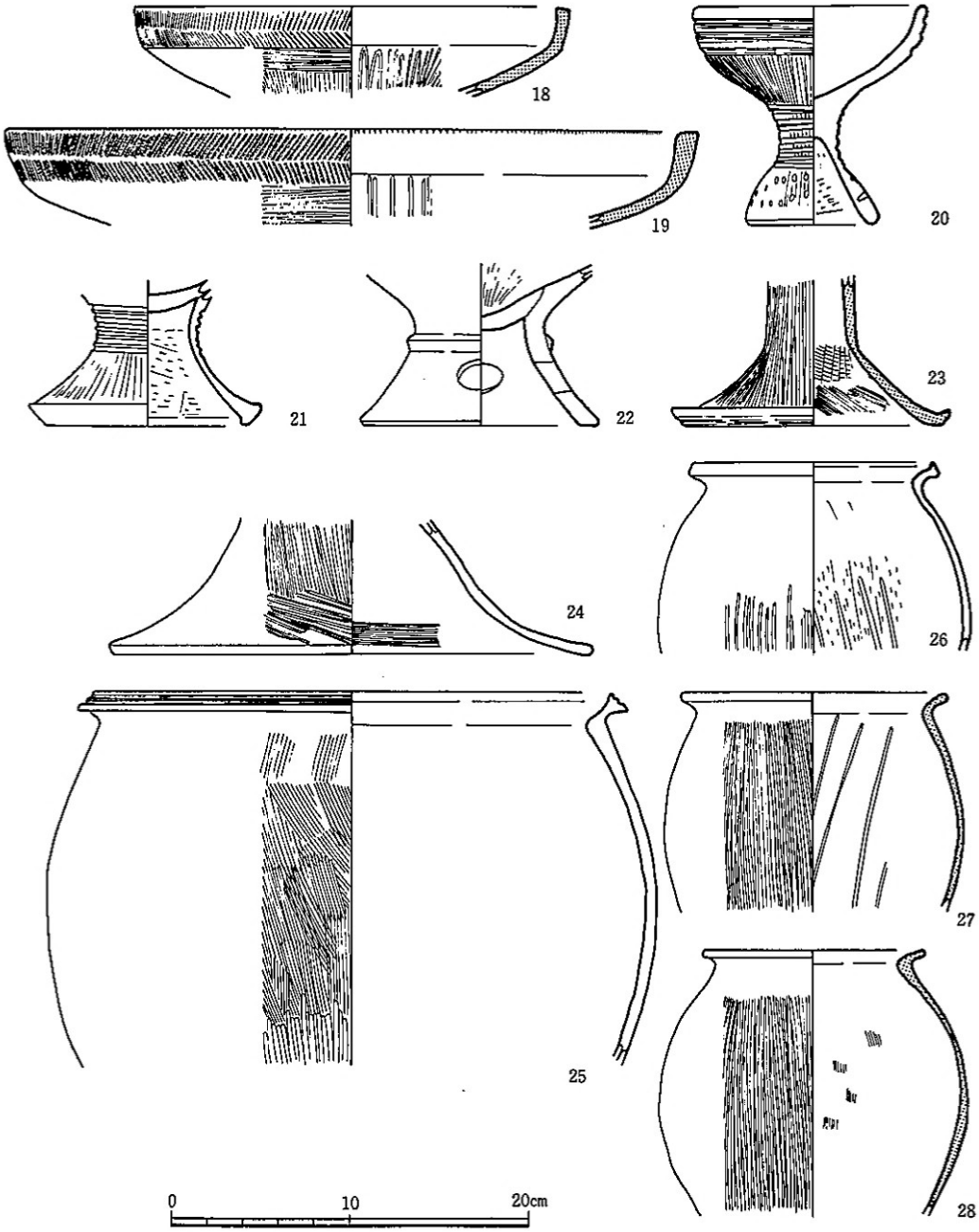
第142図　ＳＤ－27出土土器実測図（1/4）



第143図　ＳＤ－27出土土器実測図（1/4）

(17) は口径37.1cmをはかる大型品。端部は内傾して内に突出する。色調は淡茶褐色を呈する。口縁部に凹線紋３条を巡らす。

(13・16) は外に開く体部やや内弯して直立する口縁部をもつ。端部は短く外反して面をなす。色調は暗褐色を呈する。端部に刻目、口縁部に簾状紋、列点紋、簾状紋を各１帯施し、紋様間は研磨している。(16) は口径44.1cmをはかる。大型の鉢である。色調は淡茶褐色を呈する。器外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。



第144図　ＳＤ－27出土土器実測図（1/4）

（14）は口径22.2cm、器高13.4cm、底径7.9cmをはかる。内弯ぎみに立ちあがる体部に直口の口縁部をもつ。色調は淡茶褐色を呈する。口縁部外面に凹線紋４条を施す。体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。

把手付鉢形土器（15）　口径17.2cmをはかり、色調は暗褐色を呈する。端部内外縁に刻目、口縁部外面に列点紋３帯を飾る。体部内外面はヘラミガキ調整を施す。

台付鉢形土器（20～22）　（20）は口径12.6cm、器高12.1cm、底径6.7cmをはかる小型のもの。口縁部外面に凹線紋３条、柱状部に８条を施している。色調は淡茶褐色を呈する。器外面はヘラミガキ、体部内面はナデ、脚台部内面はヘラケズリ調整である。（21）は底径11.1cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈する。柱状部には凹線紋６条を飾る。裾部外面はナデ、内面はヘラケズリ調整を施す。（22）は底径12.6cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈する。裾部に透孔を２個穿つ。柱状部に突帯を貼り付けている。杯部内面はヘラミガキ調整である。

高杯形土器（18・19・23）　（18）は口径24.2cmをはかり、色調は暗褐色を呈する。口縁部には列点紋２帯を飾る。体部内外面はヘラミガキ調整である。（19）口径38.4cmをはかる大型の杯部片である。色調は暗褐色を呈し、口縁部外面に列点紋２帯、端部内外縁に刻目を飾る。体部内外面はヘラミガキ調整。（23）は底径13.2cmをはかる脚部片。色調は暗褐色を呈し、裾部端部に凹線紋１条を飾る。外面はヘラミガキ、裾部内面はハケ調整である。

甕形土器（25～28）　（25）は口径29.0cmをはかる。口縁部はくの字状に屈曲し、端部に凹線紋２条を飾っている。体部外面上位はハケ、下位はヘラミガキ、内面は指頭圧痕とナデ調整である。色調は淡茶褐色。（26）は口径13.2cm、体径16.2cmをはかる。くの字状に外反する口縁部を有し、端部は上方につまみあげている。体部外面上位はナデ、下位はヘラミガキ、体部内面上位はナデ、下位はヘラケズリ調整後に粗くヘラミガキを施す。色調は淡茶褐色。（27）は口径14.4cm、体径16.6cmをはかる。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整後に粗くヘラミガキを施す。色調は暗褐色。（28）は口径12.1cm、体径17.2cmをはかる。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は暗褐色を呈する。

ＳＤ－28

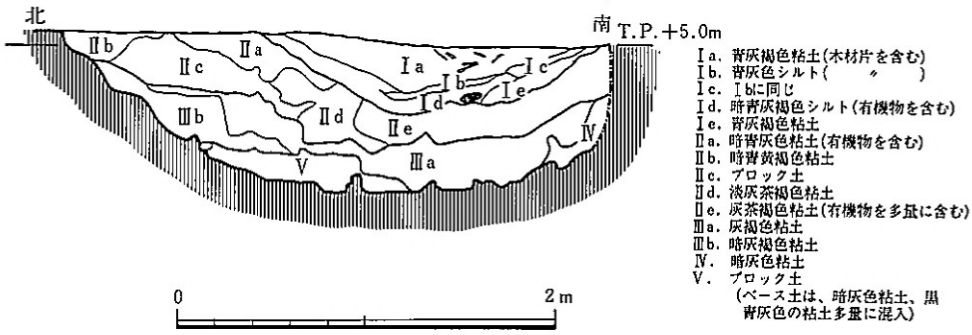
Ｊ・①地区において、弥生時代中期中頃の溝ＳＤ－20を切り込んで、北西－南東に直進するようにして検出した。検出面は、第Ⅸ層除去後の第Ｘａ層上面。形状は幅0.35m。深さ0.2mをはかり、長さ2.75mの収束する溝である。

埋土は黒褐色土の単一層で、１cm前後の青灰色粘土・カーボンのブロックを多く含んでいる。時期は、遺構の重複関係及び得られた土器の小破片から、弥生時代中期のものと思われた。

ＳＤ－29（第145図）

Ｅ・④～⑤地区において検出した東－西走する弥生時代中期の大溝である。幅は推定約3.3m、深さ約0.9mをはかる。

埋土は、溝中の堆積状況から５層に分れられる。（Ⅰ）層は青灰色粘土・シルトの互層、（Ⅱ）（Ⅲ）層は機能時に堆積した土で有機物を多量に含む、（Ⅳ）黒灰色粘土（機能時に流れ込んだ土）、（Ⅴ）暗灰色粘土（掘削時に掘り残した土の再堆積）である。出土土器は少量で、大半は表面磨耗している。北側に位置する弥生時代中期後半の溝ＳＤ－26・27と同一方向に走行していた。溝の間隔も約４ｍと等間隔であることから、ほぼ同一時期に掘削されたものと思われる。おそらく弥生時代中期の亀井集落の南隅をかぎる溝であろう。ＳＤ－29以南には、第Ⅸ層（弥生時



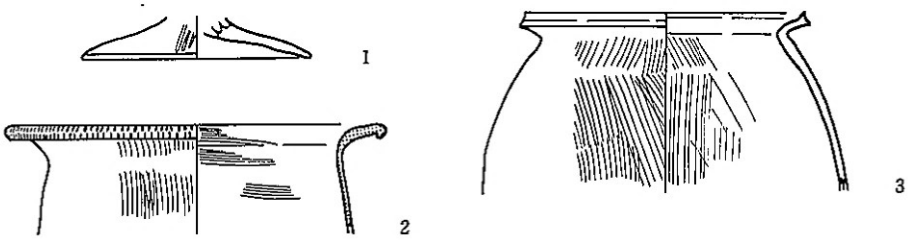
第145図　ＳＤ－29土層断面図（1/40）

代遺物包含層）の堆積は希薄になることからもうなずけよう。(註6)

〔土器〕（第146図）

調査面積が少ないことにもよろうが、土器の出土はポリ袋１杯分と、少量かつすべて破片で、器表面の保存も悪い。出土した土器は、第Ⅰ様式～第Ⅲ－Ⅳ様式に比定される。蓋・甕形土器の器種以外は、細片で図示できない。

蓋形土器（１）　口径11.8cmをはかる壺用蓋形土器である。摘は残存していないが、おそらく第Ⅰ様式のものにみられるような突起状のものと思われる。外面はナデ、内面はハケ状ナデ調整である。色調は暗灰褐色。



第146図　ＳＤ－29出土土器実測図（1/4）

甕形土器（２・３）　（２）は口径は19.0cmをはかる。口縁端部には刻目を上下に、施している。口縁部、体部外面は粗いタテハケ、体部内面は粗いヨコハケ調整である。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。（３）は口径14.8cmをはかる。体部内外面はハケ調整である。色調は淡黄褐色。

第２項　弥生時代後期

溝

ＳＤ－09（図版67ａ）

トレンチ北側にて、検出した東から西へ流れる大溝である。ＳＤ－20、ＳＫ－20、弥生時代遺物包含層、ピット等を破壊して、ＫＭのＳＤ3041へ続く。(註7)

埋土である砂層中から、多量の弥生時代中期～後期の土器をはじめとして、石器、自然木片等

が出土している。土器はコンテナ20杯分ある。未整理なので図化できなかったが、すでにＫＭ－Ｈ４・５調査区で、代表的な資料を図化しているので参照されたい（第61・62・89図）。

自然河川

ＳＤ－11（図版76ｂ）

トレンチ中央にて、検出した東から西へ流れる自然河川である。弥生時代中期～後期の遺構、包含層を切り込んで流れ、ポンプ場本体部のＮＲ3001へ続く。上部幅約11.4m、下部幅約2.5m、深さは約3.5mをはかる。検出面は、第Ⅸ層上面（Ｔ.Ｐ.＋6.0m）である。

遺物は、弥生時代中期から後期の土器をはじめとして、石器、土製品、鉄器（第243図、図版128)、自然木等が多量に出土している。特に、後期の完形土器、石器の出土が目立った。

〔土器〕（第147・148、図版116)

コンテナ300～400杯分の土器を得ているが、大半は未整理のため、ここでは後期の土器に限って図化している。第Ｖ様式の壺・長頸壺・鉢・蓋・飯蛸壺・手焙・器台形土器等の器種である。

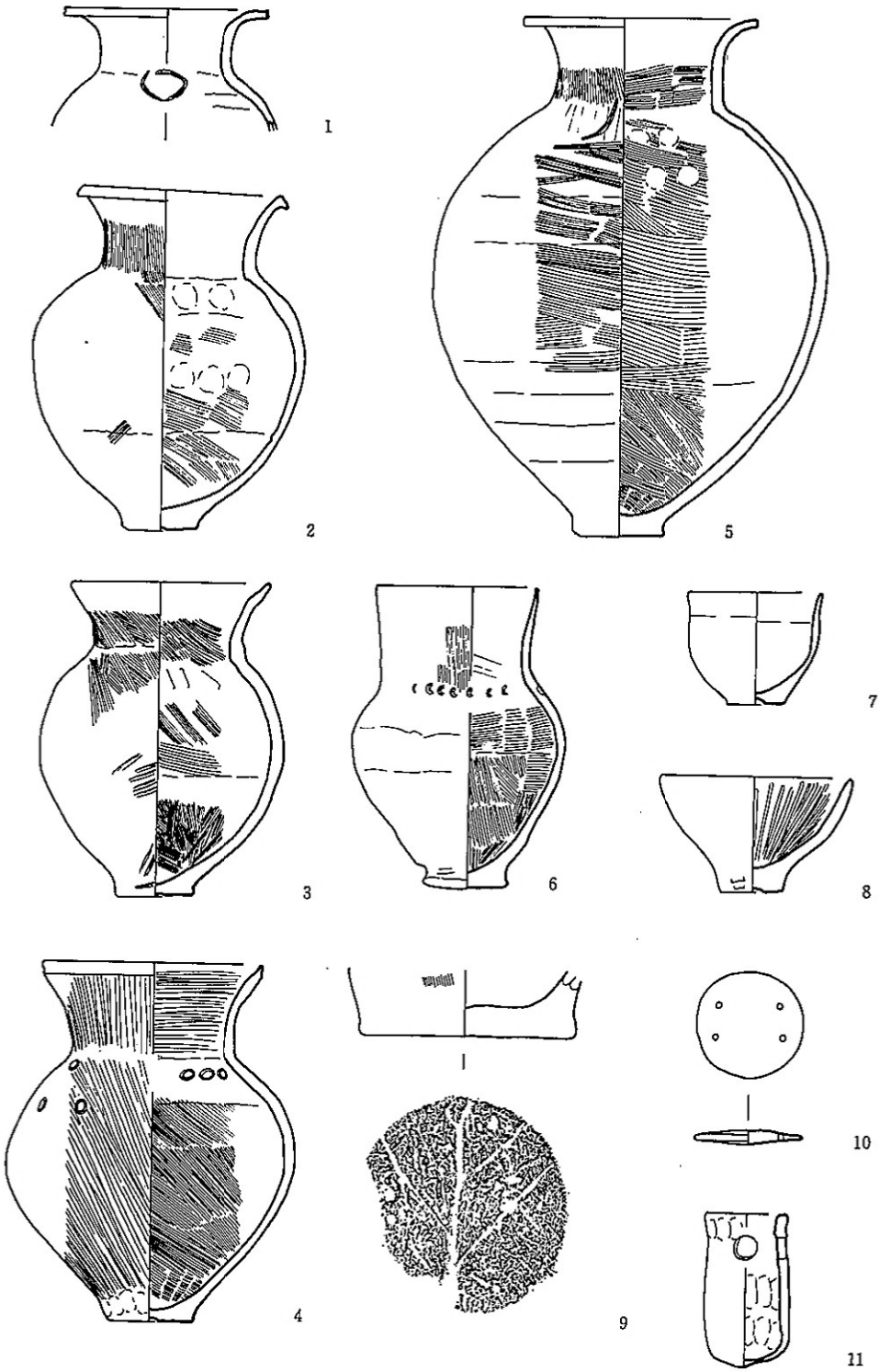
壺形土器（１～５）　（１・５）は直立する短い頸部に、外反して強く開く口縁部を有する。（１）は口径11.7cmをはかり、口縁端部に沈線１条をめぐらしている。肩部に、ヘラ描きによる記号文を有する。内外面はナデ調整である。色調は淡茶褐色。（５）は口径13.3cm、器高29.9cm、体径22.5cm、底径4.6cmをはかる。肩部に、ヘラ描きによる記号文「ノ」を有する。口縁部はヨコナデ、頸部内外面はハケ、体部外面上半はハケ、下半はナデ、内面はハケ調整である。色調は淡黄褐色。

（２）は口径11.3cm、器高19.7cm、体径15.7cm、底径4.2cmをはかる。肩の張る体部から、屈曲して斜め上方に立ち上がる口縁部をもつ。端部は下方へつまみ出している。頸部外面はハケ、内面はナデ、体部外面はナデ、内面は指頭圧痕とハケ調整である。色調は淡茶褐色。

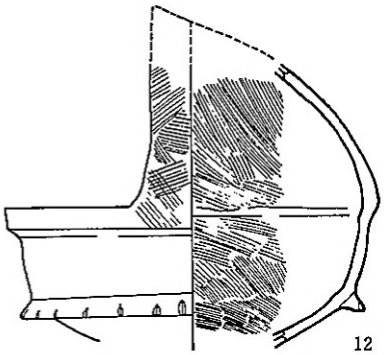
（３・４）は短い頸部に、外反して斜め上方に立ち上がる口縁部を有し、端部は内側につまみ出している。（３）は口径11.4cm、器高18.1cm、体径14.1cm、底径4.3cmをはかる。口縁部はヨコナデ、頸部内外面はハケ、体部外面上半はハケ、下半はタタキの後にハケ状ナデ、内面上半は指ナデ、下半はハケ調整である。色調は暗褐色。外面全体に煤が附着し、内面体部には煤及び炭化物が附着していた。（４）は口径12.5cm、器高20.6cm、体径16.0cm、底径4.6cmをはかる。端部外面に擬凹線紋をめぐらしている。肩部には、円形竹管紋のスタンプによる記号文「∴」「…」を有する。頸部内外面はヘラミガキ、体部外面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は淡茶褐色。

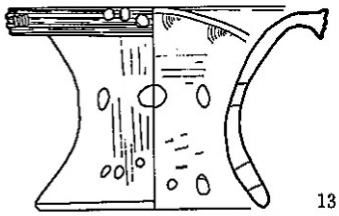
長頸壺形土器（６）　口径9.2cm、器高17.4cm、体径12.3cm、底径4.3cmをはかる。肩の張る体部から緩やかに外反して、上方に伸びる口頸部を有する。端部は尖頭状。肩部上位に、半円形竹管紋を７個スタンプした記号文を有する。頸部外面はハケ後にナデ、内面はハケ、体部外面はナデ、内面はハケ調整である。色調は淡茶褐色。

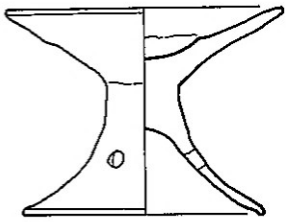
鉢形土器（７・８）　（７）は口径7.3cm、器高6.5cm、底径3.0cmをはかる。椀状の体部か



第147図　ＳＤ－11出土土器実測図　(1/4)







第148図　ＳＤ－11出土土器実測図（1/4）

ら緩やかに外反して、短く直立する口縁部を有する。内外面はナデ調整。色調は淡茶褐色。（８）は口径10.8cm、器高6.7cm、底径3.4cmをはかる。椀形の体部に直口する口縁部をもつ。体部内外面はナデ後にヘラミガキ調整である。色調は淡茶褐色。

木葉痕のある壺底部（９）　底径12.6cmをはかる。色調は淡茶褐色。

蓋形土器（10）　径6.1cm、厚さ0.8cmをはかり、口縁に沿って２孔１対の紐孔を２組穿っている。全体にナデ調整を施している。色調は赤褐色。

飯蛸壺形土器（11）　口径4.5cm、器高8.9cmをはかり、端部は面をもつ。口縁直下に紐孔を１個穿つ。調整は指ナデと指頭圧痕である。色調は淡赤褐色（図版176－２）。

手焙形土器（12）　口径19.6cmをはかり、体部に刻目突帯を施す。口縁部と体部外面上半はナデ、その他はハケ調整である。色調は淡茶褐色を呈し、内外面に煤が附着している。

器台形土器（13）　口径16.7cm、器高10.6cm、体部最小径8.4cm、裾径11.9cmをはかる。口縁端部外面に凹線紋３条を施し、その上に３個１組の円形浮紋を貼り付けている。口縁部内面には櫛描扇状紋を施し、体部と裾部にはアトランダムに透孔を穿っている。体部外面はヘラミガキ、内面上半はヘラミガキ、下半はヘラケズリ調整である。色調は淡茶褐色。

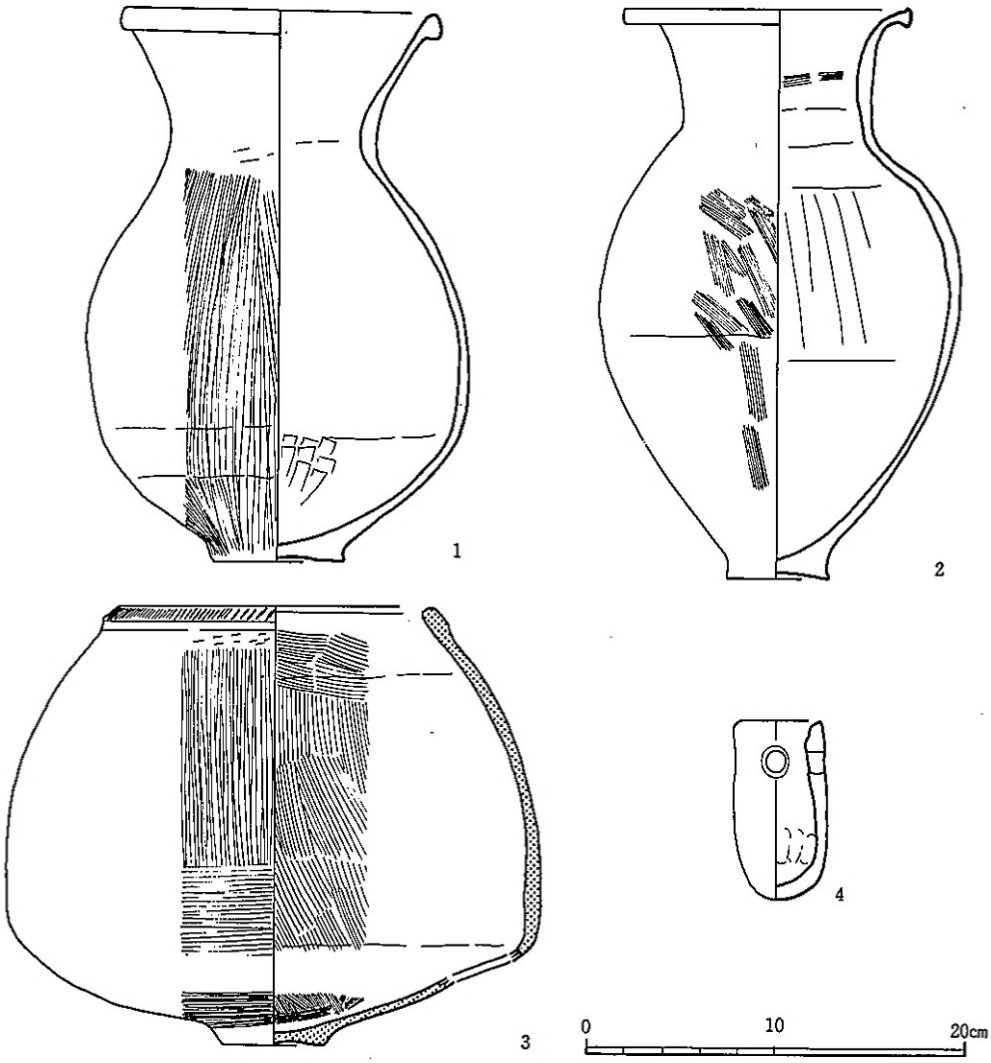
高杯形土器（14）　口径14.3cm、器高11.0cm、裾径12.7cmをはかる。外反して開く脚部に、斜め上方に低く開く、浅い杯部をもつ。口縁部は直口する。杯部の半ほどにいびつな断面三角形の突帯を貼り付けている。杯部内外面はナデ、脚部内外面はナデ調整である。裾部に透孔を３個穿っている。色調は淡褐色。

第Ⅸ層

弥生時代後期後半の自然河川ＳＤ－11を界して、北と南側では、層厚及び色調は大きく異っていた。北側は層厚約1.0mをはかる黒褐色粘土であり、遺物を多量に包含していた。対して、南側は層厚約0.4mをはかる暗青灰色粘土で、遺物出土量は激減する。両者の堆積状況の違いは集落中心近くに位置しているか、やや離れているかを示しているものと思われた。そのことを裏付けるように、集落を画すると考えられる大溝３条が検出されている。

〔土器〕（第149図、図版117・118・176）

第Ⅸ層から、弥生時代中期から後期の土器が多量に出土している。土器の整理は未完了である



第149図　第Ⅸ層出土土器実測図（1/4）

ため、図化しえたのは壺・無頸壺・飯蛸壺形土器４点である。

壺形土器（１・２）　（１）は口径16.1cm、器高29.0cm、体径20.3cm、底径6.9cmをはかる。腰の強く張る球形の体部から、スムーズに外反して上方へ伸びる口頸部を有する。端部は粘土紐を附加して、肥厚させる。口頸部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、内面上半はナデ、下半はハケ及びナデ調整である。色調は淡黄褐色。同じようなプロポーションをもつものは第36図１、『亀井・城山』（註８）第270図87にみられる。これらの土器と比較して、本例は、口縁端部の肥厚及び体部下半の張りは弱く、土器の重心はやや上位にある点を特徴とする。また、体部外面の調整は、上半から下半に至るまでタテヘラミガキであり、ヨコヘラミガキ調整は施していない調整上の簡略化という点等から、やや後出する時期に位置づけられるものと考えられよう。G・④地区出土。（２）は口径14.9cm、器高29.9cm、体径19.0cm、底径5.4cmをはかる。長胴の体部

から、屈曲して直立する頸部に外反して短く開く口縁部をもつ。端部は上下にやや肥厚する。頸部内外面はナデ、体部外面上半はハケ、下半はハケ後にナデ、内面上半はタテナデ、下半はヨコナデ調整である。色調は淡茶褐色。

無頸壺形土器（３）　口径16.5cm、器高23.1cm、体径28.1cm、底径5.4cmをはかる。腰の著しく低い体部下半から、屈曲して、上半は内弯ぎみに上方に伸びて、口縁部につづく。端部は外側に粘土紐を貼り付けて肥厚させ、その上に刻目を施している。体部外面上端はヨコヘラケズリ、上半と下半はヘラミガキ、内面はハケ調整である。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。表面は磨耗しているが、体部外面の一部に、赤色顔料の附着が観察された。

飯蛸壺形土器（４）　口径4.2cm、器高9.4cmをはかる。口縁直下に紐孔を１個穿つ。内外面は指頭圧痕と指ナデ調整である。色調は淡茶褐色。Ｉ・０地区出土（図版176－３）。

第３項　古墳時代前期

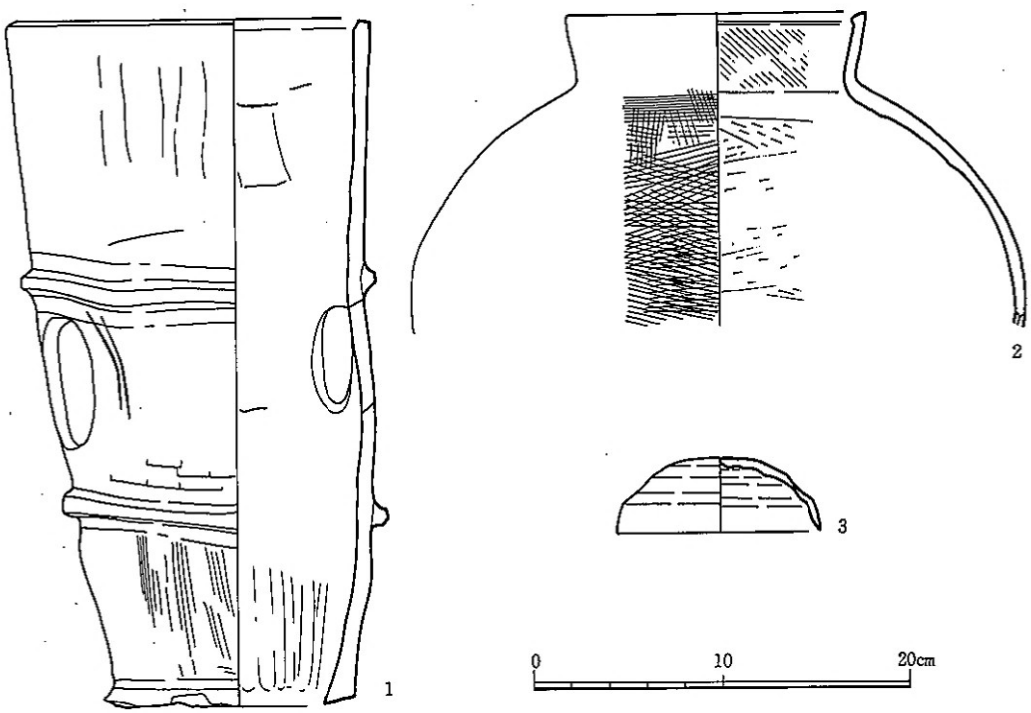
自然流路（図版69）

第Ｖ層を除去すると、弥生時代後期後半の自然河川ＳＤ－11埋没後の凹みを利用して、東－西に走行する自然流路が検出された。上部幅約6.2m、下部幅約1.2m、深さは約0.4mをはかる。

埋土は、黒褐色粘土によって充填されていた。層中から、古墳時代前期（庄内式）の土器の破片が出土している。土器は細片のため図化できない。

第Ⅵ層

〔土器〕（第150図２，図版175b－２）



第150図　古墳時代出土遺物実測図　(1/4)

古墳時代前期（布留式）の甕形土器１点が出土している。

甕形土器　口径15.8cm、体径32.5cmをはかる。球形の体部から、屈曲して内弯ぎみに立ち上がる口縁部を有する。端部は内側に折り曲げ、肥厚させている。口縁部内外面はヨコナデ（内面はハケ後に）、体部外面はタッチの深いハケ、内面はヘラケズリ調整である。色調は淡茶褐色。

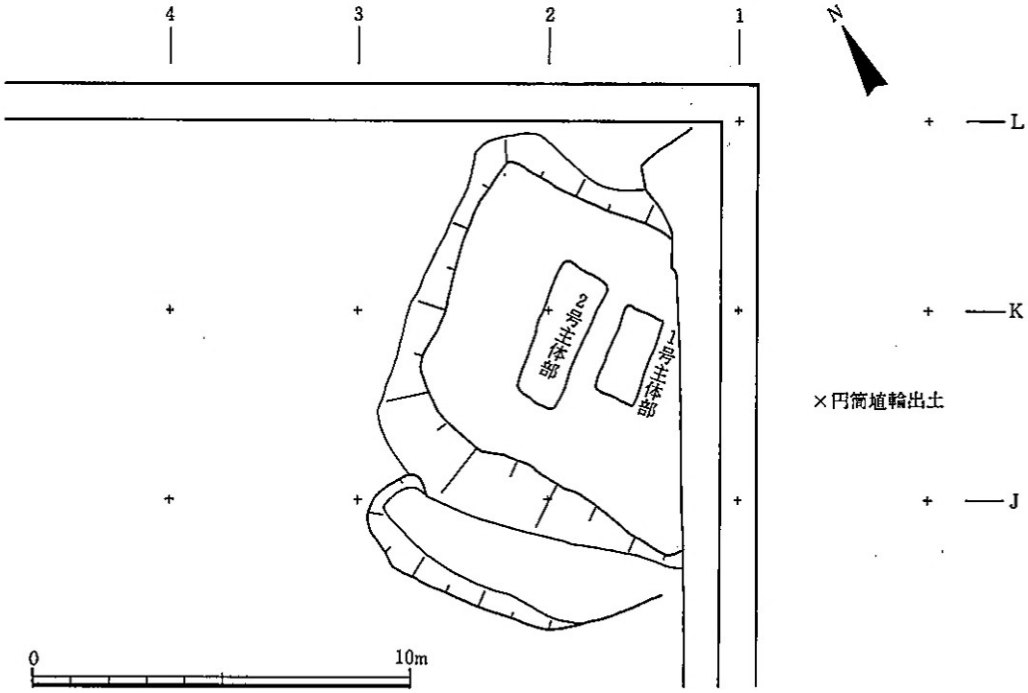
第４項　古墳時代中期（第151図）

当初、検出されるはずであった亀井１号墳の墳丘一部は、ポンプ場本体部の連続壁築造の時に使用したアースアンカーによって大きく陥没していたため、遺構として把握できなかった。だが、Ｈ・０地区第Ⅴ層下位の青灰色粘土（炭化物を多量に含む）中から、時期的に、亀井１号墳に併行すると考えられる円筒埴輪１点が横位に出土している（図版71ａ）。

円筒埴輪出土地点は、ＫＭで報告されている亀井１号墳と同一の面に相当すると考えられ、かつ近接していることから、古墳に伴なう可能性もありえよう。なお、近辺の景観は調査資料からヤナギ属などの木が繁茂していた状況を想像することができる（図版70ａ）。

〔円筒埴輪〕（第150図１、図版175ｂ－１）

口径18.1cm、器高36.3cm、底径10.9cmをはかる。２段の凸帯をめぐらし、凸帯の断面形態は「〕」で、中央はやや凹む。透孔は径5.5～7.0cmの円形で、２段目に２孔穿っている。また、



第151図　亀井１号墳遺構平面図（1/200）

２段目にヘラ描きによる二条の線刻を施す。器外面の調整はタテハケ、凸帯はヨコナデ、内面の１～２段目はタテ方向の指ナデ、３段目は強い削り状のタテハケである。、口縁部、底部はヨコナデ調整である。色調は灰褐色を呈し、無黒斑である。川西氏の編年（註９）に拠れば、第Ⅳ期に比定さ

れ、実年代は５世紀中葉から後葉に位置づけされる。

第５項　古墳時代後期

第Ｖ層中（上位）から、後期の須恵器杯蓋１点が出土している。ＫＭ－Ｈ５調査区の第Ｖ層中からも１点出土している。

〔土器〕（第150図３，図版175b－３）

口径10.8cm、器高3.9cmをはかる。内外面ヨコナデ調整。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。

第６項　奈良時代～江戸時代以降

奈良時代の遺構は、第Ｖ層上面においてウシ、ウマ等の足跡が検出されているのみである。

江戸時代の遺構には、Ｌライン以北第Ⅳａ層上面にて江戸時代平野川の南岸を検出している。（図版71ｂ）。

〔註〕

註１　その後、動物遺存体の整理中に、同一地点の同層位からイヌの左側上腕骨が出土していたことがわかった。

註２　本書の第Ⅵ章第７節を参照。

註３　ＳＤ－3004から、畿内第Ⅲ様式古段階の土器・石器（石庖丁・石錐）・木製品（広鍬・箍）・動物遺存体（イノシシ・シカ）、植物遺存体（カシ類）が出土している。
寺川史郎・尾谷雅彦編　『亀井・城山』　寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書　（財）大阪文化財センター　1980　95～101頁参照

註４　辻内義浩、国乗和雄『寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事に伴う亀井遺跡発掘調査報告書』　大阪文化財センター調査報告ＸＸⅥ　（財）大阪文化財センター　1978

註５　ＳＤ－3001から、畿内第Ⅲ様式新段階－Ⅳ様式の土器とともに土製円板・石庖丁・石鏃・石槍・砥石・軽石・木製弓・広鍬・梯子そしてイノシシの部骨が出土している。
註３の文献の91～94頁参照

註６　対して、北隅を限ぎる溝がＫＭ－Ｋの調査で数条検出されている。
高島　徹・広瀬雅信・畑　暢子編　『亀井』　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　（財）大阪文化財センター・大阪府教育委員会　1983，10

註７　ＳＤ－3041から、弥生時代中期～後期の土器・多量の石器・分銅形土製品・銅鐸形土製品・土錘・土製円板等が出土している。註３の文献の216～231参照

註８　註３の文献参照

註９　川西宏幸　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』　第64巻第２号　1978

第５節　ＫＭ－Ｈ８調査区

第１項　弥生時代中期

井戸

ＳＫ－25（第152図、図版73～75）

Ｌ・14地区の第Ｘｃ層上面において検出した井戸である。上部は、江戸時代平野川の河床に相当し、Ｔ.Ｐ.＋4.9mまで削平を受けている。平面プランは、径2.45×2.3mの円形を呈する。断面形態は下ぶくれの形状を呈し、検出面からの深さ1.45mをはかる。

埋土は、土層観察用セクションの検討から７つの層に分けられる。（Ⅰ）黒灰色粘質土、（Ⅱ）黒褐色土（有機物を多量に含み、層を形成）、（Ⅲ）黒灰色粘質土（カーボン・青灰色シルトのブロックを含む）、（Ⅳ）黒灰色粘質土（青灰色シルトのラミナ入る）、（Ⅴ）暗灰色粘土、（Ⅵ）青灰色粘土、黒褐色粘土のブロック土、（Ⅶ）灰色砂＋青灰色粘土ブロック土である。遺物の大半は（Ⅰ）～（Ⅲ）層から出土している。（Ⅱ）層中より出土した土器には、二次的に火をうけたものが多い。（Ⅲ）層中からは完形の水差形土器２点（図版74ｂ）、西壁にくい込み倒立した状態で、壺形土器１点を得た（図版75ａ）。壺形土器には、頸部に紐が巻かれていた。おそらく釣瓶として使用されていたのであろう。なお、水差形土器２点の出土はＫＭ－Ｈ７調査区のＳＫ－19にもみられた。

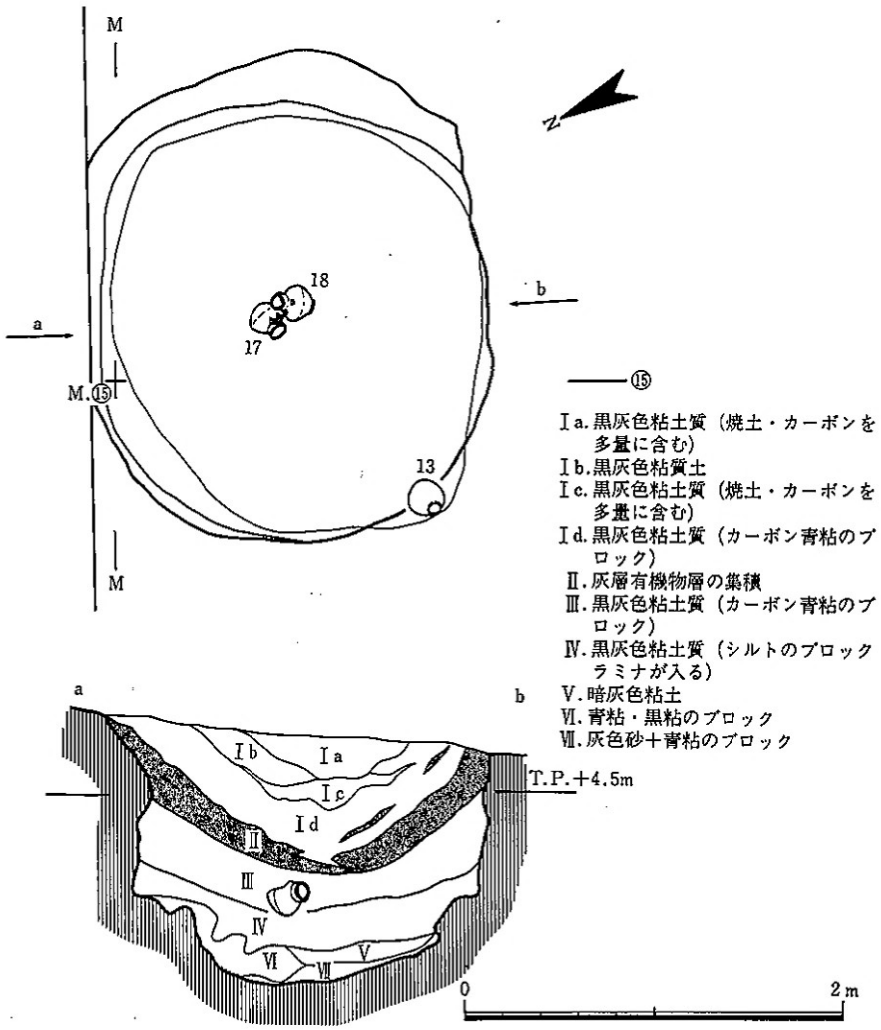
〔土器〕（第153・154図、図版118・119－213～219）

第Ⅳ様式の壺・鉢・把手付鉢・高杯・甕・水差形土器等の器種資料を得ている。（Ⅰ）層から（１～５・７～８・10・12・14・15）、（Ⅱ）層から（６・７・９～11）、（Ⅲ）層から（13・16～18）の出土をみている。

壺形土器（１～３・13）　（１）は口径13.0cmをはかり、体部からスムーズに外反して開く口縁部を有し、端部は下方に拡張する。器内外面はナデ調整である。色調は暗褐色。（２）は口径17.6cm、現高19.6cmをはかる。体部から緩やかに外反して直立する頸部に、外反して、開く口縁部を有し、端部は下方に拡張する。頸部内外面はナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は暗褐色。（３）は底径5.2cmをはかり、腰の低い体部をもつ。色調は暗褐色。体部外面上半はナデ、下半はヘラミガキ、内面はナデ調整である。

（13）は口径13.8cm、器高26.5cm、体径22.2cm、底径5.5cmをはかる。色調は淡茶褐色を呈す。胴中位に最大径をもつ体部に外反して短い頸部と短い口縁部を有し、端部は上下に多少肥厚する。口縁部に穿孔途中の孔１個と２孔１対の紐孔を２組穿つ。頸部には径0.6cmの縄を巻いていた（図版75ａ）。体部外面上半はハケ、下半はナデ、内面はハケ調整である。器表面が磨耗しているのは釣瓶として利用されていたためであろう。

鉢形土器（４・５）　（４）は口径13.4cmをはかり、色調は暗褐色を呈す。内弯ぎみに開く体部から屈曲して、内弯ぎみに立ちあがる口縁部を有する。端部は外に肥厚。口縁部外面はヘラ



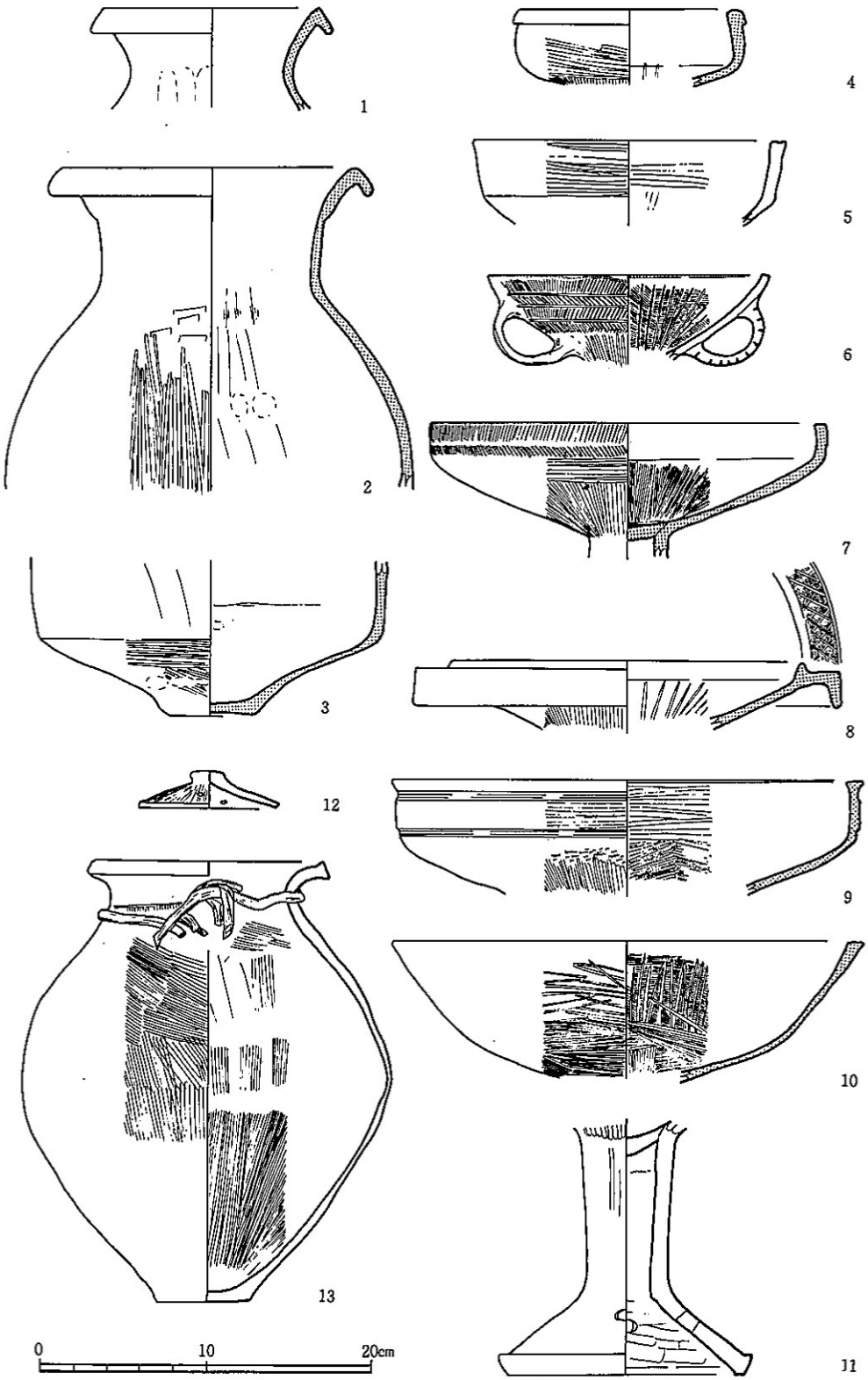
第152図　ＳＫ－25遺構平面図及び土層断面図（1/40）

ミガキ、内面はナデ、体部外面はヘラミガキ、内面は粗いヘラミガキ調整である。（5）は口径18.7cmをはかり、色調は淡茶褐色を呈す。口縁部外面はヘラミガキ、内面はハケ後にナデ、体部内面はハケ後にナデ調整である。

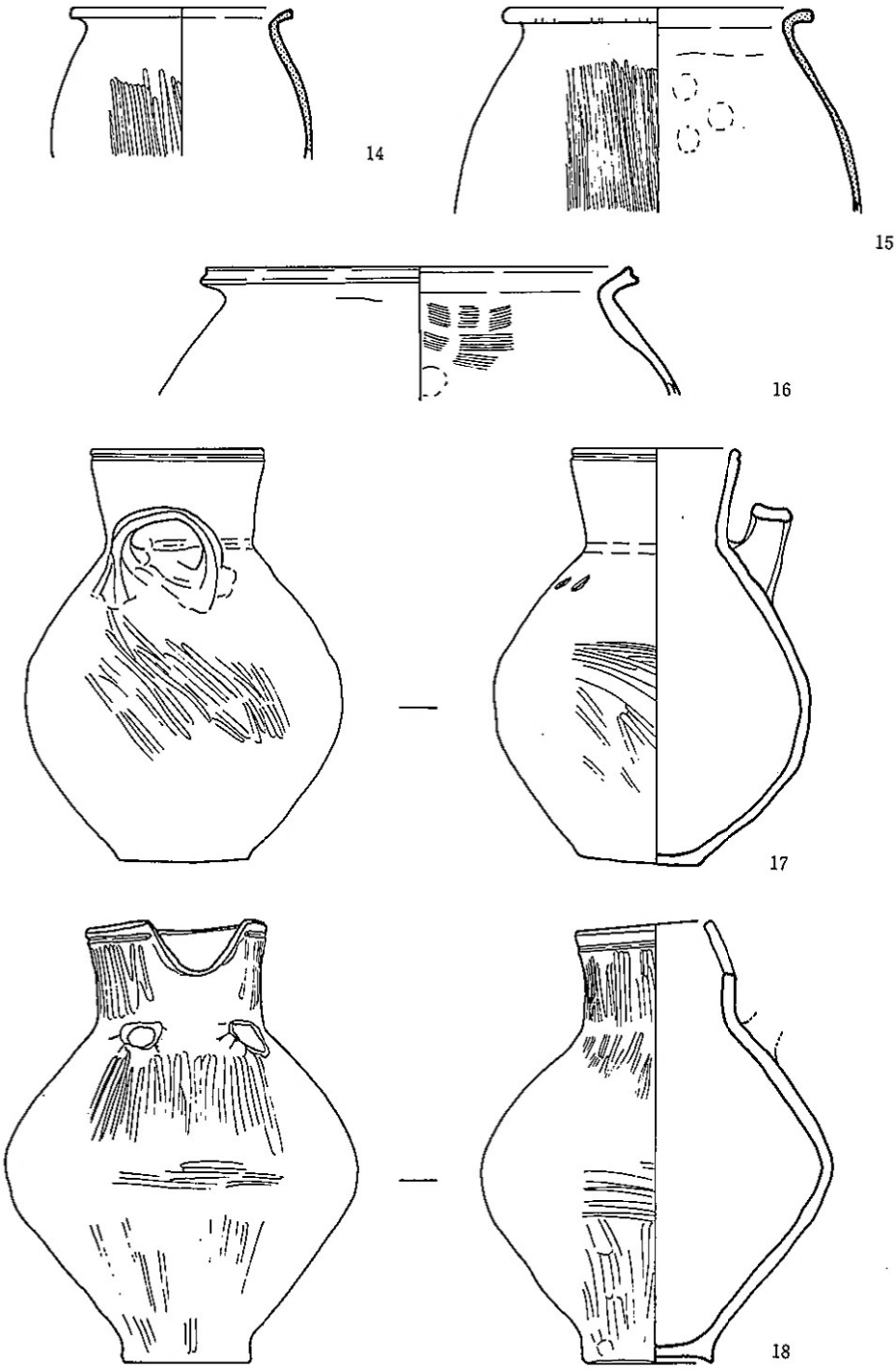
把手付鉢形土器（6）は口径16.8cmをはかり、浅い体部をもつ。色調は淡茶褐色を呈し、内外面に黒色物質を塗布する。把手上には刺突紋９個を施す。口縁部端部の内外縁に刻目、口縁部から体部にかけて綾杉列点紋を２段に施す。体部内外面はヘラミガキ調整である。

高杯形土器（7～11）　（7～10）は杯部片である。

（7）は口径23.8cmをはかり、内弯ぎみに低く開く体部から緩やかに屈曲して、直立して面をもつ口縁部を有する。色調は暗褐色を呈す。口縁部外面に櫛描列点紋２帯を施す。体部内外面はヘラミガキ調整である。



第153図　ＳＫ－25出土土器実測図（1/4）



第154図　ＳＫ－25出土土器実測図（1/4）

（８）は口径21.2cmをはかり、水平口縁部をもつ。色調は暗褐色を呈す。口縁部内面にヘラミガキ暗文で斜格紋を施す。体部内外面はヘラミガキ調整である。

（９）は口径28.3cmをはかり、色調は茶褐色を呈す。内弯ぎみに低く開く体部から緩やかに

外反して、多少内弯して立ちあがる口縁部を有し、端部は内外に肥厚する。口縁部外面に凹線紋２条を施す。口縁部内外面はヘラミガキ、体外面はヘラケズリ後にヘラミガキ、内面はヘラミガキ調整である。

(10) は口径28.2cmをはかり、色調は暗褐色を呈す。内弯ぎみに上方に開く体部に、直口する口縁部を有し、端部は面をもつ。器内外面はヘラミガキ調整である。

(11) は裾径14.3cmをはかる。色調は淡茶褐色を呈し、内外面に煤が附着している。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整である。

甕形土器 (14～16)　(14) は口径11.9cmをはかり、色調は暗褐色を呈す。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。(15) は口径16.3cmをはかり、口縁端部に刻目を施す。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は暗褐色。(16) は口径23.1cmをはかり、くの字状に屈曲する口縁部をもち、端部は面を成す。口縁端部に凹線紋１条を施す。色調は淡茶褐色を呈す。体部外面はナデ、内面はハケとナデ調整である。

水差形土器 (17・18)　胴部中位に最大径をもつ体部に、外傾して上方に伸びる口縁部をもち端部は面を有する。

(17) は口径8.9cm、器高22.8cm、体径17.4cm、底径6.5cmをはかる。肩部に、器の大きさに比して小振りな把手が付く。口縁部上端直下に凹線紋１条をめぐらし、肩部外面にはヘラ描きによる刻目を２個施す。記号文か。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。器表面は磨耗しており、壺形土器 (13) と同様、釣瓶として利用されていたためであろう　か。色調は灰褐色。

(18) は口径10.0cm、器高24.0cm、体径19.2cm、底径6.8cmをはかり、底部は著しく突出し、器壁の厚い土器である。口縁部に半円形のえぐりを入れ、上端には凹線紋１条を施す。器外面はヘラミガキ、体部内面上半はハケ、下半はヘラミガキ調整である。

以上、(Ⅲ) 層から出土した壺形土器・水差形土器３点は、出土状況から判断し、廃絶の同時性を有す一括資料といえる。また、(Ⅰ)～(Ⅱ) 層から出土した土器も型式学的に大きな幅は認められず、遺構内一括遺物として把握されうるものと思われる。他に木製品 (第220図44)、石器、動植物遺存体が出土している。加えて、人骨 (頭蓋骨片) も出土している。

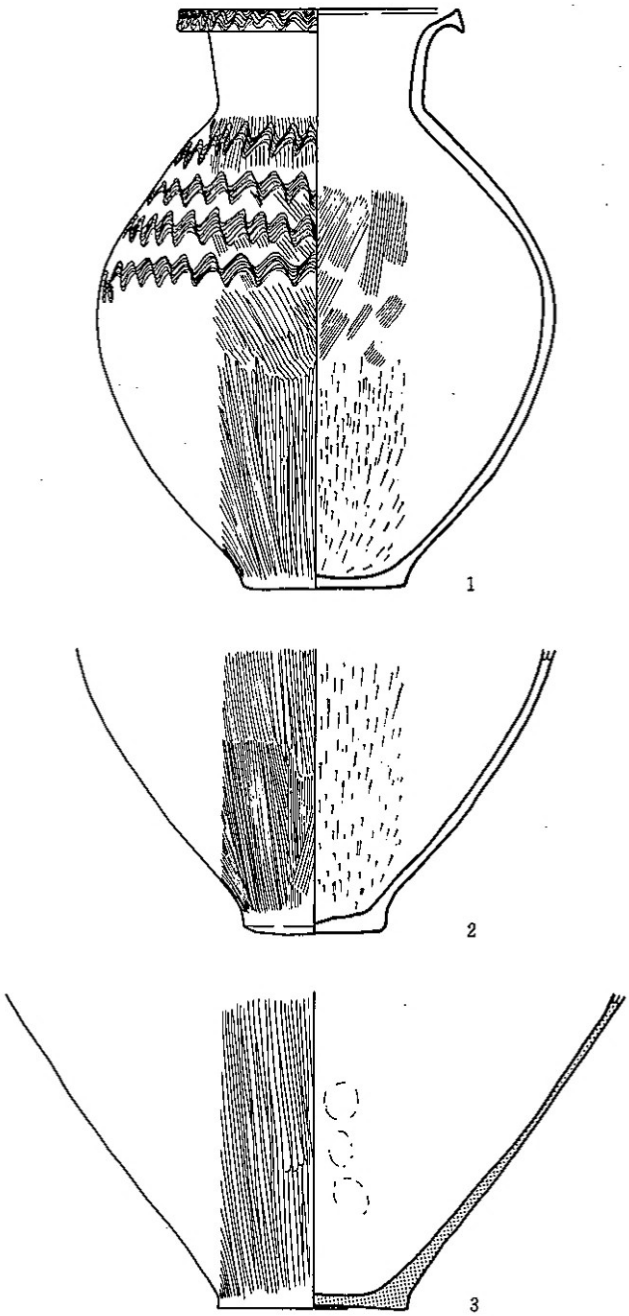
ＳＫ－26 (第156図)

Ｌ・15地区にて検出した弥生時代中期後半の井戸である。上部は江戸時代平野川の河床にあたっており、Ｔ.Ｐ.＋4.7mまで削平されている。南側はアースアンカーによる攪乱を受け。1/2を失う。平面プランは径1.3mの円形を呈し、深さは、0.92mをはかる。

坑内に堆積する埋土は、カーボン層の堆積から大きく３層に分けられる。遺物の大半は (Ⅰ) 層から出土している。

〔土器〕(第155図　図版119－220)

中期後半の壺・甕形土器等の器種が出土した。



第155図　ＳＫ－26出土土器実測図（1/4）

壺形土器（１・２）　（１）は口径14.7cm、器高30.7cm、体径 24.2 cm、底径8.6cmをはかる。胴中位に最大径をもつ体部に、直立する頸部と強く短く外反する口縁部をもつ。端部は上下に肥厚して、幅広い面をなす。端部外面、体部上半外面に櫛描波状紋を浅いタッチで飾っている。口頸部内外面はナデ、体部外面上半はハケ、下半はハケ後にヘラミガキ、内面上半はハケ、下半はヘラケズリ調整である。色調はにぶい橙色。土圧によって押し潰された状態で（Ｉ）層から出土した。（２）は底径 6.8 cmをはかり、体部外面はハケ（一部分にヘラミガキ）、内面はヘラケズリ調整である。色調は淡茶褐色。

甕形土器（３）　底径10.2cmをはかり、外面はヘラミガキ、内面はナデ調整である。色調は暗褐色を呈し、生駒西麓産の胎土をもつ。

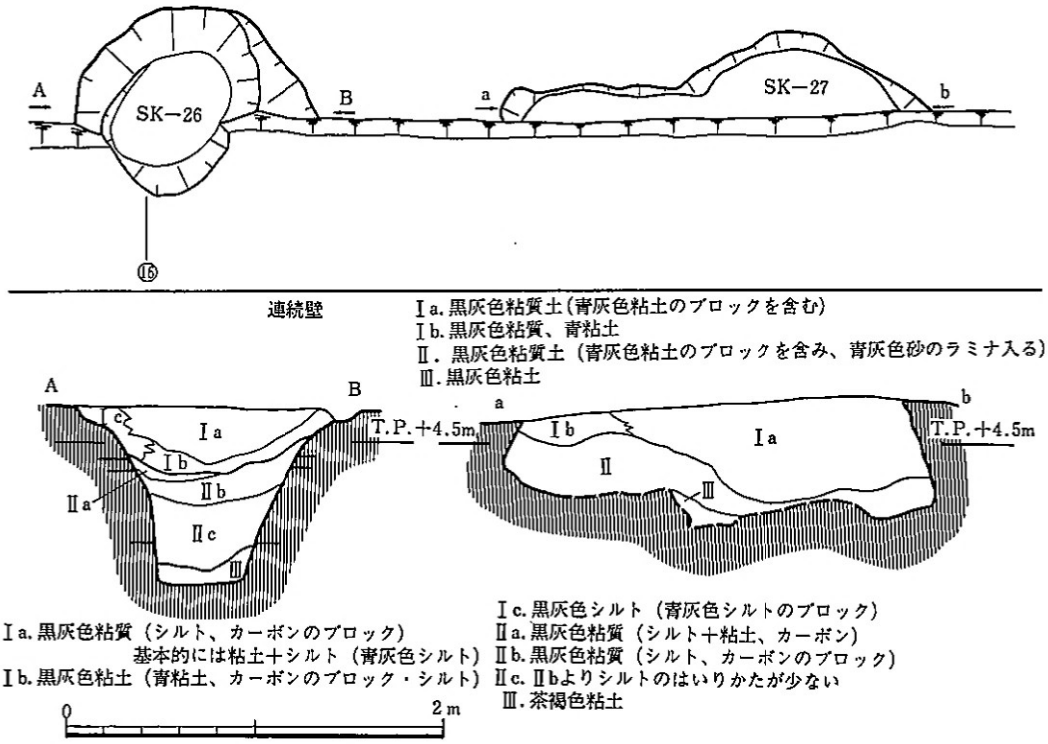
ＳＫ－27（第156図）

Ｌ・15地区にて検出した井戸である。上部は江戸時代平野川によってＴ.Ｐ.＋4.7mまで削平を受けている。形状は径2.3m以上の不定形プランを呈し、深さ0.7m以上をはかる。

埋土は、土層の堆積状況から３層に大別される。（Ｉ）（II）黒灰色粘質土、（III）黒灰色粘土である。（III）層以下の土層の堆積はアースアンカーによる攪乱をうけ不明である。遺物は弥生時代中期の土器を得ているが、いずれも細片で図示できない。

溝

ＳＤ－30（図版75ｂ）



第156図　ＳＫ−26、27遺構平面図及び土層断面図（1/40）

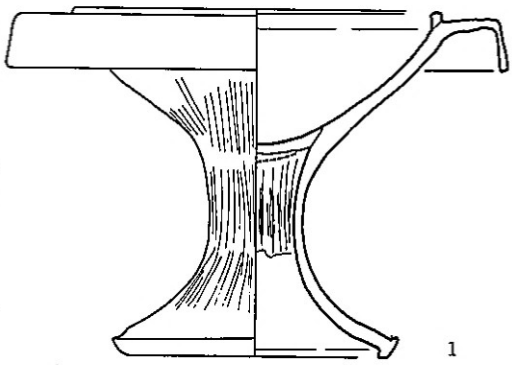
Ｍ・18～20、Ｌ・19～20地区において、南東－北西走して検出した弥生時代中期後半の溝である。ＫＭのＳＤ－3023から続く同一の溝。上部を昭和43年以前の平野川によって、Ｔ.Ｐ.＋4.6ｍまで削平されている。さらに南側は、ポンプ場本体部連壁を築く際のアースアンカーのため、著しい陥没・攪乱を受けている。

形状は、上部幅2.3m、下部幅1.3m、現存する深さは0.33mをはかる。溝底のレベルはＴ.Ｐ.＋4.238m。西肩部において完形の高杯形土器を得ている。

〔土器〕（第157図、図版119－221）

壺・甕・高杯・鉢形土器をコンテナにして２杯分得た。出土土器はいずれも器表面が著しく磨耗していた。高杯以外は細片で図示できない。

高杯形土器（１）　口径18.9cm、器高18.4cm、裾径13.9cmをはかる。水平口縁をもつもので、端部は下方へ垂下、拡張する。口縁内端に、断面四角形の突帯を貼り付けている。杯部内外面はタテヘラミガキ調整で、色調は淡灰褐色を呈する。



第157図　ＳＤ－30出土土器実測図（1/4）

第２項　江戸時代及び江戸時代以降

平面で肩は検出されていないが、昭和43年に改修されるまで当調査区内を流れていた平野川と江戸時代の自然河川１条を検出している。